星は何処に

雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星は何処に

【Ｎコード】
Ｎ９６１７Ｔ

【作者名】
雀

【あらすじ】
一人の少女―五月美鈴はひょんなことからマフィアの世界に入ってしまう。彼女を取り巻く運命とは・・・
※リング戦突入です

いろんな設定

名前　五月美鈴（さつきみれい）　ｃｖ小瀬〇絵

歳　６歳

髪　栗髪ストレート　長さは肩より上

身長　１１０ｃｍ

体重　１１ｋｇ

出身は日本

短髪のせいでぱっと見男子

性格は時と場合による。超甘えん坊だったりする。

あまりこの設定に意味はないです。

正直いろんなアニメが混ざってます。だってコイツ錬金術使えるもん。霊圧読めたり・・・あれ？これって言ってよかってっけ？まぁいっか（笑）

他にも・・・・・読んでいればわかる！！

本当にすんませんｏｒｚ

それと文章より会話や効果音が多いです。そのタイプが苦手な人はご了承ください。（ペコリ）

プロローグ

暗い・・・寒い・・・ここは何処・・・・・・・？

・・・・・・なんでこんなことになったのだろう・・・

こんな・・・はずじゃなかった・・・

もう私はイラナイ人間・・・・・・

いっそのことこの短かった人生をここで終わりにしよう。

サヨナラ・・・

あの世でも誰とも会いたくない。

・・・・・・・・・・6年って短いね。ホントに・・・・・・・・・・

お父さん…お母さん…みんな……

・・・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・・・

どさっ

プロローグ（後書き）

駄文が多いですがよろしくお願いします。

出会い（前書き）

ヴァリアー出ます。

出会い

イタリア某所

銀髪の男と金髪の少年が森の中を走っていた。

男「う〝お〝おぉい！テメー新入りのくせにラクしてんじゃねぇ！！」

少年「うっせ…鼓膜破れる（ボソ）オレ王子だから何してようがいいの♪」

男「キモイから『♪』付けんなぁ」

少年「カッチーン王子怒った」

男「てめぇなあ…ん？」

不意に銀髪の男が足を止めた。それに気づいた少年も足を止めた。

少年「何止まってんの？ボスに怒られんぜ」

男「う〝ぉ〝いあれなんだぁ」

男が指した先には何かが倒れていた。少年は興味半分でそれに近づいた。

少年「ヒト？うわ、コイツ血まみれジャン」

少年が言ったように、倒れていたのは子供だった。血にまみれ少年か少女か見分けがつかなかった。

男「う〝お〝おい何でこんなところにガキがいんだぁ」

少年「知るかよ。つかコイツ生きてるっぽいぜ。たぶん怪我とかしてんだろーからアジトにつれてかね？ってことでよろしく」

男「ふざけんなぁ。お前が背負っていけぇ」

少年「やだね。だってオレ王子だもん」

男「てめぇ生意気な（ダッ）んだって逃げんなぁ！」

少年に逃げられた男は渋々その子供を背負って走り出した。

―――――――――――――――――

男がアジトにつくと既に少年は待っていた。

少年「遅ぇよ」

男「ちっ」

ギィィィ

突然扉が開いた。

？「あんらぁ、ベルちゃんにスクアーロじゃない。お帰り」

出てきたのはオカマだった。

銀髪の男…スクアーロは背負っていた子供を下ろした。

スクアーロ「ルッスーリア、コイツを医務室に運んで怪我してねぇか見てやれぇ」

ルッスーリア「（っっ！！）」

ベル「引いてんじゃねぇよ、オカマ」

ルッスーリア「んもうっベルちゃんたらひどいわね、オカマなんて」

ベル「だって事実じゃん」

ルッスーリア「あんらっ」

スクアーロ「ルッスーリアふざけてねぇでさっさと行け！！」

ルッスーリア「はいはい。それじゃあ行きましょうね」

ス／ベ「（意識ねー奴に話しかけてるし）」

ルッスーリアが行き再び二人になった。

スクアーロ「う〝お〝ぉいベル、ボスに報告に行くぞぉ。任務の事とあのガキの事だぁ」

ベル「スクアーロだけで行けば？王子メンドイの嫌いだし、それに眠いし」

スクアーロ「ふざけんなぁ！！あのガキ連れてくるって言ったのはお前だろー（ダッ）がってだから逃げんなぁ！！！」

ベルは二度目の逃走を果たした。

スクアーロ「ちっ。しかたねぇオレがいくかぁ」

結局諦めたスクアーロだった。

悪夢

美鈴ｓｉｄｅ

夢を見た。地獄の日々の夢を・・・。

？「それをよこせ！！」

それ？それって何？？あなたは誰！？

？「貴様の――――をよこせ！！」

何？聞き取れない・・・。

そいつの手に刃物が見えた。

「やめて…」

走ってくる。

「やめてえええぇぇぇ！！」

パチッ

覚めた。よかった。・・・あれ？ここどこだろう？？

知らない場所・・・・・・。

周りを見回してみた。そこには・・・。

「っっ！！」

私の顔を覗き込む――――――――――の顔が・・・。

悪夢（後書き）

意味わかんないな。
いったい何がしたい・・・

誰の叫び声？

「キャアアアアアァァァ！！！！」

突然、悲鳴のような叫び声がアジトの中に響き渡った。

ベ／ス「！！？？」

医務室から聞こえた。

～ボスの部屋～

スクアーロ「確か…あのガキが」

バリーン

スクアーロ「っっ痛！！」

突然飛んできたコップがスクアーロの頭に直撃した。

スクアーロ「う〝お〝おおい！！何すんだぁクソボス！！」

？「るせぇ、カスが。黙らせて来い！！」

スクアーロ「ちっ。ｘａｎｘｕｓのヤロー」

～廊下～

ベル「ん？今の医務室じゃね？」

？「ム、ベル今の叫び声に心当たりがあるのかい？」

不意に声をかけられたベルは声のほうを見た。そこにはフードをかぶった赤ん坊がいた。

ベル「マーモンじゃん。ん…ちょっとね。任務の帰りに謎な奴拾ってさ。ルッスーリアが医務室に…」

マーモン「ベルも十分謎だよ（ボソ）」

ベル「ん？」

マーモン「いや、何でもないよ。それより知っているなら行った方がいいんじゃない？」

ベル「何で？」

ベルが聞き返すとマーモンは表情を曇らせた。実際はフードで見えないが…。

ベル「マーモン？」

マーモン「もし目が覚めて最初に見たものがルッスーリアの顔となると…」

ベル「っっ！！」

マーモン「あの叫び声の説明がつく」

なるほど、ベルが言いかけた時…

「いやあぁぁぁ！！」

ベ／マ「！！／っっ！！」

さっきとは違う叫び声。

マーモン「兎に角行った方がよさそうだね」

ベル「ししししっ今のってルッスーリアじゃね？」

タタタッ

ス「おっ」　ベ「あっ」　マ「ムッ」

医務室に行く道中3人は出くわした。

スクアーロ「う〝お〝おいさっきの叫び声って」

ベル「たぶんあいつだよ」

スクアーロ「そういや何でマーモンもいるんだぁ」

マーモン「ムム、僕がいちゃ悪いかい？」

スクアーロ「そういうわけじゃねぇが」

マーモン「僕はさっきベルから軽くだけど聞いたのさ」

タタタッ
ガチャっ

スクアーロ「う〝お〝おぉいどうしたぁ!!」

ルッスーリア「スクアーロ!!ベルちゃん!!マモちゃん!!」

マーモン「いったい何があったんだい？」

ルッスーリア「それが…」

チャキッ

殺気を感じた４人はその方を向いた。そこには・・・
銃を持ったあの子供だった。

夢？現実？

美鈴ｓｉｄｅ

目を覚ましたとき、私の顔を覗き込んでいたのは・・・
お母さん・・・？その顔には不敵な笑みが・・・

「キャアアアァァァァ」

ウソだ！！お母さんは私が…私が…

私が悲鳴を上げたことで、そいつは少し困惑した顔になったが、怒っているようにも見えた。

「いやあああああ！！」

今度はそいつが悲鳴を上げた。無意識のうちに私の手にはナイフが握られていた。

ガチャ

さらにそこに3人入ってきた。そいつらは・・・

「ウ…ソ……。お父さん？お兄ちゃん…？」

なんで？何でみんなここにいるの？だってみんな私が…私が…
・・・・・・・・・
私がこの手で殺したハズなのに。

不意に腰についているものに気づいた。銃だった。
私はベッドを出ると、生きてるはずのないお母さんたちに銃を向けた。

―――――――――――――――――――――――――――――――

銃を向けられたスクアーロ・ベル・ルッスーリアは動けなくなった。
マーモンが何かしようとしたとき

美鈴「っっ（ガクッ）」

子供は座り込んだ。

ス／ベ／ル／マ「！！！！」

しかしすぐに立ち上がった。が、その目つきはさっきとは何か違った。恐怖におびえる目から、夢から覚めたような目に…。

美鈴「っっ！！」

望むもの

目の前には見知らぬ人、見知らぬ風景。
その人たちに向いている銃。

美鈴「あ…私いったい何を（ガシャ」↑銃落

ガクッ　私はまた座り込んだ。
目の前の人たちが私に駆け寄ってきた。一人は金髪の少年、一人は銀髪の男、一人はオカマ？一人は赤ん坊？？

美鈴「ぷっっ」

全（美以外）「？？」

最後の二人の謎さに思わずふき出した。でも

美鈴「（ハッ）……」

視線が怖い・・・（汗）

銀髪「う〝お〝おぉい！！テメーいったい何もんだぁ！！」

突然叫ばれた。

美鈴「っっ！！…鼓膜破れます（ボソ）」

金髪「スクアーロ声でけーよ」

オカマ「そうよぉ、この子大声にびっくりしてるわよ。ねえマモちゃん」

赤ん坊「それに今『鼓膜破れます』って聞こえたしね。…ルッスーリア近すぎ」

どうやらスクアーロと呼ばれた銀髪の人は普段から声が大きいらしい。

空気が微妙すぎる。何かいわないと・・・えっと・・・えっと・・・

美鈴「あ…あの…」

ル「うん?」　べ「ん?」　マ「ム?」　ス「・・・」

美鈴「（（ビクッ）やっぱり怖い）えっとあの・・・
お風呂入りたいです」

全「……」

しまった、余計に重くなった…（汗）でも今はこれが精一杯だった。

ス「う〝お〝ぉいテメー怪我してんじゃねーのか?」

美鈴「あ…いえ別に。僕は怪我してないです」

スクアーロ「（僕ってことはコイツ男か?）」

マーモン「ふーん。じゃあ何でそんなに血まみれなんだい?」

血まみれ?言われて自分の体を見る。

確かに血にまみれていた。えっと確か・・・

美鈴「返り血」

全「！！！！」

スクアーロ「そうかぁ、ルッスーリアこのガキを風呂に連れて行け（ちっ）」

ルッスーリア「はぁーい（今舌打ちしたわね）」

美鈴「すみません（舌打ちされた）」

テクテクテクテク・・・

～風呂場～

ルッスーリア「はいここよ」

美鈴「広っっ！！」

銭湯の五倍くらいあるよ。

ルッスーリア「着替えは私が用意し――」

美鈴「持っているので心配なく」

ルッスーリア「あらそう？」

なぜ残念そうに言うのでしょうか・・・

ルッスーリア「それじゃ出たら言ってね。外で待ってるわ」

美鈴「僕だってそのつもりです。あと僕のバックなるべくあさらないでくださいね」

ルッスーリア「はいはい。（いつの間にバックが？）」

美鈴「それでは」

～十分後～

はあ・・・血がこびりついて洗うの大変だったぁ～
バックから着替えを取り出す。上下黒のジャージ。

美鈴「ふぅ。
（コンコン）ＯＫです」

ルッスーリア「それじゃ皆のところへ戻りましょうか」

美鈴「はい！！」

お風呂のせいで無駄にテンションがあがった。

～医務室～

美鈴「失礼します」

ルッスーリア「戻ったわよー」

そこにはさっきの人たちが待っていた。

美鈴「お風呂ありがとうございました」

ベル「ししししっちゃんと喋れんじゃん」

失礼な！！

スクアーロ「う〝お〝ぉいそれでテメーは何もんなんだぁ」

なぜ銀髪の人はそればっかり。。。

マーモン「そうだね。君はいったい何者なんだい？何故あんなに返り血を？」

美鈴「えっと僕は…（グゥ～）↑お腹の音

／／／…限界です…」

スクアーロ「何がだぁ！！」

美鈴「１０日間何も食べてなくって…（パタッ）」

スクアーロ「う〝お〝おおぉい！！」

マーモン「ベル、今何時だい？」

ベル「ん？夜の八時」

スクアーロ「ルッスーリア！！急いで飯作ってもってこい！！」

ルッスーリア「はいはい」

望むもの（後書き）

主人公ぶっ倒れちゃった・・・

レッツご飯タイム

ルッスーリア「できたわよー」

ベル「おいチビ、起きろ」

ベルが思いっきり体を揺らすと美鈴は目を覚ました。

美鈴「ん……？（クンクン）
ご飯のにおい」

テーブルの上に所狭しと並べられた料理。

美鈴「イタリアン料理・・・」

ベル「ん？当たり前じゃん、ここイタリアだしな」

美鈴「……え？ここってイタリアなんですか！？」

全「はぁ！？」

美鈴「てっきり日本かと…」

スクアーロ「う〝お〝おいガキぃふざけてんじゃねぇぞぉ」

美鈴「ふざけてません。それに銀髪の人！！僕の名はガキじゃないです」

スクアーロ「う〝お〝おぉい『銀髪の人』ってなんだぁ。オレはS・スペルビ

スクアーロだぁ」

マーモン「そういえば自己紹介がまだだったね。僕はマーモン」

ベル「オレはベルフェゴール。ベルって呼んでな」

ルッスーリア「私はルッスーリア。ルッス姐って呼んでね♪」

美鈴「はい。えっと、スクアーロさんにマーモンちゃんにベルさんにルッス姐さんですね」

マーモン「何で僕だけ『ちゃん』なんだい？」

美鈴「可愛いから」

マーモン「（即答・・・）」

ルッスーリア「で？あなたの名前は？」

美鈴「僕は美鈴です。美しい鈴と書いて美鈴です。みすずではなくみれいです」

マーモン「1つ気になるんだけど、君は男の子かい？」

美鈴「なっっ正真正銘の女の子ですっ健全な六歳です！！」

全「（6歳！？）」

ベル「ししししっ姫オレと2つ違いじゃん」

美鈴「姫！？」

ベル「しししっ」

マーモン「見た目も一人称も男の子だったからね」

美鈴「見た目はお母さんの趣味です。だから気に食わない。一人称は気分テキにです。だからいつもは私って言ってます」

マーモン「ふぅん」

ルッスーリア「さっご飯たべましょ」

全「はーい」

モグモグ

ルッスーリア「そういえば美鈴ちゃん、さっきイタリアってことにびっくりしてたけど何で？」

美鈴「僕は日本人です。羽田から神戸の飛行機に乗ろうと思ったんですけど…イタリア行きだったみたいですね」

コネコネ

ベル「ひ～めっ何作ってんの？」

美鈴「おにぎりです（何で姫なんだろう？）」

スクアーロ「う゛お゛ぉいテメーなんで血まみれ（ボフッ）ん！？」

全（美以外）「！！」

美鈴「食事中のグロい話はアウトですよ。スクアーロさん（ニコッ）」

スクアーロ「んん（喋れねぇ）」

スクアーロの口の中にはおにぎりが…。

美鈴「その他の質問なら」

全「（こえ～）」

ルッスーリア「えっと私はないわよ」

ベル「オレも」

マーモン「僕もだよ」

スクアーロ「（ゴクン）オレもだぁ」

美鈴「声でかい（ヒュっ）」

スポッ

スクアーロ「んん！！（またかよ）」

美鈴「んじゃ、僕から質問いーですか？」

ベル「いんじゃね？」

美鈴「えっと…こ（バン）……」

突然医務室の扉が開いた。

レッツご飯タイム（後書き）

終わり方微妙（汗）
さてきたのは誰でしょうｗｗ

レッツご飯タイムｐａｒｔ２（前書き）

読んでくれた人ありがとうございます！！！

レッツご飯タイムｐａｒｔ２

？「おい、カス鮫はいるか」

スクアーロ「ｘａｎｘｕｓ！！」

マーモン「珍しいね。ボスが食堂に来るなんて」

美鈴「（この人がボスさん）」

スクアーロ「用は何だ」

ドガッ↑かかと落

美鈴「……（痛そ）」

ｘａｎｘｕｓ「そいつが例のガキか」

美鈴「？？？？」

ｘａｎｘｕｓ「スクアーロ。さっさと飯持って来い」

バタンッ

全「……」

スクアーロ「ちっ」

ルッスーリア「美鈴ちゃんさっき何て言おうとしてたの？」

美鈴「あ、はい。えっとココってなんですか？」

ルッスーリア「あのねぇココはボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーってとこなの」

ベル「言っちゃったね」

美鈴「…ボンゴレ？アサリですか？あんさつ？ってなんですか？」

ベル「ししししっやっぱコイツ６歳だな」

マーモン「どうせなら知らなくていいよ」

美鈴「マーモンちゃんのケチ」

スクアーロ「ゴチャゴチャ言ってないでさっさと食え！」

ルッスーリア「美鈴ちゃん。ココだと難だし、余ってる部屋があるからしばらくそこに泊まっていいわよ」

美鈴「本当ですか！？ありがとうございます！」

ルッスーリア「案内するわね」

スクアーロ「オレはｘａｎｘｕｓのところに行って来る」

～空き部屋～

ルッスーリア「ここよ」

マーモン「ついでで言っとくと、右がベルで左がスクアーロ、正面が僕だよ」

ルッスーリア「マモちゃん!!私の部屋は!!」

マーモン「美鈴には健全でいてほしいからね」

ベル「言えてる」

美鈴「???」

ルッスーリア「んもう!!ひどいわぁ。私の部屋は右前よ」

美鈴「了解です」

マーモン「ついでに君の話を聞こうじゃないか」

カチャ

美鈴「広い!!」

ベル「姫の部屋オレのより広いし」

美鈴「(ヴァリアーってすごく広いな。お金持ちなのかな?)」

スクアーロ「う゛お゛ぉぉい!!何でテメーはあんな状況だったんだぁ!!」

全「っっ!!」

美鈴「スクアーロさん!?いつの間に!?」

スクアーロ「いまだぁ」

ベル「やけに早かったじゃん」

スクアーロ「うるせぇ」

美鈴「とりあえず声のボリューム落としてください」

スクアーロ「くっ」

美鈴「で『あんな状況』ってなんですか?」

マーモン「君が返り血にまみれていたことだよ」

美鈴「あーそれ!それは・・・」

レッツご飯タイムｐａｒｔ２（後書き）

きり方へたくそですね。ｏｒｚ
やっとヴァリアー揃いました！！！
？「オレを忘れているぞ」
ん？誰だっけ？？
まいっか（笑）

過去（前書き）

作「主人公ちゃんの過去を公開！！！」
美「テンション上がるな！」
ガッ
作「ごへっ」

過去

美鈴「それは皆殺っちゃったからだと思うよ」

マーモン「さらっと言ったね」

ベル「皆殺ってたってのは何で？」

美鈴「私ね日本の小さな町に住んでたんだけどね、なんかある日を境に皆にイジメられたの」

マーモン「なんかシュールだね」

美鈴「それで最初は幼稚園のクラスの人たちだけだったんだけど気づいたら町の人対私一人になってたの」

全「……は？」

美鈴「すっごく怖かった、まるで地獄。みーんな刃物とか持ってるの。包丁とか彫刻刀とかカッターとかｅｔｃ…それで怖かったから反撃の意で殺ったの」

美鈴「最初は両親から。幼稚園で作った色水に、家にあったいろんな薬を混ぜてお父さんとお母さんに飲ませた」

マーモン「（ある意味毒だね）」

美鈴「お兄ちゃんたちはナイフだったかな？で――そのほかの人たちは包丁とかカッターとか奪って殺って…」

スクアーロ「町の奴全員殺ったってのか!?」

美鈴「（ブンブン）違います。だって皆足速いから追いつけないし。だから町ごと焼いちゃいました」

全「……」

美鈴「それで飛行機に乗ったけど・・・」

マーモン「イタリア便に乗ったというわけなんだね」

美鈴「うん」

ガチャ

ベル「スクアーロ、どこいくの?」

スクアーロ「ｘａｎｘｕｓのところだ」

ベル「ん?何でまた?」

スクアーロ「美鈴のことを話してくる」

バタン

秘密の話（前書き）

題名意味わかんねー！！？

秘密の話

スクアーロside

～ｘａｎｘｕｓの部屋～

スクアーロ「う゛お゛おおい！！テメェちゃんと話聞いてたかぁ！？」

人が説明してるっつうのに寝そべりやがって（イライラ）

ｘａｎｘｕｓ「るせぇ」

スクアーロ「だとぉ！」

このヤロー（怒）

ｘａｎｘｕｓ「おい」

スクアーロ「あぁ？」

ｘａｎｘｕｓ「そのガキにこれを渡しておけ」

手渡されたのは、ヴァリアーの入隊手続き――いうなれば契約書。

スクアーロ「う゛お゛おい！どういうつもりだぁ！」

コイツ美鈴をヴぁリアーに入れる気か！？いったい何のために！？

ｘａｎｘｕｓ「例の作戦で奴が使えるかもしれない」

スクアーロ「何っっ！！」

例の作戦だと！あいつに何ができるっていうんだ。いやｘａｎｘｕｓのことだ、何か策を練ってるのかも知れねぇ。だがそううまくいくか・・・

ｘａｎｘｕｓ「入隊自体は契約書を見て決める。使える駒は多いほうが手っ取り早い」

やはりコイツからしたら美鈴もただの捨て駒か。
オレ的にはあいつにマフィアなんて似合わねーと思うがな。

スクアーロ「よし、わかった。だがもし気に入らなかった場合どうするつもりだ」

ｘａｎｘｕｓ「テメェには関係ねぇ」

ちっ。オレは軽く舌打ちをして部屋を出た。

秘密の話（後書き）

例の作戦ってなんでしょうねｗｗ

契約書

～美鈴の部屋～

ガチャ

美鈴「あ、お帰りなさい」

スクアーロ「おい美鈴、これ書け」

渡された紙を受け取る。

美鈴「何ですか？」

スクアーロ「契約書だぁ」

ス／ベ／マ「っっ！！」

美鈴「？契約書？何の？」

ルッスーリア「ボスどういうつもりかしら」

ベル「コイツ何にもできないじゃん」

マーモン「どうせ金にもならないよ」

美鈴「あのぉこれなんですか？契約書って？」

ルッスーリア「そうね。貴女にもわかるように説明してあげるわ。

美鈴ちゃん家に帰れないのよね」

美鈴「……（コクリ）」

ルッスーリア「これはヴァリアーの入隊契約書、要するにここに住むためのもの」

美鈴「え・・・それって」

ルッスーリア「私たちのボスは美鈴ちゃんがココに住むのを許してくれたのよ」

美鈴「！！ホント！？ココに住んでいいの！？」

ルッスーリア「ええ。契約書（それ）はその手続きと考えていいわ」

マーモン「（さすがルッスーリアだね。子供の扱いに慣れてる）」

美鈴「（ペラッ）…イタリア語…」

ベル「だからココイタリアだって」

マーモン「お金くれれば僕が翻訳してあげるよ」

美鈴「だ、大丈夫です。（お金取るの！？）」

ゴソゴソ

ルッスーリア「あら、何かしらそれ」

ベル「見て分かれよ。どう見てもメガネだろ」

美鈴「はい。でも度は入ってません」

マーモン「じゃあ、何のために出したの？」

美鈴「これ翻訳メガネなんです」

全「？」

美鈴「これをかければ設定した言語に見えるんです」

マーモン「へぇ～面白いね。でも君が持っているのはそれだけじゃないよね」

ベ／ル／ス「？？」

マーモン「だってここはイタリアだよ？なのに場所も知らない文字も読めない６歳児が、イタリア語で僕らと喋れると思うかい？」

その通りだった。美鈴はずっとイタリア語で彼らと話していた。

美鈴「それは…（ゴソゴソ）これです」

ベル「補聴器？」

ルッスーリア「と、ピンマイク？」

美鈴「これも言語を設定すればその言葉で聞こえます。そしてこのマイクを通せば臨機応変に相手の言語に変換されます。だから私に

とっては日本語に聞こえ日本語で会話してるんです」

マーモン「なるほどねぇ」

美鈴「それじゃあ、

『Q1　七ヶ国語以上話せるか』

無理だけどたぶん大丈夫。

『Q2　戦闘経験はあるか』

（あれは戦闘に入るのかな？）…無しだと思う。

『Q3　武器は何を使っているか』

武器？……ある分けない。

『Q4　暗殺経験はあるか』

（毒って入る？いや、あれは違うよな）無し。

『Q5　通り名はなんと言うか』

通り名？無し。

『Q6　出身国はどこか』

日本。

『ではサインを』

サイン？えーっとえーっと……Ｍｉｒｅｉ…でいいのかな？

はい書けました」

スクアーロ「よぉし、アイツんとこもって（パシ）くぞってベル！！」

ベル「姫のみして。ふぅん、やっぱおもしっ」

スクアーロ「返せ。それじゃあこれはｘａｎｘｕｓに出してくる」

バタンッ

スクアーロ「（これじゃ美鈴は入隊できねぇな）」

契約書（後書き）

はい。いつものごとくテキトーですっ

結果

～ｘａｎｘｕｓの部屋～

ガチャッ

スクアーロ「う〝お〝おい書かせてきたぞぉ」

ｘａｎｘｕｓ「貸せ（パシッ）……ハッ面白ぇ」

スクアーロ「コイツは条件を何一つクリアしてねぇ。どうすんだ？」

ｘａｎｘｕｓ「明日入隊試験を行う。勿論戦闘試験だ」

スクアーロ「何考えてんだぁ！アイツは６歳だろ！できっこねぇ！！」

ｘａｎｘｕｓ「それがどうした。ベルは８歳だ」

スクアーロ「ベルは論外だ！そもそも女子を入れようって言うその考え自体が――」

ｘａｎｘｕｓ「うるせぇ。オレはヴァリアーのボスだ。ヴァリアー（ここ）のことはオレが決める」

スクアーロ「……ちっ。勝手にしやがれ」

バタンッ

～美鈴の部屋～

スクアーロ「ということで、明日お前の入隊試験がある」

美鈴「にゅうたいしけん？」

ルッスーリア「美鈴ちゃんがここで住めるかどうかのテストよ」

美鈴「テっ…テスト！？」

ベル「だーいじょぶだって。姫だったら簡単に合格できるって」

美鈴「ベルさん…。だといいですね」

マーモン「ま、ボスのことだ。無理かもしれないね」

ベル「お前士気下げるようなこと言ってんじゃねぇし」

マーモン「フン」

ベル「カッチーン。何王子にその態度」

ルッスーリア「コラコラ二人とも、やめなさいって」

美鈴「フフッアハハハ」

スクアーロ「何笑ってんだぁ」

マーモン「不気味だよ」

美鈴「アハハごめんなさい。皆さんにぎやかだなって思って。楽しい人たちだなって」

マーモン「ふーん。そういわれたのは初めてだよ」

美鈴「どうしてですか？」

ベル「オレらは暗殺部隊だからな」

美鈴「へぇ？」↑暗殺部隊わかってない

マーモン「まあいいさ。それより美鈴、明日は早いんだろ？僕たちはこれで失礼するよ」

スクアーロ「聞くことは聞いたからなあ」

ベル「ししし姫おやすみ」

美鈴「おやすみです。
　疲れた…ふぁ～眠いｚｚｚ」

～廊下～

ベル「ホントに謎な奴」

マーモン「スクアーロ明日の入隊試験、誰を相手にするんだい？戦闘試験なんだろ？」

ルッスーリア「そうよぉ。さらっと町を焼いたって言ったけど、あの子はまだ６歳よ？」

スクアーロ「ああ。だからレヴィでいいと思う」

ルッスーリア「大丈夫かしら」

ベル「やばいかもね、顔的に」

全「……」

スクアーロ「大丈夫だろ（汗）」↑ケッコー心配

美鈴の相手をするレヴィとは一体…（笑）

ベル「ナレーション遊んでね？」

スクアーロ「う〝お〝おい遊んでんじゃねーぞぉ！！」

ゴメンナサイ…（汗）

結果（後書き）

次回やっとヴァリアーのメンバー揃います。

入隊試験

翌日

美鈴「ｚｚｚ」

スクアーロ「う゛お゛ぉぉい朝だぁ起きろぉ」

美鈴「にゃ！？」↑ｗｗ

スクアーロ「朝飯できてんぞぉ」

ガバッ

美鈴「おはようございます。スクアーロさん（ニコッ）」

ご飯に敏感な美鈴である。

スクアーロ「…行くぞ」

美鈴「ふぁ～い」

～食堂～

ガチャッ

美鈴「皆さんおはようございます！！」

ルッスーリア「美鈴ちゃんおはよう」

ベル「姫おはよっ♪」

マーモン「起きれたんだね」

美鈴「どういうことですか（怒）」

マーモン「別に」

？「ぬ．」

美鈴「…誰？」

レヴィ「オレはレヴィ・ア・タンだ。レヴィでいい」

美鈴「レヴィさんですか」

スクアーロ「おい、さっさと食べて試験行くぞ」

美鈴「は、はい！！」

レヴィ「ぬ、試験？」

ルッスーリア「ヴァリアーの入隊試験よ」

マーモン「まあ、ヴァリアー自体分かってないみたいだけどね」

レヴィ「このガキが入隊だと！？」

美鈴「ガキって言わないでください。私には美鈴って言う名前があ」

スクアーロ「うぉ゛お゛ぉいさっさとしろ！！」

レヴィ「せいぜいがんばれ」

ベル「何言ってんの？相手お前だし」

レヴィ「なぬ！？」

ベル「なぬじゃねーよ、ムッツリ」

レヴィ「ベル！！貴様！！」

スクアーロ「うるせーぞぉ！！テメーらぁ！！」

美鈴「あなたが一番うるさいですよ（ボソッ）」

マーモン「美鈴ってケッコー毒舌だね」

ルッスーリア「ご飯冷めちゃうわよ」

全「はい・・・」

～数分後～

スクアーロ「それじゃ行くぞ」

ベル「レヴィ、姫に怪我させたらお前殺すから」

マーモン「それじゃ意味ないよ」

美鈴「ｘａｎｘｕｓさんも来るんですか?」

スクアーロ「当たりまえだぁ。こなきゃ意味ねぇだろぉが」

レヴィ「貴様ごときが気安くボスの名前を口にするな!!」

美鈴「（ビクッ）…ぅぅ…ヒック」

ベル「泣かした」

マーモン「責任取りなよ」

スクアーロ「レヴィ何やってんだぁ」

美鈴「うあああああん」

レヴィ「ぬぅ…」↑焦ｗ

美鈴「フフフ…アハハハハ」

全「!?」

スクアーロ「う〝お〝おい何笑ってんだぁ。泣いてたんじゃねぇのかぁ」

美鈴「挑発です」

レヴィ「（怒）」

ルッスーリア「挑発？」

マーモン「レヴィがきれかけてるよ」

ベル「大人げねーの」

レヴィ「貴様！！ヴァリアーに入隊できぬようにしてやる！！」

美鈴「フン」

スクアーロ「それじゃあいくぞぉ！！」

～トレーニングルーム～

ｘａｎｘｕｓ「おせーぞカスが」

レヴィ「すみません、ボス」

美鈴「（なんかキャラ違うし）」

スクアーロ「よおし始めるぞぉ」

マーモン「ちょっと待ちなよ」

スクアーロ「なんだぁ」

マーモン「美鈴、素手で戦うのかい？」

スクアーロ「……」

美鈴「ご心配なく♪」

パン　バシュッ↑槍練成

レヴィ「ぬっ！？」

マーモン「ム…」

ベル「ん？」

スクアーロ「お、おい」

ｘａｎｘｕｓ「…（フッ）」

美鈴「準備ＯＫです」

ベル「何それ」

美鈴「詳しいことは終わったら♪」

スクアーロ「始めろ」

レヴィ「丸焼きにしてやる！！レヴィ・ボルタ」

バサッ

ベル「アイツマジで本気じゃん」

美鈴「傘…？デカイ！（バチバチ）って電気ぃ！？電気大っっ嫌い！！」

サクッ　タン　ピョン

スクアーロ「槍を足場にして飛んだか」

レヴィ「ぬぅ…」

ルッスーリア「まあ身軽ね」

美鈴「じゃあ私も行きます」

タタッ

レヴィ「自ら突っ込んでくるとは愚かな」

美鈴「ちっさいから当たりませんませんよーっだ（べー）」

スッ　パリン

レヴィ「ぬおっ!!足が!!」

マーモン「凍ってるね。これは幻覚ではなく現実（リアル）だよ」

ベル「あれ?姫はどこに行った?」

美鈴「ここだよ」

レヴィ「天井!?」

スクアーロ「どーなっていやがる」

美鈴「これで終わり(ラスト)♪」

タッ

スクアーロ「そこまでだぁ」

ピタッ↑空中だよw

美鈴「ちぇっ」

スクアーロ「降りて来い」

美鈴「はーい」

シュタッ　シュルシュル

マーモン「ム…ワイヤーかい？」

スクアーロ「天井にいたトリックかぁ」

美鈴「はい。レヴィさんの傘を足場にして飛んで、ワイヤーを取り付けたんです」

ベル「（ワイヤーか。うしし…使えるね）」

ｘａｎｘｕｓ「おい、ガキ」

美鈴「はい（またガキかいな）」

ｘａｎｘｕｓ「合格だ」

美鈴「本当ですか！？ヤッター住む場所できたぁ＾＾」

全（？以外）「そこ！？」

レヴィ「おい、それはいいからこの氷を溶かせ」

美鈴「あっすみません」

パン　ガラガラ

ベル「姫合格おめでとう」

ルッスーリア「これでもう仲間よ。だから敬語じゃなくていいわ」

美鈴「はい、ありがとうござ…じゃなくてありがとう！」

マーモン「それじゃあ改めて」

全「ヴァリアーにようこそ」

入隊試験（後書き）

晴れてヴァリアーの一員となりました。

ほっとしてあれこれ

美鈴「それじゃ皆の呼び方変えるね」

スクアーロ「どうせ特に変わんないだろ」

美鈴「アハハ。えっとスクアーロにマーモンにベル兄にルッス姐で」

ベル「何でオレだけ変わってんの？」

美鈴「だって年齢的にお兄ちゃん的位置だから」

ベル「ま、姫だから許す」

ルッスーリア「立ち話もなんだから部屋に行きましょう」

マーモン「そうだね」

～美鈴の部屋～

美鈴「何で私の部屋？」

全「広いから」

美鈴「即答！？」

マーモン「いちいち気にしてたらきりがないよ」

美鈴「…まいっか」

ルッスーリア「それより試験のときのあの技なあに？」

ベル「確かに。両手合わせるだけで物が作れるってうけんだけど」

美鈴「あーあれかぁ。あれは錬金術っていって…説明メンドイな」

錬金術…それは物質一の物から別の物質一の物を作り出す技。詳しくは鋼〇錬「う〝お〝おい！！それ以上はアウトだぁ！！」

マーモン「ナレーションも真面目にやりなよ？」

・・・。

美鈴「ということでそれ参照で」

マーモン「美鈴も説明省いたね。まいいけど」

ベル「いいのかよ」

ルッスーリア「……あそういえば」

全「？？」

ルッスーリア「美鈴ちゃんヴァリアーに入隊したんだから隊服作ってあげないとね」

美鈴「隊服？」

ベル「ヴァリアーの証的なやつ」

美鈴「それって一緒に住んでる証ってこと?」

全「（え――――――っ）」

ルッスーリア「まあ、そういうことね。なんかリクエストある?女の子だからスカートなんてどう?」

美鈴「スカートは遠慮します。皆と同じでいい。あと猫耳フードつきで!」

ルッスーリア「わかったわ。それじゃ」

バタン

ルッスーリア「さて可愛くしてあげましょう」

美鈴『可愛くなくていいから』

ルッスーリア「……」

――――――――

美鈴「あっぶな（汗）」

ベル「ネコ耳付けんのに可愛いのだめなんだな」

美鈴「そこ突っ込んだら負け」

マーモン「負けとかあるんだ…」

美鈴「ん…そうだえっとレヴィって人大丈夫カナ？」

スクアーロ「アイツの心配はしなくていいだろ」

ベル「だな。あのムッツリ」

美鈴「（嫌われてるんだ…）」

マーモン「二人とも言い過ぎだよ。あくまでも彼も幹部なんだからね」

ベル「へいへい」

美鈴「幹部？」

マーモン「言ってなかったね。僕らは皆幹部って言ってヴァリアーの中で上の立場なのさ」

美鈴「ゑ？」

マーモン「まあ、君も幹部だけど」

美鈴「ほっ」

コンコン　ガチャ

ルッスーリア「隊服できたわよ」

ベル「さっすが」

美鈴「は…速い」

ルッスーリア「そりゃあヴァリアーの女将さんだもの（ハート）」

ベル「キモッ」

美鈴「（ハート!?）」

マーモン「ルッスーリア、美鈴が引いてるよ」

ルッスーリア「あんらぁ?そんなことないわよねえ」

美鈴「いや…正直ドン引き」

ルッスーリア「（ガーン――――）」

美鈴「って隊服!!」

パサッ

美鈴「おぉ～メッサいいよこれ。試し着」

～少々お待ちを～

美鈴「あれ?何でサイズが合ってるの?」

ルッスーリア「実は美鈴ちゃんが寝てる間にこっそり」

美鈴「（ガーン――――）お嫁にいけない…」

スクアーロ「テメー何してんだぁ」

バコッ

ルッスーリア「うげぼっ」

ベル「ししししっ野太ぇ声」

ガチャ

ｘａｎｘｕｓ「おい、任務だ。美鈴お前の初任務にする」

美鈴「にんむ？」

ルッスーリア「ここにいる限り私たちはお仕事をしなくちゃいけないの」

美鈴「うん。わかった」

マーモン「美鈴一人かい？」

ｘａｎｘｕｓ「マーモンとベルもだ。コイツの力を見て来い」

マーモン「で、内容は？」

ｘａｎｘｕｓ「シルアスファミリーを潰して来い」

ベル「へーい」

マーモン「わかったよ」

美鈴「了解っス！」

ルッスーリア「がんばってね」

美鈴「はい！」

ｘａｎｘｕｓ「（結構隊服、様になってるな／／／）」

ほっとしてあれこれ（後書き）

次回は初任務に出かけマース
つーか最後のｘａｎｘｕｓどうしちゃった！？

初任務（前書き）

作「初任務ガンバ！」
美「誰にいってんの？」

初任務

タタタッ

美鈴「ねぇそのシリアスファミリーってどこ？」

マーモン「シリアスじゃなくてシルアスだよ。確かココから北２？、東に４００ｍだよ」

美鈴「よーし。Ｌｅｔ、ｓ　ｇｏ！！です」

ベル「テンションたっけー。ホントに６歳かって」

美鈴「ホントだよー。というかベル兄はなんでヴァリアーに入ったの？」

ベル「オレ？オレはみーんな殺してヴァリアーが面白そうだから入った」

美鈴「へぇ～。
　お、着いた。ココ？」

マーモン「そうだね」

ベル「人数は？」

マーモン「今やるよ。スゥ～粘写…ズビー」

美鈴「……なにこれ」

ベル「粘写。きったねーよな」

美鈴「……」

マーモン「ム…見張りが五人で中が２５人」

美鈴「少なっ。学校の一クラス分もいないじゃん」

マーモン「ココは弱小ファミリーだからね」

美鈴「ふーん?それじゃこれつかってみよ」

シャキッ↑短刀２本出現

ベル「どっからだしたの?」

美鈴「さぁ?いこっ」

マーモン「これで美鈴の面白い力が見れるかもね」

ダッ

美鈴「Ｉｔ、ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ♪」

ザシュッ　ザクッ

ベル「何の抵抗もなしに人殺せるんだな」

マーモン「案外暗殺者に向いているのかもね」

美鈴「ボスさんどちら♪鬼さんこちら♪」

マーモン「ちゃんとボスを倒すって分かってるんだね」

ベル「つーかゲーム化してるし」

美鈴「ん?この気配…ココの部屋だ!!」

バン

ベ／マ／美「いた」

ボス「何故分かった!?」

美鈴「君には関係ないさ。それじゃあ…
　ｓｅｅ　ｙｏｕ.」

パン　ボゴッ　グシャ

ボス「…（ドサッ）」

マーモン「今のも錬金術かい?」

美鈴「ん…まあね（パンパン）」↑手を払う

ゴソゴソ

ベル「何それ手袋?（パチン）なんで指鳴らして――」

美鈴「急いでココを出るよ（タッ）」

マ／ベ「美鈴？／姫？」

美鈴「急いで！！」

マ／ベ「…（ダッ）」

美鈴「5…4…3…2…（ダッ）↑外
…1」

ドオォォン↑アジト爆

マ／ベ「え？」

美鈴「かんりょー」

マーモン「一体何をしたんだい？」

美鈴「ボスさん倒したあとにその周りに火薬を撒いて」

ベル「あの手払ってたとき？」

美鈴「うん。で発火布で点火したって訳ですわ」

マーモン「発火布？」

美鈴「手袋だよ。詳しい説明はメンドイのでしない」

手袋と指パッチンで火をつける方法なんてまるで鋼の「ちょい待っ

たぁー。おいナレーション！！しっかり、私がしないからって」

ベル「姫が説明しないからナレーションが暴走しちゃったじゃん」

美鈴「だってぇ～メンドイんだもん（ウルウル）」

マーモン「でも火薬だけじゃあんな爆発無理だよ」

美鈴「あのボスさんね、体中にいっぱいボム持ってたから」

体中にボムなんてまるで獄寺のよ「ネタばれ自重！！」

美鈴「ナレーション！！いい加減にしないと三枚におろすぞぉ！！」

ベル「刺身にしてやんぜ」

何故にスクアーロ！？

美鈴「針千本のサボテンに…」

ベル「それ、オレの台詞だし」

マーモン「二人ともナレーションに当たる暇があったらさっさとかえるよ」

ベ／美「はーい」

～アジト～

美鈴「ただいま戻りましたぜ皆様方！！」

スクアーロ「うぉ゛お゛ぉい何があったぁ」

ルッスーリア「美鈴ちゃんのキャラが変わってるわよ」

マーモン「さーね。僕は知らないよ」

ベル「任務が楽しかったんじゃねぇの？」

美鈴「～♪」

レヴィ「ご機嫌だな」

美鈴「あっレヴィ無事だったんだ」

レヴィ「なぬっ！？」

スクアーロ「ベル、マーモン。美鈴の力はどうだった？」

ベル「殺しはゲーム感覚」

マーモン「美鈴が本気を出したら恐ろしいだろうね」

スクアーロ「じゃあアイツは本気を出さなかったのか？」

マーモン「見たところまだ１０％ってところだったね。美鈴にはまだ隠された力があるらしい」

ベ／ス「隠された力？」

ベル「何それ」

マーモン「さぁね。確証はないから信じるかどうかは君たちしだいだけどね」

ベル「で？」

マーモン「それは――」

初任務（後書き）

隠された力とは・・・！次回公開（ウソ）

全「おい！！」

皆の部屋

マーモン「それは――」

美鈴「ねえ！」

マーモン「（ムス）なんだい？」

美鈴「皆の部屋見たい！」

ベル「ん？いいぜ」

美鈴「わーい」

マーモン「お金払わないと見せないよ」

美鈴「ケチ（ウルウル）」

マーモン「…仕方ないね。今回はつけにしておくよ」

美鈴「やった」

ルッスーリア「私もいいわよ」

美鈴「ありが――」

ベル「行かせねーよ」

マーモン「美鈴に見せるわけにはいかないよ」

スクアーロ「テメーは論外だぁ」

美鈴「??（何があった?）」

ルッスーリア「ひどいわぁ」

美鈴「え…えっとじゃあルッス姐は最後で。スクアーロは?」

スクアーロ「いいぞぉ」

美鈴「それじゃあベル兄の部屋から」

~ベルの部屋~

ベル「ほい」

美鈴「おお~キレーだ」

ベル「当たり前じゃん。オレ王子だもん」

マーモン「見かけによらないね」

美鈴「ん?ピアノ線?じゃなくてワイヤーだ」

ベル「ししっ今新技試し中」

美鈴「へぇ~。よし次はマーモンの部屋」

マーモン「美鈴以外はあとでお金貰うよ」

スクアーロ「強欲チビがぁ」

～マーモンの部屋～

ガチャ

マーモン「見ても面白くないよ」

ベル「机とベッドとタンスだけかよ。つまんなっ」

美鈴「え？」

スクアーロ「テメェのほうが見かけによらないだろ」

美鈴「？」

ルッスーリア「金庫ぐらい合ってもおかしくないのにねぇ」

美鈴「ちょっと何言ってんの？奥にでっかい金庫があるじゃん」

全「何！？」

マーモン「まさか僕の幻術が見破られるとはね」

シュウウウ

ス／ベ／ル「あ！！」

スクアーロ「この金庫を隠してたのかあ」

マーモン「あまりお金は入ってないけどね。盗まれたら大変だからね」

ベル「でもマーモンの幻覚見破れるなんて姫やるじゃん」

美鈴「アハハ…」

～スクアーロの部屋～

美鈴「うん。予想通り」

スクアーロ「ちいっ」

マーモン「適度に汚いね」

ベル「いやきったないだろ」

美鈴「お、鮫の剥製発見。鮫好きなんだね」

スクアーロ「悪いかぁ」

美鈴「ううん」

美鈴「よし。最後にルッス――」

ベル「ごめん。オレ用事が…」

マーモン「僕もだよ」

スクアーロ「オレもだ」

美鈴「ちょっ待ってよ（泣）」

ピタッ

ベル「だよな」

マーモン「一人はきついね」

スクアーロ「そうだな」

～ルッスーリアの部屋～

ルッスーリア「ココが私の部屋よ」

ガチャ

全「っっ！！（おえっ）
　ごめん用事が！！」

ダダダッ

ルッスーリア「んもう。遠慮しちゃって」

違うだろ…ｗｗ

美鈴「ハアハア…何あれ」

マーモン「だからいったんだ」

ベル「マジでアイツきもいだろ」

スクアーロ「……（おえっ）」

一同が見たものはこれでもかというほど部屋に積まれたマッチョな男の死体の山。

美鈴「忠告聞けばよかった」

ベル「気分転換にどっかでおしゃべりしようぜ」

美鈴「大賛成」

ということで皆でおしゃべりタイム。

おしゃべりタイム

～美鈴の部屋～

ガチャッ

美鈴「あっ私の部屋、土足厳禁にしたから」

ベル「なんで？」

美鈴「だって私日本人だもん。日本は土足厳禁なんだよ」

マーモン「しっかり靴箱も設置してある。わかったよ」

美鈴「土足で上がるとトラップが発動するよ（ニコッ）」

ベル「スクアーロに言っとけ。たぶんアイツそのままあがりそうだからな」

美鈴「だね。っと…そうだ、マーモンに聞きたいことがあるんだけど」

マーモン「なんだい？」

美鈴「なんでマーモンは赤ちゃんなのにヴァリアーに入ってるの？」

ベル「そういえばそうだよな。なんか術とかも使えるし」

マーモン「そのことかい？それはお金払わないと教えないよ」

ベ／美「（またお金かよ！！）」

ベル「マジでむかつくんだけど、このチビ」

マーモン「やるかい？」

ベル「任務暇だったしさ」

マーモン「だろうね」

注意：ココ美鈴の部屋ですよｗｗ

美鈴「ちょっと二人とも！！払うからさ！！やめて！！」

ベル「ちぇっ（ボソ）…姫が払うなら王子も払うか。（やっぱ払わなくても…）」

マーモン「どうも。僕はアルコバレーノって言う呪われた赤ん坊さ」

美鈴「アルコバレーノ？虹？」

ベル「聞いたことあるぜ。確か世界に七人いるんだよな」

マーモン「その通りだよ。本来は普通の人間だったけど、アルコバレーノになるときに、呪いで赤ん坊の姿になったんだよ」

美鈴「ふーん？」↑難しいの苦手（だって六歳だもん）

ベル「へぇー」

美鈴「ヴァリアーって不思議というか個性的な人がいっぱいだね。特にルッス姐とか…」

ベル「…」

マーモン「そのうち慣れるよ」

ベル「眠い…」

美鈴「お開きにしよっか。もう夜遅いしね」

マーモン「そうだね。それじゃおやすみ」

ベル「ふぁ～。おやすみ」

バタン

美鈴「……（パタッ）
すぅ～」

寝つきのいい美鈴でした。

おしゃべりタイム（後書き）

短っ！？

て言うかスクアーロ一緒じゃなかったんだ

星

ベル「ひ～め～」

マーモン「どうしたんだい？」

ベル「マーモン、姫見なかった？」

マーモン「見てないよ」

ベル「ちぇっ」

タタッ

ベル「オカ…ルッスーリア、姫見た？」

ルッスーリア「今オカマって言ったわね？」

ベル「知んね」

ルッスーリア「……ふう。美鈴ちゃんなら上よ」

ベル「上？」

ルッスーリア「そう。屋根の上よ。何でも今日は星がきれいだから眺めてるんですって」

ベル「サンキュ」

～屋根の上～

ベル「やっと見つけた」

美鈴「お、ベル兄。ベル兄も星見に来たの？」

ベル「ちげーよ。ほれ（カサ…）」

美鈴「ケーキだ。ありがと」

ベル「しっかし、ホントにきれいに星でてんな」

美鈴「でしょ？私さお母さんによく聞いてたの。星は何で明るいのかって」

ベル「は？」

美鈴「そしたらね、星は皆を見守るために明るいんだって言われたの」

ベル「随分とロマンチックな母さんだな」

美鈴「だね。それで思ったの。一人ひとり生まれた場所、生きていく場所は違うけど皆同じ地球って言う名前の星に生まれたんだって、皆どこかで繋がってるんじゃないかって」

ベル「ふうん。なるほどな。姫って思考回路が普通じゃないよな」

美鈴「ん？なんで？」

ベル「だって普通の六歳児は星を見ただけでそんな感想は言わないぜ」

美鈴「そう？」

ベル「ああ」

美鈴「そっか。そうだよね。なんか哲学者みたいなこと言っちゃったね」

ベル「ま、星がきれいだし、オレもしばらく見てくか」

二人で空を見上げる。澄み切った夜空に何千何万の星が輝いていた。

美鈴「イタリアに来て星がこんなにきれいって知った」

ベル「日本で見なかったのか？」

美鈴「周りに明かりが多いと星ってきれいに見えないの。でもココは森の中、明かりなんて全くないからとてもきれい」

ベル「姫はイタリアに来て良かったと思ってるか？」

美鈴「勿論！イタリアに来てこんなに楽しい人たちとあえてこんなにきれいな星を見ることができた。とってもうれしいよ。

……人は死んだら星になるって言われてる。私が殺した町の皆も星になって私を見てるのかな？」

ベル「さーな。オレはロマンチストじゃないからさ。けど姫がそう

思うならそうなんじゃね？」

美鈴「絶対に恨まれてるよなぁ（汗）」

ベル「殺された奴も悪いだろ。だって姫のこと殺そうとしてたんだろ？」

美鈴「まあそうだけど」

美鈴は複雑な気持ちで星空を見た。星はどこまでも広がっていて見るものすべてを癒した。

星（後書き）

内容が全く意味がわからないよ（汗）

お買い物（前書き）

軽めの日常です。

お買い物

美鈴「お買い物、お買い物♪」

ルッスーリア「あらあらそんなにはしゃいじゃって」

ベル「もうちょい大人しくしてろよ」

美鈴「だってお買い物大好きなんだもん♪」

スクアーロ「う〝お〝おい！！オレたちまで来る必要あったかぁ」

レヴィ「ぬ…」

ルッスーリア「あったわよ。だってスクアーロがいなくちゃボスの好み分からないじゃないの」

美鈴「そうだよ、スクアーロ。せっかくのボスの誕生日なんだから」

つまりはそういうことである。一同はｘａｎｘｕｓの誕生日プレゼントを買いに、町まで来ていたのだ。元々はルッスーリアと美鈴だけだったのが、姫が行くならとベルも付いてきてさらにそのメンバーだとボスの好みが分からないということでスクアーロも付き、マーモンは任務で不在、一人残されるのがいやだったレヴィはとりあえず付いてきたのだ。

美鈴「と言うことで、ボスの好みは何ですか？」

スクアーロ「んなの知るか！」

美／ル「（ガーン）」

ベル「ししっこの際なんでもいんじゃね？テキトーに買ってけばさ」

レヴィ「ボスへのプレゼント（貢物）を買うというのにテキトーは断じて許さん！！」

ベル「じゃあお前ボスの好きな物（モン）知ってんのかよ（つーか貢物じゃねーし）」

レヴィ「ぬぅ…それは…」

美鈴「ほらぁ変なことでケンカしないでよぉ。だからベル兄もナイフしまってよね」

ベル「ちぇっばれてたか」

美鈴「もう（呆）」

スクアーロ「何でもいいからチャッチャと買うぞ」

レヴィ「スクアーロ貴様！オレがテキトーは許さんと言ったばかりでは――」

美鈴「うっさい」

ドスッ↑飛び蹴り

レヴィ「ぬおっ」

ベル「ししししっぶっざま♪」

レヴィ「このガキが…」

美鈴「（カチン）……あーそーですか君はここで人生を終わりにしたいんですね？（ゴゴゴゴゴゴ）」

レヴィ「……（フリーズ）」

ルッスーリア「美鈴ちゃん落ち着いて（汗）今はボスの誕生日プレゼントが先よ。レヴィは後にしなさい」

美鈴「ちっはーい」

レヴィ「（遠まわしにオレのことを殺っていいと言われた気が…）」

ベル「んで？結局何買うの？正直何かってもボスは喜ばねーと思うし、良くてスクアーロいびり、悪くてアジト全壊だと思うぜ」

ルッスーリア「そうよねぇ」

スクアーロ「う〝お〝い！何で良くてオレがあいつにいびられなきゃなんねーんだぁ！！」

美鈴「仕方ないよ、スクアーロはそういうキャラなんだ」

スクアーロ「子供を諭すような口調で言うなぁ！！」

美鈴「よしこうなったらじゃんけんだ」

ベル「ジャンケン？」

美鈴「そう。ジャンケンをして勝った人がプレゼント選び、負けた人がボスにプレゼントを渡すって言う形で」

ベル「ししっおっもしろそ～」

ルッスーリア「美鈴ちゃんがいいなら別にいいわよ」

美鈴「いくよっジャンケン――」

美「パー」　ベ「チョキ」　ル「チョキ」　ス「チョキ」　レ「チョキ」

全「……弱！？」

美鈴「じゃんけん弱いの忘れてた～！！」

スクアーロ「これでプレゼントを渡す奴は決まったな」

ベル「んじゃ次いこうぜ。ジャンケン――」

ベ「グー」　ル「グー」　ス「グー」　レ「パー」

レヴィ「ぬおおおぉぉ！！！」

ベル「決まりだな。と言うことでレヴィ、任せたぜ」

と言うわけで三時間後。

ベル「長……」

美鈴「すぅーーーー」

ルッスーリア「あまりに長くて美鈴ちゃん寝ちゃったわよ」

ベル「ししっ姫の寝てるとこネコみたいじゃん」

ルッスーリア「そうかしら？」

ベル「ちょー丸まってさ幸せそうな寝顔してっからさ。そーゆーとこネコみたいじゃね？」

ルッスーリア「まあ言われて見ればね」

スクアーロ「う〝お〝おいまだ決まんねぇのかぁ！」

レヴィ「か…買ったぞ」

ルッスーリア「それじゃ帰りましょうか」

～アジト～

ベル「姫がんばれよ」

美鈴「う…うん」

ガチャ

美鈴「失礼します……」

ｘａｎｘｕｓ「何のようだ」

美鈴「えっと今日ボスの誕生日って聞いて皆でプレゼント買ってきたんです。よ…良かったらどうぞ」

ｘａｎｘｕｓ「……」

美鈴「プレゼント選んだのレヴィなのでセンスの保障はできないんですけど…。ではこれで」

タタタッバタン

ｘａｎｘｕｓ「……（ゴソゴソ）」

出てきたのは耳あて。

ｘａｎｘｕｓ「（イラッ）」

ドガァン

十月十日、アジト半壊、負傷者一名（スクアーロ）

ヴァリアーっていいね

美鈴ｓｉｄｅ

私が入隊してから二ヶ月が経った。↑早いです。ゴメンナサイ

今ではSランクの任務に一人で行けるようになった。いろんなことを通してヴァリアーに馴染むこともできた。それに隊員さんたちも丁重に扱ってくれるし。

スクアーロ「う〝お〝おい美鈴、任務だぁ。サイドファミリーを消して来い」

美鈴「ＯＫですぜい！！」

スクアーロの大声にも慣れた…多分。

～敵アジト～

美鈴「お～人がいっぱいだね…やりがいがありそう♪」

パン　ドゴッ↑地割れ

門番「うわっっなんだぁ！」

美鈴「サヨナラ～」

敵「敵襲だ（シュッ）ぐああ」

最近は基本武器も定めた。手裏剣がお気に入り♪

美鈴「Ｉｔ、ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ！！」

敵「うああ」

ボス「貴様何者だ！？」

美鈴「うわ、ボス自ら来たよ…（呆）私はヴァリアーなんすよ」

名乗ってみた。

ボス「こんなガキがか！」

因みにボスさんの身長は目測１８７ｃｍ…

美鈴「小っさくて悪うございました！！（怒）」

パン　グシャ↑人体破壊

ボス「な…（ドサッ）」

美鈴「ふん」

タタッ　パチン

美鈴「Ｌｅｔ、ｓ」

ドオオォォン↑アジト爆

美鈴「任務完了っと。帰ろ」

―――――――――

～アジト～

美鈴「ただいま」

ベル「おかえり」

レヴィ「ご苦労だったな」

美鈴「ありっ？マーモンは？」

スクアーロ「アイツは任務だぁ」

ガチャ

マーモン「今帰ったよ」

美鈴「お帰り」

スクアーロ「全員揃ったか。昼飯のあと会議室に来い」

美鈴「会議室？（なんかあんのかな？）りょーかい」

ベル「ん」

マーモン「わかったよ」

レヴィ「…」

ルッスーリア「ご飯できてるわよ」

美鈴「おなかすいたぁ」

～食堂～

モグモグ

美鈴「やっぱりイタリアン料理っていいね。いつ食べても飽きないよ」

ベル「普通にイタリアにいる六歳の日本人って姫ぐらいじゃね」

美鈴「あはは。そうだね」

モグモグ

美鈴「ご馳走様」

ベル「はやいな」

スクアーロ「てめえが遅いんだ」

美鈴「よし、会議室に行くか」

ルッスーリア「私は片付けてからいくわね」

～会議室～

ｘａｎｘｕｓ「揃ったか」

スクアーロ「ああ」

マーモン「どうしたんだい、ボス。突然の召集なんて」

レヴィ「何事ですか」

ｘａｎｘｕｓ「来週ボンゴレを襲撃する」

全「っっ！！」

美鈴「あ、あれ？ヴァリアーもボンゴレじゃ…」

マーモン「なるほどね。とうとうあれが始まるのか」

レヴィ「１０代目はボスだけです」

美鈴「あのー話が全く見えないんだけど」

マーモン「ボスは現ボンゴレボス９代目の息子なんだよ」

美鈴「へぇ！！」↑今回は理解

ｘａｎｘｕｓ「それで今回の襲撃の作戦を立てる」

全「はい」

ｘａｎｘｕｓ「そこで美鈴、今回お前に囮をやってもらう」

全（美以外）「っっ！！」

ｘａｎｘｕｓ「その為にボンゴレ本部にお前の入隊を報告していない」

マーモン「でもボス、美鈴はまだ六歳だ」

ｘａｎｘｕｓ「だからこそだ。相手が子供なら誰も警戒はしねぇ」

スクアーロ「相手側に隙を作らせるということか」

レヴィ「だがボス。このガキに出来（ガン）」↑殴

美鈴「ガキって言うな！ムッツリ」

レヴィ「貴様！！」

美鈴「ボス、私囮やります。いや、やらせてください！」

ベル「姫？」

美鈴「せっかくの恩返しのチャンスだもん」

恩も何もこのために入れられたんだけどね（笑）

美鈴「なんか言った？」

いえ何も。

ルッスーリア「でも美鈴ちゃん、囮ってたくさんの敵をいっせいに

引きつけるのよ？」

美鈴「うん、わかってる」

ｘａｎｘｕｓ「決まりだ。ベルとルッスーリアは通路、レヴィは中庭、マーモンは司令室だ」

ベル「へーい」

マーモン「ＯＫだよ」

レヴィ「仰せのままに」

ルッスーリア「はぁい」

ｘａｎｘｕｓ「スクアーロはオレと一緒にじじぃを殺る」

スクアーロ「ああ」

ｘａｎｘｕｓ「決行は来週の水曜日だ」

全「はい」

ｘａｎｘｕｓ「解散しろ。美鈴は残れ、囮の内容について詳しく説明する」

美鈴「はい」

ゾロゾロ

ｘａｎｘｕｓ「お前がやることは…」

ｘａｎｘｕｓが美鈴に託した囮の内容は…
1、なるべく多くの敵をひきつけ他のメンバーが侵入しやすくする。
方法は問わない。
2、ひきつけた敵は一人残らず全て殺す。
3、ヴァリアーの侵入がうまくいったらベルたちに加勢する。

…ということ。

ｘａｎｘｕｓ「わかったか。必ず成功させろ、その先はお前にかかっている」

美鈴「はい。がんばります」

ｘａｎｘｕｓ「もどっていいぞ」

美鈴「失礼しました」

ガチャ

美鈴「ふうー」

？「どうだった？」

美鈴「うわっ皆何してんの！？」

ベル「姫が心配だったから」

美鈴「大丈夫。なんとかなるって（笑）」

ルッスーリア「あら、そう？」

マーモン「策は立ててあるんだね？」

美鈴「うん。確かこれをかぶると…（スポッ）」

シュルルルル

美鈴がフードをかぶると一瞬にしてネコになってしまった。

美鈴（ネコ）「ニャ～ン」

ベル「へ？どーなってんの？」

パサ　シュッ

美鈴（ネコ）がフードを取るといつもの美鈴に戻った。

美鈴「と言うことなんで」

ベル「アンビリーバボー」

ルッスーリア「がんばってね」

美鈴「モッチロン！！」

それから一週間、幹部は全員総出の修業を行った。そして完璧に仕上がった。

ヴァリアーっていいね（後書き）

もうすぐ揺りかごです！！

作戦実行・・・はまだしない！！

作戦実行前日
この日は美鈴からトレーニングルームに来るように全員に召集がかかった。

スクアーロ「う〝ぉ〝いアイツどういうつもりだぁ」

ｘａｎｘｕｓ「…」

ベル「どうしたんだろ」

～トレーニングルーム～

美鈴「皆まだかな～」

ガチャ

スクアーロ「う〝お〝ぉい！！用事って何だぁ！！」

美鈴「やっと来た」

マーモン「ム…なんだいそれ」

美鈴が持っていたのは…

美鈴「カメラだよ♪」

デジカメだった。

美鈴「明日は作戦実行日でしょ?だから、明日何があっても皆ここに一緒にいだんだって、皆仲間なんだって証を残しておきたくて」

ｘａｎｘｕｓ「…くだらねぇ」

美鈴「あまり写真をバカにしないでよボス」

スクアーロ「写真かぁ。別にいいんじゃねえか?」

ベル「王子は賛成♪」

マーモン「僕も構わないよ」

ルッスーリア「証なんていいじゃない」

レヴィ「それもそうだな」

美鈴「よし。じゃ撮ろ♪」

ルッスーリア「ホラ皆並んで」

マーモン「ボス、せっかく美鈴が提案したんだ。いいじゃないか」

ｘａｎｘｕｓ「ハッ…るせぇ」

全「……」

美鈴「と、撮るよ（汗）」

ピッピッピッカシャ

美鈴「うん、撮れた。これ後でプリントして皆に配るから」

ベル「楽しみじゃん」

美鈴「楽しみにしといてね」

ｘａｎｘｕｓ「誰がするか」

スクアーロ「おいｘａｎｘｕｓ、美鈴がやってくれるっつってんだからその態度はやめやがれ」

ｘａｎｘｕｓ「チッ」

ドガッ↑カメラスタンド投

スクアーロ「（ゴチン）でっ！！う〝お〝おい、ｘａｎｘｕｓ！！」

スタスタスタ

全「……」

美鈴「（明日ホントに大丈夫かな）うん…用はこれだけ。写真は出来るまで時間が有るから戻っていいよ……」

～美鈴の部屋～

美鈴「ボス機嫌悪すぎ…（汗）」

カチッ↑pc起動
貴女六歳ですよね？
カチャカチャ
ピー

美鈴「うん、出来た。カンペキ」

～ベルの部屋～

コンコン

ベル「へーい」

美鈴『ベル兄写真できたよ』

ガチャ

ベル「おっサンキュ」

美鈴「はい」

ベル「ぷっボスとレヴィ超仏頂面してんの」

美鈴「私他の人に渡してくるから」

ベル「ん」

～スクアーロの部屋～

コンコン

スクアーロ「誰だ？」

美鈴『私だよ』

ガチャ

美鈴「写真持ってきたよ」

スクアーロ「おう、すまねえ」

美鈴「いいっていいって」

スクアーロ「こうやって見ると、やっぱりベルと美鈴は本当にチビだなぁ」

ドガッ↑殴

美鈴「怒るよ（ニコッ）」

スクアーロ「す…すまん（もう怒ってるだろと突っ込んだら負けだろうな）」

美鈴「他の人んトコ行くから（プイ）」

～マーモンの部屋～

コンコン

マーモン「ム…入っていいよ」

ガチャ

美鈴「マーモン写真持ってきたよ」

マーモン「ありがとう」

美鈴「ねえマーモン」

マーモン「なに？」

美鈴「やっぱり何でもない」

マーモン「フーん」

美鈴「やっぱり聞く」

マーモン「どっちだい」

美鈴「ルッス姐の部屋、行くの最後のほうがいいよね」

マーモン「…そうだね」

美鈴「じゃあ私次の部屋行くから」

～レヴィの部屋～

コンコン

美鈴「レヴィ写真持ってきたよ」

レヴィ「…お前がオレの部屋に来るのは初めてだな」

美鈴「そりゃそうだよ。誰にも教えてもらってないもん」

レヴィ「ぬ？じゃあどうやって来た？」

美鈴「あ…どうやって来たんだろう？何故かわかったんだよね」

レヴィ「そうか」

～ｘａｎｘｕｓの部屋～

コンコン　がチャ

美鈴「失礼しま…（ヒュン）…！！」

パリン

コップが飛んできた。

頭上５０ｃｍほど。いつもならスクアーロの頭に当たる位置…

美鈴「ボ…ボスぅ～（泣）」

ｘａｎｘｕｓ「……（あっ）何のようだ」

美鈴「しゃ、写真が出来たので持ってきたんですけど…（今『あっ』って聞こえた…（ブルブル））」

ｘａｎｘｕｓ「そうか。明日は早い。明日に備えてしっかり休め」

美鈴「はい」

パタン

ｘａｎｘｕｓ「…ハッ証か…くだらねえ」

次の日↑早いｗｗ

ベルｓｉｄｅ

王子楽しみでちゃんと眠れなかった。因みに今は朝の四時。

ししっ姫の部屋にいたずらにいこっ♪

～美鈴の部屋～

カチャッ

そ～

美鈴「あ、ベル兄」

バタン

……ちぇっ起きてた。

ガチャ

ベル「何で起きてんの？」

美鈴「何でって…眠れないから」

ベル「何だ姫もか」

美鈴「『も』ってことはベル兄も緊張してるの？」

ふ～ん。緊張してるんだ。

ベル「いや、オレは楽しみで眠れなかった」

今日は何人殺せるかな♪

美鈴「じゃあさ、寝不足にならないようにおまじないしてあげる」

おまじない？

ｃｈｕ☆（ホッペ）↑六歳ですので恋愛とかではないですよっっ

ベル「なっ／／／」

美鈴「にゃは！！（ニパッ）」

ベル「んじゃ王子からもお返しで緊張しないおまじない」

ｃｈｕ☆（ホッペ）↑八歳なんだから恋愛じゃないよっっ

美鈴「ふにゃ／／／」

ベル「とにかく姫は明日大切な役なんだからもっかい寝れば？子供に不眠はよくないぜ」

美鈴「いやいや…ベル兄も子供だしょ…（呆）その言葉そのまま返してあげる」

ベル「オレは大丈夫だし。だってオレ王子だもん」

美鈴「王子関係ないよ!!じゃあ私もっかい寝るから」

ベル「んじゃオレも戻るな。お休み姫」

バタン

ベル「ふぁ〜」

あれ?なんか眠くなってきた…おまじないの効果?

オレも二度寝しよ。

作戦実行・・・はまだしない！！（後書き）

ル「ちょっと～私の部屋は？」
作「ｍｅの気分が悪くなりそうなのでカットした」
ル「いやあぁぁぁ！！」

作戦開始

６：００
まだ薄暗い廊下。幹部たちの部屋の前に立つ人物が一人…

スクアーロ「う〝お〝おおおぉぉぉい！！！！！テメーらぁ！！さっさと起きやがれぇ！！！」

パリーン↑コップＨＩＴ

ｘａｎｘｕｓ「るせえ、カスが」

ルッスーリア「んもう、スクアーロったら朝っぱらから大声出して」

美鈴「そんな大声出さなくても起きられるって」

ベル「お、姫よく眠れた？」

美鈴「おかげさまで。そっちは？」

ベル「オレも」

全「？？」

マーモン「スクアーロ、朝っぱらからそんなに気力使って、作戦のときに倒れたりしないでよね」

レヴィ「貴様朝からボスの機嫌を損ねるな」

スクアーロ「チィ！！」

？「ああ、やはり行ってしまわれるのですね」

ベル「あっ」

美鈴「おっ？」

マーモン「ム…」

ルッスーリア「あら…」

レヴィ「ぬ…」

スクアーロ「テメーは…」

ｘａｎｘｕｓ「オッタビオ」

オッタビオ「ｘａｎｘｕｓ様…」

彼・・・オッタビオはヴァリアーの副隊長、いわゆる?2だ。オッタビオの詳しい説明は隠し弾（シークレットブレット）第二巻で。

全「（コイツ説明テキトーだな…）」

ｘａｎｘｕｓ「てめぇ今更何しにきやがった」

オッタビオ「いえ、別に何も。あなた方は止めても行ってしまわれるのでしょう」

スクアーロ「それじゃあ一体何しに来たぁ」

オッタビオ「見送りですよ。しかしベルフェゴールや美鈴まで動くとは…。幹部とはいえまだ十歳にもなっていない二人が…」

ベル「うしし、だって面白そうだモン」

美鈴「ボスのおかげで私はココでこうして生きてる。だったらその人のために動くのが筋ってモンじゃないの？」

ベル「話だと作戦に参加しないのお前だけなんだってな」

オッタビオ「私は皆さんが無事に帰ってくるのを待っていますから」

ｘａｎｘｕｓ「テメーらいくぞ」

全（オ以外）「はい」

美鈴「（何で突然オッタビオ来たんだろう）」

作者の気まぐれです（笑）

スタスタスタ

～ボンゴレアジト本部～

美鈴「うわ～とうとうきたぁ～」

スクアーロ「うまくやれよ」

美鈴「う、うん…（スポッ）」

シュルルルル

美鈴（ネコ）「ミャ～ン」

タッ

全「（ほわ～ん）」

小さな黒猫に見とれる全員であった。

美鈴（ネコ）『ニャ～ン』

門番『ん？ネコ？』

門番『おいどうした？お、可愛い黒猫だな。お前のか？』

門番『違うよ。どっからか迷い込んできたんだ』

美鈴（ネコ）『ニャニャニャ』

一瞬美鈴（ネコ）の目が光ったのに誰も気づかなかった。

門番『それにしてもこのネコ不思議な奴だな。右目と左目の色が違うぞ』

門番『ホントだな。きれいな深紅の色じゃないか』

門番『オレ他の奴ら呼んでくるわ。こいつ見せてやろうぜ』

～しばらくして～

ゾロゾロ

ベル「うわ、何あれ。中から人がいっぱいじゃん」

ルッスーリア「よくもまあネコ一匹であんなに人が来るわね」

ベル「オッドアイのネコが珍しいんじゃねぇの？」

スクアーロ「アイツってオッドアイなのか？」

ベル「あ、知んなかったカンジ？」

マーモン「僕は気づいていたよ」

美鈴（ネコ）『（クルッタン）』↑宙返り

ボンゴレの皆様方『おぉ～（パチパチ）』

ｘａｎｘｕｓ「おい合図が来たぞ」

全「（さっきの宙返りって合図ですか！？）」

サササッ

美鈴（ネコ）「（よし。皆入ったね）シャーッ」

ダッ

ガブッ

男「うわっ」

ブチッ

美鈴（ネコ）「（さあショータイムの始まりだ）」

ブチッ　グシャッ
ドサドサ

パサッ　シュッ

相手全「こっ子供!?」

美鈴「フフフ……It、s　show　time♪」

こうしてヴァリアーによるボンゴレ本部襲撃は幕を開けた。

作戦開始（後書き）

天国にて
男「あのネコ欲しいなぁ」
男「何を言っている！あれはオレのだ！！」
門番「何だと！オレが最初に見つけたんだぞ！」
男「なにを～」
ポカスカ
死んでもまだ戦い（？）続ける男たちであった（笑）

作戦の先には・・・

～廊下～

パァンパァン

男「敵だ」

男「どこにいる!?」

コツコツコツ

ルッスーリア「・・・」

男「うわっっ」

男「何だ貴様は!?」

男「ん?その服…ヴァリアーの奴じゃないか?」

男「何だ味方か。ちょうどいいお前敵を見なかったか?」

ルッスーリア「うっふ～ん見たわよ」

男「何?」

男「どこだ?」

ルッスーリア「うふふ…あなた達のま・え（ハート）」

ドガッ　バキッ

男「き…貴様ぁ！！」

ドサッ

～中庭～

男「クーデターだ」

男「敵はヴァリアーらしい」

ザ・・・

レヴィ「・・・」

男「相手は一人だ」

男「袋叩きにしてしまえ」

男「行くぞぉ！！」

レヴィ「フン雑魚共が。丸焼きにしてやる、レヴィ・ボルタ」

バチバチッ

男たち「うわあああぁぁ！！！！」

～廊下～

男「防護壁をおろせぇ！！」

ガシャン　ガシャン　ガシャン

男「これで大丈（スパッ）…なに！？」

ベル「ししししっこんなんで止められると思ってんのかよ。誰相手にしてんのか分かってんの？」

シュッ　スパッ

男たち「ぐわぁ！！」

～司令室～

女「Aブロック、Bブロック、Cブロック、Dブロック突破されました」

男「くそっ」

グニャ　ザバァァ↑幻覚の水

女「きゃあああああ」

男「うわあああああ」

マーモン「ボンゴレの心臓部ともいえる司令官がこんなものかい」

～廊下～

美鈴「皆どこだろ～加勢しに来たのに」

男「いたぞ！！」

美鈴「ん？（ダダダッ）おお！！人が沢山！！２０人くらいですかね？」

男「こんなガキに侵入を許すなど！！」

美鈴「（プチッ）」↑キレタ

男「撃てぇ！！」

ズガガガガガガガガガガ

男「死体を確認しろ」

男「なっっ誰もいない！？」

美鈴「どこみてんだか（呆）」

男「天井だと！？」

男「奴の周りにあるのは…弾！！？？」

美鈴「６歳相手に大人げないなあ…。今君たちが撃った分だけ返してあげる」

パン　　フッ↑全て落下（美鈴も）

ストッ↑着地

男「逃げろぉぉ！！」

美鈴「ムリ」

ズガガガガガガガガガガ

ベル「おっ姫じゃん」

ルッスーリア「大丈夫だったのね…？血まみれだけど」

美鈴「ああ（ポン）これはこの人たちの血でございますわ（ニコッ）」

ベ／ル「……（汗）」

マーモン「ムム、全員無事のようだね」

ベル「全員じゃねぇよ」

マーモン「レヴィがいないのか」

レヴィ「ココに…いるぞ…ゴホッ」

美鈴「ダサッ…あ！マーモン、ボスとスクアーロは？」

マーモン「九代目のところにいったよ」

ルッスーリア「私たちも行きましょう」

全「うん」

〜???〜

ドガン　バゴン

ｘａｎｘｕｓ「ハァ…ハァ…じじぃここまでやるとは思わなかったぜ」

九代目「家光はお前を殺すなと言ってくれた。だが、ここまで犠牲を出してしまった以上私がやらなくては…」

ｘａｎｘｕｓ「やっと本性を出しやがったな!!じじぃ!!」

九代目「ｘａｎｘｕｓ何故お前は…」

ｘａｎｘｕｓ「うるせぇ!!それはお前が一番良く知っているはずだ!!なぜならオレは――――」

スクアーロ「っっ!!」

ｘａｎｘｕｓ「分かったらかっ消えろ!!」

九代目「……皆すまん。やはりわしには…」

ボッ　ボッ　カッ

ｘａｎｘｕｓ「何だこの技は!?ぐわぁぁ!!」

ビキビキビキ

スクアーロ「はぁ…はぁ…（ｘａｎｘｕｓ）」

コツコツコツ

スクアーロ「（行ったか…）」

タタタッ

スクアーロ「っっ！！」

美鈴「スクアーロ！！ボス！！」

ルッスーリア「大丈夫！？」

スクアーロ「おめーらすまねぇ…」

ベル「スクアーロ、ボスは？」

スクアーロ「あそこだぁ」

スクアーロが指差した先には…

全「っっ！！」

氷付けにされたｘａｎｘｕｓが…

レヴィ「ボスぅ！！」

マーモン「どうなっている」

美鈴「氷なら私が…（パン　シーン）…崩れない…じゃあこれは！！（パチン　ドォン）う…そ…」

氷はびくともしなかった。

スクアーロ「もうすぐ他の奴らがきちまう。急いで出るぞ」

美鈴「でもボスは」

ルッスーリア「この氷ごと行くのは無理よぅ」

レヴィ「ふざけるな！！」

ベル「諦めろよレヴィ。姫もさ」

美鈴「……ボス…ごめん」

スクアーロ「行くぞ」

タタタッ

男「九代目これは！？」

九代目「ｘａｎｘｕｓを地下に厳重に幽閉しておけ」

男「はっ」

～ヴァリアーのアジト～

美鈴「うう…ひっく…ボス…（泣）」

ベル「…」

ルッスーリア「…」

マーモン「…」

レヴィ「ボス…」

スクアーロ「ちくしょう…ｘａｎｘｕｓ…」

ガチャ

全「！！」

入ってきたのはボンゴレの幹部だった。

幹部「これよりヴァリアーの処分を言い渡す。ヴァリアー隊長ｘａｎｕｓはボンゴレ地下に幽閉・監禁処分。ヴァリアー副隊長オッタビオを除くヴァリアー隊員は無期活動停止処分とする」

オッタビオの名が出たときみんなの中にムカツキが出たことは言うまでもない。

美鈴「無期活動停止…」

レヴィ「ヴァリアーが潰れぬだけましか…」

幹部「ヴァリアーをつぶさぬのは九代目のご慈悲だ。ありがたく思え」

バタン

幹部が出て行って沈黙が支配した。

ベル「これからどーする？」

ルッスーリア「おとなしくしていましょ」

全「ハァ～」

設定パート2

ココから一気に話が二年飛びます。

年齢：８歳

身長：１２６ｃｍ

瞳の色：左が茶色右が深紅（前回入れ忘れました。すみません（ペコリ））

髪：栗色　長さは肩より５ｃｍ下　前髪は微妙に右目を隠している

所持品：謎のリング↑今はほとんど関係ないです
　発火布（手袋）　手裏剣　短刀２本

ツナ出てきます。多分・・・・・・
なんかいろいろテキトーですね。揺りかごまで読んで頂いた方本当にありがとうございます。まだまだ駄文が続くと思いますが、ママンのように心が広い方はどうぞ読み進めてください。ついでにこれからも応援よろしくお願いします。（ペコリ）

いざ日本へ

「揺りかご」――あのクーデターの日をマフィア界の人々はそう呼ぶようになった――から二年がたった。しかし、ヴァリアー内の空気はあの日から何も変わっていなかった。その中でも特に異常だったのが…

ベル「ねぇ姫？」

美鈴「・・・」

ベル「ひーめっ」

美鈴「・・・」

ベル「姫ー聞こえてるー？」

美鈴「・・・」

美鈴だった。

ベル「？なあ、最近姫の反応が無いんだけど」

ルッスーリア「え？」

マーモン「ム？」

スクアーロ「はあ？」

レヴィ「なぬ？死んで…」

ベル「ねえから」

ルッスーリア「そういえばご飯に対する反応も最近鈍いわね」

マーモン「確かにね。ちょっと美鈴」

美鈴「・・・」

ルッスーリア「美鈴ちゃん？」

美鈴「・・・」

レヴィ「おい」

美鈴「・・・」

スクアーロ「う゛お゛おい！！美鈴ぃ！！」

美鈴「・・・」

ベル「スクアーロの声にも反応しないし」

全「（マジで死んでんじゃないの？）」

マーモン「何があったんだい？」

ルッスーリア「心当たりは？」

ベル「あるわけねぇだろ。おい、姫！！（ポン）」

美鈴「わひゃあ！！！！」

全「っっ！！」

美鈴「あ、ベル兄どうしたの？」

ベル「どうしたのじゃねぇよ。何回呼んだと思ってんだよ」

マーモン「一体何をボーッとしてたんだい？」

ルッスーリア「そうよお。スクアーロの大声にも反応しないなんて」

美鈴「ごめん、考え事してた」

マーモン「ココ最近ずっとかい？」

美鈴「うん」

ルッスーリア「なににについて？」

美鈴「…ボスのこと」

レヴィ「ボス…」

ベル「何で突然ボスのことを…」

美鈴「それが突然って訳でもないんだよね。正直2年まえはパニックで何もわからなかった。時が経つにつれて冷静になったのはいい

んだけど、そしたら逆に疑問が出てきたの」

ベル「疑問？」

美鈴「九代目は息子であるボスを凍らせた。それってボスを十代目として認めてないってことだよね」

ルッスーリア「あ…」

ベル「確かに」

マーモン「ム…」

レヴィ「何故ボスは…」

スクアーロ「（くそ…）」

美鈴「スクアーロ」

スクアーロ「…なんだ」

美鈴「ボス以外にも十代目候補っているの？」

スクアーロ「ああ、確か４人ぐれぇいたな」

美鈴「どんな人？」

スクアーロ「聞いてどーすんだ？」

美鈴「別に。ただ知りたいだけ」

スクアーロ「……4人中3人は九代目の甥達だ。歳はｘａｎｘｕｓより上だと聞いた」

マーモン「あと一人は誰なんだい？」

スクアーロ「門外顧問　沢田家光の息子、沢田綱吉だ」

ベル「門外顧問の息子！？」

スクアーロ「今は日本に住んでいて歳は美鈴と同い年だそうだ」

ルッスーリア「美鈴ちゃんと」

マーモン「同い年だって？」

美鈴「そっか、それなら私……に行く」

ベル「何？」

美鈴「日本に行く」

レヴィ「どういうつもりだ」

美鈴「ボスのため。いつ戻ってきてもいいように相手の情報を得る」

ルッスーリア「でも私たちは活動停止処分中なのよ」

レヴィ「そうだ。勝手に動いて罪が重くなったら」

美鈴「勿論ヴァリアーとして動く気は無いよ。これは一人の人間としての命の恩人への恩返しなの」

ベル「でもよ」

美鈴「ね？いいでしょ？スクアーロ」

スクアーロ「…わかった。日本に行くことを許可する」

マーモン「スクアーロ！」

スクアーロ「だが！お前一人では行かせない」

美鈴「え？」

スクアーロ「美鈴一人で行かせて暴走されても困る」

美鈴「なあ！？私がいつ暴走したって言うの？」

マーモン「町を1つ焼いたこと自体が暴走だと思うよ」

美鈴「うっっ…」↑図星ｗｗ

スクアーロ「だからもう一人連れて行け」

マーモン「誰が行くんだい？」

ベル「それ決めんのは姫だろ」

美鈴「…わかった。ベル兄一緒に行こう」

ベル「オレ!?ま、いっか。日本行ってみたかったし」

スクアーロ「よぉし。それならベルに個人的命令を言う。美鈴は旅行にでも行った気分ですきにしていい。ベルは美鈴が暴走しないためのストッパーをしてもらう」

ベル「へーい」

美鈴「じゃあ、これから準備して明日の朝早くに出るね」

スクアーロ「ああ」

ベル「じゃあオレも用意しとこっと」

バタンッ

ルッスーリア「ねえスクアーロ本当にいいの?」

スクアーロ「オレだって奴に願掛けしてるからなあ」

レヴィ「ボスへの忠誠心ならオレだって…いやオレの方がある」

マーモン「ふーん（誰もレヴィには聞いてないよ）」

～美鈴の部屋～

美鈴ｓｉｄｅ

明日から日本…ヴァリアーの皆とはしばらく会えないな。

美鈴「そうだ。報告をテレビ電話にすればいいんだ」

確かこの辺にｐｃがもう一台…

美鈴「あった…」

カチャカチャカチャ

これでよし。皆にはまだナイショにしておこう。

～ベルの部屋～
ベルｓｉｄｅ

ベル「日本か。どんなところかな？しししっ♪」

楽しめそうなご当地の殺し屋いるかな？

ベル「つーかこの任務、姫が暴走しなけりゃ王子も自由なんだろ？だったら楽しまなくっちゃな」

ししっ

次の日　　朝３：００

～スクアーロの部屋～
スクアーロｓｉｄｅ

そろそろ美鈴とベルが出発する頃か・・・。

＝回想＝

ルッスーリア「ねえスクアーロ、ほんとうにいいの？」

マーモン「もしものことがあったらどうするの？」

スクアーロ「もしものこと？」

マーモン「美鈴の暴走だよ」

スクアーロ「ああん？その為にベルをつけたんだろうが」

マーモン「僕が心配してるのはそこじゃないよ」

スクアーロ「じゃあなんだ」

マーモン「美鈴にはまだ美鈴自身も気づいていない隠れた力がある」

スクアーロ「何っ！？」

ルッスーリア「どういうこと？なあに、隠れた力って？」

マーモン「正直僕にもわからない」

スクアーロ「テメーふざけてんのか？」

マーモン「ふざけてなんかいないさ。だって彼女が知らないんだ僕が知るはずがないだろう」

レヴィ「それでは何を根拠に」

マーモン「美鈴が僕の幻覚を見破ったのを忘れたのかい？」

全「あ・・・」

スクアーロ「それがあいつに隠された力か？」

マーモン「たぶんね」

ルッスーリア「確かに自分が知らないなら力のコントロールもしようがないわね」

スクアーロ「なるほどなあ」

＝終＝

本当にあいつに隠された力があるとすれば…いや今更考えてもしかたねえ。だが暴走すれば厄介だな。

コンコン

スクアーロ「っっ！！」

美鈴『スクアーロ、私だよ。もうそろそろ行くね』

スクアーロ「そうか。気をつけていけよ」

美鈴『うん。ありがとう』

～大広間～

美鈴「それじゃ、いこっか」

ベル「だな」

ガチャ

美鈴「あ…皆」

マーモン「気をつけてね」

ルッスーリア「行ってらっしゃい」

レヴィ「死ぬなよ」

ベル「当たり前だろ」

美鈴「グス…行ってきます」

ギィィィ　バタン

ルッスーリア「行っちゃったわね」

レヴィ「ああ」

マーモン「ボスも美鈴とベルもいつ帰ってくるかわからないんだ。
僕たちも今やれることをやっておこう」

レヴィ「ああ」

ルッスーリア「そうね」

～空港（イタリア）～

コツコツコツ

ベル「姫、ホントにいいのか？」

美鈴「なにが？」

ベル「日本は姫にとっていやな思い出の場所なんじゃないの？それにヴァリアーの皆とも会えないんだぜ？」

美鈴「過去のことは自分で背負っていく。自分でそう決めたから。あとヴァリアーの皆のことは大丈夫。アジトにサプライズを残してきたから」

ベル「サプライズ？」

美鈴「はら！飛行機に乗り遅れちゃうよ！」

ベル「おい姫待てって」

いざ日本へ（後書き）

さてさて日本に向かった二人、どうなるんでしょうね？

題名で日本に行く気満々だったのに日本についてませんね（笑）

でも次回は日本です。っていうか日本ばっかりです。

日本に来ました！！（前書き）

美「タイトルでテンションあがってどーすんの？」
作「気にしない気にしない」

日本に来ました！！

～空港（日本）～

ベル「姫、１つ聞いていい？」

美鈴「なあに？」

ベル「オレ等の家ってどうすんの？」

美鈴「沢田綱吉って人が住んでる並盛に手配してあるよ」

ベル「手配って…」

美鈴「私のお母さんの口座とか使って買っておいた」

ベル「姫本当に８歳かよ（汗）」

美鈴「またそれ？話は後。行こっ（ニコッ）」

ベル「だから待てって」

～ヴァリアーのアジト～

スクアーロ「そろそろ日本に着いたか」

ルッスーリア「そうねえ。二人とも元気かしら」

マーモン「ルッスーリア、二人が出てからまだ数時間しか経ってな

いよ」

ルッスーリア「そうだけど…」

スクアーロ「うぉ゛ぉ゛い！！心配しすぎだぁ！」

意外とヴァリアーの皆は活気を取り戻しつつあった。

〜並盛〜

美鈴「来たあ――――――――――――――――――――――――っっ！！！！」

ベル「テンションあがりすぎだし。ふーん結構でかいじゃん」

美鈴「あったりまえだよ」

ガチャ

美鈴「ちゃんと家具もそろえてあるよ」

ベル「で、空港での続きなんだけど」

美鈴「へ？ああ、あれね」

ベル「姫さ、何であんなにいろいろできんの？」

美鈴「昔からなんかこうなる気がしてたの。なんていうか生まれたときから、私は『すぐにこの家族、この町から離れるときが来る』って感じてた」

ベル「???」

美鈴「だから、文字が読めるようになった頃からいろんなことを必死で勉強した。機械関係とか、日常的に使える情報はなるべく覚えたの」

ベル「あの錬金術ってのは?」

美鈴「錬金術はおまけ。私ねすっごく科学が好きなの。それでいろんな本を読んでいるうちに、科学の元となった錬金術を見つけた」

ベル「科学の元?どゆこと?」

美鈴「そこのところは良くわかんない。で、錬金術に興味を持って調べてたら、いつの間にか使えるようになってた」

ベル「どんなだよ…(苦笑)」

美鈴「アハハ…(苦笑)…あ、そうだ、ベル兄お買い物いこっ」

ベル「買い物?別にいいけど何買うの?」

美鈴「ご飯の材料と変装道具」

ベル「変装の必要ある?」

美鈴「あるよ。いかにして怪しまれずに近づくか。それにベル兄の金髪&ティアラは目立つし」

ベル「わかったよ。ばれなきゃいいんだろ？」

～並盛商店街～

ベル「こんなところに売ってるワケ？」

美鈴「さあ？……あ、あった」

ベル「げっマジかよ」

美鈴「行こう」

ベル「おい姫」

店員「いらっしゃいませ」

美鈴「すみませーん。コスプレとかに使うカツラのコーナーってありますか？」

店員「それなら奥にありますよ。（何！？このガキ。コスプレって何すんだし！？）」

ベル「おいっ先に行くなって」

美鈴「ゴメン」

店員「（金髪にティアラって何のコスプレ！？）」

美鈴「ありがとうございます（ニコッ）」

店員「いえいえ。（謎が多すぎるよこの子達）」

美鈴「ほらベル兄行くよ」

ベル「姫だからって王子より先に行くの許さねーよ」

美鈴「……（ススス）↑下がった
ゴメンナサイ……」

テクテクテク

ベル「ココらしいな」

美鈴「バリエーション豊富だね。うーんとね、ベル兄はこの茶髪のヤツ」

ベル「なんでだよ。ってか勝手に決めんな（怒）」

美鈴「気にしない気にしない」

ベル「最初の作者みたいなことしてんなよ」

美鈴「む～（プクーッ）」

ベル「／／／／／／んじゃあ姫はこれで」

美鈴「えっと…黒髪？」

ベル「王子とおんなじくらいのショーカット」

美鈴「……右目…」

ベル「隠れるって」

――――――――――――――――――――――――

美鈴「はい、かぶって」

ベル「ん（スポ）ってか姫って料理できんの？」

美鈴「できます～（ぶー）」

ベル「ふーんじゃあオレハンバーグがいい（ニヤ）」

美鈴「ハンバーグを作れと!?」

ベル「姫なら作れるんでしょ？」

美鈴「（Sだ、ここに最強のSがいる）」

ベル「楽しみ♪」

美鈴「……（汗）」

ドン

美鈴「うわっっ」

？「わあ！」

美鈴「いつつつ…」

？「いたいよぉ」

ぶつかってきたのは茶色のつんつんした髪型の男の子だった。

美鈴「あっゴメンナサイ」

ベル「大丈夫か？」

美鈴「うん大丈夫」

？「ほらツー君謝って」

？「ごめんなさい」

？「本当にすみません」

美鈴「あいえ別に」

スタスタスタ

美鈴「？？？なんだ？」

ベル「アイツマジ殺してー（シャキッ）」

美鈴「町中なのでやめましょう」↑冷静ｗｗ

ベル「…」

美鈴「とにかくさっさと買い物済ませて帰ろう」

ベル「…（チッ）」

～家～

美鈴「ハア～疲れた」

ベル「ひめ～アイツ殺してきていい？」

美鈴「ダメだし。明日から学校行くよ」

ベル「はあ？学校？」

美鈴「そっ。沢田綱吉って人が通ってる並盛小学校だよ」

ベル「マジかよ」

美鈴「手続きは済んでるし。んで、私たちの名前なんだけど、学校…って言うかあいつ等の前ではベル兄は『五月鐘（サツキリン）』だから」

ベル「『鐘（リン）』？何でかね？」

美鈴「だって…ベルから連想しちゃったんだもん（ウルウル）」

ベル「…で？姫は？」

美鈴「私は『五月悠里（サツキユウリ）』だよ。だからね、学校では私のこと姫って呼んじゃダメだよ。私もベル兄じゃなくて鐘兄にするから」

ベル「悠里って呼ぶの？メンドクサ」

美鈴「仕方ないんだよ？だって…だってあたしまだ８歳だもん（ウルウル）」

ベル「じゃあやんなよ！！」

美鈴「あーご飯作ろーっと（棒読み）」

ベル「無視かよ！！」

日本に来ました！！（後書き）

あれ～なんかツナっぽい人いたね（笑）

学校と沢田綱吉

コケコッコー　コケー（棒読み）
美鈴「（イラッ）なんか人の声で鳴いてるニワトリがいるー」
ベル「ナレーションしめる」
美鈴「私にもやらせてよー」
・・・・・・（汗）　ダッ↑逃
美鈴「逃げた。まいっか」
ベル「チェッ」
美鈴「んん～（ググッ）朝ごはんパンでいいよね」
ベル「ん」
～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・
モグモグモグ
美鈴「…あ、ベル兄に一個いい忘れ」
ベル「何？」
美鈴「私たち双子設定だから」

ベル「…何で？」

美鈴「だってそのほうが監視しやすいでしょ？」

ベル「それもそうだな」

美鈴「よしっ学校行くぞー！！」

ベル「もうかよ！？」

～学校～

コンコン

ベ／美「失礼しまーす」

先生「おお来たか。今から君たちの教室に案内しよう」

ベ／美「はーい」

美鈴「同じクラスだからね（コソコソ」

ベル「沢田綱吉は？（コソコソ」

美鈴「いるよ（コソコソ」

ベル「なにやってんだし（コソコソ」

～２－Ａ～

先生「ここだよ。ちょっと待ってなさい」

ガラガラ

美鈴「ん、そうだ。私たちの名前表記って大丈夫？」

作者「まかせいっ。今からツナたちのいるところって言うか変装してるときはその役の名前で表示するよ」

悠里「んおっなってる」

鐘「やっぱりしっくりこねーな」

先生『それでは二人とも入って』

悠里「私が何を言っても突っ込まないでね」

鐘「ん？ああ」

ガラガラ

悠里「五月悠里です。よろしく」

鐘「五月鐘だ。よろしくな。ししっ」

クラス「うわ～／／／」

先生「二人は双子で、お父さんの都合でイタリアから来た。仲良くしてやれよ」

クラス「はーい」

先生「悠里さんの席は綱吉さんの隣、鐘さんは窓際です」

ツナ「悠里さんココ…ってええ！！」

悠里「ん？ああ！！」

鐘「あいつ…」

なんと沢田綱吉とは前日美鈴とぶつかった少年だった。

先生「何だお前ら知り合いか？」

ツナ「いえ…昨日商店街で見かけて…」

鐘「じゃなくてぶつかったんだろ」

先生「そ…そうか。それじゃあ一時間目は…道徳か…。それなら質問タイムにするか」

クラス「わーい」

ダダダダッ

女子「ねえねえ五月さん」

悠里「名前で呼んでもらえるとうれしい」

女子「うんわかった。じゃあ悠里ちゃん」

女子「悠里ちゃんってイタリアから来たの？」

悠里「うん（さっき先生が言ってただローが）」

女子「イタリアってどんなところ？」

悠里「どんなところ？んんんんんんんんんん～～～～～～～わからない」

鐘「ケッコーいいところだぜ」

女子「そっそうなんだ／／／」

悠里「（コイツベルに惚れてる（ムカ））」

女子「何人家族なの？」

悠里「何人？（私・ベル兄・レヴィ・スクアーロ・マーモン・ルッス姐…ボス）７人だよ」

女子「すごーい、いっぱいだね」

女子「お父さんって優しい？」

鐘／悠「え゛!?ムリムリ!!怖いって!!」

女子「（ハモったーっ）」

男子「なあ、お前ら二人に質問していいか？」

男子「W質問ってヤツ？オレからいいか？好きな食べ物は？」

鐘／悠「牛乳」

女子「それは食べ物じゃないよ（苦笑）」

男子「それじゃお母さんのことどう思ってる？」

鐘「キモイ」

全「え〝！？」

悠里「料理おいしい（あとオカマｗｗ）」

女子「二人とも誕生日いつ？」

悠里「九月十四日」

鐘「十二月二十二日」

全「え…？」

男子「誕生日違うんだね」

女子「私双子って確実に同じだと思ってた」

悠里「まあ、いろいろだよ（ヤベッ）」

ツナ「……」

悠里「綱吉君？」

ツナ「え！？あの、僕はツナでいいよ」

悠里「じゃあツナ君。何で黙ってるの？」

ツナ「え…いや…その…」

男子「コイツ、ダメツナって言うんだよ」

鐘／悠「ダメツナ？」

男子「ツナは何をやってもダメダメなんだ」

悠里「そうなの？」

ツナ「えっと…」

鐘「だから悠里とぶつかったんじゃねえの？」

男子「お前ホントダメツナだな」

ツナ「ゴメン…」

悠里「まあまあ」

キーンコーンカーンコーン

ガラガラ

先生「はい、質問タイムは終了です。次は算数ですので速やかに準備をしてください」

クラス「え――――――――――――――――」

勉強レベルは如何ほどか！？

現在算数のお時間です。

先生「それじゃあこの式、綱吉君」

ツナ「は…はい。えーっと『２×８』は…１０？」

悠里「（足してるし）」

先生「残念。じゃあ悠里さん」

悠里「はい。１６です」

先生「よし、正解だ。それでは次、鐘君」

鐘「へーい。ん？『３×７』？…２１」

先生「当たりだ」

ツナ「二人ともすごいね」

悠里「別に」

先生「それじゃあ最後だ。わかる人だけでいいぞ」

『１２×１４』

クラス「わかるかーーーっ！」

鐘／悠「はい」

ツナ「え？悠里ちゃん、鐘君？」

先生「何だ二人とも、分かるのか？じゃあ、同時に答えてみろ（黒笑）」

鐘／悠「１６８」

先生「あ…当たりだ（汗）」

クラス「…すごい」

悠里「（楽勝）」

鐘「ししっ」

女子「イタリアの学校って進んでるのかな？」

男子「すげーな」

こうして無事転入一日目を終えた。↑端折った

美鈴「ナレーションの問題なのか作者の問題なのか…」

ベル「例え作者でも殺るのはナレーションだな」

！！　ダッ↑逃

美鈴「今度は逃がさない（ダッ）」

作者「端折ってるのは作者だよ★」

～家～

美鈴「ふぁ～楽しかった」

ベル「アイツあったま悪いな」

美鈴「ホントだね。スクアーロたちに報告しないとね」

ガチャ

美鈴「繋がったかな？

～ヴァリアーのアジト～

スクアーロ「あいつらはちゃんとやってんのかぁ」

マーモン「さあね」

？「♪～」

ルッスーリア「あら？このメロディーって」

マーモン「美鈴がご機嫌のときに良く歌ってた曲だね」

スクアーロ「どっから聞こえてるんだぁ？」

ルッスーリア「美鈴ちゃんの好きな曲だから、あの子の部屋じゃないの？」

レヴィ「行くだけあるな」

ス／マ「（いつからいた？）」

マーモン「とにかく行ってみよう」

～美鈴の部屋～

ガチャ

マーモン「やはりここだったらしいね」

スクアーロ「パソコン？」

カチャ

ピー　パッ

美鈴『あっやっと出た。遅いよ～』

スクアーロ「美鈴！？」

マーモン「何これ」

美鈴『テレビ電話。報告に使えるし、皆のことも見れるし一石二鳥でしょ？』

ベル『サプライズってこれかよ』

美鈴『まあね』

ルッスーリア「それで？なにかあったの？」

美鈴『実は今日から小学校に行って沢田綱吉って人に会ってきたの』

ベル『で、そいつが勉強・運動ｅｔｃ何をやってもダメダメでさ、あだ名がダメツナって言うんだぜ』

マーモン「ダメツナねぇ」

美鈴『ま、そういうことでうまく近づけたから、がんばって監視しマース。じゃね☆』

ブチッ

スクアーロ「お…おい」

マーモン「切られたね」

ルッスーリア「あらま」

レヴィ「そんな奴が候補とは…」

～五月家～

ベル「皆元気そうだったじゃん」

美鈴「そうだね。沢田綱吉……その皮を剥がしてやる」

ベル「（怖）」

こうしてベルと美鈴の日本の生活がはじまった。

私とツナと九代目（前書き）

美「ちょっと待って！何なのこの、バカテスみたいなサブタイトル！？」

ツ「いやいや、そこでバカテスって出す君もどうかと思うよ…」

べ「ま、いんじゃね？コイツ今それにはまってるらしいし」

作「言うなーーーっ」

私とツナと九代目

美鈴ｓｉｄｅ

ツナ「ねぇ今日家に遊びに来ない？」

悠里「はい？僕なんかが行っていいの？」

ツナ「うん！それにこの前のことも謝りたいし」

悠里「……分かった。っいうか、もう許してるけどね」

とにかく潜入捜査（？）が出来そうなのだ。行くしかないよねっ。

ツナ「それじゃあ放課後にね。後で案内するから」

悠里「じゃ、鐘兄に、言ってくる」

テテテッ

悠里「べ～ル兄」

鐘「おいっ（ペシッ）」

悠里「アテッ」

はたかれた……ううう…（シクシク）

悠里「僕が何をしたって言うのさ」

鐘「その名前で呼んだらダメだって言ったのそっちだろ」

はうぅっ　小声だからいいではないかイジワル。それに誰も聞いてなんか無いよぅ。

鐘「んで?どうしたの?」

悠里「あのね、今日ツナん家に行くの。だから、先に家に帰ってて?」

鐘「ハァ?何?悠里だけアイツん家に行くの?なんで?」

悠里「いいのいいの。そういうことだから」

テテテッ

悠里「んじゃ、行こっ」

ツナ「うん」

~沢田宅~

ツナ「ただいま」

悠里「お邪魔します」

?「まあ、ツー君がお友達を連れてきたわ」

なんかテンションが高めのお母さんだな。ちょっと羨ましいかも。

ルッス姐は、テンションが高すぎだからうるさいというか……。

悠里「こんにちわ。ツナのクラスメイトの五月悠里です」

奈々「私は綱吉の母親の沢田奈々です。よろしくね」

なんていうか自分の本当の母親が恋しくなってきた。もう死んでるけど。

家光「どーも、ツナの父の家光です。ツナと仲良くしてくれな」

……この人が門外顧問の沢田家光か。随分とだらけてるって言うかノホホ～ンとしてると言うか。

家にはもう一人いた。って、この人って……

九代目「こんにちわ。綱吉君に悠里君でいいのかな？」

きゅっ…九代目ぇ！！？

ななな何で九代目がこんなところに！？もしかして勝手に動いたのばれちゃったのぉ！？

ツナ「お母さんこの人だぁれ？」

何も知らずに平凡なツナが羨ましい。私なんて今恐怖で心臓バクバクなのにぃ～っ

奈々「この人はねお父さんの仕事の上司さんよ」

違う！ちがく無いけど違う！

九代目「家光にはいつも世話になっているからね。こうやって遊びに来たんだよ」

なんと言う運の悪さ。偶然出会ってしまうとは……。

奈々「悠里君、何も無いけどゆっくりしていってね」

悠里「はい」

そういえばさっきから悠里”君”って呼ばれてるけど、そんなに男子に見えるのかなあ。ま、その点に関して言えばベル兄に感謝だな。

九代目「おいで二人とも。一緒に遊ぼうか」

ツナ「わーい」

悠里「は、はーい」

うぅ…正体がばれる前に帰りたい…
だけどここは無邪気な子を演じなくちゃ。

悠里「何して遊ぶ?」

ツナ「ボール使って遊ぼっ」

九代目「ああ、いいよ」

なんだろう、さっきから九代目の視線が私のほうにばかり来てる気が……。

九代目「君とはどこかで会ったかい？」

ギクリ

悠里「そ、そんなこと無いですっ」

やばいいいいぃ

悠里「えっとそのぉ…僕イタリアから来たばかりなのでこっちの人とは接点が無いって言うか」

九代目「イタリアから？そうか、それならきっと、私がイタリアで君を見かけたのかも知れないね。すまないね、知り合いに君と似た人がいたものだから」

私と似た人？…ってもしかして私がヴァリアーにいたことばれてるーっ！？でっでもボスは私が入隊したことは報告してないって言ってたし、ありえ――――

九代目「仕事関係でね」

絶対バレてるしーーーっ！！

家光「九代目（ボソ）」

九代目「どうしたね家光」

家光「（ゴニョゴニョ）」

悠／ツ「？？？」

九代目「そう決め付けるのは早いよ」

家光「ですがもしそうだとしたら」

九代目「大丈夫だよ」

一体何の話をしてるんだろう？

ボーンボーンボーン

突然鳴り出す時計。うわっ時間が！

悠里「ごめんなさいっ時間が無いので帰りますっ」

奈々「そうなの？」

ツナ「また明日ね」

家光「いつでもまた遊びに来てね～」

悠里「はーい」

バタン

その後急いで家に帰った物のおなかをすかせたベル兄に怒られた。

災難な一日だ……。

美鈴とツナと死ぬ気の炎

ツナ「ねえ、今日家に遊びに来ない？」

悠里「何スか、この前回に似た始まり方」

ツナ「あ…今日は忙しいの？」

悠里「そんなことは無い。遊びに行くよ」

しっかり仕事してくださいね（笑）

悠里「うっさい黙れ」

ツナ「誰と話してるの？」

悠里「独り言」

そして帰り道。

ツナ「そおだ、この前のおじいちゃん今日も来てるんだよ」

悠里「ごへっ」

ツナ「？？？大丈夫？」

悠里「大丈夫（え～また九代目いんの？ボスのくせに暇ですな～）」

～沢田宅～

ツナ「ただいま～」

悠里「お邪魔しまーす」

奈々「あら、悠里君。いらっしゃい」

悠里「今日もお世話になります」

ツナ「おじいちゃん、悠里君連れてきたよ☆」

九代目「そうかそうか。こんにちは悠里君」

悠里「こ、こんにちは」

ツナ「悠里ちゃんボール」

悠里「ボール？これで遊ぶの？」

ツナ「うん！（ニコッ）」

九代目「おじさんも入れてくれるかい？」

ツナ「うん！！」

～数時間後～

悠里「（へたっ）づがれ゛だ」

ツナ「（キャッキャッ）」

悠里「（ちびっ子の好奇心か。よく疲れないモンだよ）」

戦闘向きの体力は、遊ぶ体力には不向きなのである。（美鈴限定）

悠里「黙れよクソナレ」

ふんっ（プイッ）

ツナ「あっ、ボール……」

九代目「ゴメンよ」

悠里「ん？」

見ると、ボールが庭に転がっていっていた。

ツナ「ひっ！……グス…うえええん」

悠里「？？？」

何故か突然泣き出すツナ。そこにいたのは、

チワワ「クゥ～ン」

悠里「チワワ相手で泣いたの！？（ガーン）」

ツナ「うえええええええええええん」↑泣きすぎｗｗ

ポウッ

九／家「！！？」

泣きじゃくるツナが、わずかに死ぬ気の炎を纏っているのを九代目と家光は見た。因みに美鈴は気づかず。

九代目「家光、やはり君の子だ。この子はしっかりといい子に育つ」

家光「そう願いますが、犬を怖がるほどで…」

九代目「そのほうがより将来が楽しみじゃないか。おいで、綱吉君」

九代目はツナをそっと抱くと、その額に人差し指を当てた。

ポウッ

そこから放たれる死ぬ気の炎。ツナは炎に誘われるように泣き止み、眠った。

悠里「！？おじいちゃんツナに何したの？」

九代目「綱吉君は遊び疲れてしまったようだね」

悠里「ふうん（嘘だ。今わずかだけど変な感じがした）」

奈々「ゴメンね悠里君。折角遊びに来てくれたのに、ツナったら寝ちゃって。もう帰る？時間も遅いしお家の人心配しちゃうんじゃないかしら？」

悠里「（お家の人か……）良いんです。僕には心配してくれるよう

なお家の人はいませんから（どうせベル兄は人のこと心配しないだろうし）」

奈々「あら、そうなの？」

悠里「だから別に。……」

その時、家光と九代目の頭の中に不思議な映像が流れてきた。
次々と殺されていく人々、赤く燃える町。

家光「九代目、これは…」

九代目「恐らくこの子の過去なのかもしれない。（この歳でこのような過去を持つ子がいるなんて、この国も廃れてしまったか）」

家光「どうしますか？このまま放って置くと彼自身の精神が危ぶまれます」

九代目「私たちには何も出来ないよ。過去を変えることも許されない」

悠里「（お父さん…お母さん…なんで私を殺そうとしたのかな……そうすればまた皆で笑って過ごせる日が来たかもしれないのに……。ヴァリアーもいいけどやっぱり本当の家族が欲しいな）」

フォ……

家光「！！？九代目…これは……！？」

九代目「死ぬ気の炎……この色は白、いや白銀…！？」

家光「白銀の炎……まさか！？」

九代目「悠里君、こっちにおいで。（過去を変えることは出来ないが、こうするしかない）」

ポウッ

再び九代目の指に死ぬ気の炎が灯る。

悠里「……（フッ　トサッ）」

そして倒れこむ美鈴。

家光「九代目……」

九代目「家光、この子をしっかりと見守ってやりなさい。この子の力を記憶と共に封印した。時が来れば、力だけの封印が解かれるはずだ。もし記憶を取り戻せば、取り返しの付かないことになる。だから…」

家光「仰せのままに」

その後、家光により美鈴はしっかりと家に届けられた。（笑）

美鈴とツナと死ぬ気の炎（後書き）

ベル「ん？なんか今回俺の出番なくね？」
作者「中身の関係で泣く泣く出番カットです（泣）」
ベル「これからはちゃんと出番有るんだろーな？」
作者「もちっす。でわノシ」

設定パート3（前書き）

ＰＶが１０、０００アクセスを超えましたっ。
ありがとうございます！！

設定パート3

こんなに設定いらなくね？って思った人、ゴメンナサイっっ
どうしても必要なんですっっ。この駄作のように時間が相当昔からだと設定が必須なんですっ。
「読むのがめんどくさい」とか「こんなの読んでどうするの？」という人は読まなくても結構です。

と、言うことで、前回の話から5年も話がぶっ飛びます。
要するに中学生じゃーーーっ！！！なのです。一人でテンションあがってすんません。

でわでわ、設定です。

五月美鈴↑いい加減名前覚えてくれた？「みれい」ですよっ。

髪の長さは、腰まで。家にいるときは、ポニーテールなんです。純白のリボンで結ってます。
趣味は人を殺すこと（笑）
好きなことは料理とか、料理とか料理とか。

五月悠里

身長：１５１ｃｍ
体重：乙女のシークレット
髪：黒。男子と同じくらいのショートカット。
瞳：右が深紅、左は茶色。

その他：性格は男子っぽい。一人称は「僕」。皆には男子かと思われるほど。

五月鐘

身長：１６５ｃｍ
体重：５２ｋｇ
髪：茶色。ベルの髪をくせっ毛にしたカンジ。勿論前髪で目が隠れてます。
その他：悪戯好き。よく悠里と騒動を起こしている。

な、カンジですかね（笑）

一応ストーリー的には、次回はリボーンが来る一日前にしようかと思っています。

僕とツナたちと並盛中学校

美鈴ｓｉｄｅ

沢田綱吉を監視するために日本に来てから早五年。今私たちは中学生となり、並盛中学というところに通っている。

美鈴「くぅ～っ朝日を浴びると気持ちいいな」

ベル「あ、姫。おはよ」

美鈴「ベル、起きたんだ。おはよ」

いつもの通りにベルが起きてきた。まあ、いつもの通りって言うのは危ないんだけどね。

ベル「朝ごはん何？」

美鈴「とっくに出来てるよ。全く、何回起こしても起きないんだから。遅刻したら、またアイツに怒られるよ」

「アイツ」とは、また後ほどに。

美鈴「それに、あのバカも呼びに行かなきゃいけないんだからね？」

ベル「何であいつと一緒に行かなきゃなんないわけ？」

美鈴「仕方ないでしょ？おじさんに頼まれてるんだから」

ベル「あの門外顧問のことおじさんって呼ぶのやめろし」

お分かりだと思うが、「あのバカ」とは、ツナのこと。友達（仮）になってから、おじさん――つまり沢田家光に、学校での面倒見を任されてしまったのだ。

美鈴「とにかく時間無いから早く！」

ベル「へーい」

ガチャ

～沢田宅前～

悠里「すぅ～……

バカツナ起きやがれ――――――――っっ！！！」

『ガラガラガシャーン』

家の中からものすごい音が聞こえた。恐らく私の声にびっくりしたツナが階段から落ちたのだろう。

数分待つと、食パンを咥えたツナが、家から飛び出してきた。

ツナ「鐘、悠里。ごめん！」

鐘「おせーよ」

悠里「君は何度アイツの餌食になりたいのかな？」

ツナ「ごごごごめんっっ！！い、急ごう！」

～学校～

――――タタタッ

ツナ「ハア…ハア…」

悠里「何とか間に合ったか？」

？「間に合ってないよ。また、君たちかい？」

ツナ「ギクッ」

振り向くと、そこには黒髪のすらっとした少年がたっていた。

悠里「雲雀さん、どうも」

彼の名は、雲雀恭弥。ここ、並中の風紀委員長にして、並盛の不良の頂点に君臨する男。最凶の風紀委員長。

雲雀「どうも、じゃないよ。君たちの遅刻は、これで何度目だい？」

悠／鐘「全部ツナ（コイツ）が悪いんです」

ツナ「お、オレ！？」

雲雀「誰が原因かなんて聞いてないよ。ただ、僕も鬼じゃないからね、後一分だけ待ってあげるよ。その間に教室に行かなかったら、咬み殺すよ」

ツナ「ひぃぃぃっ！」

咬み殺すといっている時点で鬼だと思うのは突っ込んだら負けだろう。

絡むのも面倒だからさっさと教室に行くことにした。

悠里「ほれ行くぞ」

～廊下～

悠里「んじゃ、鐘。またあとで」

鐘「ん。悠里もな」

私とツナは１－Ａ、ベルは１－Ｂである。

ガラッ

ツナ「おはようございます（ボソボソ）」

悠里「シャキッと声出せ！！」

ドカッ

ツナ「うあっ（ドテッ）」

男子「お、やっと来たな。ツナと悠里のダメダメ遅刻コンビ」

悠里「五月蝿いっ」

いつも遅刻をしているせいで、プライドに傷が付くあだ名を貰った。
第一遅刻するのはツナが寝坊するせいで、私たちは待ちぼうけを食らってるだけだし。

キーンコーンカーンコーン

先生「そこの二人も席について。出席をとりますよ」

悠里「へーい」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

？「よっ。今日も遅かったな、悠里」

悠里「山本」

彼は山本武。一言で言うなら野球馬鹿。もしくは天然バカ。

悠里「文句ならツナに言ってくれるかな?遅いのはアイツなんだから」

山本「そっか」

ツナ「寝坊は認めるけどそこまで言うことかな？」

悠里「認めるなら許されるべきことだと、僕は思うよ」

ツナ「ハア～。
　ねえ、悠里。今日の数学、わかんないところがあったからさ、教えてくれない？」

悠里「また？自分で考えろって何度もいったよね？そんなんだからダメツナってあだ名が付くんだ」

山本「まあまあ。教えてやればいいじゃねーか」

悠里「放課後」

ツナ「あ、ゴメン。オレ放課後空いてないんだ」

悠里「じゃあムリ」

ツナ「（ガーン）」

山本「心配すんな、ツナ。代わりにオレが教えてやってもいいぜ」

悠里「本当かな？いつもツナと一緒に赤点とってる山本武君♪」

山本「う…悠里っていつもストレート発言なのな」

悠里「それにしても、何でこんなに時間がたってるのに君はこう成長しないのかなあ」

ツナ「お、オレだってがんばってるんだよ！ただ、なかなか結果が出ないだけで……」

悠里「それならまずはその頑張りを、ゲームから勉強に移すところから始めようか」

ツナ「あ……そ、それは」

山本「そーいや二人っていつからの付き合いなんだ？」

悠里「小学二年生のときだよ」

ツナ「友達のいないオレの、初めての友達なんだよな」

山本「なるほどな。だからこんなに仲がいいのな」

悠里「（今までのやり取りで仲が良いと判断した君は、神レベルの天然さだよ）」

キンコンカンコン

山本「もうお昼の時間なのな」

ツナ「っていうか、今のチャイム何？やけに変じゃなかった？」

悠里「ん？いつものことだろ？」

ツナ「そう？ま、いいや。屋上で弁当食べよう」

山本「そうだな」

悠里「鐘も呼んで来るよ」

～1－B～

悠里「リ～ン～いるか～？」

鐘「ん？もうそんな時間？ししっ　りょーかい」

女子「じゃあね鐘君♪」

悠里「もててるね」

鐘「だってオレ王子だし。それを言うならそっちだってもててるじゃん。

女子に　　」

悠里「（ズーン…）」

鐘「じょ、冗談だっつーの」

～屋上～

ツナ「そういえば、前から思ってたんだけど、悠里とヒバリさんてなんとなく似てるよね」

悠里「は？」

ツナ「綺麗な黒髪とか、細身の体とか」

山本「言われてみればそうだな。これじゃ鐘よりもヒバリと兄弟って間違われそうだよな（笑）」

悠里「ツナ、山本。言っていい冗談と悪い冗談の区別をつけろ」

ツ／山「（ゾクッ）」

ツナ「ごっゴメン……」

山本「わ、悪ぃ……」

鐘「殺気抑えな（コソ）」

悠里「（はっ）危なかった」

ツナ「（でもやっぱり似てるよなあ）」

それ以上言うと、君、殺されちゃいますよ（笑）

ツナ「はいはい（呆）」

時は過ぎて、各自帰宅完了。

美鈴「……この端折りレベルはすごいと思う」

ベル「内容考えんのがめんどくさかったんじゃないの？」

美鈴「ベル、ナレにきれてないの？」

ベル「ししししっ王子それくらいじゃ怒らないし」

美鈴「ふうん。

美鈴ちゃんの明日の占い
運勢：小吉
明日は思いがけないことが起こりそうです。今のうちに災難に備えどんな事態にも対応できるようにしましょう。」

ベル「……どうしたの？」

美鈴「明日、何か良からぬことが起こりそうだから、気をつけてね」

僕とツナたちと並盛中学校（後書き）

次回、ツナに異変が！？
京子や花、出でくるよ。

突然壊れた日常

悠里「じ……」

ツナ「……（汗）」

鐘「じ……」

ツナ「え…と…？二人とも？一体どうしたの？」

悠／鐘「じ……」

こんな状況になったのは、さかのぼること昨日のこと。

ピピピピピピピ　　カチッ

美鈴「ふぁ～…眠い」

ベル「姫おはよ」

美鈴「……ベルがもう起きてる。やっぱ昨日の予報どおりに何かおかしなことが起きるのかも」

ベル「オレが起きてたらおかしいのかよ（怒）」

美鈴「当たり前でしょ？お寝坊さんのベルが早く起きてるんだもん」

ベル「……」↑反論できず

美鈴「ま、いいや。とにかく今日は、何かが起こる可能性が高い。気をつけないと」

～学校～

１－Ｂにて。

ガラッ

鐘「おはようございます」

女子「あっ！鐘君おはよっ」

女子「おはよっ♪」

１－Ａにて。

悠里「おはようございます」

男子「おっ。悠里、今日は早ぇな」

悠里「まあな」

女子『ねえ、あそこ見て！京子と持田先輩のカップル！』

女子『本当だ！やっぱ、モテる京子は羨ましいよ』

窓の外には、学校のアイドル笹川京子と、当学校剣道部主将持田剣介の姿。

悠里「（笹川京子か……。ツナの片思いの相手なんだよな。ま、アイドル相手じゃツナは無理だろうけど）」

ふうっ、と溜息をついたそのときだった。

？「うおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

悠里「っっ！！あれは！？」

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・

沢田綱吉は走っていた。走っている理由、それはそこに道があるから――――というわけではなく、ある人物を追いかけていた。

ツナ「うおおおおおおおおおおおっ！！！！」

目標は、学校の正門のところにいた。

ツナ「見つけたあっ！！」

その人とは、笹川京子だった。

ドガッ

持田「うわっ」

隣にいた持田は突き飛ばされたが、偶然通りかかった山本にキャッチされた。

女子「キャー山本君かっこいい」

男子「さっすが野球部」

山本「ん？あいつ、ウチのクラスの…」

ツナ「笹川京子！！オレと付き合ってください！！」

京子「え？」（チラッ）

突然の告白に驚くが、しかしながら目の前の人物はパンツ一丁。

京子「キャアアアアッ」

タッ

ツナ「あ…」

持田「テメー京子に何やってんだ！」

ドカッ

ツナ「うあっ」

悠里「沢田綱吉……今のは死ぬ気の炎……？」

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・

美鈴「っていうことがあったの」

ベル「マジで？」

美鈴「やっぱり大変なことが起こったね」

ベル「どーすんの？スクアーロたちに報告するの？」

美鈴「いや、ハッキリしたことがわかるまで報告はお預け。とにかく明日はいっそう監視を強めないと」

そして今に至ると。

ツナ「回想地味に長かったね」

悠里「話をそらさないで」

鐘「昨日のこと、全部はきな」

ツナ「いや……そんなこと言われても……（ダッ）」

悠／鐘「逃がすかっ（ダッ）」

花「あれ、沢田たちじゃん。何やってんだろ」

山本「おっ朝から元気なのな（笑）」

雲雀「……（ムスッ）学校の風紀が乱れる」

ガシッ

ツナ「ひいいいぃっ！！」

悠里「もう逃げられないよ」

ツナ「ホントに何にも無いって！」

悠里「やましいことが無いなら何故逃げる必要があるんだい？」

ツナ「そ……それは」

男子「おー、いたいた。探したぜ」

ツナ「（ほっ）ど、どうしたの？」

男子「持田先輩が今日の昼休み武道場に来いってさ。何でも昨日の落とし前をつけるって」

ツナ「んなーーーーっ！！？」

鐘「ししっ諦めな。お前に逃げる道は用意されてねーんだよ」

悠里「そういうことだ。男なら大人しくやられて来い」

ツナ「（それ、何か間違ってる気がする…）」

男子「んで、お前が負けたら、二度と笹川と口を利くなってさ」

ツナ「なっ」

そして昼休み。

パッパラパー　　パチパチパチ　（棒読み）

全「イラッ」

持田「おい、沢田はどうした」

男子「トイレ行きたいって言うんで、行かせました」

男子「あいつトイレ逃亡（エスケープ）したな」

持田「ということでオレの不戦勝だ。ぶわぁーっはっはっはっは」

男子「先輩って皆頭良いのかと思ってたよ（コソ」

男子「オレも（コソ」

悠里「はあ～。呆れた」

鐘「あんな奴がボス候補なんて笑えるよな」

悠里「ホントだよ」

？『うおおおおおおおおおおおっ！！！！』

悠里「っっ！？なんかくる」

バァン！！

ツナ「死ぬ気で何が何でも一本とる！！」

男子「来たぞ！変態のお出ましだ！」

花「うわ……本当にあいつパンツ一丁だし」

京子「……」

悠里「（やっぱり額から死ぬ気の炎……。一体どうなってんだろう）」

ツナ「死ぬ気で勝つ！」

持田「ぶわぁーっはっは。ブァカの極みだな。だがオレには勝てん！」

バキッ↑竹刀　折

全「！？」

持田「何っ！？」

ガッ　　ブチブチブチブチ↑髪抜

ツナ「一本どころか百本取ったぞ！」

全「……（ポケーッ）」

男子「あっはっはっは！ツナの奴考えたな！」

男子「確かに一本とってやがる！」

ツナ「（ギロッ）」↑睨

審判「ひいいいいいいっ！！！」

ツナ「これでもダメなら――――」

ブチブチブチィッ

ツナ「全部本」

審判「あああ赤！勝者沢田綱吉！！」

男子「か、勝った」

男子「すげえよ！あのツナが持田先輩に勝った！！」

シュウウゥゥゥ

悠里「（炎が消えた……）」

ツナ「や、やった。オレも死ぬ気になれば、先輩に勝てるんだ……」

京子「沢田君」

ツナ「京子ちゃん!?（やばい！まだ怒ってるのかな?合わせる顔が無いよ（汗））」

京子「昨日はゴメンね?逃げちゃったりして」

ツナ「あ、いや…それは俺も悪かったって言うか」

京子「私よく友達に笑うところが分かってないって言われるの」

ツナ「（告白冗談だと思われてるーっ）」

京子「沢田君ってすごいんだね！只者じゃないってカンジ」

ツナ「え……?」

京子「今日から『ツナ君』って呼んでいい?」

ツナ「も、勿論!!」

～外～

?「沢田綱吉。お前の力を見せてもらう」

なんだかまだまだ嵐の予感（笑）

突然壊れた日常（後書き）

次回、獄寺登場っ

謎の転校生

キーンコーンカーンコーン
ガララララララ

先生「はい、朝のＨＲを始めます。が、その前に皆さんにお話した通り、今日からこの学校に通う転校生を紹介します。ささ、獄寺君入って」

ドアから入ってきたのは、柄の悪い男子。

先生「獄寺君はずっとイタリアに留学していて、先月帰ってきたそうです。皆さん仲良くしてあげてくださいね」

悠里「（イタリアかぁ）」

獄寺「（ギロッ）」↑睨

ツナ「ひいいいっ」

先生「それじゃあ獄寺君の席はそこ（ズカズカ）……って、獄寺君？」

ドカッ↑机蹴

ツナ「うあっ」

悠里「ツナ、知り合いか？」

ツナ「しっ知らないよ。目が合っただけなのに机蹴ってきて」

悠里「でも、あの様子だと向こうはツナのことを知ってるみたいだよ」

ツナ「っていわれても」

先生「ＨＲは以上だ。各自、授業の準備をするように」

ガララララ

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

山本「ツナ、ちょっと良いか？」

ツナ「なに？どうしたの？」

山本「今日の球技大会出てくんねーか？」

ツナ「はあ！？何でオレが！？」

山本「実はな、メンバーの殆どが食中毒にやられてさ」

ツナ「絶対アイツノ仕業だーっ！」

山本「あいつ？」

ツナ「ううん、なんでもない。それよりメンバーなら悠里とかいるじゃん」

悠里「バカだな。僕は既に正式なメンバーだよ」

ツナ「え゛？」

山本「頼むツナ！このままだと人数が足りなくて不戦敗になっちまうんだ」

悠里「ツナ、僕からも頼むよ。こんな理由で負けるなんて、僕のプライドが許さないからね」

ツナ「ええ！？でも、オレなんかが入ったら、余計に負けちゃうんじゃ…」

山本「心配ねーって。最近のお前スゲーからな」

ツナ「（すごい？）……うん、わかった！引き受けるよ」

山本「本当か！？サンキュー」

悠里「ついでに本音を言っておこう。お前がしくじっても、野球部エースの山本と運動神経抜群の僕。この二人がいればなんら問題ないという、他のメンバーの見解さ」

ツナ「（いろいろヒデーっ）」

山本「因みに獄寺もいるからな」

ツナ「んな――――――――――っ！！？」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

先生「それでは、1―A対1―C、バレーボール対決　始め」

ダンッ

男子「行ったぞツナ！」

ツナ「え？え！？うわっ」

ドスッ

全「……」

獄寺「チッ」

悠里「（プイッ）」

山本「ドンマイ。次行こうぜ」

ピーッ

ダンッ　ドガッ

ツナ「うあっ」

バシッ

ツナ「ひいぃっ」

バンッ

ツナ「ああっ」

全「……（呆）」

男子「本当にこれが持田先輩を倒した男かよ」

女子「全然ダメじゃない」

京子「ツナ君……」

メンバー「おいツナ。ちゃんとやれよ！」

メンバー「オレたちゃ真剣なんだよ！」

獄寺「（ギッ）」↑睨

ツナ「（ひいぃっ睨んでるよ）えっと……そその、この前の一戦で足くじいちゃって」

メンバー「え…そうだったのか？」

メンバー「ムリすんなよ。悪化したら悪いからな」

悠里「そうだね。嘘をついて逃げるのは気に食わないけど、そんな覚悟だったらいるだけ邪魔だからね（コソ）」

ツナ「っっ！！」

悠里「それともう一つ。逃げるなら、その前に全員の身体状況を確認してから逃げな（コソ）

さて、第二試合を始めよう」

ツナ「（みんなの身体状況？……あっ皆傷だらけ…〈オレたちゃ真剣なんだよ！　そんな覚悟ならいるだけ邪魔だよ〉そうか。皆この試合で勝ちたいんだ……）」

メンバー「どうしたツナ？休んでていいんだぞ？」

ツナ「ゴメン皆。オレ、間違ってた。オレもみんなに負けないくらい精一杯がんばるから」

悠里「ようやく分かったな」

ツナ「うん。逃げようなんて考えてごめん」

？『よく言ったな。それじゃあ、コイツをプレゼントだ』

悠里「！！！？？」

ズガガン

ツナ「うわっ（足撃たれた）」

山本「ツナ？大丈夫か？」

ツナ「う、うん。（あれ？おかしいな）」

山本「それじゃ、がんばろーぜ」

ピー　　ダンッ

メンバー「ツナ！ブロックだ！」

ツナ「うん！（ピョン）ってええ！？」

全「なぁ！？」

軽く飛んだはずが、ネットの上までとんだツナ。本人は勿論、この光景に驚かない者はいなかった。

そして、ツナの活躍により、1―Aが勝利を手にした。

山本「ツナやったな！」

獄寺「チッ。全く目に余るやわさだぜ」

ツナ「え……？」

獄寺「テメーに十代目なんか継がせねえ」

ツナ「んな!?何でそれを?」

獄寺「ちょっとこっちに来い」

ツナ「(グイッ)ちょっ獄寺君!?」

山本「お、おい。どこにいくんだ?」

悠里「怪しい(スススス)」

~体育館裏~

悠里「ここらに隠れてみるか」

?「お前誰だ?」

悠里「!?誰!」

振り向くと、そこにはスーツを着た赤ん坊がいた。

悠里「ふう。まさかこの僕が後ろを取られるとは。君は殺し屋かい?」

?「鋭いな。そうだぞ、オレは殺し屋だ。それよりお前、驚かないのか?」

悠里「それは君が喋っていることにかい?僕はそんなことでは驚か

ない（そもそもマーモンが喋る赤ん坊だし、コイツおしゃぶりをつけているから、アルコバレーノと見て間違いないだろう）」

？「お前、こんなところで何してんだ？」

悠里「それはこっちの台詞だね。ここは中学校、赤ん坊がいるべきところじゃない。僕はただ、あの二人の様子を見ているだけさ」

ツナ『リボーン！どこにいるんだ！どうせどっかでオレを見張ってるんだろ！』

？「お呼びだな。じゃあな」

悠里「リボーンか。ちょっと待ちなよ。さっき沢田綱吉に何か細工をしたのは君だね」

リボーン「気づいていたのか。褒めて然るべきだが、その話は後だ（タンッ）」

悠里「黄色のおしゃぶりを持つアルコバレーノ、リボーン。一体あいつに何をしたのか、その実体を見せてもらう」

リボーン『よく来たな獄寺。随分と早かったじゃねーか』

獄寺『あんたが、九代目が信頼してるって言うリボーンか』

リボーン『そうだぞ』

ツナ『え?リボーン、獄寺君のこと知ってるの?』

リボーン『勿論だ。コイツは俺が呼んだんだからな』

獄寺『こいつを殺せばオレが十代目ってのは本当なんだろうな』

ツナ『ちょっ何言って…!』

リボーン『ああ、本当だぞ』

ツナ『はあ!?お前、オレを十代目にするって言ったよな?あれ、嘘だったのか!?』

リボーン『強い奴が上に立つのは当然のことだ』

獄寺『目障りだ。果てな』

ジュッ

ツナ『んな!?どこからダイナマイトが!?』

リボーン『コイツはなイタリアで有名なダイナマイト使いで、体の至る所にダイナマイトを隠し持ってるんだ。人間爆撃機って呼ばれているんだ』

獄寺『またの名を、スモーキン・ボム・隼人。果てろ』

ドォォン

ツナ『ひいいいぃぃっ!!』

悠里「スモーキン・ボム…か。後で皆に聞いてみるか」

山本『あっ、いたいた』

獄寺『ちっ（邪魔が来た）』

山本『（ポス）ん？なんだこれ花火か？』

ツナ『ああっダメェ！！』

ジュッ

ツナ『あつっダメだ。消せない！』

リボーン『いいや、お前が消すんだ』

ズガン

悠里「あれは……特殊弾？」

死ぬ気ツナ『復活（リ・ボーン）！！死ぬ気で消火活動！』

山本『ツナ？』

死ぬ気ツナ『消す消す消す』

ジュッジュッジュッジュッ

獄寺『チッ。二倍ボム！！』

死ぬ気ツナ『消す消す消す消す消す消す消す』

ジュッジュッジュッジュッジュッジュッジュッ

獄寺『くそっ。さ、三倍ボム…（ポロ）しまった！』

ジジジジジジジ

獄寺『ジ・エンド・オブ・俺…』

死ぬ気ツナ『消す消す消す消す消す消す消す消す消す消す』

ジュッジュッジュッジュッジュッジュッジュッジュッジュッ

ジュッジュッ

獄寺『！！？』

シュウウゥゥ

ツナ『よ、よかった。消火できた』

獄寺『御見それしました！！』

ツナ『！？』

獄寺『命を狙ったオレまで助けてくれた。あなたこそ十代目に相応しい』

ツナ『ちょっ何言って』

獄寺『自分が十代目になろうなんていう大それたこと考えていません。ただ、十代目候補が自分と同い年と聞いて力を見たかっただけなんです。でもあなたは、オレの想像をはるかに超えていた。一生付いていきます』

リボーン『よかったじゃねーか。部下第一号だぞ』

ツナ『部下って、あのなあ！』

リボーン『負けた奴は勝った奴の下に付く。それが普通だ』

山本『なんか面白そうなことやってるのな。オレも入れてくんね？』

獄寺『（怒）』

悠里「獄寺隼人、荒くれ者っと（メモメモ）」

リボーン「んで、お前は何者なんだ？」

悠里「Ｗｏｗリボーンいつから？」

リボーン「たった今だぞ。もう一度言うがお前は何者だ？何故、ツナを監視している？」

悠里「監視してるだなんて酷いね。僕はただ、あの二人が何をするのか見たい、そういったはずだよ。僕はただの世間から外れた女子中学生さ」

リボーン「……女子？」

タタッ

ツナ「あっ悠里！」

悠里「やあツナ。君のお連れさんは失礼だね、どうやら僕を男だと思ったみたいだよ」

ツナ「リボーン、それは失礼だよ。悠里はれっきとした女の子なんだから（とか言ったけど、正直オレもたまに忘れちゃうんだけどね）」

リボーン「ふむ……」

悠里「おっと、自己紹介がまだだったね。僕は五月悠里。れっきとした女の子さ」

リボーン「それじゃあ悠里、お前に話がある」

悠里「話？」

謎の転校生（後書き）

次回予告で獄寺しか言ってなかったのにリボーンも出ちゃいましたね（笑）
次回は美鈴ちゃん、リボーンに勧誘されるカモカモ＾＾

どこのファミリー？ここのファミリー

リボーン「お前、ツナのファミリーになれ」

悠里「は？」

ツナ「な！？」

リボーン「お前みたいな奴が居れば、きっとどうにかなる」

悠里「そんなテキトーな理由で利用されるのはゴメンだね」

リボーン「利用じゃねえ。仲間に入れてやるって言ってるんだ」

悠里「悪いけど、お断りだよ。友達ならまだしも、そんな得体の知れないものに入りたくなんかないね」

ツナ「そ、そうだよね」

リボーン「興味がある、なんてこともないか？」

悠里「ない」

リボーン「（まずいな。こいつが本当に五月悠里であるならば、なんとしてでもツナのファミリーに居なきゃならねえ。それがあいつとの約束だからな）」

悠里「（コイツは一体何を考えているんだ？）」

リボーン「それじゃ、お前としては入らなくていいが、オレの中では入れるそれでもいいか？」

悠里「却下だ」

リボーン「お願い（ウルウル）」

悠／ツ「登場そうそうキモイことすんな！！」

リボーン「ちぇー」

悠里「どうして君はそこまでして僕を入れたいの？」

リボーン「九代目に頼まれているからだ」

悠／ツ「っっ！？」

悠里「（何で九代目はこう、私に付きまとうかな……）」

リボーン「ボンゴレ九代目、お前も知っているはずだ」

悠里「知らない」

ツナ「そうだよリボーン。悠里が知っているはずないじゃないか」

リボーン「そんなはずはねえんだが」

悠里「とにかく僕はそのファミリーとやらに入る気はないよ。もっとも、友達として遊びに誘ってくれるのは大歓迎だよ」

リボーン「お前、自分に何が起こるか分かっているのか？」

悠里「分かってるよ。だからこそ、自分のことは自分で何とかする。誰の助けも借りずにね」

ツナ「？？？何の話？」

悠里「分からなくていいよ。ファミリーにならない以上君には関係ない話だからね。じゃ」

スタスタスタスタ

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

美鈴「的なことがあって」

マーモン『リボーンには気をつけなよ。あいつはアルコバレーノの中で、一番タチが悪いからね』

ルッスーリア『それより、何で九代目は美鈴ちゃんをファミリーに入れようとしたのかしら』

レヴィ『貴様、そちらに行ってから九代目との接点はあったのか？』

美鈴「覚えてない。けど目を付けられる様な事はしてない」

ベル「ま、姫は何回か沢田綱吉の家に行ってるから、門外顧問からの連絡でも受けたんじゃねーの？」

美鈴「そういえば、家光おじさん一年前からずっと日本に帰ってきてないんだよな。話によると蒸発したとか」

マーモン『何を言ってるんだい。家光ならイタリアでずっと九代目のそばで働いているよ』

美鈴「あ、そうだったんだ」

ベル「とにかく、いろいろ分かったな。特殊弾とかｅｔｃ．．．」

スクアーロ『とにかくだぁ。アルコバレーノには気をつけやがれぇ』

美鈴「了解でーす」

星を眺めるその心には、一体何が映っているのだろうか。

空に広がる満天の星空。どこまでも絶えることなく続くそれ。

ツナ「なんか不思議な気分だ。まだ出会って間もないメンバーで、こうしていられることが」

リボーン「おい、今日は並森山に行くぞ」

事の発端は、リボーンのこの一言。

悠里「並盛山？何のために？」

リボーン「なんとなくだ」

悠里「（イラッ）そんなくだらない理由で僕を誘わないでくれる？」

山本「まあまあいーじゃねーか。このメンバーで遊ぶの初めてだろ？面白そーじゃねーか」

獄寺「うるせーぞ、野球バカが。
　オレは、構わないですよ。リボーンさんが言うのなら」

鐘「オレはパス一。そーゆーメンドイこと嫌いなんだよね」

悠里「それなら僕も遠慮しておくよ。得体の知れないものには、参加しないって言ったよね？」

悠里君、君は日本に来た目的を忘れていないかい？そこは付いていくが吉だとは思わんのかね。

全「誰？」

毎度おなじみの、ナレーションでございます。

悠里「ふうん」↑絶対零度視線

作／ナ「サーセンっした！！！」

ツナ「何で作者まで謝ってんの？」

作者「だって馬鹿ナレが口を滑らせてるから」

っっ！！ここは逃げるが吉だ！！！！
ダッ★

全「（★とかムカツクーッ）」

リボーン「まあ、馬鹿はさておき。行くか行かないかは聞いてねえぞ。全員強制参加だ」

悠里「行って僕にメリットは？」

リボーン「今日は天気がいいからな。あそこなら綺麗に星が見えるぞ（ニッ）」

悠里「よし、行こう」

ツナ「決めんのはやっ！？」

ツナ「ハア・・・ハア・・・」

獄寺「大丈夫ですか、十代目」

ツナ「う、うん。ありがとう、獄寺君」

悠里「私は、一体どこに居るのでしょうか。暗い暗い闇の中。
あなたは、一体どこに居るのでしょうか。いくら探しても見つからない」

全「???」

山本「悠里?」

悠里「いつの間にかあなたは私の前から姿を消した。そんなの許した覚えない。
でも、やっぱり許すわ。私はやがて星になり、そこであなたを見つけた。
人はいつか星になり、暗い夜を照らし出す。
愛した人が、迷子にならないように・・・」

獄寺「コイツどうしたんスか?急に歌いだして」

ツナ「さ、さあ?」

京子「私この歌知ってるよ。『星の帰り道(シルエット)』って言う曲なの。あまり知ってる人は居ないけど、女の子には人気の曲なんだよ」

ツナ「そ、そうなんだ(やっぱり、京子ちゃんが居ると和むなあ)」

悠里「けれどいつかその想いが届く前にあなたは星になる。私の心を置き去りにして・・・」

ツナ「つか、その曲暗すぎでしょ!」

そして、あたりは暗くなり、空一面に無数の星が浮かび上がった。

京子「うわぁ、綺麗」

悠里「日本でも綺麗に星が見えるところがあったんだな・・・」

鐘「泣いてんの？」

悠里「ばっ…誰が泣くか！」

鐘「しししし」

京子「星って不思議だよね。見ていると心が癒されるみたい」

悠里「実際、癒しているさ。星はその柔らかな光で見るもの見ないもの全てを優しく包み込む」

山本「なんか、いつもとキャラが違うのな」

悠里「星は全てを見ている。騙すことなんて出来ない。『星の帰り道（シルエット）』もそういう曲さ」

リボーン「今日はここで野宿するぞ」

ツナ「はあ!?何言ってんだよ!」

リボーン「明日帰ったら、全員に感想文書いてもらうからな（ニッ）」

獄寺「分かりました」

山本「了解だ」

京子「感想文か。ちゃんと書けるかな」

悠／鐘「メンド・・・・・・」

星を眺めるその心には、一体何が映っているのだろうか。（後書き）

感想文は次回です。

って言うか次回は感想文ｏｎｌｙですから。

それと注意事項。『星の帰り道（シルエット）』という曲は実在しませんので探さないでくださいね？歌詞とかも即興で作り上げた駄文なので、グダグダです！

ごめんなさいっ！！！

感想文

五月悠里の感想文
おい、リボーン。いい加減ファミリー扱いするのはやめてくれる？
星を見せてくれたことには感謝だけど、強制参加って事が気に食わない。
とにかく感想文だから感想を書いておく。
山登り面倒くさい。
ツナ五月蝿い&情けない。
星綺麗だった。以上。

五月鐘の感想文
何でこんなメンドイの書かなきゃなんないわけ？
別に星に興味とかないし、ただ面倒なだけだったし。
ま、綺麗っつったら綺麗だけどな。

沢田綱吉の感想文

今まで星なんて気にしたことなんてなかったけど、実際に見てみて、良かったと思う。

いつもリボーンに振り回されっぱなしだけど、こういうのならいいと思う。

京子ちゃんも来てくれたし。

獄寺隼人の感想文

リボーンさん、昨日は本当にいいものを見せてもらいました。

星は本当に綺麗でした。野宿も新鮮でしたし。

またいつでも誘ってください！

山本武の感想文
星ってすんげー綺麗なんだな！昨日見てビックリしたぜ。
ビックリといえば、悠里って歌うまいのな。さすが女子だぜ。

笹川京子の感想文
ツナ君昨日はありがとう！
初めてあんなに綺麗な星が見れて、初めて野宿して、とってもいい思い出になったよ！
今度は夏にでも、花火皆で見に行こうね。

「ふぅ。全員感想文になってねえぞ。日記もしくは手紙カンジだな」

彼は、提出された課題を読み終えると、静かにエスプレッソを飲んだ。

「悠里と鐘のこと、いっぺん調べてみるか」

感想文から二人のことになった経路は誰にも分からず。

感想文（後書き）

突然なのですが、ハートを記号表記するやり方を知ってる人は、感想のところでいいので教えてください。

このままでは、ルッスーリアの台詞の部分が悲しくなってしまう。

ボンゴレ式クイズ大会

悠里「おはようございます」

ツナ「おはよう、悠里」

悠里「……」

ツナ「へ？あの？オレの顔なんか付いてる？」

悠里「なん…で……ツナがこんな時間に学校に来てるの……？」

ツナ「なっ！（ガーン）」

獄寺「テメェ！十代目に対して失礼だ！」

悠里「……誰？」

獄寺「なぁっ！？オレは獄寺だ！並盛山に行った時居ただろうが！つーかお前こそ何モンだ？ファミリーでもねえくせに、十代目に付きまとわりやがって！」

悠里「僕は悠里。別に僕は好きでツナの周りに居るんじゃない」

獄寺「十代目の無礼はオレがゆるさねえ！」

悠里「ふん。十代目十代目ってお前はツナがいないと生きてられないのかよ。忠実な部下も良いけど、度が過ぎればただの迷惑に過ぎないよ」

獄寺「てっテメェ！！！」

ツナ「お、落ち着いて獄寺君！！悠里も獄寺君を煽らないでよ！」

悠／獄「ふんっ（コイツとは仲良くなりたくもねえ）」

？「随分と賑やかじゃねえか」

全「！？」

ウィィィン

リボーン「ちゃおっス」

ツナ「リボーン！！」

獄寺「リボーンさん！！」

悠里「……やあ」

リボーン「感想文、読ませてもらったぞ」

詳しくは前回へＧｏ！

リボーン「全員赤点だ。罰ゲームをかねた補習をやるから、今日全員ツナんちに集合だ」

ツナ「なっ」

リボーン「悠里。ちゃんと鐘も連れてこいよ」

悠里「面倒なことは嫌いだ」

リボーン「それとツナ、京子もしっかり誘っておけよ」

ツナ「京子ちゃんも!?危ないことはしないんだろうな!?」

リボーン「ああ。勿論だ。
京子が帰るまではな（ボソ）」

ツ／獄／山「???」↑聞こえてない

悠里「（コイツ一体何を考えているんだ?笹川が帰った後、何をする気だ?）」↑聞こえてる

リボーン「誰一人拒否権は与えられないからな（ニッ）」

ツ／悠「（理不尽だーっ）」

山本「ははっやっぱコイツおもしれー」

獄寺「大丈夫です。リボーンさんが言うことなら自分、何でもやりますから」

リボーン「集合時間は４：００だぞ」

この学校の下校時刻、４：００。

全「ムリだーっ」

リボーン「全員このプリントを終わらせろ。他の奴との相談は禁止だ」

目の前に積み上げられた大量のプリント。

リボーン「なるべく8：00までには終わらせろ」

開始から三十分。

悠／鐘「終わった」

ツ／山／獄「早っ！」

からの三十分。

獄寺「終わったぜ」

からの十分。

京子「自信はないけど、全部とき終わったよ？」

からの一時間。

山本「教科書見れば、案外できんのな」

からの……

リボーン「おい、まだおわんねーのか？」

ツナ「え……っと」

山本がとき終え、二時間が経過していた。つまり開始してから、四時間十分が経過していた。

鐘「とっくに８：００オーバーしてるぜ」

リボーン「しかたねえな。京子、もう遅いから帰って良いぞ」

京子「えっ？う、うん。じゃあね、ツナ君。がんばってね」

リボーン「ツナ、お前も切り上げろ。京子が帰ったから本題に移る」

全「！！？」

悠里「やはり、この補習は全員を集めるためのカモフラージュか」

ツナ「ちょっっリボーンどういうことだよ！」

リボーン「それじゃあ始めるか。ボンゴレ式クイズ大会をな」

獄寺「ボンゴレ式」

山本「クイズ大会？」

悠里「何それ？」

リボーン「簡単な話だ。オレが問題を出し、オメーらが答える。それだけだ」

ゴソゴソ

リボーン「答えはこのホワイトボードに書け」

全「（どっからだした！？）」

リボーン「最も多く答えられた奴には景品があるぞ。但し、ビリの奴にはお仕置きが待っている」

ツナ「んな――――――っ!!オレビリ確定じゃん!!」

獄寺「大丈夫です。十代目なら全問正解ですよ」

ツナ「（獄寺君、さっきののオレを見てムリだと気づいて）」

悠里「拒否権は?」

リボーン「ないといったはずだ。それじゃあ第一問」

「ボンゴレとはイタリア語でなんという意味か」

ツナ「それ、普通の問題じゃないから!!」

リボーン「いいから、さっさと答えろ」

ツナ「そんなこと言っても皆が……」

悠里「舐めてるね」↑イタリア出身（と思わせている）

鐘「ししっバカにしてんの?」↑生粋のイタリア人

獄寺「これくらいいけます」↑イタリア出身

ツナ「何気イタリア多いし!」↑イタリアのかてきょー付き

山本「ん?聞いたことあるな。何だっけ」↑ノー天気な日本人

リボーン「時間切れだ。全員答えを見せろ」

悠里「あさり」

鐘「アサリ貝」

獄寺「アサリ貝」

ツナ「アサリ」

山本「アサリ」

リボーン「よし、全員正解だぞ。山本、お前よく知ってたな」

山本「ああ。ウチにある道場が『あさり組』って言う名前なんだけどよ、前に親父が『アサリってのはイタリア語でボンゴレって言うんだ』って教えてくれたんだ」

ツナ「へ～」

リボーン「んじゃ次いくぞ」

「オレはツナをどうするために日本に来た?」

ツナ「だから普通の問題出せよ!」

ドガッ↑蹴

ツナ「ふげっ！」

獄寺「大丈夫ですか十代目！」

ツナ「うん、大丈夫」

山本「小僧が来た理由？」

リボーン「時間だ、答えを聞こう」

悠里「……ム〇カ？」

リボーン「いいからさっさと見せろ」

悠里「ダメツナをご立派なボンゴレ十代目ボスにするため（誰がさせるかコノヤロー）」

鐘「沢田綱吉をボンゴレボスにするため（コイツにを十代目なんかにはさせねーし）」

獄寺「立派なボンゴレ十代目にするため」

ツナ「オレをマフィアのボスにするため」

山本「勉強が出来るようにするため」

リボーン「山本以外全員正解だぞ」

ツナ「あれ?なんで悠里と鐘、知ってんの?」

悠里「球技大会の日君たちが話してるのが聞こえたんだよ」

リボーン「嘘をつくな（チャキッ）」

ツナ「ひっ」

悠里「脅しかい?そんな物僕には無意味だ」

リボーン「あの日、お前はツナたちの後をつけていた。違うか?」

ツ／獄「!?」

悠里「クスッ　違うって言っているだろ。それよりさあ早く、クイズ大会を進めなよ」

リボーン「チッ。第三問だ」

「オレのペットの名前は何だ」

鐘「ゲッ知んねえし」

リボーン「答えを見せろ」

悠里「レオン」

鐘「知らね。つか居たんだ（笑）」

獄寺「　」↑分からなかった

ツナ「レオン」

山本「わかんないのな」

リボーン「ツナと悠里が正解だ。……何故知っている？」

悠里「僕は五感全て、いや六感全てがずば抜けているのをお忘れなく」

ツナ「六感全て！？」

獄寺「な、なんつー奴」

鐘「生態不能な変な奴」

ひゅんっ　　ストッ

鐘「……（汗）」

悠里「次は目だ」

なんつー殺気でしょうか。ツナは震え獄寺は固まり、リボーンですら顔をしかめた。

その中で唯一動けるのは、

山本「へー、スゲーのな。手裏剣なんていいセンスだな」

武器の確認を行えるほど、殺気に怯えていなかった。否、

山本「おもちゃにしてはリアルなのな」

殺気を感じないほどノー天気なのである。

全「緊迫感ねー奴」

リボーン「最終問題だ」

「どうしてツナはボス候補になった?」

悠里「(問題腐ってんなー)」

リボーン「見せろ」

悠里「知らん」

鐘「初代ボンゴレボスの子孫だから」

獄寺「すごいお人だから」

ツナ「オレのひいひいひいじいちゃんが初代ボンゴレのボスだから」

山本「なんとなく」

リボーン「ツナと鐘が正解だな。結果を発表するぞ。一位は全問正

解のツナ、景品はラ・ナミモリーヌの商品券だぞ」

ツナ「いらない！！」

リボーン「ビリは山本だ。罰としてプリント増量だ」

ドサッ

山本「い゛っ」

悠里「（ケーキケーキケーキケーキ）」

鐘「沢田、商品けんいらねーなら悠里に渡してやりな」

ツナ「へ？何で？」

鐘「こいつの顔見てみろよ。ケーキ以外何も言ってないぜ」

全「……（汗）」

後日、商品券によりケーキを買いまくった美鈴である。

ランボさん登場だもんね！！

リボーン「答えは……」

ツナ「さ…3？」

リボーン「はずれ（カタン）」

ドゴオォン

ツナ「んぎゃあぁあ！！」

奈々「賑やかねえ」

ツナ「ゲホゲホ……どこに答えを間違うたびに部屋ごと爆破する家庭教師が居るんだよ！」

リボーン「ここに居るぞ。これがオレのやり方だ」

ツナ「間違ってるよソレ！！」

ピロリロピロリロ♪

ツナ「ん？オレの携帯……」

宛先：ダメツナ
件名：お疲れ
本文：やあダメツナ君。朝から爆発だなんて騒がしいね。
　ハッキリ言って近所迷惑だよ。
　話がそれるけど、君の部屋の窓付近、変な牛ガキが銃を構えてるよ。
　爆発に巻き込まれて泣いてるけどね（クスッ）
　以上　悠里

ツナ「（窓の外？）んなっ！！？」

窓を見ると、確かに牛ガキ発見。

牛「我慢なんて出来ないモンねーっ（泣）
　ランボさんのこと無視するなんて許さないんだもんねーっ（泣）」

ツナ「（え――――――――――――――――（ガーン））」

牛「リボーンなんて……うあぁぁぁぁん」

ツナ「なあリボーン。外に変な奴がいるんだけど……」

リボーン「それじゃあ今やったところのおさらいするぞ」

ツナ「シカト――――――――――!!?」

牛「うあああぁぁぁぁ（ミシミシ）あ…あ…?」

バキッ　ヒュウウ　ドデン

牛「ぐぴゃっ」

ピポピポピポ

牛「リボーン君あそぼー」

奈々「はい（ガチャ）あら?」

牛「ガハハ侵入成功!!」

バン

牛「久しぶりだなリボーン!!オレっちだよランボだよ!!」

ツナ「うわっ入ってきた!!リボーンの知り合いかよ!!」

リボーン「この公式は覚えておけよ」

ツナ「え?」

ランボ「……」

まるでこの部屋には自分とツナしかいないように接するリボーン。

ランボ「コラー無視すんじゃねーーーーーーーーーーーー!!いてまうぞコラー!!」

ビシイッ↑殴
ドガッ↑激突

ランボ「ぴゃん!!」

ツナ「わあっ。ひ…ひでー!!(この二人一体どういう関係なんだ?)」

ランボ「おーいて…(ズルズル)何かにつまずいちまったみたいだ。
イタリアから来たボヴィーノファミリーのヒットマン、ランボさん5歳はつまずいちまった!!
大好物はブドウと飴玉で、リボーンとバーであったランボさんはつまずいちまった~~~!!」

ツナ「（一生懸命自己紹介してる――！！（ガーン））」

ランボ「ってことで改めて、いよおリボーン！オレっちだよ、ランボだよ！！」

リボーン「今の公式でコイツを解いてみろ」

ツナ「あ…んん…」

ランボ「（ピタッ）」

ツナ「（オレも無視すればいいんだよね…）
よ…4かな？」

リボーン「そーだぞ、4だ」

ランボ「グス・・・」

奈々『ツッ君、ちょっといいかしら？』

ツナ「はーい。リボーンちょっとゴメン」

リボーン「しかたねーな」

とんとん

ツナ「何、母さん？って悠里！？なんでウチに？」

悠里「居ちゃ悪いかい？あまりにも五月蝿いからね、僕も勉強会参

加させてもらおうと思ってね」

ツナ「あ…うん。いいよ、って言うか居てくれたほうが助かるかも……（あのランボって奴がいるし…）」

奈々「悠里君、ツナのこと頼んだわよ。このこったら、リボーン君とは喧嘩ばっかりで……」

悠里「了解しました。さ、行くよ」

とんとん

ツナ「でね、悠里」

悠里「ん？何」

ツナ「さっきの牛の子が（ガチャ）居て…って入るの早いよ！！」

ランボ「ぐぴゃあああぁぁぁぁぁあっ」

リボーン「ウゼェ（ヒュッ）」

ドガアァァン

悠／ツ「……何をどうしたらこうなるの？」

リボーン「ちゃおっス。よく来たな悠里」

悠里「よくきたも何も僕の家隣だから」

リボーン「そうだったのか？（ニッ）」

ツナ「リボーン！さっきの子どうしたんだよ？」

リボーン「さっきの子って誰だ？」

ツナ「だから、あの牛柄の服を着た…（ツンツン）え、何……あ」

悠里「あいつのことか？」

悠里がさした先には、真っ黒に焼けた牛（笑）

ツナ「ちょっ何もこんなにしなくても…！知り合いなんだろ！？」

リボーン「しらねーぞこんな奴。どっちみち、ボヴィーノファミリーって言ったら中小マフィアだ。
　オレは、格下は相手にしねーんだ」

ぶっ飛ばした時点で相手にしてるだろ、と突っ込んだら負けなのである。

？「ししっおんもしれーことしてんじゃん」

ツナ「あっ鐘！どうしたの？」

鐘「なーんか面白いことやってそうだからさ、来てみただけだぜ？」

ツナ「（なんていうか、この二人傍観好きだよなぁ）」

作者「突然だけど、十年バズーカ見たい人ーっ」

全「はい？」

作者「見たい人が居なければｃｕｔしちゃうんだけど」

悠里「ソレって、後で絡む？（私が居るところで）」

作者「うん！絡むよ、いーっぱいね！」

悠里「そう、それじゃあそのときでいいよ」

作者「了解っ☆」

鐘「あれ？もしかしてオレの出番もう終わりなカンジ？」

リボーン「そーじゃねーか？」

鐘「じゃあ何で出したし」

悠里「そりゃあ……」

全（作含む）「作者の気まぐれ？（笑）」

ランボさん登場だもんね！！（後書き）

時系列メチャクチャですいません。内容とかも全然違うし……

ランボは個人的に嫌いなのでさっさと切り上げたかったんです。

それで、ふと思った。

「日常編細かすぎね！？」

ただでさえ長い日常編を、グダグダと意味のないオリストを交え、しかもスタート地点が古すぎる。

なんか…なんか…ｏｒｚ

でもとりあえず必要なだけ書くので、中身が薄くなるかもしれないけど、心が優しい方は、根気強く読んでください。

大丈夫……日常じゃなければきっと……

美鈴「作者がバグリ始めたね」

ベル「いいんじゃね？どうせバカだし」

突然の訪問者

美鈴「眠い眠い眠い眠い眠い眠い眠い眠い」

ベル「眠いはいいけど、早くご飯作ってくんね？」

美鈴「ん、ゴメン」

テテテッ

美鈴「（ん～何作ろうかなぁ。ハンバーグを作ろうにも材料がないし、パスタを作るには時間がない。おにぎりを作るにしてもご飯を炊いてないし……）

って何も作れないじゃないか！！！」

ピーンポーン

美鈴「ベル～出てくれない？変装するのも忘れないでね」

ベル「分かってるっての」

ガチャ

鐘「あれ？誰も居ない……？」

？「ちゃおっス」

鐘「赤ん坊じゃん。どしたの？」

リボーン「今日のことでいろいろと話があってな」

鐘「へえ。立ち話もなんだし、とりあえず上がれば？」

リボーン「ああ。そうさせてもらうぞ」

美鈴「んで、誰だったの？て、あわわわっ（ババッ）」

悠里「やあリボーン。何か用かい？」

変わり身の早い美鈴である。

リボーン「今何か違かったような気がするんだが」

悠里「気のせいじゃない？」

リボーン「そうか？（怪しいな）」

鐘「つか、用があるならさっさと済ませてくんね？まだ晩飯食ってないんだよね」

リボーン「それじゃ、夕食に邪魔してもいいか？」

悠里「話って今じゃないとダメ？」

リボーン「まあな」

悠里「……分かった。食べていきなよ。丁度出来上がったからね」

鐘「なっ（何やってんだよ!!敵をご飯に誘うとか、正気の沙汰じゃねえだろ!!）」

しかし、そんなベルの心配は美鈴には届かず。

リボーン「短刀直入に聞くぞ。お前らマフィアに関係してるだろ」

悠／鐘「!!!??」

悠里「何でそんなこと」

鐘「俺たちはマフィアとかしらねえし」

リボーン「隠しても無駄だ。今日のお前の動きと殺気、あれは一般人のなせる業じゃねえ」

悠里「昔から家柄そういうことが得意になっちゃんたんでね」

リボーン「マフィアじゃねえってなら、どこの家のモンだ?」

鐘「（姫、どう答えるつもりだ？ヴァリアーの事言うわけにはいかねえし、だからといって姫が自らあの家のことを言うとも思えねえし）」

悠里「僕の家は本当にマフィアなんて物とは無縁の物。ただその町に住んでいる人たちがやけに喧嘩っ早くてね。必然的に強くなることを求められた」

鐘「？？？？？」

もう既に何の話をしているのか分からなくなっているベルなのだ。
というか美鈴自身も何の話をしているか分かっていない。なぜなら、たった今作ったテキトーな話なのだから。
しかし、何故かリボーンは気づかない。

リボーン「ふむ。そうか。それともう一つ。何故マフィアを嫌う？」

鐘「いや、嫌ってるわけじゃ……」

悠里「一度、住んでいる町がマフィアに襲われたからね」

鐘「？？？？？？？？」

悠里「やっぱりアルコバレーノは違うよね」

リボーン「！？」

鐘「おいっ！」

リボーン「オレがアルコバレーノって事を知ってるんだな」

悠里「クスッ。アルコバレーノのことは知ってるよ。だって僕の町を襲った奴等の中に、アルコバレーノが居たからね」

鐘「なっ!?（姫何言ってんの!?）」

リボーン「何!?」

悠里「ま、この話は君たちを信じることが出来た暁にでも教えてあげるよ」

リボーン「俺たちのことを信頼してないって事だな」

悠里「質問に答えてあげたんだから、こっちの質問に答えてよ。どうしてダメツナをボスにしようとなんかしてるの?いくら初代ボスの子孫だとしても、適任者はいくらでも居るんじゃない?」

リボーン「企業秘密だ」

悠里「拒否権は君にはないよ」

リボーン「（ちっ、なんつー殺気だ）……ふう、仕方ねえんだ。今、イタリアの巨大マフィアボンゴレファミリーにはボス後継者がツナしかいねーんだ」

悠里「いない?（スクアーロの情報とずれてる?）」

鐘「何それ、どゆこと?」

リボーン「一人は抗争中に射殺（ピラ）　一人は溺死（ピラ）一人

は気づいたら白骨死体になっていた（ピラ）そうだ」

悠里「誰も写真を見せろとまでは言っていないが」

リボーン「そして一人はクーデターを起こし厳重幽閉中だ」

悠／鐘「っっ！！！」

悠里「（ボ…ス…）」

リボーン「どうした？」

悠里「いや、なんでもない」

リボーン「ツナがボスになるためにはいろんな人との交流が必要だ。鐘、悠里。ツナと仲良くしてやってくれよ」

悠里「それはどうだろうね。僕は昔から友達が出来ない性質でね」

その理由が、常に殺気を出しているせいだと言う事を本人は知らない。それでもツナが一緒に居られるのは、ホントにボス体質だというのも、全員気づいていない。

リボーン「ツナとなら、きっとうまくやっていけるぞ」

悠里「分かってないね。今度ツナに聞いてみるといい。僕とつるんだ人間がどういう目に遭ったのかを」

鐘「あのこと覚えてんだ」

リボーン「そうか。今日は邪魔したな」

ツナ「リボーンどこ行ってたんだよ？」

リボーン「ツナ。お前昔悠里とその周りで起こった事件について知ってるか？」

ツナ「事件？知ってるけど何で？」

リボーン「少し詳しく教えろ」

ツナ「（えらそうに（ムスッ））あれは、俺たちがまだ小学四年生だったときの話だよ」

当時、悠里と仲のよかった女子が居たんだけど、ある日何故か悠里に対する態度が一変したんだ。

『悠里、アンタうざいのよ。消えてくれる？』

その言葉を初めに、皆が悠里をいじめるようになったんだ。まあ、元々悠里は人と馴れ合わないタイプだから、別に気にしてる様子もなかったんだ、けど。

リボーン「けど？」

その態度がその女子を逆上させた。

『調子に乗ってんじゃないわよ！！』

イジメはエスカレートしていった。だんだん、悠里にも変化が現れた。

不登校になることはなかったけど、気休めにって教室に来てくれる鐘にさえ、話をしようとしなくなった。

そしてある日事件が起きた。

一日に一人、学校に来ない人が増えていった。理由は、全員何者かに襲われ怪我をしたということ。

最初は誰がやったかなんてわかるはずがなかった。先生たちも、犯人探しに追われていた。

そんな時とうとう目撃者が現れた。犯人は、悠里だった。

リボーン「!?」

悠里本人は、自分が何をしているのか気づいていない。先生は、悠里がいじめを受けているということを知らなかったんだ。だから勿論殺人未遂って事で逮捕もされた。悠里は無論、無実を主張した。オレも鐘も悠里の無実を求めた。でも、当時悠里は嫌われていた。オレと鐘以外に悠里の肩を持つ人なんて居るはずがなかった。でも、悠里は本気で自分は何もしてないと思っていた。自分はいじめられたとしても、仕返しをするようなことは決してしないっていつも言ってた。

結局、目撃があっても証拠不十分ってことになって、無実になった。あの日以来悠里は誰も信じようとしなくなった。オレとも今までどおりに接してくれた物の、やっぱり感情がないような、そういう話し方に変わってた。

ツナ「そういう事件があったから、悠里は自分と鐘しか信じていない。オレやリボーンや獄寺君にあんなにつめたいのはそのせいなんだよ。もとはきっと優しい人だよ。

だからさ、悠里をこれ以上マフィアとかに巻き込まないでくれよ」

リボーン「(そんなことがあったのか。九代目に任されたもう一つの家庭教師(しごと)は面倒だな)」

突然の訪問者（後書き）

すみませんすみません！！！
この回本当は「ボンゴレ式クイズ大会」から帰ってきてからなんですっっ！！
割り込み投稿を失敗してしまい、このザマです。
ほんっっとうに、ごめんなさあぁいっっ

初めてであった親友

悠里「詰まんない。何も面白いことがない。いい加減誰か殺したい」

ここは公園。あまりにも暇なので来てしまった美鈴。しかし、余計にやることがなかった。

悠里「ハ～（ゴロン）ｚｚｚｚｚ」

ガサガサ

？「あ……あの」

悠里「ｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚ」↑爆睡中

？「……死ん…じゃった？」

悠里「勝手に殺さないで欲しいな」

？「（ビクッ）あ……あの」

そこに現れたのは、黒髪の少女。どこか一般人ではないような、そんなオーラを放っていた。

悠里「あ、邪魔か。悪いね（ムクッ）隣、座りなよ」

？「（コクリ）」

悠里「んで、君誰？僕は悠里」

凪「……凪」

悠里「ふうん。どこに住んでんの？」

凪「…黒曜のほう」

悠里「（なんか無口な奴。それにしても黒曜か、あそこの学校って荒れてるって聞いたな）こんなところで何してるの？」

凪「……散歩。親が忙しいから家の事は自分で…」

悠里「親って何してるの？」

凪「……お母さんが女優で、お父さんが大手企業会社の社長……」

悠里「な!?凪の家は超リッチーっ!?」

凪「……（フルフル）お父さんもお母さんも忙しくて私に構ってくれないから……」

悠里「親のこと好きかい？」

凪「……（コクリ）」

悠里「友達とか居るの？」

凪「……（フルフル）」

悠里「どうして？」

凪「……皆、私が変な子だって避けるから」

悠里「変な子か。そんなこといつまでも気にしてたらずっと出来ないと思うな」

お前の言える台詞ではないぞ、バカたれ。

凪「……？」

悠里「コイツは気にするな」

凪「？？？」

悠里「凪…だっけか？君、秘密を絶対守れる？」

凪「？……（コクリ）」

悠里「（たまにはこういう子と仲良くなっても悪くないな。この子面白いし）

僕…いや私の名前は美鈴って言うの。わけあって悠里って名乗ってるけど、君はなんだか似た物を感じる」

凪「……似た物？」

美鈴「うん。だから、友達になってくれるかな？私のヒミツを初めて話した初めての親友」

凪「／／／／私なんかでいいの？」

美鈴「勿論。だからヒミツはちゃんと守ってね？」

凪「……（コクリ）」

美鈴「凪って携帯持ってる？」

凪「（コクリ）」

美鈴「（突然反応早くなった！？）メアド交換しよう」

凪「……え」

美鈴「ホラ早く。（ピッ）完了っと」

そのメアドをツナとはまったく別のグループに入れ、『親友』という欄が出来上がったのは、美鈴と凪のヒ・ミ・ツ♪

凪「……？？？」

悠里「馬鹿なれクン？ちょーっと後で用事があるんだけど（黒笑）」

（冷汗）い～や～だ～っ！！！！

ダッ

悠里「それじゃ、またいつか会おうね」

凪「……うん」

悠里「（もしかしたらメル友になっても、もう会うことはないかもしれないけどね）」

凪「……また今度……美鈴」

初めてであった親友（後書き）

うわ～凪が出てきたよ。

姫「どんだけいろんな人と絡ませたいの？」

……あれ？

獄寺夫人「まあ、それがコイツなんだし、仕方ないんじゃん？」

どSちゃん「そうですね」

ななな何でいんのーっ！？

姫／夫／S「どうもこんにちわー。『転生……なのかなぁ？』よりコメンテーターとして来ちゃいました」

姫「ま、本音はこのコーナーを乗っ取ろうとしてるんだけどね（黒笑）」

どSちゃん「それもありますね。私的には作者をいじろうと思ってきました」

獄寺夫人「っていうか、私の名前は結局これなの？」

作／姫／S「え？それ以外になんかあんの？」

獄寺夫人「シクシクシクシクシクシクシク」

姫「バカはさておき」

どSちゃん「次回からこのコーナーは私たちが担当させていただきます。異存はありませんかＸＡＮＸＵＳ様（笑）」

ＸＡＮＸＵＳ「好きにしやがれ」

ちょーっ何でＸＡＮＸＵＳが許可しちゃってんの！？私の雑談コーナーがぁっ。

全「黙れカス」

……（泣）もういいもんっ

ダッ

『どうにでもなっちまえ～！』

姫「許可も貰ったことだし」

どSちゃん「今回はこの辺で」

獄寺夫人「Ｓｅｅ　ｙ（ガスッ）んぎゃ！」

姫／Ｓ「さようなら～」

獄寺夫人「（酷ぇ～）」

ポイズンクッキング&十年バズーカ（前書き）

どっちかって言うと、アニメよりです。マンガ派の人ごめんなさい。

ポイズンクッキング&十年バズーカ

今、1―A沢田綱吉の机の上は地獄と化していた。

悠里「なんだい、これ」

山本「なんか息苦しいのな」

ツナ「えっと…よくわかんない」

獄寺「こ…これは…」

そこには毒ガスを放出する毒々しい食べ物らしき何かが置かれていた。

因みに、この四人以外のクラスメイト（先生含む）は全員、天国への扉を見かけていた。何故この四人は無事なのかって?それは、美鈴が用意したガスマスクをつけているからさ。

悠里「とにかく教室を出るよ」

三人「うん」

～屋上～

山本「一体あれなんだったんだ?」

ツナ「今朝からこれだよ」

獄寺「今朝からですか!?」

ツナ「うん。今朝は、突然女の人がくれたジュースが毒だったり、それで近くにいた鳥が皆死んじゃったていうか」

獄寺「オレ……正直毒物（アレ）のこと知ってます」

全「知ってんの！？」

獄寺「いや…でも…ありえねえ」

悠里「現実逃避してるし」

山本「まあ、あんまし考え込んでもしゃーねぇし、昼飯でも食べようぜ」

ツナ「そうだね。時間的にも丁度だし」

？「ランボさんもご飯食べるんだもんね！」

ツ／悠「（ピクッ）まさか……」

ランボ「ランボさん登場だもんね！」

獄寺「なんスかこの牛は」

悠里「ボヴィーノファミリー、自称五歳のランボ」

ツナ「いいよ、ほっとこう。それよりご飯」

ゴソゴソ

悠里「！！　開けるな、そいつはヤバイ！！」

ツナ「え？」

ランボ「バーカ、ランボさんは開けちゃうもんね」

パカッ

悠里「バッくそ……これ付けろ！」

ツナ「へ？んぐっ」

山本「ん？んぐっ」

獄寺「おい！んぐっ」

ランボ「？？？（モワ～ン）ぐぴゃっ（とてっ）」

ツナ「ラ、ランボ！？」

悠里「この弁当のせいだ。さっきのヤツと同じ物だ」

？「その通りだ。そいつはポイズンクッキング、食ったら一秒で天国行きだ」

ツナ「んな――――――――っ！ってリボーン！！」

悠里「ポイズンクッキング……毒さそりビアンキか」

リボーン「ピンポーン。（何でコイツ知ってんだ?）ビアンキそこにいるんだろ?」

ガチャ

ビアンキ「さすがリボーンね。私がここに居いることに気づいていたのね」

獄寺「あ…アネキ（ぐきゅるるる）はがあ!」

ツナ「ご…獄寺君!?えっお姉さん?」

リボーン「そーだぞ。腹違いのな」

ツナ「つーか、何でオレが殺されかけてんの〜〜〜〜!!?」

悠里「君が十代目って言うのと関係してるんじゃないの」

ビアンキ「迎えに来たよ。また一緒に大きい仕事しようリボーン。やっぱりあなたに平和な場所は似合わない。あなたのいるべきはもっと危険でスリリングな闇の世界なのよ」

リボーン「言ったはずだぞビアンキ。オレにはツナを育てる仕事があるからムリだ」

ビアンキ「……ぐす……かわいそうなリボーン」

ツナ「え?」

ビアンキ「この十代目が不慮の事故か何かで死なない限り、リボー

ンは自由のみになれないってことだよね（ぐず…）」

ツナ「（ガーンッ）んなぁ――――――っ！？
（それでオレ殺そうとしてたの――っ考え方おかしーだろ！！！）」

悠里「なるほどね（ニヤ…）」

ビアンキ「とりあえず帰るね。十代目をころ…十代目が死んじゃったらまた迎えにくる…」

ツナ「ちょっ何言っちゃってんのあんた――――――――――っ！？」

山本「獄寺の姉さん、またな」

悠里「さてと、ひとまず獄寺を保健室に連れて行かないとね」

ツナ「わわっ獄寺くーん！！」

悠里「君、沢田綱吉の命狙ってんだね」

ビアンキ「あなたは？」

悠里「僕は五月悠里。今日限りだけど、それ手伝ってあげてもいいよ」

ビアンキ「どういうことかしら」

悠里「今日、家庭科の調理実習でケーキを作るんだ。そのときになったら分かるよ」

先生「それでは始めてください」

悠里「Ｉｔ、ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ♪」

山本「それにしても獄寺残念だな。こんなときに腹痛なんて…」

ツナ「ホ…ホントだね」

本日のメインイベント。女子が家庭科の調理実習で作ったケーキを男子にくれてやろうじゃないかというイベント。

男子「どんなケーキくれるかな」

男子「誰もお前になんかくれねーよ」

男子「んだとっ」

ガラッ

女子「ケーキを男子にくれてやるーっ」

悠里「ハァ。あほらし」

京子「ねぇ、悠里君は誰にあげるの？」

悠里「一つは鐘で、一つはツナ、もう一つは笹川と交換でもしようかと」

京子「ホント？貰ってもいいの？」

悠里「ああ」

花「ってか、アンタって女子だったんだね」

悠里「どうでもいいよ（毒サソリ、すり返るなら今しかないよ）」

ビアンキ「（さあ、沢田綱吉。毒にまみれて死んでしまえ）」

サッ

ツナ「なっ!?ちょっ待てよっ何してんだお前!?」

京子「ツナ君、私のケーキ食べる?」

ツナ「え…と。その…」

京子「あ、モンブラン嫌いだった?(しゅん…)」

ツナ「いや…そ…そんなことはなくて(問題は、それがビアンキによってポイズン化していることなんだよ(汗))」

ビアンキ「(さあ食べなさい。愛のためなら人は死ねるというのが私の持論よ)」

悠里「渡すタイミングないし…」

山本「ツナがくわねーなら、オレがもらうぜ」

ツナ「ダッダメぇぇぇ!」

リボーン「それじゃあそれはお前が食え(ズガァン)」

死ぬ気ツナ「死ぬ気でケーキを食う!!!」

パクッ　　モグモグ

死ぬ気ツナ「(ゴクリ)うまい!」

ビアンキ「！！ポイズンクッキングが効かない！！？」

リボーン「死ぬ気弾をへそに撃つと鉄の胃袋（アイアンストマック）だ。何を食ってもへっちゃらだ」

死ぬ気ツナ「たりねー！！！」

女子「あ、アレ？ケーキが」

男子「あ！！ツナが食ってる――っ」

もしゃもしゃ

死ぬ気ツナ「まだ足りねー」

男子「うわ！！コイツ無差別に食いまくる気だ」

男子「だめだぁっ」

男子「誰か止めろ――――！！！」

悠里「僕が止めようか」

京子「悠里君？」

悠里「はああっ（ズボッ）」

死ぬ気ツナ「（パク）……（ドテッ）」

山本「ツ…ツナ！？」

花「沢田!?一体何をしたの?」

悠里「止めろというから止めただけだよ。そのうち起きるさ」

ランボ「ガハハハ!!ランボさんもケーキ食べるんだもんね!!」

山本「お、さっきの奴じゃねぇか。もうケーキないぜ」

ランボ「ぐぴゃっ」

悠里「ちっ。(なんだろう、こいつ見てたら殺意が芽生えてきた)」

ランボ「うぐっ…が・ま・んしないもんね!!ランボさんのケーキ!!」

ズガン

全「!!?」

悠里「なんだよアレ」

?「ふう。まさか十年前に来てしまうとは…」

悠里「お前誰だ」

大人ランボ「初めまして、若き悠里さん。オレはランボです」

リボーン「なるほど。十年バズーカか」

悠里「ボヴィーノファミリーに伝わる幻のバズーカ。撃たれた者は、五分間だけ十年後と入れ替わることが出来る」

リボーン「詳しいな」

悠里「別に」

ビアンキ「ボンゴレめ。これで決める……！！ロメオ…」

リボーン「そういえば、アホ牛の十年後はビアンキの元彼にそっくりだな。ホレ（ピラッ）」

悠里「どれどれ……

合唱」

ビアンキ「あなたの料理なら効くのね。弟子入りさせてくれない？」

悠里「却下だ。手伝うのは今日限りって言ったよね」

ビアンキ「それじゃあせめて、今日のレシピだけでも」

悠里「残念だけど、あのケーキにレシピは存在しない。でも、材料を分けてあげることは出来る」

ビアンキ「そうね。それでいいわ」

悠里「明日あたりにでも渡しに行くよ。どこに住んでるの？」

ビアンキ「沢田綱吉の家よ」

ピンポーン

ツナ「はい。……悠里!?」

悠里「毒サソリに用があってきた。お前に用はない」

リボーン「何しにきた（チャキッ）」

悠里「毒サソリに用があってきたと言ったはずだ」

リボーン「昨日、ツナに何を食わせた?」

悠里「ケーキ」

リボーン「嘘をつくな」

悠里「僕は一切嘘はついていない」

ビアンキ「騒がしいわね。ああ、悠里。来てくれたのね」

悠里「毒サソリ、リボーンが五月蝿いんだが何とかならない？」

ビアンキ「迷惑だったらゴメンナサイ」

悠里「とりあえずホレ、材料だよ」

ビアンキ「ありがとう。これで今考えているポイズンクッキング？が完成するわ」

悠里「ま、がんばってな」

ポイズンクッキング&十年バズーカ（後書き）

姫「パンパカパ～ン、姫獄Sのコーナー来ました！！！」

獄寺夫人「やっほーっ」

どSちゃん「落ち着きなさい」

姫「今回は第一回なんでゲストが来ちゃってるよ☆」

獄寺夫人「それではどうぞ。五月み…」

どSちゃん「今作品の主人公、五月美鈴さんです」

獄寺夫人「いつになったらこの酷い扱いを訂正してもらえるのかな？」

姫「一生ムリだね」

美鈴「やっほー☆元気にしてるーっ？と・く・にどSちゃん！」

どSちゃん「はい、おかげ様で元気です」

姫「それにしても、ツナに何を食べさせたの？」

美鈴「んとね……ピーとかピーとかピーとか…」

姫「す、ストーップ！！聞いた私が悪かった！！黒いよ君！！」

美鈴「？？？？？？？」

どSちゃん「アハハ・・・（苦笑）」

獄寺夫人「何で今回はこんなに獄寺の出番が少ないの？？」

全「黙りなさい獄寺夫人」

獄寺夫人「（ガ――――――――ン――――――）」

美鈴「今度よかったら作り方教えようか？」

和「頼む」

どSちゃん「コラッ出て来るな和。ネタバレは自重しなさい」

獄寺夫人「でも、何でビアンキには教えなかったの？」

美鈴「いずれ敵になるような人とは馴れ合わない」

姫「……」

全「・・・・・・・・・」

美鈴「ま、ツナには死んでもらったほうがボスが十代目になれるからいいんだけどね（黒笑）」

姫「え…えっと、そろそろお時間なので（苦笑）」

全「じゃあね～」

美鈴「ひゃっほ～☆」

どSちゃん「お前は黙っとけ」

はひぃっ！　天然さん登場です！（前書き）

※美鈴ｓｉｄｅ

はひぃっ！　天然さん登場です！

悠里「ふぁ～」

本日何度目か分からないあくび。

獄寺「お前大丈夫か？」

悠里「大丈夫だと思ったらほっといて、大丈夫だと思わなかったら寝るトコ頂戴」

山本「ビミョーにキャラ変わってるぞ」

悠里「眠いんだから仕方ないでしょ」

山本「寝不足になるくらい何やってんだ？」

何って、この前ツナに食べさせたケーキ、仕組みがどうなってんのとか、毒サソリに頼まれてポイズンクッキングのレシピ考えたりとか。

山本「不眠は女子の天敵だぜ」

悠里「君に言われなくても分かってるよ。でも科学者として分からないことはそのままにはしておけない」

山／獄「科学者！？」

間違ってないよね。錬金術師って科学者だよね。

それより私はなんで獄寺と登校しているのかな?獄寺とは犬猿の仲のはずだよね?何でだろうね。

獄寺「そりゃあ、この前毒から助けてくれたり、薬くれたりしたから……」

悠里「あ、そう」

?『絶対にハルは認めません!』

ツナ『そんな事言われたって……』

聞き覚えのある声が聞こえますー。

山本「お、アレ、ツナじゃねぇか?」

獄寺「本当だ。10代目ーっ!」

?『ハルと勝負してください!ツナさんが勝ったらリボーンちゃんは諦めます』

ツナ『んなーっ!』

悠里「勝負申し込まれてるね」

獄寺「あんにゃろー（ダッ）」

山本「おい獄寺！（ダッ）」

悠里「放置ですか！？」

女子を一人置いていくなんて酷いじゃねーか！

悠里「にしても、あの女子誰？」

？「あいつは三浦ハル。俺に惚れた女だぞ」

悠里「Ｈｉ　Ｒｅｂｏｒｎ．」

リボーン「何で英語なんだ？」

悠里「さあな。で、何でツナはその三浦ハルって人に勝負を申し込まれてるの？」

リボーン「あいつはオレがマフィアってことが許せないらしーんだ」

悠里「ふうん。関係ないし、先に学校に行くか」

獄寺『１０代目！伏せてください！』

ツナ『へ？』

獄寺『果てろ！』

ドガァン

ハル『はひいっ！！』

悠里「あーあ」

リボーン「オレの出番だな（タッ）」

悠里「………仕方ない。見に行くか」

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・
〜・〜・

ハル「…………」

獄寺「反省したか？」

ハル「………プッ」

ツナ「！！？」

獄寺「（イラッ）」

ハル「死ぬ気でハルを助けるー！オレにつかまれーっ！」

悠里「ハァ？」

ハル「そんな古臭い台詞、映画の中だけかと思いました。ありがとうございます、リボーンちゃんの代わりにハルを助けてくれた、１０・代・目（ハート）」

ツナ「んなぁっ！？」

ハル「ハルはツナさんに惚れた模様です！ギュウってして欲しいです」

獄寺「ふざけたこと言ってんじゃねえぞ！」

山本「まあいーじゃねーか。ツナもこの子も無事だったんだし」

悠里「結局コイツなんなんだし」

はひぃっ！　天然さん登場です！（後書き）

姫「本編短っ！？」

どSちゃん「仕方ないよ。さて今回のゲストは何故か最近出番の少ない鐘ことベルフェゴールさんでーす」

ベル「なんかムカつくけど事実だし……」

姫「ベルーーーーっ（ピョン）」

ベル「ゲッ（ヒョイッ）」

姫「（グシャ）へぶっ」

獄寺夫人「いい気味♪」

ベル「いきなり飛びついてくんなっての」

どSちゃん「出てきてもらって早速なのですが、作者に代わってお知らせをお願いします」

ベル「メンド。ま、いーや。
　えーっと、なんか姫と絡んで欲しいキャラクターが居ればリクエストを待ってるぜ。六道骸って奴以外でな」

獄寺夫人「でわ今日はこの辺で」

ベル「もうかよ！？」

どSちゃん「さよなら～」

姫「ベルーっ（ピョン）」

ベル「（ヒョイ）」

姫「（グシャ）」

どSちゃん「アンタは学習しなさい」

問7

夏休み。
美鈴は珍しく沢田綱吉の監視をできずにいた。原因は、その学力の差。落ちこぼれ組みの沢田綱吉と山本武は学校にて補習、できる組の美鈴と獄寺隼人は公園でおしゃべりをしていた。

悠里「あぢー。何でこんな暑い日に外にいなきゃなんないのー」

獄寺「お前が提案したんだろうが」

すでに悠里のキャラ崩壊に慣れた獄寺。

悠里「あれーそうだっけ？」

～十分前～

獄寺「くそー。十代目のおそばにいられないのが悔しいぜ（ボソ）」

悠里「獄寺、学校の前をふらついてどうかしたの？」

獄寺「十代目が心配なんだよ」

悠里「ふぅん。ま、ここに居るのもなんだし、公園にでも行かない？」

獄寺「ん…まあ、そうだな」

だ、今に至ると。

悠里「そういえばそうだったね」

獄寺「テメェ（イラッ）とにかくここにいちゃ、そのうち日射病か熱中症になっちまうから、どっか建物ん中入んねーと」

悠里「それなら、獄寺の家に上がらせてもらおうかな」

獄寺「はあ!?」

悠里「だって君、アパートで一人暮らしなんでしょ?気になるしね」

獄寺「ちっ。しゃーねーな」

～獄寺宅～

獄寺「ここがオレん家だ」

悠里「お邪魔します」

獄寺「別に、たいしたモンはねえよ」

そしてその後、ベルから昼飯の電話が来るまで獄寺の家に居座った美鈴だった。

美鈴「端折ったなコノヤロ」

だって本題はこれからだから。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

～・～・

ピロロロ　ピロロロ

美鈴「はい、何？」

ツナ『ねぇ、分からない問題があるんだけど』

美鈴「僕なら解けるかもって？」

ツナ『う、うん。お願いできる？』

美鈴「仕方ないね。１０秒待ってな」

～１０秒後～

悠里「で、どれ？」

ツナ「この問題なんだけど」

悠里「……答えは４。簡単な問題だよ、ネコじゃらしの公式を使えばね」

全（リ以外）「ネコじゃらしの公式？？」

悠里「詳しくはリボーンが教えてくれると思うよ。ついでに聞くとこの問題、何時間かけた？」

ツナ「えっと……三時間？」

ハル「ゴメンナサイ……」

悠里「（なるほど。コイツのせいか）
　用が終わったなら僕は帰るよ」

獄寺「ちょっと待て。何でオレですら解けなかった問題がお前には解けるんだ？」

悠里「解けちゃおかしいのかい？科学は不可能を可能にするためにある。数式も然り」

ツナ「か、科学？」

山本「そういえば前に科学者とかって言ってたっけな」

ツナ「マジで！？」

悠里「じゃあね。せいぜい夏休みを楽しむことだよ」

問7（後書き）

姫「また随分テキトーな」

獄寺夫人「つか作者、こっちとかばっかりじゃなくってうち等のもちゃんと更新してる？」

作者「してますよ。今日だって一話」

どSちゃん「せめて、一日に一話のペースでお願いします。新作なんてもう九話目だそうですね」

作者「ばれてた？」

全「勿論」

作者「がんばります」

瀬名「こっちも忘れんなよー」

極限！！　ボクシング部主将笹川了平だーっ！！（前書き）

熱い！！サブタイトルの時点で熱すぎるよ！！

極限！！　ボクシング部主将笹川了平だーっ！！

獄寺ｓｉｄｅ

今日から二学期。
また学校で常に十代目をそばでお守りできる日々が来る。

悠里「何を一人でブツブツ言ってるの？」

鐘「うしし、暑さで頭やられたカンジ？」

獄寺「なっ。つーか、何でお前らと一緒に登校してんだよ！」

悠里「家のある方向が同じなんだから仕方がないだろ？（こっちだって嫌なんだ）」

おい、フツーに（　）中、聞こえてんぞ。

悠里「二学期か。行事が沢山ある季節だね」

獄寺「大変っちゃ大変な時期だな」

鐘「ま、その分振替休日とかあっていいけどなっ」

悠里「ある意味、日本っていいところだね」

鐘「イタリア（むこう）でもイベントとかあったじゃん」

悠里「確かにクリスマスとかハロウィンとかはあるけど、日本には

花見とかひな祭りとかこどもの日とか、独自の文化があるだろ？」

獄寺「オレは特に興味はねーけどな」

悠里「ＫＹ」

獄寺「んだとテメェ（サッ」↑ボム

悠里「雲雀さーん危険人物！」

獄寺「ああ？誰だソイツ」

鐘「話通じねーの」

んだコイツら。ヒバリって誰だ？

～教室～

山本「おっす。悠里、獄寺」

悠里「おはよう山本」

獄寺「…」

やっぱコイツは好けねーな。

ガラッ

獄寺「あっ！十代目おはようございます」

ツナ「獄寺君…おはよう」

十代目は珍しく、笹川と一緒に入ってきた。

悠里「京子どうかしたの？随分と嬉しそうだね」

京子「うん、今朝って言うかさっき、久しぶりにお兄ちゃんのうれしそうな様子見たの。そしたら私も嬉しくなっちゃった」

悠里「京子のお兄さんって確かボクシング部主将だよね。何があったの？」

京子「お兄ちゃんがツナ君のこと入部させたいんだって」

悠里「は…？マジで？」

獄寺「なに！？笹川、本当か！？」

京子「うん」

やっと他の奴らにも十代目のすごさが分かってきたらしい。

山本「ツナすげーのな」

ツナ「え…いや、その……う、うん」

キーンコーンカーンコーン

先生「ＨＲ始めるぞー」

チッ先公がきやがったか。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

～・～・～・～・

side　out

その後、ボクシング部の部室にてツナの了平のボクシング対決が行われた。

リボーンが了平・ツナどちらにも死ぬ気弾を撃ち、了平が常時死ぬ気男だと判明。そしてツナは死ぬ気で入部を断り、ツナの勝利。入部をすることはなくなったが、逆に気に入られてしまったツナ。

さらにリボーンは了平を逆スカウトする始末。

そんな様子を美鈴とベルは詰まらなそうにと言うか、興味がないというか、冷たい目で観戦していた。

すごく締りが悪くて中身がテキトーだけど今回の話はここまで。

極限！！　ボクシング部主将笹川了平だーっ！！（後書き）

姫「おい作者何があった」

作者「さっさと日常編を終わらせたい、ただそれだけ」

どSちゃん「テキトーですね」

獄寺夫人「だったら出す人出してさっさといけば？」

作者「でも前に言ったお知らせ、誰もリクエストしてくれない（泣）」

全「ご愁傷サマ」

最凶の風紀委員長、現る！

～屋上～

ツナ「もー秋か～～～。夏休みもあっという間だし、なんかさみしーなー」

山本「補習ばっかだったしな」

獄寺「アホ牛がブドウブドウって、最近ウザくねースか？」

悠里「そもそも、夏休みの話が一話しか書かれてないけど」

ツ／山／獄「確かに」

？「そんなときには栗でも食べろ」

ヒュンヒュン

サクサク

ツナ「いだ！いだだ！！リボーンだな！（くるっ）い゛っ」

リボーン「ちゃおっス」

今日のリボーンは栗のコスプレ。

チクチクチクチク

ツナ「痛い痛い刺さってる――――――！！（ガーン）」

リボーン「これは秋の隠密ようカモフラージュスーツだ」

ツナ「１００人が１００人振り返るぞ！」

悠里「君は目立つのが隠密だと思ってるの？」

ツナ「大体、学校に出没するなって言ってんだろ！」

キュッ　↑リボーン着替え完了

リボーン「ファミリーのアジトを作るぞ」

ツナ「はあ！？」

山本「へー面白そうだな。秘密基地か」

獄寺「子供かおめーは！アジトいーじゃないスか！ファミリーにアジトは絶対必要っスよ！」

ツナ「ちょっまっ」

悠里「（アジトといえば、ヴァリアーのアジト今どーなってるかな？）」

リボーン「決まりだな。早速応接室に行くぞ」

全「！？」

悠里「確か応接室って…」

リボーン「応接室は殆ど使われてねーんだ」

悠里「いや、だから…」

リボーン「家具も見晴らしもいいし、立地条件は最高だぞ」

悠里「（人の話微塵も聞いちゃいない。ま、私には関係のないことだけど）」

山本「よし、行くか」

悠里「それじゃあ、僕はこの辺で」

山本「ん？なんでだ？」

悠里「僕はファミリーじゃないからね」

リボーン「何言ってんだ？お前もファミリーだぞ」

悠里「承諾した覚えはないんだけど。それにこれから用事が…」

リボーン「あっても行かせね（ダッ）ーぞって逃げたな」

獄寺「いいんじゃないスか？あいつって非協力的ですし」

ツナ「悠里って結局なんなんだろ？」

リボーン「（やっぱり調べる必要がありそうだな）」

～応接室～

ガチャ

山本「へ～～～こんないい部屋があるとはねー。
　　！」

雲雀「君、誰？」

山本「（コイツは…風紀委員長でありながら不良の頂点に君臨する、ヒバリこと雲雀恭弥……！！）」

作者「雲雀さんの説明は、中学生生活を始めるに当たって、悠里君が説明済みのはず」

山本「そうなのか？」

獄寺「なんだあいつ？」

山本「獄寺、待て…」

雲雀「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？ま、どちらにせよただでは帰さないけど」

獄寺「！！んだとてめー」

雲雀「消せ（ビュッ）」

獄寺「なんだこいつ！！（タバコを切りやがった！？）」

山本「聞いたことがある…。ヒバリは気にいらねー奴がいると、相手が誰であろうと、仕込みトンファーでめった打ちにするって）」

雲雀「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ。視界に入ると咬み殺したくなる」

獄寺「（（ゾクッ）こいつ…）」

山本「（やっかいなのにつかまったぞ…（汗））」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

？「面白い物が見れそうだね。じっくりと楽しませてもらおうか」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ツナ「へー初めて入るよ、応接室なんて（するっ）」

山本「待てツナ！！」

ツナ「え？」

雲雀「一匹（ガッ）」

ドザァッ

獄寺「のやろぉ！！ぶっ殺す！！」

フッ

雲雀「二匹（ガッ）」

山本「てめえ……！！！」

チャキ…ン

ビュビュビュビュ

雲雀「怪我でもしたのかい？右手をかばってるね」

山本「！」

雲雀「当たり（ドッ）」

ドザッ

雲雀「三匹」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

？「だ～れも敵いやしない。さすが並盛最強と謳われた男」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ツナ「あーいつつつ……！ごっ…獄寺君！！山本！！なっなんで！！」

雲雀「起きないよ。二人にはそういう攻撃をしたからね」

ツナ「え゛っ」

~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・

？「つまんねー。もうチョイ面白くなんないのかな～？
　このままツナが死ぬ気になったとしても、ただ雲雀さんが怒るだけ。
　そしたらどうせリボーンが何かするんだろうし。ハァ～いつもいつもワンパターンで先が読めちゃうんだもんな～」

ドガアァン

？「予想通りの結末。
　それじゃ、はじめっか（ヒュンッ）」

~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・

雲雀ｓｉｄｅ

今、風紀委員総出で応接室の片付けに追われていた。
原因はさっきの赤ん坊。僕の攻撃を止めた上に、爆弾を使うなんてね。興味が沸いたよ。

雲雀「あの赤ん坊、また会いたいな」

草壁「委員長、もうじき片付けが終了します」

雲雀「そう」

その時、突然の殺気を感じた。トンファーで『それ』を防ぐ。

ガキィィンッ

『それ』は壁に突き刺さった。

草壁「委員長……これは…」

雲雀「手裏剣…？」

草壁「手紙が付いています」

いつの時代だ。

雲雀「貸して（パシッ）“屋上に来い”？ふーん、この僕に指図するんだ」

草壁「どうなされますか？」

そんなの決まっているさ。

雲雀「いくよ。心当たりは一人しかいないからね。咬み殺してあげないと」

～屋上～

扉を開けると既に人が居た。あの手紙の主だろうね。

向こうを向いていて顔は分からない。学ランを肩にかけ、黒い髪をたなびかせて…ん？僕とキャラかぶってないかい？

雲雀「君だよね。ふざけた手紙をよこしたの」

声をかけると、ソイツがこっちを向いた。

雲雀「やっぱり君だね。

五月悠里」

悠里「ご名答。どうして僕だと分かったのかな?」

雲雀「毎朝君と会って、君が僕に怯えたことが一度もなかった。それどころか僕に向かって殺気を出していた」

悠里「あ~やっぱり殺気は抑えられなかったか。怯える演技は案外うまく言ってたと思ってたんだけどね」

まったくだよ。

雲雀「それで?僕に何のようだい?その学ランは僕のだよね」

悠里「用件はただ一つ。君に手合わせを願いたいのさ。ついでに言っとくと、確かにこの学ランは君のだよ。隙を見てもらっておいた」

雲雀「僕の物は返してもらうよ」

悠里「残念だけど僕はリボーンのようには甘くない（ヒュッ）」

雲雀「！（キィン）
君は僕に咬み殺されたいらしいね。手合わせなら大歓迎さ」

悠里「交渉成立。Ｉｔ、ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ♪」↑久々キター。Ｖ。

ヒュン　キイィン
ヒュン　キイィン

彼の攻撃はスピードも遅く軌道が読みやすい。

雲雀「この程度かい？」

悠里「まさか（サッ）」

雲雀「！」

消えた！？

悠里「こっちだよ（ヒュンッ）」

キイィン

後ろ…いつの間に。

悠里「よくかわした、と言いたいところだけど甘いね」

スパッ

！！？

左足を手裏剣が切った。

雲雀「君すごいね。僕に傷をつけられる人なんてそういない」

悠里「そりゃありがたいね（ヒュン）」

雲雀「もうその手には乗らないよ」

悠里「本当に？」

スパッ

雲雀「…！」

完全に避けたはず！

……こうなれば。

ヒュッ

悠里「トンファー投げるとかどんだけ（呆）」

サアッ

悠里「しまっ…！」

投げたトンファーが五月悠里の頭を掠めた。が、その瞬間、黒い髪が落ち、その下から栗色の長い髪が現れた。

悠里「ちっ」

雲雀「カツラだったんだね」

悠里「そうだよ」

雲雀「何のために？」

悠里「素性を隠す以外に、変装の理由ってあるの？僕…いや、この際いっか。私は仕事のために並盛にいる」

仕事？素性を隠してまでする仕事ってあるのか？それ以前に、コイツは女だったのか。

雲雀「仕事って？」

悠里「勝てたら教えてあげてもいい」

雲雀「咬み殺されたいの？」

悠里「やれるモンならね」

～二時間後～

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

雲雀「はあ…はあ…」

悠里「もう息上がってんの？」

雲雀「いいや」

悠里「肩で息してるじゃん。
　まあいいや。こっちも疲れてきたし、そろそろお開きにしてあげてもね」

雲雀「何を言ってるの？」

悠里「じゃあね」

美鈴が何かを投げる。それは雲雀の口の中に入り、雲雀はゆっくりと倒れた。

悠里「さようなら。最強の風紀委員長さん♪」

最凶の風紀委員長、現る！（後書き）

姫「チャッチャラ～ン」

獄寺夫人「どうしたの？」

姫「先日のアンケートの結果を発表するぜよ」

どSちゃん「何で土佐弁？」

姫「と言うことで、美鈴ちゃんと絡むのはヒバリサンにけって～い！」

どSちゃん「因みに恋愛系で絡むのはベルだそうです」

獄寺夫人「それと何故骸は除外されたのかについて説明します。それは…」

姫「それは骸のことは決定事項だからだよ～」

獄寺夫人「人の台詞を取るな」

どSちゃん「でわ今日はこの辺で」

獄寺夫人「だから私の扱い酷いって！」

結局……（前書き）

前回の次の日♪

結局……

ツナ「（あ～も～どーしよー。ヒバリさんに目ぇ付けられたら終わりだよー！）」

ポン

ツナ「！！！」

悠里「落ち込んだ顔してるけど、何かあった？」

山本「オッス」

獄寺「おはようございます十代目」

ツナ「あれ？三人一緒に来たの？」

山本「まーな」

ツナ「何で？」

悠／獄「知るか！」

悠里「そういえば、昨日の応接室どうだった？」

ツナ「えっと…使えなかった」

山本「あはは…」

獄寺「ちっ」

悠里「やっぱりね」

ツナ「え？」

悠里「昨日の委員長会議で、応接室は風紀委員が使うことになったんだよ」

ツナ「なっ！？」

獄寺「何でそのこと言わなかった！」

悠里「リボーンに邪魔されたからさ。人の話を聞かないのが悪いんだから」

キーンコーンカーンコーン

悠里「……一時間目ってなんだっけ？」

ツナ「確か社会だったはずだけど」

悠里「……（ドサッ）」

ツナ「ちょっ悠里！？」

山本「どーしたんだ？」

悠里「社会なんて消えればいい、この世から存在を消せ。消えろ（ブツブツ）」

獄寺「社会にすげー恨み持ってんな」

ツナ「そういえば悠里って、唯一社会ができないんだよね」

山本「オレが教えてやろっか？」

悠里「五月蝿い、赤点補習組」

山本「オレがなんか言うといっつもそれだな（笑）」

ツナ「そこ笑うとこ！？」

ガラガラ

先生「授業始めるぞー」

悠里「授業なんて腐っちまえ（ボソ）」

先生「ボソボソ言っている五月は指すぞー」

悠里「Ｏｈ　ｍｙ　ｇｏｄ！」

ツナ「何で英語！？」

悠里「あ～指されていいからダレル」

先生「じゃ、指すな」

悠里「ハァ～」

ガラガラ

全（悠以外）「？…！」

雲雀「五月悠里、いる？」

悠里「ん？恭弥？どうしたのこんなところまで来て」

全（雲含む）「恭弥！？」

ツナ「ヒ…ヒバリさん、どうしたんですか？」

雲雀「五月悠里、今すぐ昨日の続き」

悠里「却下。アレは僕の勝ちで終わったでしょ？」

雲雀「何言ってるの？君に勝ちなんて与えられないよ」

悠里「ちっ。それなら逃げるまで（ダッ）」

？「待ちなさいよ」

女子「アンタ雲雀さんと何したわけ？勝ちとかって何？」

悠里「君たちには関係ない。そこをどけ」

女子「何よ偉い子ぶって。そんなに頭いいのが偉いの？」

悠里「君たちみたいな下等生物と話してる暇はない。もう一度言う、

さっさとそこをどけ」

女子「下等生物ですって!?」

悠里「（どく気はないらしいな）
　　しゃーねえ」

スタスタ

ツナ「あれ?悠里、そっちは窓……」

ピョン

ツナ「えええええ～～～～～!!!!」

悠里「恭弥、僕と戦いたければここまで下りて来る事だ。僕に勝てたら（ゴソゴソ）
　　この学ランを返してあげてもいい」

雲雀「返せ（ピョン）」

悠里「そこの下等生物たちも悔しかったらここに来ることだな。最も、来た瞬間にその命はなくなるだろうけど」

山本「……ツナ」

ツナ「何?」

山本「悠里ってあんなキャラだったっけ？」

ツナ「ゴメン山本。オレにも分からない」

雲雀「さあ始めるよ。僕との咬み殺し合い」

悠里「やれるものならね」

ダッ

ガキィィン

ツナ「なんかヒバリさん悠里のことを殺しにかかってるように見えるんだけど（汗）」

山本「やっぱりか？」

獄寺「あいつら何があったんだ？勝つとかなんとかって」

？「あの二人は昨日戦ってたんだぞ」

ツナ「リボーン！学校に来るなって！」

獄寺「悠里とヒバリが戦ってたってどういうことですか？」

リボーン「そのまんまだぞ。おめーらが応接室を後にした後、あの二人は屋上で戦ってたんだ」

ツナ「ええー！！じゃ、じゃあ話の流れからして…」

山本「そーゆーことになるな…」

獄寺「あ、ありえねえ…」

雲雀「ちょこまかと逃げないでくれる？」

悠里「恭弥が殺そうとするからでしょ？普通の反応」

ビュッ

悠里「昨日も思ったけど、トンファーは投げる物じゃない」

雲雀「どう使おうと僕の勝手さ」

悠里「メンドくせ（ボソ）
　！いーモンがあった」

ツナ「？アレは？」

獄寺「ケーキ？」

悠里「昨日と同じくさっさと終わらせてもらうよ（ヒュッ）」

雲雀「（パクッ）」

ツナ「ふつーに食べてるけど……」

雲雀「うっ……（どさっ）」

悠里「悪いけどしばらく寝ていてもらう」

山本「何が起きたんだ？」

ツナ「さ、さあ（汗）」

悠里「草壁ーっ、恭弥のこと後は頼んだ！」

女子「ちょっと！雲雀さんに何したの！？」

悠里「五月蝿いよ、いつまで群れてるつもり？さっさとどきな」

女子「っっ！」

次の日。

ガラッ

雲雀「五月悠里、話がある」

悠里「咬み殺し合いなら断るよ」

スタスタ

雲雀「君に風紀委員に入ってもらう。生意気である罰だ」

悠里「それで？僕に何のメリットがあるって言うの？」

雲雀「襲うのをやめ、学ランをあげる」

悠里「それでも断った場合は？」

雲雀「そうだね。
君の正体を学校中にばらそうかな（コソ）」

悠里「！！！分かったよ！はいればいいんだろ！」

雲雀「いい子だね」

悠里「くっそ～～～～っ」

結局……（後書き）

姫「おい、ベル出せやアホ作者」

獄寺夫人「もっと獄寺の出番増やせ～」

どSちゃん「あんたらはバカですか？」

今日は何の日？

美鈴ｓｉｄｅ

恭弥の一件（私が風紀委員に入ることになった件）から数日が過ぎた。
最近は妙なことが起こっています。何が妙かって、ベルが見当たらない。登校も下校も一緒じゃないし、家にも帰ってもいない。まあ、ベルはモテルし人気者だから友達と遊んだりでいないのは分かる。でも連絡ぐらいほしい。
そして、特に妙なことといえば。それは昨日のこと。一ヶ月毎の小遣い日で、ベルの口座に小遣いを振り込もうと思ったら、お金が減っていた。ベルのお金だからいくら使おうと私は何も言わない。でも、それだけじゃ全く妙じゃない。妙なのは、昨日と一昨日の二日で、四回も引き落としをしていること。一体何に使っているのやら…（汗）
そして今日も朝からベルの姿が無い。朝ごはんは作ってあった。あれ？ベルってご飯作れたっけ？
違う…昨日の夕食の残りだ。

～学校～

悠里「ツナ、べ…鐘見てない？」

ツナ「（べ？）見てないよ。どーしたの？」

悠里「ここ二、三日見てないからさ」

ツナ「え？それって行方不明ってこと！？」

悠里「いや、家に帰ってきてはいるんだ。けど、僕が起きている間は家にいない」

ツナ「そうなの？そういえば最近リボーンのことも見てないよな」

悠里「おいおい、かてきょー大丈夫か？」

ツナ「あはは…」

山本「鐘と小僧なら昨日見たぜ」

悠／ツ「どこで？」

山本「商店街。二人で一緒にいたぜ」

ベルがあいつと一緒にいただって？何考えてるんだろう。

悠里「まったく」

獄寺「鐘の奴がリボーンさんと一緒にいるなんて珍しいな」

ツナ「そもそも、リボーンと鐘ってお互いあんまり知らないはずだよね」

全「確かに」

見つけたらリボーン共々事情聴取だな。

～帰り道～

結局学校ではベルともリボーンとも会わなかった。それどころか、最終的にはツナたちまでもが怪しい行動をとり始めた。

美鈴「はあ～何やってんだろアタシ……あ」

気づいたら家の前。

ガチャ

あれ？家が開いてる。ベル、帰ってきてるんだ。

美鈴「ただいま」

そう言いながらリビングに入ったとたん。。。

パアン！

クラッカーの音が鳴り響いた。

今日は何の日？（後書き）

姫「これまた微妙なところで切ったね」

獄寺夫人「獄寺の台詞がたったの一回……」

姫／S「（コクリ）」

ドガッ×2

獄寺夫人「いだあっ」

ボンゴリアン・バースデイ・パーティー

パアァン

悠里「！！」

？「誕生日おめでとう！」

悠里「は？」

そこにいたのは、ベル・リボーン・沢田綱吉・山本武・獄寺隼人・毒サソリ・笹川京子・三浦ハル。

悠里「何してるの？どうしてみんな揃ってるの」

鐘「ししっ今日が何の日だか忘れた？」

悠里「今日？今日今日きょうきょう…あ！
Ｔｏｄａｙ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ.」

鐘「当たり」

ツナ「何で悠里はいちいち英語になるの？」

悠里「Ｉ　ｄｏｎ、ｔ　ｋｎｏｗ.」

山本「ははっいーじゃねーか」

悠里「それより二つ目の質問に答えて欲しい」

リボーン「お前、これで13歳だろ？ボンゴレファミリーでは、奇数歳の誕生日にはボンゴリアン・バースデー・バーティーを行うんだぞ。知らなかったのか？」

悠／鐘「全く知らん」

ツナ「ボンゴリアン・バースデー・パーティー？」

獄寺「やはり我々に用意しろと言っていた物と関係があるんですね」

悠里「用意した物？」

リボーン「ああ。こいつらにはお前を楽しませるためにそれぞれ用意してもらったぞ」

ハル「はひっそーです！ハルは京子ちゃんとこれを買ってきたんです！」

京子「はい、ラ・ナミモリーヌのショコラケーキ」

悠里「いいの！？マジで！？いよっしゃーっ」

全（鐘以外）「何があった！！？」

ハル「なんだかよくわかりませんが、喜んでもらえたなら嬉しいです」

悠里「あ～やっぱり女の子って幸せだよね～」

ハル「やっぱり何かが壊れてます……」

リボーン「悠里、この二人に点を入れろ」

悠里「点？」

リボーン「ボンゴリアン・バースデー・パーティーでは、誕生日の奴を楽しませ、そいつが点数を決めるんだ。一位の奴には景品、ビリの奴には死が待っている」

ツナ「んな――――――っ！？ふざけんなよ」

悠里「ふうん。じゃあ、９０点」

京／ハ「ありがとう」

山本「オレからはこれだぜ」

そういって山本武が出した大きな箱。

パカッ

そこに入っていたのは…

悠里「お寿司……（ヤバイヤバスギマスヨ）
……サーモンある？」

山本「ああ。ホラここに」

パクッ

悠里「も～ヤバいっすよこれ。サーモンおいしい」

鐘「ひ…悠里、ウニもらっていい？」

悠里「どーぞぉ。おっマグロ発見」

パクッ

悠里「にゃ～今すぐ死んでもいいかも」

獄寺「（“にゃ”！？）」

悠里「山本は９５点な」

山本「サンキュー。親父も喜ぶぜ」

こうして一人ずつ出し物が終わり……

一位山本

二位ツナ獄

三位京ハル

四位毒サソリ

五位ランボ

リボーン「最後に鐘の番だぞ」

悠里「何かくれんの？」↑期待感１００％

鐘「もうあげてるし」

悠里「は？」

鐘「オレの出し物は、この誕生日会自体だから。喜んでもらえるように頑張ったんだぜ」

悠里「ふぇっ／／／／／」

獄寺「キザなヤローだぜ」

ハル「キザだけどかっこいいです」

悠里「…うぐ…ひっく（ポロポロ）」

鐘「ゲッ泣いてるし」

リボーン「女を泣かせたな」

ビアンキ「女の子はハートが脆いのよ」

鐘「なんか責められてね？」

悠里「ありがどー（ギュムッ）」

鐘「っっおい／／／／」

獄寺「なっ／／／／／」

ツナ「ええー！／／／／／」

山本「おいおい／／／／／」

リボーン「何お前らまで赤くなってるんだ？」

ビアンキ「子供ね」

京子「悠里君って大胆だね」↑まずは“君”を取る事から始めよう

ハル「ハルもツナさんにギューってしたいです」

ツナ「しなくていいから！！」

悠里「ふぇえええん」

リボーン「感動してるとこ悪いが点数どーすんだ？」

悠里「グス…そうだった。１００点だよ！！」

リボーン「（ニッ）決まりだな。結果は一位が鐘でビリがアホ牛だ」

京子「ランボ君なら飛んでいっちゃったよ」

実は登場して一秒で、私と獄寺の手によってランボはどこかに飛ん

でいっていた。

ツナ「そういえばそんなことがあったっけ」

リボーン「あとで絞めとくか（ぼそ）」

今不吉な台詞が聞こえましたよ。感動泣きしているところに不吉な台詞が入ってきたよ。こんの、ＫＹ！

獄寺「それでは一位の景品ってなんですか？」

リボーン「鐘。お前の願いを一つだけ聞いてやる」

鐘「願い？」

悠里「王子様に願いなんてあるのかな？（ぼそ）」

鐘「うっせ。あるし（コソ）」

リボーン「早くしろ」

鐘「コイツとずっと一緒に暮らせればそれでいいし」

悠里「は？／／／」

リボーン「それだけか？」

鐘「ああ」

ベルの……ベルの……

悠里「バカアアアァァァァ！！！！」

50話達成記念　美鈴の一日

ピピピピピピピピピピ
朝四時に鳴る目覚まし時計。私はそれで目を覚ます。風紀委員として働くために。
寝ぼけ眼で部屋を見渡す。
薄暗い部屋に、かすかに朝日が差し込む。その光の先にあるものを見て、眠気は一気に吹き飛んだ。
血まみれの少女。
部屋の隅から私を睨むように立っていた。
けど気にしない。一秒でも学校に遅刻したら、恭弥が許さない。
急いで着替えてベルの分の朝ごはんを作り、家を飛び出した。
少し血まみれの少女が気になったけど、仕事に身が入らないと色々と困るから、記憶から消し去ることにした。

学校に着いたら、まずは応接室に行く。
応接室に置かれた風紀委員活動報告ノート、通称“風紀委員ノート”に私の仕事は書いてある。
今日の仕事は、昼休みに書類の整理をする、ただそれだけ。
ふと、視線が応接室の隅へと動いた。心臓が止まるかと思った。
――――血まみれの少女。確かにそこにいた。
気味が悪い。さっさと人の多いところに移動しないと。

教室に入ると、女子からは殺意のこもった、男子からはいやらしい視線が送られてくる。風紀委員に入ってからの日常茶飯事。慣れて

しまった。
気分が悪い。先生が来るまでの間、しばらく机に伏した。数分毎に、沢田綱吉や獄寺隼人たちからの挨拶が聞こえたが、返事をする気力もない。
それから更に数分後、先生が入ってくる音がした。顔を上げると、――――またいた。
何故だろう、知らないはずなのに、見覚えがある。
授業の間も、少女とその疑問で頭がいっぱいになり、全く集中ができなかった。

昼休みに応接室へ行く。既に恭弥がいた。
目の前に積まれる書類の山。これを全て片付けなければ、午後の授業に出ることはできない。
その条件が凶と出るか、吉と出るか。
――――どうやら凶のほうだ。またもや『あいつ』は現れた。
どこにでも来るならば、周りにいる人間は多いほうがいい。と言うより、いっそのことはベルのクラスに逃げ込みたい気分だ。
そして私は、恭弥に驚かれながらも、いつもの十倍のスピードで仕事を終わらせ、教室へと足を運んだ。

教室へ戻ると、沢田綱吉が心配そうに駆け寄ってきた。そんな彼から私は逃げた。
沢田綱吉の隣に『あいつ』はいた。逃げたようで逃げていない私。
足がすくんで動けない。吐き気がこみ上げてくる。声すら出すことはできない。
イヤ・・・来ないで・・・
“本当に私が分からないのか”

突然頭に響く『あいつ』の声。
“私は忘れはしない。この怨み、例え地獄に堕ちたとしても消えはしない”
目の前が暗くなる。『あいつ』の声は、まるで私の中に眠る何かを引きずり出そうとしているようだった。
それでも私は知らない。何か大切なものを忘れてしまっているのか。
それすら分からない。
暗闇の中、『あいつ』の声は響き続けた。。。。。

気がつくと、私はベッドで寝かされていた。同時に聞こえるざわめき。
そこには、ベル・沢田綱吉・獄寺隼人・山本武・笹川京子の顔ぶれ。
会話と雰囲気で、ここが保健室のベッドだと言うことがわかった。
話によると、教室に戻った私は、沢田綱吉が駆けつけた瞬間に気を失ったらしい。
情けないな。
全員に、何があったのかと質問されて、渋々全てを話した。
話し終えると、皆が判を押したように同じの不安そうな顔をした。
そして、京子が、何かできることは無いかと積極的に言ってきた。

私は、ハッキリ言ってどうでも良かったのだが、獄寺の提案で、霊媒師を呼ぶことにした。
霊媒師はすぐに来た。手配したのは恭弥。恐るべし風紀委員長。
準備が整ったとのことで、除霊を開始した。
何か呪文のようなものをブツブツとつぶやき始める。暇だ。これでは霊よりも先に退屈で死んでしまう。
それではその退屈しのぎに寝てしまおうか。そう思ったとき、

ズキッ

突然の頭痛。そして、次々に私を襲う、体中の痛み。耐えられない。
やむを得ずにベッドに倒れこむ。
意識はあっさりと、闇の世界へ連れて行かれた。

名前を呼ばれて目を覚ます。
全員笑顔だった。ベルも沢田達も霊媒師も、そして、私も。

家に帰っても、『あいつ』が現れることはなかった。
本当に終わったんだな、とやっと実感する。
これで普通の日常に戻れ・・・・・元から普通じゃないか。でも
一件落着。いつもの五倍くらい疲れる一日だった。

５０話達成記念　美鈴の一日（後書き）

どうも。

なんだかシリアス系ですね。

こんなヤツがあと、５話くらい続くと思われます。

「こんなもの詰まらん！」

と思う方は、読まなくても大丈夫です。

この後の内容に関るかどうかはまだ未定ですので。

根性のある方や、心の広い方はどうぞ、読み進めてくださいませ。

50話達成記念パート2　ベルの一日

六時に起きる。起きても家には誰もいない。
姫は、風紀委員ってのに入ってるから五時に学校に行く。朝ごはんはしっかり用意してある。
・・・何時に起きてるんだろう？つーか何時に寝てるんだろう？
そんなことを考えながら、準備を終わらせて家を出る。

学校へ着いて一番に出くわしたのは、クラスの友達（？）。話しながら教室へと入る。次にくるのは女子たち。学校では何気モテル。だってオレ、王子だもん。
・・・・・これ言ったの姫にばれたら、怒られるな。
正直に言っちゃうと、真面目に授業を受けたことがない。王子、天才だから（と言うより、こいつ等の三つ年上だから）やんなくても関係ない。つーか、必要ねえし♪

気づくと昼休みだった。やる事もないし、姫のクラスに遊びに行こう、そう思ったとき、沢田綱吉がオレのクラスに駆け込んできた。
“悠里が倒れた！”
は？姫が倒れた？何で？
事情を聞きながら保健室に急行。保健室のベッドで姫は寝ていた。
顔面蒼白。それが一番ぴったりな言葉だろう。姫の顔は、死人のようだった。

まさか、死んでないよな?生きてるよな?生きてなかったら殺しちゃうぜ?ヴァリアーの皆のところに帰るまで、死んだらダメだかんな。

その時だった。

姫の茶色の瞳が見えた。沢田綱吉が、何があったのかを説明する。

オレは一体何があったのか尋ねた。

どうやら姫には、人に見えない奴が見えるらしい。つまりは、幽霊?

笹川が、何かできることは無いか、とやたらに積極的だが、姫はどうでも良いと言った。

よくねえよっ

結局、獄寺の提案によって、霊媒師を呼ぶことになった。

そいつはすぐに来た。姫が、体を起こす。

そして、霊媒師が何かブツブツ言い始めて除霊が開始する。

なんかつまんね。暇。眠い。

バタッ

!!

突然姫が、ベッドに倒れこんだ。それでも霊媒師はブツブツといい続ける。

と、突然違うことを言い出した。

“彼女の体を借りて、言いたいことを言いなさい”

何言ってんだコイツ?誰に向かって言ってんだろ?だけど、その声に反応するように、姫がゆっくりと起きた。

ひ、姫?

戸惑うオレをよそに、姫は口を開いた。

“私はコイツを恨み続ける”

は?何言ってんの?姫・・・あ、違う。よくわかんねえけど、コイツは姫じゃない。

“何故あなたは彼女を苦しめるの?”

“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”

よくわからない会話が続く。オレはその会話に耳を傾けた。

“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいるわね”
周り・・・？姫は今日しかこいつを見てないって・・・・。
そういうことか。姫がコイツを見るのは今日が初めて。でも『こいつ等』を見るのは、初めてじゃないって事か。
“彼らもあなたと同じなの？”
“そうだ。私たちはコイツに、この女に苦しめられた者達だ！”
“彼女はあなた達に何をしたの？”
“私は・・・私達は・・・皆この女に殺されたのだ！！”
ようやくピースが繋がった。今、霊媒師と話している『こいつ』は、七年前まで姫が暮らしていた町の住人。
嘘だ。沢田がつぶやく声が聞こえた。悠里は人を殺さない、と。
でもオレは、姫の過去を知っている。暗殺者になる前の姫を。それに過去がどうあれオレ達ヴァリアーは殺しを仕事とする暗殺部隊。マフィアになるということは、殺しの道を進むと言うこと。それを拒絶する沢田は、やっぱりボスには向いてない。十代目には、オレ等のボスがなるべきだし。
とにかく、姫の過去がこいつ等にばれたら不味い。オレは思い切って聞いた。本当ならば聞きたくないことを。
“お前の望みはなんだ”
“私の望み、それはこの女を地獄に堕とすことだ！”
このっふざけんな！テメーらの都合で姫を死なせっかよ！多分、初めて憤りを感じた。
何時からだろうか、姫のことを意識するようになったのは。誕生日パーティーだって、昔、姫がやってみたいって言うから、ドッキリで用意した。あのときには既に・・・。
“グアッ”
奇妙な声で我に返る。見ると、姫が・・・いや、姫の中のソイツが苦しみ始めた。しかし、突然何かが吹っ切れたように大人しくなり、そして、またゆっくりとベッドに沈んだ。

“ひ・・・悠里”
危うく姫と呼びそうになり、慌てて訂正する。他の奴らも悠里、悠里、と呼んでいる。
しばらくして、姫は目を覚ました。思わず笑顔になる。それは全員同じだった。最後に、姫も薔薇色の笑顔になった。

姫は家に帰ると、相当疲れていたらしく、お楽しみのヴァリアーとの交信前に寝てしまった。
オレは、今日の大まかな流れを説明した。と言っても、体調を崩してしまった、とだけ。幽霊がどうしたこうしたと言えば、こいつ等（特にオカマ）が五月蝿い。それに、スクアーロ達に心配をかけたくねえし、姫にこれ以上のつらい思いはさせたくないし・・・・・・。
“ベルちゃん？”
オカマの声で、まだ繋いでたことを思い出した。キーキー五月蝿いルッスーリアは置いといて、切り上げる。
きっと明日からは姫も普通の生活に戻れ・・・あり？元から普通じゃねえか。・・・たら良いんだけどな。

５０話達成記念パート２　ベルの一日（後書き）

ひっさびっさのヴァリアー登場（笑）

あの～ベルのキャラ崩壊については、なるべくノーコメントでおねがいしまする。

50話達成記念パート3　ツナの一日

母さんに起こされて一日が始まる。因みに今は・・・8：00。やばいよ！遅刻しちゃう！またヒバリサンに咬み殺されちゃうよ（涙）なんでもっと早く起こしてくれないのかと突っかかると、母さん曰く起こしたのは五回目。おまけにランボにまでバカにされるし、リボーンには蹴られるし朝から最悪だ・・・。

食パンを銜えて急いで家を出る。と、そこで獄寺君とあった。獄寺君は遅刻とか気にしていない様子。獄寺君に喋りながら歩きましょう、と言われて結局学校に着いたときはカンペキに遅刻確定。なんでこーなるかな？

教室に入ると悠里ですらいた。風紀委員の仕事も終わってんのか。おはようと挨拶したけど無反応。それどころかめったに怯えない彼女が、何かを怖がっている様子だった。何があったんだろう。

昼休みになると、仕事があるからと言って姿を消した。それで獄寺君や山本と喋っていると、十分ぐらいしたら戻ってきた。

でも顔色が悪い。まるで死人のように青白い。心配で駆け寄った瞬間、悠里は崩れるようにして倒れた。

思わず叫ぶ。それに気づいた獄寺君と山本に悠里を任せて、オレは鐘のいる1－Bに直行した。鐘を見つけると、悠里が倒れたことを伝えた。事情を話しながら急いで保健室に向かう。

悠里はベッドに寝かされていた。Ｄｒ．シャマルは貧血か何かだろうと言う。大丈夫なのかな。

心配で見守っていると、しばらくして目を覚ました。現状を分かっていないみたいだったから、オレが説明した。鐘が何があったのかと尋ねると、悠里は教えてくれた。人には見えないものが見えるんだと。

京子ちゃんは積極的で、何かできないかと聞いてきた。悠里はどうでもいい感じだったけど、獄寺君の提案で、霊媒師を呼ぶことになった。姿を消した京子ちゃんは一分したらそれらしき人を連れて戻ってきた。ヒバリさんが手配してくれたらしい。ヒバリさんにも優しいところがあるんだ。ちょっと意外。

霊媒師の人が何か、ブツブツと始まった。除霊が始まったらしい。なんだろこれ、聞いてると眠くなってくる。でも皆も同じみた・・・パタッ。え？見ると、悠里が再び倒れた。

それを見計らったかのように霊媒師の人はボソッといった。

“彼女の体を借りて言いたいことを言いなさい”

そしてまたブツブツと。すると、悠里がゆっくりと体を起こした。

その時、鐘が何かボソッと言ったけれど、聞き取れなかった。

そして、悠里は口を開いた。

“私はコイツを恨み続ける”

え・・・？

その言葉を聴いて、霊媒師の人は質問を始めた。

“何故あなたは彼女を苦しめるの？”

“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”

会話から、今喋っているのは悠里じゃないって分かる。じゃあ誰なんだろう。苦しめられたって、どういうことなんだろう。

“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいる

わね。彼らもあなたと同じなの？”
“そうだ。私たちはコイツに、この女に苦しめられた者達だ！”
“彼女はあなた達に何をしたの？”
悠里の中の『それ』は、一度唇をかみ締めて答えた。
“私は・・・私たちは・・・この女に殺されたのだ！”
えっ殺された！？
嘘だ、無意識的に声が出る。悠里は人を殺したりしない。絶対にありえないよ、信じられないよ・・・悠里が人を殺すなんて。
確かに悠里は普通じゃない。武器とか持ってるし、ヒバリさんより強いし、たまに殺気とか怖いし。でも、誰かを殺したりはしないはず。
“お前の望みは何だ”
突然、鐘が『それ』に質問する。
“私の望み、それはこの女を地獄に堕とすことだ！”
そんな・・・。“てんめっ”鐘はそう呟いた。相当怒っている。拳が強く握られて、怒りで震えていた。
しばらく静かだった霊媒師が、またブツブツと言い始めた。すると、『それ』が苦しみだした。でも、ピタッとやんだと思ったら、静かにベッドに倒れこんだ。
“ひ・・・悠里”
鐘が叫ぶ。『ひ』って言うのは気のせいだよね。
オレたちも、呼び続ける。しばらくして、悠里は目を覚ました。ほっとしてオレたちは笑顔になった。勿論、悠里も笑顔だった。

家に帰った瞬間リボーンに蹴りを入れられた。原因は午後の授業に出なかったこと。一体なんで知ってんだろう。仕方ないじゃん、悠里が倒れて心配で皆で保健室にいたんだから。

でもそれで許すリボーンじゃない。それどころか悠里にも説教する言う。

やめろって、罰ならオレが受けるから。そういったら、宿題を倍に増やされた。終わりそうにない量だ。なんだか大変な一日だ。

明日は学校がないから、獄寺君とか誘って悠里のお見舞いに行こう。

５０話達成記念パート４　獄寺の一日

朝８：００に目が覚める。普通なら急がねぇと遅刻する時間だが、オレにはカンケーねえ。ヒバリや先公が怖くて十代目の右腕が務まるかテキトーに朝食を食って家を出る。
十代目の家の前を通り過ぎようとしたとき、家の中から十代目が食パンを銜えて飛び出してきた。急いでもなんだから、十代目に喋りながら歩きましょうと提案する。

学校に着くと遅刻だとヒバリに絡まれたがシカトする。教室に入ると、十代目が悠里に挨拶したが、悠里は見事に無反応だった。シカトしてんなよ！そう突っ掛かろうとしたがやめた。悠里が・・・めったにビビッたりしないあの悠里が何かを恐れている感じがした。・・・・今日は雨でも振るのか？

昼休みになると悠里は仕事と言って姿を消し、オレは十代目や山本のヤローと話をしていた。案外、悠里が帰ってくるのは早かった。十代目が悠里の異変に気づき駆け寄った瞬間、悠里は崩れるように倒れた。十代目が叫びオレたちも駆け寄る。十代目は悠里をオレと山本に任せ、１－Ｂに鐘を呼びに行った。
二人で保健室に運ぶ。

保健室にはシャマルがいた。シャマルは悠里を見ると、ここまで容姿が男子に近いに関らず、女の子～と言って飛びついてきた。が、起きていたのか反射的なのか、悠里の蹴りによって地に沈んだ。・・・バカだ。

心配だったのか笹川も来た。そして十代目が鐘を連れて入ってきた。十代目はずっと心配していた。全く、十代目に心配かけてんじゃねえよ。

その時悠里が目を覚ました。全く状況をつかめてねぇ悠里に十代目が説明する。話を聞いて、情けないな、と呟くのが聞こえた。皆で何があったのかと聞くと、渋々ながらも話し始めた。

どうやら悠里には人には見えない奴らが見えるらしい。何だ、妖怪じゃねえのかよ、つまんね。

笹川が悠里に何かできないかと言っていたが、ほんにその気はないらしい。そこで、幽霊がらみなら、と興味本意で霊媒師を呼んでみてはどうか、と提案してみた。そしたら他の奴も興味があったのか、あっさり通った。

一分後、霊媒師は来た。ブツブツと何かを言い始めた。随分と眠い声だな、オイ。

ポテッ

ん？悠里の奴、また倒れやがった。寝んの早くねーか？だが霊媒師はそれを待っていたようだった。

“彼女の体を借りて言いたいことを言いなさい”

すると、悠里が体を起こした。そして口を開いた。

“私はコイツを恨み続ける”

声が・・・ちげぇ！？

“何故あなたは彼女を苦しめるの？”
“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”
“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいるわね。彼らもあなたと同じなの？”
“そうだ。私たちはこの女に苦しめられた者達だ！”
“彼女はあなた達に何をしたの？”
そこまで来ると、『ソイツ』は唇を強くかんだ。そして言った。
“私は・・・私達は・・・この女に殺されたのだ！”
殺さ・・・れた・・・？いや、でもあいつは人を殺すようなタチじゃねえ。嘘だ、十代目がポツリと呟いた。悠里は人を殺したりしない、と。
そして悠里・・・じゃなくて『ソイツ』は注意しなければ聞こえないほど小さな声で“この女のせいで、私達は命を落とした。いや、それだけじゃない。この女は自分が住んでいた町ごと焼き払った”と言っていた。
“お前の望みは何だ？”
不意に鐘が聞いた。その問いに『ソイツ』が答える。
“私の望み、それはこの女を地獄に堕とす事だ！”
なっ！？てんめっ、鐘がそういったのが聞こえた。恐らくコイツ、そーとー切れてる。強く握り締めた拳が怒りで震えている。
すると、今までの成り行きを見守って（？）いた霊媒師が再びブツブツといい始めた。『ソイツ』は苦しんでいた。そして、ピタリと大人しくなり、悠里はゆっくりとベッドに倒れこんだ。
“ひ・・・悠里”
鐘が叫ぶ。とりあえず『ひ』には突っ込まないで置く。十代目に続きオレたちも悠里の名前を呼んだ。しばらくして、悠里は目を覚ました。オレたちはほっとして、そして緊張が解けて笑顔になった。
悠里と共に。

家に帰り、ベッドにダイヴする。やけに眠い。
プルルルル
電話だ。十代目からだった。明日、皆で悠里のお見舞いに行こうと誘われた。もちっス。そう答えて電話を切る。
・・・ん？『皆で』ってことは山本のヤローのくんのかよ・・・←
←

50話達成記念パート5　山本の一日

朝五時起床。六時には朝練が始まるから、これくらい早く起きなきゃなんない。親父なんて、仕込があるっつって四時には起きてっからな（笑）

学校にはランニングで向かう。野球部で最も早く学校に来て人一倍練習している。
オレが来てから数分後、他の部員たちもやってくる。

朝練が終わり、教室に行く。既に悠里がいた。
今日は早いのな。いつもだったら、見回りとか書類まとめでギリギリまでこねーのに。
軽く挨拶したけど、何の反応も無かった。というより机に突っ伏してたから寝てんのかもな。
登校時間を過ぎてから、ツナと獄寺が来た。まあ、先生も来てないしセーフだな。

昼休み、悠里が風紀委員の仕事でいなくなったから、ツナや獄寺と喋っていた。
悠里は意外と早く戻ってきた。ツナが、様子がおかしいと駆け寄っていった。けど、その瞬間に悠里は崩れるように倒れた。ツナが叫

ぶのと同時にオレたちも駆け寄る。
ツナは、オレと獄寺に悠里を任せると１－Ｂに鐘を呼びに行った。
オレと獄寺は、悠里を担いで保健室へと向かった。
悠里の顔は真っ青で、まるで幽霊そのものだった。

保健室にはＤｒ．シャマルという、ツナと獄寺の知り合いがいる。
保健室についたオレたちは、ベッドを貸してもらえるように頼んだ。
するとシャマルは悠里を見たとたん、可愛い女の子ぉ～とか言いながら飛びついてきたが、悠里の顔面蹴りによって地に伏した。
あれ？起きてんのか？
そう思ったが、悠里はまだ気を失ったままだった。
そして心配したらしく、笹川も来た。少し遅れてツナと鐘も入ってきた。
ツナはずっと大丈夫かな、と心配しっぱなしだし、獄寺はイライラしてるっぽいし、鐘なんてメッチャそわそわしていて、誰一人落ち着かない雰囲気。
そんな中、ようやく悠里が目を覚ました。何があったのかイマイチ分かっていないらしいので、ツナが現状を説明した。鐘は何があったのか聞いていた。なんか悠里には、人には見えないもの、つまりは幽霊が見えるらしい。
笹川が心配して、悠里に何かできないかと聞いていたが、本人はどうでも良いらしく、曖昧な答えしか返さなかった。そこで、獄寺の提案で霊媒師って言うやつを呼ぶことになった。
そして一分後、その霊媒師が来た。何でも、ヒバリ自ら手配したらしいぜ。
霊媒師が何かブツブツと言い始めた。

眠っっ。。
ふぁ〜あ。
思わず出るあくび。
ドサッ
あ・・・悠里、倒れた。大丈夫か？
と、そこで霊媒師は一旦ブツブツ言うのを止めた。
“彼女の体を借りて言いたいことを言いなさい”
え、幽霊マジでいんの？
“私はコイツを恨み続ける”
あ、マジでいた。
“何故あなたは彼女を苦しめるの？”
“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”
“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいるわね。彼らもあなたと同じなの？”
“そうだ。私達はコイツに、この女に苦しめられた者達だ！”
なんつーか、話についていけねえし。
“彼女はあなた達に何をしたの？”
“私は・・・私達は・・・この女に殺されたのだ！”
ん？なんか、シリアス系になってね？大丈夫なのか？
嘘だ、ポツリとツナの声が聞こえた。悠里は人を殺したりはしない、と。確かに同感だな。人殺すような極悪人でもないしな。
次に口を開いたのは鐘だった。
“お前の望みは何だ”
それに対し、返された答えは
“私の望み、それはこの女を地獄に堕とすことだ！”
・・・それは拙いんじゃね？
てんめっ、鐘が呟く声が聞こえた。強く握り締めた拳が怒りで震えているのが見て分かる。
鐘って滅多に怒らないキャラだけあって、キレルと怖ぇのかな？
そこで、成り行きを見守っていた霊媒師が、またブツブツと始まっ

た。そしたら幽霊が、
苦しむ→大人しくなる→パタッ
って感じになった。
“ひ・・・悠里”
鐘が叫ぶ。何故か最近、鐘が悠里を呼ぶとき『ひ』がつくのな。なんでだろ?
オレたちも名前を呼んでると、しばらくして悠里が目を覚ました。
ほっとして、オレたちは笑顔になった。勿論悠里も一緒にな♪

家に帰ったら、親父の拳骨が振ってきた。悠里の事があったとはいえ、午後の授業サボっちまったもんな（苦笑）
プルルルル
電話が鳴る。ツナからだった。明日、皆で悠里の見舞いに行こうと誘いの電話。了解して電話を切る。
明日、あいつの好きなサーモン持って行ってやるか。

50話達成記念パート6　京子の一日

朝六時。昔から目覚ましがなくてもいつもこの時間に起きられる。お兄ちゃんのご飯、作ったりしないといけないし。

花と一緒に学校に行くと、もう悠里君がいた。朝の見回りとかあるのに、何時に来てるんだろう。でもやっぱり疲れてるみたい。おはようって声をかけようと思ったら、寝ちゃってた。大丈夫かな？女の子に寝不足は良くないのに。それでも授業前には起きたし、大丈夫だよね。

昼休みになると、悠里君は書類をまとめなきゃ、って教室を出て行っちゃうし、花とお喋りしてたら突然ツナ君の叫ぶ声が聞こえた。見てみると、山本君と獄寺君がぐったりしてる悠里君を運び出しているところだった。

見ていた人に聞いたら、悠里君が突然倒れちゃって、それで山本君と獄寺君が保健室に連れて行ったんだって。

ビックリして保健室に行ったら、悠里君はベッドに寝かされていた。シャマル先生は貧血だろうって言ってたけど、やっぱり寝不足だったのかな？

少ししたらツナ君と鐘君が来た。悠里君を心配してる鐘君は、なんだか私のお兄ちゃんみたいだった。妹を持つお兄ちゃんって、みん

な似てるのかな?
そんなことを考えてたら、悠里君が目を覚ました。ツナ君が何があったのか説明したら、情けないなって小さく聞こえた。鐘君が悠里君に何があったのか聞くと、今日あったことを全部教えてくれた。悠里君には人には見えないものが見えるんだって。それで、今日は朝から付きまとわれて大変だったらしいの。
心配だったから何かできないか聞いたのに、悠里君はあんまり気にしてないみたいで、曖昧な返事しか返してくれなかった。そしたら、獄寺君が霊媒師を呼ぼうって提案してくれて、急いで職員室に向かった。
先生に、事情を説明したら、そういうことはヒバリさんに頼んだほうがいいって聞いて、今度は応接室に向かった。
ヒバリさんは一人でお仕事をしていた。邪魔しちゃいけないかな、と思ったけど、一応話をしたら、霊媒師さんを呼んでくれた。ヒバリさんにお礼を言って、霊媒師さんを連れて保健室に向かった。

保健室に着いたら、霊媒師さんは悠里君を見ると、すぐにブツブツと何かを言い始めた。
うわぁ、霊媒師さんに、除霊って憧れるな~。今度ハルちゃんと一緒にこういう格好をして遊ぼうっと。
そんなことを考えてたら、なんだか眠くなってきた。
フッと悠里君が倒れる。そしたら霊媒師さんが
“彼女の体を借りて言いたいことを言いなさい”
って。幽霊さんに話しかけてるのかな?悠里君が体を起こす。
“私はコイツを恨み続ける”
あれ?今の声誰だろう。悠里君が言ったように見えたけど、声が違かったし、誰だろう。
“何故あなたは彼女を苦しめるの?”
“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”

“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいるわね。彼らもあなたと同じなの？”

“そうだ。私達はコイツに、この女に苦しめられた者達だ！”

霊媒師さんと幽霊さんの会話が続く。苦しめられたってどういうことだろう。悠里君がつらい思いをしているのはこの人のせいなのに。

“彼女はあなた達に何をしたの？”

“私は・・・私達は・・・この女に殺されたのだ！”

え・・・・・？殺された？ウソだよね。だって悠里君は優しいし、確かに女の子なのに男の子の格好をしてたりで、よく分からないこともあるけどいい人だよ？それなのに・・・・・・。

嘘だ、ポツリとツナ君が言った。悠里は人を殺したりしない、って。

“お前の望みは何だ”

突然、鐘君が質問をした。

“私の望み、それはこの女を地獄に堕とすことだ！”

ダメだよそんなの！いくら憎くても人を殺すことが望みだなんて・・・・・。

そんな時、霊媒師さんがまた何かを言い始めた。そしたら、悠里君（？）が苦しみだして、また大人しくなって、倒れちゃった。

なんだろう。

“ひ・・・悠里”

鐘君が叫んで、それに続いて私たちも悠里君を呼んだ。しばらくして、悠里君は目を覚ました。

よかった。思わず笑顔になる。ツナ君たちも霊媒師さんも、そして、悠里君もみんな笑顔だった。

家に帰ったらお兄ちゃんにすごく心配されちゃった。私が午後の授

業に出なかったことを花から聞いたらしくって、私が調子が悪いんじゃないかって。だから、今日あったことをみんな話した。
全部話し終わったとき、丁度電話がなった。ツナ君からで、明日みんなで悠里君のお見舞いに行こうって誘われた。うん分かった、といって電話を切る。
悠里君、早く元気になるといいな。

５０話達成記念パート６　京子の一日（後書き）

京子は、悠里が女であると知っていながら、悠里『君』と呼んでおります。

理由は、・・・・・・よく分からない。

箸休め

作者「終わったーーーっ！！」

リボーン「オメー何やってんだ？」

作者「とある一日を、それぞれの視点で書いてみたんスよ」

リボーン「何でそんな面倒なことしてんだ」

作者「いや～、本当は『主人公ちゃんは幽霊が見えます。あーそうですか。ハイハイ』的なカンジにしようと思ってたんだけど、シリアス系になっちゃった」

リボーン「真面目にやりやがれ（チャキッ」

作者「ごごごめんなさーい！！」

ハル「何でハルを出してくれないんですか～～～」

作者「だって学校が違うし関れないじゃん」

ハル「ハルはツナさんと同じ並中に転入したいです！」

ズガン

ハル「はひぃっ！？」

リボーン「ギャーギャーうるせーぞ」

作者「全く危ないなあ。私のコーナーで暴れないでよ」

雲雀「僕の出番が少ないよ」

作者「あ、雲雀さん。出ただけいいじゃん」

雲雀「良くない。咬み殺す」

作者「だ～か～ら～私のコーナーで暴れないでってば」

三人「誰がお前（君）（あなた）のコーナーだ（だい）（ですか）！」

作者「私が居なくちゃ誰もここに出れないくせに（ボソ）」

三人「……（汗）」

ベル「つーか、何で幽霊なんだ？」

リボーン「オメェ何時から居た？」

ベル「ししっ最初っから」

ハル「えっと、誰ですか？」

ベル「オレ？オレはベルフェゴール」

作者「何で来てんの！？主人公ちゃんは！？」

ベル「家で寝てるぜ」

スクアーロ「う〝ぉぉい！！オレたちも出せぇ！！」

美鈴「うるせー黙れカスザメ！」

ベル「あ、来た」

ハル「あの……今の一言で大人しくなっちゃいましたけど」

美／べ「え？」

スクアーロ「……」↑拗ねた

全「ええ～！！？」

雲雀「詰まらない。帰る」

作者「じゃね～」

美鈴「ってかどうしたの？みんな集まってさ」

作者「ん？お喋り会」

美鈴「ふ～ん」

ハル「そろそろツナさんが恋しいので、ハルは帰りますね」

作者「さよなら～もう来なくていいよ～」

美鈴「酷いな作者」

リボーン「作者とお前ってほぼ同じ人間だろ？」

作者「ち、違うよ……一応」

ベル「そういえば、お前と姫の誕生日って、同じだよな」

作者「ああっ！！」

全「（ビクゥッ）」

作者「そうだよ！変なのかいてる内に誕生日迎えちゃったじゃん！」

リボーン「つーことは、ボンゴリアン・バースデイ・パーティーだな（ニッ）」

美鈴「ちょっと待った！私はやったばかりじゃないか？ここは作者だけでやってもらおうじゃないか」

作者「あっはっは～何いってんのさ君。私は今年で十五歳……しまった！奇数才だ！」

リ／美「（ニヤリ）」

作者「ゾクリ」

ベル「ってかどうでもいいけどさ、ハンバーグ作って姫」

美鈴「そっちのほうがどうでも良くない！？っていうか、そこに来

る経緯が分からないよ！？」

ベル「だってお腹すいたし」

全「（グゥ～～～～～）」

美鈴「何人居るの？……点呼！」

リボーン「いーち」

ベル「にー」

スクアーロ「さん」

作者「しー」

雲雀「ご」↑あれ？

ハル「ろく」↑オイ

ツナ「なな」↑……

山本「はち」

獄寺「きゅー」

京子「じゅう。いいのかな？」

ビアンキ「じゅういーー」

美鈴「ってちょっと待った！あんたら何時来たの！？」

雲／ハ／ツ／山／獄／京／ビ「いま」

美鈴「……（汗）あと何人いるのさ」

ランボ「ランボさんも居るもんね！」

イラッ

美／作／獄「消えろアホ牛ぃ！」

ドガッ

ランボ「ぐぴゃあぁあっ！！」

ハル「はひ～～～ランボちゃんが飛んで行っちゃいました」

ベル「姫こえっ♪」

マーモン「僕たちも居るよ」

ルッスーリア「美鈴ちゃんがハンバーグ作ってくれるんですって？」

美鈴「にゃ～マーモン！（ムギュッ）」

男全「（うわー羨ましい）」

マーモン「美鈴、皆の視線が痛いから離してくれるかな？」

美鈴「はっ！ごめん、つい」

マーモン「君たちも出てきなよ」

全「？？」

レヴィ「ぬぅ……」

ＸＡＮＸＵＳ「ハッ　カスが」

美鈴「え？ボスまで？」

レ／Ｘ「グ～～～」

美鈴「アハハ……」

？「クフフ…僕たちもいーーー」

作者「わーダメー！読者さん混乱しちゃうしネタバレ自重！」

？「……仕方ないですね。スグ出してもらいますよ」

作者「ふー（汗）」

ベル「今の誰？」

スクアーロ「さあな」

和／理／隼「私たちも居たりするよ」

ツナ「あ、出た。姫獄Ｓの三人」

美鈴「おひさ～」

和「私たちも入れてもらおうじゃないか」

作者「実はコイツも誕生日一緒（ボソ）」

和「なんか言った？」

作者「別に」

美鈴「えっと改めて人数は……十八人か。すぐ作ってくるよ」

～二十分後～

美鈴「できたよ」

全「はやっ！？

美鈴「ルッスの手伝いしてたから、料理の早作りは慣れた」

ルッスーリア「あら、ホント？嬉しいわぁ」

リボーン「そんじゃ、早速食べるぞ」

全「いただきます」

ツナ「そういえばこれって、元々は和たちが乗っ取った、後書きの

スペースだったんだよね？」

獄寺「そういえばそんな設定でしたね。おい作者！どうなっていやがる」

作者「ほら、今回がいつもと違かったでしょ？だからついでで今回のこれもいっぱいやっちゃえってカンジで」

獄寺「なっ……テキトーなヤツ」

作者「私だって言いたいことといっぱいあるのに、コーナーを乗っ取られたり、スペースが無かったりって大変なんだよ！」

山本「なるほどな」

リボーン「ところで、何でさっきピーが来たんだ？」

作者「ん？いやあ最近そろそろ黒曜編に入ろうかな～なんて」

リボーン「そうか」

ツナ「コクヨウヘン？」

美鈴「何それ、おいしいの？」

ベル「食べるもんじゃねえだろ」

ビアンキ「愛があれば平気よ」

ツナ「そこ！？」

雲雀「君たち五月蝿いよ。食事のときぐらい静かにしてくれる？」

ツナ「ごっゴメンナサイ！」

美／べ「（プイッ）」

京子「ねえ、悠里君はどこかな？」

ハル「そういえば見てませんね」

獄寺「鐘のヤツもいねえしな」

美／べ「（ギクリ）」

作者「二人ならスグそこ――――」

美鈴「だっ誰？その悠里って人」

ベル「鐘なんてオレもしんねえし」

リボーン「何でオメーらが焦ってんだ？」

スクアーロ「う〝おい！美鈴（みれ）ぇ！お代わりあるかぁ！」

美鈴「無いよ（にっこり）」

スクアーロ「……（ポテッ）」

ルッスーリア「あらあら、スクアーロが固まっちゃったわよ」

マーモン「僕のを分けてあげるよ」

スクアーロ「お、おう。すまねえ」

ＸＡＮＸＵＳ「カスザメが」

スクアーロ「んだとＸＡＮＸＵＳ！」

美鈴「スクアーロ、落ち着きなよ（ヒュン）」

スポッ

スクアーロ「……！！」

ルッスーリア「まぁ、久々に出たわね。おにぎり」

スクアーロ「んんんん……！（久々にもほどがあるぞ！！）」

リボーン「今度ツナにもやってみるか」

ツナ「やめて！リボーンがやったら死にかねないから！」

というわけで、ご飯ｔｉｍｅ終了。

全「はやっ！？」

作者「アハッ★」

ハル「そろそろお開きなんですか？」

獄寺「ちょっと待て。その前に気になることが」

ツナ「あ、うん。オレもある」

作者「何？」

獄寺「あの黒いヤツら誰だ？」

黒い奴ら：

美鈴・ベル・スクアーロ・ルッスーリア・マーモン・レヴィ・ＸＡＮＸＵＳ

ヴァリアー全「アハッ★」

作者「キャラ崩壊しちゃダメだよ！特にＸＡＮＸＵＳ！」

美鈴「フフッまぁ、その内また会えるさ」

？「●◇＋＊♪▲@」

ハル「はひっまた小さな可愛い子が」

リボーン「“自分の出番はまだか”」

作者「大丈夫！次の話から出るので。それでは」

全「チャオチャオ～～！」

嘘か真かそれとも（前書き）

すいやせん

前回、イーピンが出てくるような事言いましたけど、まだでないッス。

嘘か真かそれとも

これは、あの幽霊騒動の次の日の話。

～五月宅～

ピンポーン

美鈴「む。お客さんなのだ」

ベル「姫はまだ安静に寝てろよ。オレが出てくっから」

美鈴「ん。任せた。だけど」

ベル「なに？」

美鈴「もし来たのがツナたちで、上がりたいと言ったら、ここまで連れてきて」

ベル「……なんで？」

美鈴「私もあいつらに用事がある」

ベル「わかった。でも、姫は大人しくベッドの中にいろよ」

美鈴「わかってる」

ガチャ

鐘「やっぱり、あんた等だったか」

ツナ「突然大勢で来てゴメン。悠里のお見舞いに来たんだ」

山本「心配だしな」

獄寺「ケッ」

京子「悠里君、大丈夫？」

リボーン「ちゃオッス」

鐘「（限度を考えろっての）
いいぜ。アイツもお前らが来たら部屋に通すように言ってたからな」

リボーン「話が早いな。早速案内してくれ」

ツナ「ちょっリボーン！人ん家にきといてメーワクかけんなよな！」

鐘「（この状況が既にメーワクって気づかねーのか？）
ま、いいか。付いて来いよ」

ゾロゾロ

ガチャリ

悠里「…やっぱり皆だったんだ」

ツナ「悠里、体調はどう？」

悠里「すこぶる悪いぞ」

獄寺「とか言ってる割には元気そうじゃねえか」

悠里「悪かったね、普段から血色良くて」

山本「まーまー落ち着けって。オレたちお見舞いに来ただけだしよ」

ツナ「それと……その……どうしても教えてほしいことがあるんだ。悠里の過去のことを」

悠／鐘「！！！」

鐘「それは…」

悠里「そうだね。僕もそろそろ言おうかと思ってたころだし」

鐘「なっ……！？」

悠里「昨日、僕の意識が無い間にどんな会話が行われていたか知ってるんだ」

京子「知ってたの？じゃあ、あれは本当なの？」

悠里「それも含めて、全て話す。

僕が生まれたのは、小さな町だ。決して裕福なわけじゃないが、不自由も無く過ごすことができた。
父親はヤクザ、母親はマフィア。あの町は、普通の人の道を踏み外した人間が集う、寂れた村だった。だから僕も、気づけば何かにこじつけては兄たちと喧嘩してた。

そしてある日、町はマフィアに襲われた。家族は殺され、町が焼かれ、僕を除く全ての人間がこの世から消え去った」

リボーン「ちょっと待て。そしたらどうしてお前は生きている？他の奴らが全員殺されたにも関らず、何故生き延びることができた？」

悠里「そんなの、こっちが聞きたいよ。僕の右目が赤いのは、その時浴びた血がその事件を僕に刻み込んだ証だ。
これは全て、僕が六歳を向かえた日に起こった」

ツナ「た、誕生日に！？」

京子「酷い……」

悠里「その後、どうやってその町から逃げたのかは覚えていない。気がついたら、今の家族、つまり鐘の家族に拾われて、生きていた」

獄寺「それって要するに…」

鐘「オレとコイツは血が繋がってない、元は赤の他人だよ。
出かけた帰り道、血まみれになって倒れているコイツを見つけた。そういうことだよ」

悠里「そして僕たちは、今はボンゴレの人間」

全（京除く）「!!?」

京子「??」

悠里「日本に来たのは、同い年のボス候補を見たかったからだ。興味があった。どんなヤツなのか。実際にあって、友達になってもよく分からない」

ツナ「……」

悠里「僕から言えることは、これだけだ。昨日言っていたアイツは、当時の親友だった」

リボーン「なるほどな。七年前の事件“町焼失事件”か」

獄寺「あれ、ですか?」

ツナ「なにそれ?」

リボーン「マフィアが手を下したとしか思えない、あまりに残酷な事件だ。だが、生き残りはいないとされてきていた。……いたんだな、こんな近くに」

鐘「なあ、もうそれぐらいにしね？これ以上、こいつが苦しむのとか、オレやだしさ」

京子「そうだよね。そろそろ帰ろっか」

ツナ「そうだね。悠里だって、まだ体調悪いんだし」

山本「っとそうだ。親父に頼んでサーモン握ってもらったぜ」

悠里「……ありがとう（フッ）」

獄寺「それじゃあ、帰りましょう、十代目」

ツナ「うん。じゃあね、悠里。お大事に」

リボーン「チャオチャオ～」

バタン

ベル「……姫」

美鈴「なに？」

ベル「さっき言ってたのって、本当か？」

美鈴「本当。全て、私の記憶に刻み込まれた真実」

ベル「そっか。

（おかしい。昔、オレたちに話してくれたことと、何もかも

が違う）」

美鈴「どうしたのベル？」

ベル「いや、なんでもない」

美鈴「そう。私、寝るから一人にしてくれる？」

ベル「昔みたいに添い寝してやろっか？」

美鈴「いくらベルでもぶっ飛ばすよ」

ベル「じょ、冗談だっつーの」

バタン

美鈴「ふぅ～（ドサッ）」

（この違和感は一体なんだろう。私は記憶にあることを全て話した。なのに……

どうして偽り感があるんだろう）

ベル「姫に何があったんだ?スクアーロたちの言っていた、力の暴走が始まってんのか?

（一体何があったんだよ、姫）」

ツナ「人の過去を根こそぎ聞いて、満足かよリボーン」

リボーン「満足はできねーな。でも、アイツが嘘を言ってるようには見えねえ」

ツナ「なんだよ、納得いかないのって」

リボーン「ツナ、悠里はイタリア出身なんだよな？」

ツナ「そーだけど、それがどうかした？」

リボーン「“町焼失事件”が起こったのは、日本なんだ」

ツナ「！？」

リボーン「だが、ヤツがボンゴレであることは間違いねえ。九代目が言っていたからな」

ツナ「九代目が？」

リボーン「ああ。オレはツナのかてきょーと一緒に、五月悠里のかてきょーも任されていた」

ツナ「は？」

リボーン「記憶が戻らないように、しっかりと見張っていろとな」

ツナ「ちょっそしたらなんかおかしくない！？だって、悠里はオレ達に過去を教えてくれたじゃないか！」

リボーン「だからこそ、納得いかねーんだ」

（後で、ディーノに調べてもらうか）

嘘か真かそれとも（後書き）

主人公の記憶は混乱中です。コイツは本気でこの記憶が正しいと思っています。

この記憶がどこから来た物なのか、その内やります。

・・・多分

記憶の隅のあの子は一体（前書き）

今回は、骸っちさんのリクエストにより、ヒバリさんと美鈴の絡みを入れてみました。

骸っちさん、気に入らなかったら、いくらでも言ってください。

記憶の隅のあの子は一体

目の前にちらつく、栗色の髪。

自分を怖がらない、純粋無垢な笑顔。

僕を初めて受け入れてくれた――――

パチッ

……またあの夢だ。いつしか封印したと思われた、謎の少女の記憶。

「ふぁ～」

いつからだろうか。昔に会った幼い少女、彼女がここ最近、夢に出てくる。

名前は思い出せない。

「君は一体誰なんだい？」

？「うえええええん」

泣き声が聞こえる。誰のか知らないけど、耳障りだ。

少し歩くと声の主はいた。

栗色の髪をポニーテールで束ね、少し男子っぽい服を身にまとった幼い少女。

「ここで何してるの？」

？「ヒック……お兄…ちゃんと……はぐれちゃって…家が分からないの……」

迷子か。面倒だけど、並盛の風紀を乱すことは許されない。

「家はどこ。僕はこの町が好きだからね、隅々まで案内できる」

？「！本当ですか！？ありがとうございます！お兄ちゃんの名前はなんていうんですか？」

「僕は、

雲雀恭弥」

？「それじゃ、ひばにぃって呼びますっ。

私の名前は、――――――です！」

！！？

聞き取れなかった。

いや、そこだけ空間が削り取られたかのような感覚だった。

僕は、その少女の言葉を頼りに、道を進んでいく。

ソレは、この僕ですら確認のできていない道。

この少女、何者？

？「うぐ……お兄ちゃん…」

家にたどり着くことができずにいると、いつの間にか日は傾き始めていた。

雲雀「ねぇきみ、この道で本当に合ってるの？」

？「分からないです……気配が遠すぎて…」

気配が遠いって、明らかに家と方向が違うってことだよね？

？「ちょっと待っててください。ひばにぃの力があれば、きっと見つかるかもです」

僕の……力？どういうこと？

少女に強く手を握られる。

その瞬間、意識が急に遠のき始めた。

雲雀「くっ……」

それでも何とか持ちこたえる。

？「良かった。やっぱりひばにぃは強い人です」

雲雀「一体何を……うぐっ」

その時だった。少女の体が淡く光りだし、僕たちの周りに、沢山の布が現れた。

目の前で起こっていることがわからずに、ただ呆然と立ち尽くす。

？「いた」

少女が呟いた瞬間に、崩れ落ちた。慌てて支える。

……僕は一体何をしているんだ？らしくない。

気づけば、意識もハッキリして、万全の状態だった。

？「ひばにぃ……北に７６９m、東に３０mです」

雲雀「そこが君の家なの？」

？「はい…」

どうやら今の彼女には立つ力は無いらしい。仕方が無いから、背負っていくことにした。

言われたとおりに進むと、一軒の家があった。

雲雀「ここ？」

その瞬間、家の中から一人の少年が飛び出してきた。

？「姫っどこに行ってたんだよ！？」

？「よかったぁ」

どうやら彼が、兄らしい。

？「ひばにぃありがとう」

純粋無垢な瞳。無邪気な笑顔。

それは、僕には決して向けられるはずの無いものだった。

ふと、家の表札に目が行く。

『五月』

ハッ

さっき、聞き取ることのできなかった少女の言葉が蘇る。

？「私は、五月美鈴ですっ！」

同時に、また少女が名乗っていた。

夕日のせいなのか、彼女の頬は、ほんのりと赤く染まっていた。

五月美鈴。僕を恐れなかった、唯一の人間。

応接室で、黙々と仕事を進める。ふと、同じように黙々と進める彼女の姿が目に入る。

黒い髪で男子のような風貌。だけど、その下は、あの少女のように栗色の髪が隠れている。

屋上でこいつと戦ったときから、『美鈴』を思い出していた。

悠里、君はあの少女なのかい？

イーピン

美鈴「今日は平和な一日でありますように」

ベル「何やってんの？」

美鈴「ん？最近疲れる事だらけだから、お祈りしてんの」

ベル「でもなんでご飯中に？」

美鈴「気にすんな♪」

ベル「気にしろよ！
そういえば、あの幽霊たちどうなったの？」

美鈴「あいつ等？見えなくなったよ。その代わり自縛霊とかだったらいるけど」

ベル「え――――（呆）」

美鈴「ま、全然オッケーだけどね。

Ｌｅｔ、ｓ　ｅｎｊｏｙ　ｉｎ　ｔｏｄａｙ♪」

ベル「テンション高っ！」

～学校～

メンドイからもう放課後。

全「え～～～～～～～！？」

屋上にて。

悠里「いい天気だなぁ」

山本「気持ち良いのな」

リボーン「お日様は健康にいいんだぞ」↑え？そうなの？

ツナ「オレ、全然そんな状況じゃないんだけど……」

？「●◇♪σΠα▲」

ツナ「何でオレばっかり殺されかけんの！？」

リボーン「イーピンだって殺し屋だぞ。ターゲットが誰か、なんてカンケーねぇぞ」

悠里「それにしても、香港の殺し屋が来てるとはね」

イーピン「βγπ○☆∴」

リボーン「“お師匠様に報いるためにお前を倒す”」

獄寺「十代目！オレが今助けます！」

悠里「ってか僕たちだけで話を進めて良いの？多分、読者の人、イーピンを理解してない人いるよ？」

えっと、イーピンは香港からやってきた殺し屋で、今はツナを殺そうとしています。

山本「作者、なんかあったのか？」

早く黒曜編に入りたいそうでーす。

ツナ「リボーン！ヘルプ！」

リボーン「仕方ねえな。おいイーピン。お前の技ダセェから諦めろ」

悠里「それは挑発というのでは？」

イーピン「（ピタッ　　ザバァ）」

ツナ「うわぁ汗すげ――――――！！！」

リボーン「よし。これで“箇子時限超爆（ピンズじげんちょうばく）”に切り替わったぞ」

悠里「アホタレー！僕たちも殺す気かい！？」

獄寺「おい悠里、どうした！？」

悠里の代わりに答えてあげるよ。恥ずかしさが頂点に達したイーピンの頭には九箇（キュウピン）が現れて、時とともに一つずつ減り、一箇（イーピン）になったとき全身の汗腺から餃子ガスを一気に噴出して爆発しまーす。

ツナ「ちょっそれヤバイよ！」

ビュッ

獄寺「十代目、パス」　ポーイ

ツナ「戻さないでよ！」　シュッ

悠里「トス」　とんっ

ツナ「だから戻すなーっ！！」　ビュッ

山本「ん？オレんとこ来た」

ツナ「そうだ！山本、思いっきり投げて！！！」

山本「んしょっ」　ゴッ

ヒュ――――――――――――

ドオォン

～沢田家～

ツナ「何も、ぐるぐる巻きにしなくても」

獄寺「何言ってるんスか。コイツは十代目を殺しに来たんスよ…」

ツナ「でも、根はいい奴だと…」

リボーン「お前、この写真の奴を殺せって言われたんだろ？」

イーピン「（コクリ）」

リボーン「これはツナじゃないぞ」

イーピン「！！」

悠里「れどれど？」

獄寺「な！？」

山本「あ…！」

ツナ「誰だよこれ――っ！！！」

イーピンはど近眼だった。

リボーン「まだまだ未熟だな」

こうしてイーピンは未熟な己を鍛錬すべく、日本で修業を始めたのだった。

イーピン（後書き）

全「短っ！？」

イーピン「■▽◎＾¥」

リボーン「“もっと出してほしかった”」

作者「ゴメンちゃいっ★」

キーンコーンカーンコーン

先生「それではH．Rを始め（ガラッ）」

？「すみません、遅れました！！」

先生「あなたは誰ですか？茶色で短髪の生徒なんてこのクラスにはいないですけど」

？「んお？アハハハハッ！な～に言ってるんですか先生。私ですよ、悠里！」

ツナ「なっ！？」

獄寺「は！？」

全「見えね――――――――――っ！！」

～放課後～

ツナ「ちょっ悠里！？何があったの！？」

悠里「にひひ。実は昨日恭弥に怒られちゃって（笑）」

獄寺「怒られた？」

悠里「うん」

＝回想＝

雲雀「悠里、ちょっといい？」

悠里「何？何か問題でも？」

雲雀「明日から、その髪と口調、直してきなね」

悠里「は？え？なんで？」

雲雀「僕とキャラが被ってムカつくから」

悠里「理不尽だーっ」

＝了＝

悠里「的なことがあって」

ツナ「それ、ヒバリさんが正しいと思う」

山本「悠里といっと、なんかヒバリといるみてーな感じになるしな」

獄寺「そうだな。それに、女子ならもっと女子らしくするのが普通じゃねえか？」

悠里「（ガーン）なんだよぉみんなのイジワル
シクシクシクシクシクシクシク」

ツ／山／獄「（え～～～～～～～～～～！！？）」

悠里「（それに、ホントはそれだけじゃないんだよな）」

＝回想＝

雲雀「それと、髪のことだけど、別にカツラでもいいから、君の本当の色に直しなね」

悠里「ホントの色!?ど、どうして……」

雲雀「色をごまかしてる時点で校則違反だからね」

悠里「……そこ、どうでもよくない？」

雲雀「良くない」

＝了＝

悠里「あ～鬼だぁ。鬼がいるよ～」

ツナ「で、でも。そっちのほうが悠里っぽいし、いいと思うよ（ここまで女の子っぽい悠里、初めて見た／／／）」

獄寺「十代目の言う通りだぜ（コイツってこんなに可愛い奴なんだ

な／／／）」

山本「ああ。似合ってるぜ（／／／／／／）」

悠里「ほ、本当に……？」

ツ／山／獄「うん（／／／／／／）」

悠里「顔、赤いけど？」

ツ／山／獄「気のせい！！」

イメチェン（後書き）

獄寺夫人「美鈴め……呪ってやる」

姫／S「バカだな」

ディーノ

ある日の登校中。

悠里「なにこれ？」

鐘「さあ？」

二人の目の前には黒い集団が。

悠里「あの～通してもらえますか？」

男「ダメだ。ここは沢田家の人間しか通せない」

悠／鐘「（理不尽だーっ！！）」

悠里「まったく。おーいダメツナーッ！！」

ガラガラガッシャーン

ガチャッ

ツナ「あ、悠里、鐘！おはよう」

悠里「おはようもいいけど、何なのこいつ等」

男「沢田さん、この方は？」

悠里「私はツナの幼な――――」

リボーン「ツナのファミリーだぞ」

悠里「ってうおい！勝手に言うな！」

リボーン「事実だろ」

悠里「認めてない！」

男「！そうでしたか、沢田さんのファミリー……！」

悠里「そっちも納得しないで！」

？「お、ツナのファミリーか」

鐘「？？？」

悠里「そのタトゥーは確か…跳ね馬ディーノ？」

ディーノ「オレのこと知ってんのか」

悠里「うん。まあ」

今更だけど、ヴァリアーに入隊してから、美鈴はマフィアについて、特に通りなのある有名な人については色々勉強していたのだ。

ベル「姫よく覚えてんね。オレ忘れてた（コソ）」

ディーノ「オレを知ってるってことは、お前もマフィアなのか？」

悠里「まあ一応ボンゴレだしぃ」

ディーノ「何!?そいつはすまねえ。ボンゴレファミリーの奴の顔と名前は全員覚えたつもりだったんだけどな」

悠里「気にしなくていいから。どーせ影薄いし……」

鐘「（っていうか、ばれたらそれはそれでアウトなんだけどな）」

ディーノ「ま、改めてだ。オレはキャバッローネ十代目ディーノだ」

悠里「五月悠里ッス！」

鐘「五月鐘」

ディーノ「通り名とかあんのか？」

悠里「ない（マジ）」

鐘「ない（嘘）」

悠里「と言うよりも、こうしてる時間は無いのですが」

ツナ「え？わあっ遅刻！それじゃっディーノさん！」

ダダダダッ

悠里「それで置いてくなダメツナがぁー！！」

タタタッ

鐘「おいっちょっ待てって！」

タタタッ

ディーノ「あの悠里って奴、なんか気になるな」

リボーン「だろ？九代目が目ぇ付けてっからな」

ディーノ「ほー」

リボーン「今日、アイツと手合わせしてみろ」

ディーノ「は！？女子相手にか！？」

リボーン「アイツ、相当強ぇぞ」

ディーノ「マジかよ（汗）」

？「やってやれよボス」

ディーノ「ロマーリオ……」

ロマーリオ「ボス前に言ってただろ。知らない人とも仲良くなりたいってな」

ディーノ「そうだな。いっちょやるか！」

てわけで放課後。

川原にて。

悠里「えっと…よろしくお願いします？」

ディーノ「手加減無しでいくぜ」

悠里「あーマジか。（手加減してほしー）」

鐘「（姫ズルイ。オレも戦いたい）」

悠里「あーもう。持ち物が多くてどこに何があるのかなんて覚えてないよ」

全「？？」

シュッ↑手裏剣

ディーノ「おわっと」

悠里「えーっと他には他には…あ、あった」

獄寺「あ、この前オレが渡した奴」

悠里「よっと」

ヒュッ↑ボム

ディーノ「甘く見るなよ」

ビッ

バッ

ドガガァン

悠里「おお（パチパチ）」

鐘「真面目にやれし」

悠里「だって手合わせなんてしたことないし」

ツナ「え？ないの？」

獄寺「まあ確かに、今までは悠里が一方的にやってただけだしな」

ツナ「そうだね。ヒバリさんのこととかヒバリさんのこととかヒバリさんのこととか――――」

悠里「恭弥のことだけかよ！？」

ディーノ「余所見は厳禁だぜ」

悠里「ぅわぃ」

リボーン「さっさと終わらせろ」

悠里「はーい。チャンチャチャッチャンチャーン！ケーキ」

あんたはドラ◯もんかいな。

ツナ「あ、なんか久々に見たね。あのケーキ」

ディーノ「ケーキ？」

悠里「Ｌｅｔ、ｓ　ｅａｔｉｎｇ♪（ポーイ）」

パク

パタ

悠里「終了」

リボーン「今回は悠里の勝ちだな」

悠里「おーい跳ね馬ー！Ｗａｋｅ　ｕｐ！」

ディーノ「ケホッ……強ぇなお前」

悠里「それはあなたがケーキの初心者だったからです」

鐘「おーい腹減ったから帰るぞ！」

悠里「了解。んじゃね、跳ね馬ディーノ」

タンッ

一瞬にして消えた美鈴とベルだった。

全「……（速っ！？）」

ディーノ（後書き）

姫「お～跳ね馬来たね」

どSちゃん「うち等のほうでは随分とお世話になってますよね」

獄寺夫人「特に姫が」

姫「うるせいっ。仕方が無いんだ！」

どSちゃん「ま、ここでいがみ合ってもしょうがないですから」

姫「次回は、フゥ太が出る予定で～す」

フゥ太

ｓｉｄｅ美鈴

今日、私の家に面白い人が遊びに来てます。

ななななんと！

ランキングフゥ太君が来ちゃってます！

フゥ太「こんにちは、悠里姉、鐘兄」

鐘「鐘兄って何か久々に聞いた」

ってな訳で、私のケーキについてランキングをしてもらうことに。

フゥ太「そのケーキの殺傷力は７万６８０１位中７万６８００位」

ですよね。殺したことないし。

フゥ太「睡眠力は８０万９８０５位中三位。絶品だね」

鐘「すげっ」

フゥ太「もしこれに神死草を入れたら殺傷力は一位になるよ」

いや、だからこれでは人は殺さないから。

それにしてもこのランキングすごいね。

後々スクアーロ達にもフゥ太のことを話したら、メッチャ興味持ってた。

明日もやってもらおうかな。

フゥ太（後書き）

和「短いね」

理沙「実際、ノート一ページ分も無いそうですよ」

隼菜「なぜに？」

作者「だって骸が～～～」

骸「クフフ……早く出しなさい。でないと堕としますよ」

作者「って」

三人「え～～結局来ちゃったの！？」

犬「早く骸さんを出すびょん！」

千種「メンドイ」

作者「わー来ちゃダメだってば～～～～～！！！」

和「…苦労してんだね」

進級（前書き）

？「いつもいつもありがとうございます」

？「いえいえ。今回は一千万振り込んでおきますね」

？「それではいつも通りの手はずでよろしいですね？」

？「ええ。お願いします」

進級

晴れて二年生になった美鈴たち。

いつものメンバーは同じクラス。

わーすごいねー。

しかも今年は美鈴とベルは同じクラスだよ。

アハハー（笑）

悠里「うわーメッチャナレぶっ飛ばしたい」

鐘「いいんじゃね？」

すみません許してください。

ツナ「悠里、今年もまた同じクラスだね」

悠里「六年連続の快挙を成し遂げたね」

山本「そんなに一緒だったのか！？」

獄寺「十代目呪われてんじゃないすか？」

山本「なんだそりゃ」

？「悠里さん、初めまして」

悠里「誰？」

フィン「私はアメイラ・C（チェル）・フィノーレ。皆にはフィンって呼ばれてるの」

鐘「げっ。また同じクラスかよ」

フィン「リン君おはよっ★」

鐘「（ドン引き）」

悠里「ていうか、他の女子が自ら話しかけてくるなんて、京子以来だよ」

フィン「悠里さんと友達になりたいなぁなんて」

悠里「（怪しい）……本音は？」

フィン「私、マフィアなの（コソ）」

悠里「！！　それで？何が目的？」

フィン「別に？あなたもマフィアなんでしょ？それなら話が盛り上がるじゃない」

？「マフィアならツナのファミリーに入ったらどうだ？」

フィン「え？」

ウィイイン

悠里「あ、またリボーン。ツナに怒られるよ」

リボーン「チャオッス」

フィン「ちゃ……チャオッス？」

ツナ「あ！リボーン！学校にくんなって言ってるだろ！」

リボーン「ツナ、こいつをファミリーに入れるぞ」

ツナ「は！？進級早々何勧誘してんだよ！」

リボーン「心配はいらねえぞ。コイツもマフィアだ」

ツナ「ええ！？」

フィン「ナチスファミリーのフィンです。よろしくねっ★」

リボーン「ナチスファミリーってあの独裁主義者の多いファミリーか？」

フィン「皆に印象悪いんだね。でも私は違うから」

鐘「どうだか」

フィン「リン君ったら♪」

全「（ドン引き）」

フィン「とにかくこれから一年、皆、特に悠里はよろしくね」

悠里「突然呼び捨て？」

フィン「だって友達だから（ニコッ）」

悠里「（何だろうコイツ）」

時は過ぎて放課後。

？「ねーさーん！かえろー！」

全（フ以外）「だれ？」

フィン「セシル、私ね早速友達で来たよ！」

？「なんだってー！？」

ツナ「フィンちゃん、誰、その人？」

セシル「私はアメイラ・K（カル）・セーシャル。通称セシルです。姉のフィンとは双子なんです！」

獄寺「見えねー！」

悠里「と言うか、妹のほうが可愛い」

フィン「グサリ」

鐘「確かに言えてるな」

フィン「グサグサリ」

山本「モデル体型なのな」

フィン「グサグサグサリ」

セシル「皆ありがとう！」

フィン「グサグサグサグサリ。
ただ今、現実逃避に走りました。御用のある方は、頑張って引き戻してください」

悠里「な!?何があったの!?」

セシル「あ、姉さんね、ブロークンハートすると、現実逃避してなかなか帰って来れないの」

ツナ「悪いことしちゃった……？」

セシル「気にしないで。ねえ、一緒に帰ってもいい？」

山本「いいぜ」

ツナ「うん」

悠里「ま、たまにはいいんじゃない？」

鐘「悠里が言うなら」

獄寺「勝手にしろ」

セシル「よし、帰ろう」

ゾロゾロゾロゾロ

フィン「はっ。置いてかないでえええぇぇえええええ！！！」

進級（後書き）

和「うわー何か新キャラいるよ？」

フィン「こんにちは。作者さんのご好意で出してもらった、作者さんの友達でーす！」

理沙「正確には、作者さんの友達をモデルとしたキャラクターです」

セシル「やっほ～。私は、その友達によって作り出されたキャラクターでーす！」

和「正確には、本当は存在しなかったけど、その友達のわがままによって編み出されたお邪魔キャラ」

フィ／セ「本音をいうな～！！！」

設定パート４

アメイラ・Ｃ・フィノーレ（通称フィン）

年齢：１３歳

誕生日：二月五日

血液型：Ｏ型

身長：１６０？

瞳：茶色

髪：茶髪のショートカット

性格：テンションの高低差が激しい。
　キレルと男っぽくなる。

追記：独裁主義者の多いナチスファミリーに所属している。が、本人曰く『自分は社会主義者』。意外と幹部だったりする。

一年のころはベルと同じクラス。

アメイラ・K・セーシャル（通称セシル）

年齢：13歳

誕生日：二月五日

血液型：A型

身長：158cm

瞳：緑がかった黒

髪：ブロンドのショートカット

性格：フィンとは違って表裏が殆ど無い。基本的におしとやか。

追記：フィンと同じくナチスファミリーの幹部。何とか主義者と言うのは大して気にしてない。

一年二年とCクラスのため、殆ど、と言うか休日ぐらいしかツナたちとの接触は無い。

フィ／セ「みんな、忘れないでねー！」

ツナ「いい天気だね」

獄寺「そうですね」

悠里「ポカポカ陽気が眠気を誘う」

フィン「言えてる～」

鐘「言えてない」

セシル「鐘さんの言うとおりです」

悠／フィ「それもこれも、この全てを包み込むような大空のせいだ」

山本「聞いてないのな」

リボーン「オメェら何訳のわかんねえことしてんだ？」

ツナ「だったら早くここに呼び出した理由を教えてよ」

今現在、いつものメンバー（＋フィンとセシル）は川原にいた。全員リボーンに呼び出されたのだ。

リボーン「今日はオレ様の知り合いを紹介しようと思ってんだ」

鐘「今までにも知り合いが居たんじゃねえの？」

リボーン「今日は昔からの腐れ縁だ」

ピカ――――ッ

悠里「ワォ。おしゃぶりが光ってる！」

リボーン「来たか」

？「おい、リボーン。用って何だ、コラ！」

リボーン「下りて来いコロネロ」

バサバサ

コロネロ「さっさと用事を言え、コラ」

ガスッ

リボーン「こいつらを紹介しようと思ったんだ」

ガスッ

ガスッ

リボーン「それだけだ」

ガスッ

悠里「もしもーし」

リボーン「紹介するぞ。オレ様と同じアルコバレーノのコロネロだ」

鐘「アルコバレーノ？（マーモンと同じってことか）」

コロネロ「そうだぞ、コラ！お前たちがリボーンの教え子か？」

悠里「いつから教え子になった？」

鐘「さ？」

コロネロ「とにかくよろしくだ！」

コロネロ（後書き）

次回、やっと、やっと

黒・曜・編だあああああ！！！！！

隣町ボーイズ来たる（前書き）

骸「クフフフ……ようやく僕の出番が来たようですね」

犬「やったれす！骸さんやったれすよ！」

千種「犬、五月蝿い」

犬「んだと、このダメ眼鏡！」

作者「あ、犬と千種は最初からですけど、骸はもっと後だよ」

犬「げっ！？」

骸「クフフフフフ」

犬「む、骸さん……？」

骸「では作者さん。犬にはお仕置きをしておくので先に進めて置いてください」

作者「了解♪」

犬「理不尽だびょん！」

ダッ

骸「クフフ逃がしませんよ」

ダッ

千種「……（やれやれ」

トテトテトテ

作者「それじゃ、黒曜編にＬｅｔ、ｓ　ｇｏ♪」

隣町ボーイズ来たる

夜九時。

ドスッ

どさっ

風紀委員「うっ　ぐはっ」

風紀委員「うう……」

？「よえーよえー。風紀委員恐るるに足らーず！」

風紀委員「貴様ら…何者だ…」

？「んあー？遠征試合にやってきた隣町ボーイズ？」

？「それ、つまんないよ。早く済ましなよ犬」

犬「恨まないでね～。上の命令だから」

風紀委員「まてっ…やめっ…うぎゃあああ！！！」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

悠里「また！？これで八人目だよ！」

草壁「はい、分かりました（ピッ）」

雲雀「それで、なんだって？」

草壁「はい。風紀委員以外にも何人も襲われているようです」

雲雀「ふうん。それじゃあ悠里――――」

悠里「ねぇ恭弥。これ何？」

雲雀「（イラッ）なにが？」

悠里「これこれ。この壊れた時計」

草壁「今までやられたもの全員、それが置いてありました」

悠里「へ～そっか」

雲雀「襲われたものは中央病院に運ばれているから、被害状況を確認してきて」

悠里「ん。了解」

タタッ

～病院～

悠里「ウソ……なにこれ」

病院に駆けつけた美鈴が見たのは、溢れんばかりの並中の生徒。

悠里「こんなにも沢山の人が襲われてるって訳？」

ピッピッピッ

悠里「あ、ベル。大丈夫？」

鐘『今、黒曜中を名乗る変な奴をまいたとこ』

悠里「襲われてたんかい（汗）気をつけてね。今、被害状況を確認するのに、病院にいるんだけど、そこらへん並中生ばかり」

鐘『マジ？』

悠里「マジ。去年ツナと戦った持田先輩、あいつもやられてた」

鐘『ふーん。姫も気をつけてね』

悠里「大丈夫だよ。それじゃ」

プチッ

Ｐｒｒｒｒｒ

《雲雀恭弥》

悠里「どうしたの恭弥」

雲雀『これ以上はきりが無い。学校に戻ってそっちの警備をして』

悠里「分かった。それと、鐘が敵と接触した。相手は黒曜中の生徒」

雲雀『黒曜中？……分かった』

ピッ

～学校～

悠里「やっぱり人が少ないな」

山本「おっす、悠里」

悠里「山本は無事だったか。獄寺は？」

山本「まだ来てねえよ」

鐘「襲われてんじゃねえの？」

フィン「物騒なこと言わないでよ」

鐘「でもわかんねえよ」

悠里「そうだよ」

ガラガラガラ

先生「授業始めるぞー」

山本「あ、先生来たのな」

～・～・～・～・～・～・～・～・

ガラガラ

悠里「（あ、獄寺来た。あいつも無事だったか）」

先生「コラ獄寺！遅刻だぞ！」

獄寺「ああ？（ギロッ）」

先生「ひいぃっ」

鐘「おもしっ♪」

獄寺「（どーなってんだ？欠席してる奴は多いし十代目も来てねえ）」

現状を知らないのは獄寺だけ。

獄寺「（かったりーっ）あ、切れた」

ガタッ

獄寺「ケータイの電池切れたんで帰ります」

悠里「（早っ！？）」

先生「おい獄寺！！貴様遅刻してきて今来たばっかりだろー！！」

山本「ん？もう昼休みか？」

先生「山本！お前も寝てばっかりで！」

山本「（まだ獄寺もツナも来てないのか）」

Ｐｒｒｒｒｒｒ

先生「誰だ？授業中にケータイ鳴らしてるのは！」

ピッ

悠里「もしもし、あ、ツナどーしたの？」

先生「五月か！」

ツナ『悠里！獄寺君いる？』

悠里「残念だけどたった今帰った」

ツナ『ええ！？そんな！』

悠里「なにかあった？」

ツナ『襲われている人の規則性が見つかったんだ！』

悠里「！？　それで？」

ツナ『次が獄寺君なんだよ！』

悠里「なに――――――――っ！！」

全「（ビクッ」

悠里「誰か獄寺を止めにいって！じゃないと……今度はアイツが病院送りだ！」

フィン「どーゆーこと？」

悠里「ツナが襲われた人の規則性を見つけた。次が獄寺、そして、山本お前だ」

ツナ『とにかく、オレは急いで獄寺君を探すから！』

悠里「ああ、急げ」

ピッ

山本「オレ、獄寺のこと探してくるわ」

悠里「お前はバカか！？今外に出たら、どうなるか（ダッ）って、人の話を聞けええぇ！！」

先生「山本！！……ったく」

Ｐｒｒｒ

先生「またか！」

悠里「先生静かに！草壁から！」

ピッ

草壁『悠里さん、委員長が敵アジトに乗り込みました』

悠里「な……！！」

鐘「今度はどったの？」

悠里「恭弥が、単独で敵アジトにいったって」

フィン「ホント！！」

草壁『ですのでもう安心です』

悠里「そうであることを祈るよ」

草壁『はい？』

悠里「何でもない。報告ありがとう」

ブチッ

悠里「……あのバカ（ボソ）」

先生「……えー、今日の授業はここまでにします」

鐘「マジ？ラッキーじゃん」

そして、その数分後。学校中に、学校閉鎖の放送が流れたとさ。

仲間のために何ができる？

※獄寺がやられる辺りからなので、ご了承ください。

獄寺「ふ～チョロいぜ」

ツナ「ご、獄寺君！大丈夫！？」

獄寺「十代目！？まさか、オレを心配して！？

ご心配なく！獄寺隼人、たった今敵を撃退したところです！」

ツナ「なあ！？（この人ドンだけ強いんだよ！）

でも、よかっ（ガラガラ）！！！？」

千種「……ボンゴレボスが自ら来たか」

ツナ「（（ぞくっ）あの人が黒曜中の人……？思ったよりこえーっ）」

獄寺「ちっまだ生きてやがったか…ッ

十代目、ここはオレに任せて逃げてください！！」

ツナ「でも……足がすくんで動けない（ブルブル）」

獄寺「な！？」

千種「壊してから連れて行く」

ビュッ

ツナ「ひいいぃっ」

サクサクッ

ツナ「……え？」

獄寺「逃げて…ください……十代…目（どさっ）」

ツナ「そんな！獄寺君！！」

千種「邪魔者はいなくなった。次はお前を壊す」

ビュッ

？「危ない！」

キキキンッ

ツナ「な、何！？（ズザァッ）うわっ」

千種「？？」

山本「助っ人とーじょーっ」

悠里「大丈夫かツナ！」

ツナ「山本！悠里！

（はっ）獄寺君！」

悠里「しっかりしろ！」

山本「コイツは穏やかじゃねえな（キッ）」

ツナ「（めったに怒らない山本が切れてる）」

千種「山本武…お前は犬の獲物…もめるのメンドイ…

シャワー浴びたい…（フラフラ）」

ツナ「行ってくれた……」

悠里「この針、毒が仕込んである…。ちっ」

パカッ

悠里「山本、何か傷口をふさぐ布、用意して」

山本「お、おう」

ツナ「悠里？一体何を……？」

ポタ…ポタ…

獄寺「ぐあっ」

ツナ「獄寺君！ちょっ何してんの！？」

悠里「解毒だ。研究の試作品、持ち歩いてて正解だった」

ツナ「（いつの間にそんなの作ってたのーっ（ガーン））」

山本「これでいいか？」

悠里「うん、丁度だ」

ギュッ

悠里「よし、ひとまずは安心だから、病院連れてくよ！」

ツナ「そ、そうだね」

？「いや、病院は危険すぎる」

リボーン「学校の保健室に連れてけ」

ツナ「リボーン！」

山本「お、それいいアイディアなのな♪」

悠里「私は、奴を追う。風紀委員としてね」

ツナ「えっちょっ（ダッ）悠里！」

山本「アイツ、大丈夫か？」

リボーン「ほっとけ。行くぞ」

～保健室～

ビアンキ「なぜ？

どーして隼人が入院してるのがここなのよ」

シャマル「ビアンキちゅわ～ん（ハート）」

ビアンキ「よるな！」

バキッ↑蹴

シャマル「なんだよー。病院は危険だからってリボーンが連れてきたんだぜ。男の診察はしねーけどベッド貸してんだしさー。いーじゃん。おじさんとあそぼーぜ」

ビアンキ「良くないわ！」

ガツ↑殴

シャマル「ボヘッ！」

ビアンキ「隼人の看病は私が付きっ切りでするわ！！邪魔するのなら出てって！！」

山本「ビアンキ姉さん」

ツナ「ビアンキ」

シャマル「んなことしたら…治るもんも治らんぞ」

ツナ「確かに」

山本「ハハハ」

ビアンキ「山本武。何がおかしい？」

山本「え…オレ？」

ビアンキ「場合によっちゃ殺すわよ…」

ツナ「……」

パタン…

山本「……ツナ？」

シャマル「そりゃーそーと、この治療誰がしたんだ？」

山本「悠里だぜ」

ビアンキ「何かあったの？」

シャマル「いや。コイツはちゃんとした奴じゃないと治療はできない状態のはずだ。それを解毒までしてある」

山本「さーな。でも、アイツ自分で『自分は科学者だ』って言ってたぜ」

シャマル「科学者…ねぇ」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

ツナ「オレのせいで…オレのせいで獄寺君が…」

リボーン「へこたれてる暇はねーぞ」

ツナ「お前、出てくんのが遅すぎんだよ！何やってたんだよ！」

リボーン「イタリアで起きた集団脱獄を調べてたんだ」

ツナ「はあ？だつごく？」

リボーン「ああ。二週間前に大罪を犯した凶悪なマフィアばかりを収容する監獄で脱獄事件が起きたんだ。脱獄犯は、看守とその他の囚人を皆殺しにしやがった。

その後、マフィアの情報網で脱獄の主犯はムクロという少年で、部下二人と日本に向かったと言う足取りがつかめたんだ。

そして、黒曜中に三人の帰国子女が転入し、あっという間に不良を絞めたのが十日前のことだ。リーダーの名前を六道骸」

ツナ「な！！まさかムクロって…！もしかして同じ人――！？」

リボーン「（コクリ）」

ツナ「あっちょっと待って。それって、何気相手がマフィアってこ

と!?」

リボーン「逆だぞ。奴らはマフィアを追放されたんだ」

〜???〜

ガタ…

骸「ああ。千種ですか?」

どさっ

骸「! おや、当たりが出ましたね」

犬「千種帰ってきましたー?

あら!っひゃーだっせー!血まみれ黒こげじゃん。レアだよレア…。

っひゃ、血いうっまそ!」

骸「噛むな犬!」

ピタ

骸「気を失ってるだけです。ボンゴレについて何もつかまず千種が手ぶらで帰ってくるはずが無い。

目を覚ますまで待ちましょう」

犬「そー言えば骸さん。一つぃーれすか？」

骸「なんですか犬？」

犬「骸さん、やっと出番来ましたね」

骸「クフフフフそうです。やっと僕の出番が――――」

作者「もうすぐ終わるけどね」

骸「……」

犬「やな予感がするびょん……」

骸「犬、後で覚悟して置いてくださいね」

犬「結局！？」

～並中～

ツナ「あ～～～～～

　何でこんなことになるかな～～～！！」

リボーン「とにかく骸たちを倒すしかねーな」

ツナ「バカ言え！！そんな奴らに勝てるわけねーだろー！！？」

リボーン「できなくてもやるしかねーんだ」

ツナ「はあ！？」

リボーン「初めてお前宛に九代目から手紙が来たぞ」

ツナ「なー！九代目だって！！」

リボーン「読むぞ。

“親愛なるボンゴレ十代目。君の成長振りはそこにいる家庭教師から聞いているよ。
さて、君も歴代ボスがしてきたように、次のステップを踏み出すときが来たようだ。
君にボンゴレの最高責任者として指令を言い渡す。十二時間以内に六道骸以下脱獄囚を捕獲、そして捕らえられた人質を救出せよ。
幸運を祈る。

九代目”

ツナ「ちょっなんだよこれー！」

リボーン「“追伸　成功した暁にはトマト百年分を送ろう”」

ツナ「いらねーよ！！（ガーン）」

リボーン「“因みに断った場合は裏切りとみなしぶっ殺……」

ツナ「わーわーわーっ聞こえない聞こえないー！！」

ダッ

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

ツナ「ったく冗談じゃないよ。リボーンの近くにいるとろくなことが無い」

主婦「あら」

主婦「あの子並中生でしょ？」

主婦「例の事件で今日学校閉鎖したんでしょ？」

主婦「大丈夫かしら。ふらついてて」

ツナ「はっ（そーだった…町も全然安心じゃない！（ガーン））」

リボーン「逃げ場はどこにもねーぞ」

ツナ「リボーン！！」

リボーン「しかも獄寺を襲った奴にお前がボスだってばれてんだ。奴らは直接お前に狙いをつけてくるぞ」

ツナ「ひいいいそーだった――――――！！リボーン！どーしよー！！怖ぇーよ～～～！！」

リボーン「もう分かってるはずだぞ」

ツナ「！」

リボーン「奴らがお前を探すためにやったことを忘れるな。
お前が逃げればその分被害はさらに広がることになるぞ」
ツナ「……そ…そりゃあ
そりゃあオレだって奴等のやり方はおかしいと思うよ。皆まで巻き込んで…
骸って奴ムカつくよ！
だけどあのヒバリサンだって帰ってきてないし、悠里も連絡一本もくれない。
そんな奴ら、ダメツナのオレに倒せっこ無いよ…
無茶だよ…」
リボーン「だけど、まわりはそうは思ってねーぞ」
ツナ「え？」
？「お！いたいた。オレも連れて行ってください！」
ツナ「え…」
獄寺「今度はメガネヤローの息の根止めますんで！！」
ツナ「獄寺君！！つーか怪我は大丈夫なの？大怪我だったよ！！」

獄寺「悠里に助けられましたよ。あいつの使った薬、そーとー効き目がよくって、全快です！」

ツナ「良かった！」

？「オレも行くぜツナ！今回の黒曜中のことはチビに全部聞いたぜ」

ツナ「！」

山本「学校対抗のマフィアごっこだって？」

ツナ「（騙されてるよ山本――！！（ガーン））」

？「私も行くわ」

ビアンキ「隼人が心配だもの」

獄寺「ほげーっ」

ツナ「（逆効果ー！！）」

リボーン「よし。敵地に乗り込むメンツは揃ったな」

ツナ「マジかよ！」

リボーン「守りから攻めに転じるときだ。やつ等のアジトは新国道ができて寂れた旧国道の一角だと思われる。多分人質もそこにいるはずだ」

ツナ「人質？」

リボーン「ああ。お前たちの良く知っている人質がな」

いざ、突入！

奈々「ツナ帰ってたの？」

ツナ「うん」

奈々「あら？お気に入りに着替えて、遊びに行くの？」

ツナ「えっ（ドキッ）え…まあ…」

奈々「今日はやめといたら？また並中生が襲われてるらしいじゃない」

ツナ「（今まさにその元凶に乗り込もうとしてるんだけど…）」

奈々「鐘君や悠里君。大丈夫だった？」

ツナ「あ…うん。鐘も襲われたけど何とか撒いたって。悠里は……獄寺君を襲った相手を追いかけたっきり連絡が無くって…」

奈々「まあ。心配ね」

ツナ「そうだね」

？「準備はできたか？」

そこにはのっぺらな丸い顔をした誰か。

ツナ「どなた――――っ！！？」

リボーン「（ぺろん）オレだぞ」

ツナ「な、なんだよお前かよ。何だ？その丸いの？」

リボーン「レオンだ」

ツナ「ふ～ん……ってレオン！！？どーしちゃったの！？」

リボーン「繭になったんだ」

ツナ「マユ？」

リボーン「ああそうだぞ。レオンがこうなる時はいつもオレの生徒は死に掛けるんだ」

ツナ「不吉～～～～～！！

それってあのディーノさんも～～～！？つーか行く前にそーゆーこと言うか～～？」

リボーン「ああ、それとな。

オレは戦わないから頑張れよ」

ツナ「え――――――マジで――――――！？お前いるから脱獄犯相手でも何とかなるかもって思ってたのに！！」

リボーン「今回の指令はツナへのもんだからな。オレは“死ぬ気弾”以外撃てない掟なんだ」

ツナ「最悪の掟だな！！！」

リボーン「因みに死ぬ気弾もあと一発しかねーからな」

ツナ「へ？」

リボーン「死ぬ気弾はレオンの体内で生成されるから今は作れねーんだ」

ツナ「そーだったの～～！？」

リボーン「死ぬ気弾はボンゴレ伝統の素弾を形状記憶カメレオンの体内に三日間埋め込んでできるんだ。ちょうど貝で真珠を作るみてーにな」

ツナ「レオンってそんな重要なペットだったんだ…」

リボーン「だから死ぬ気弾をアテにすんなよ」

ツナ「死ぬ気弾一発しか撃たれないのはいいけど、どっちみちやべーよ。どーしよ～～～～～～っ」

ピンポーン

？「おじゃまします！」

山本「いよいよだな！茶と寿司差し入れな」

ツナ「（行楽気分だ――！！つーかマフィアごっこだと思ったまま

連れて行っていいのか――――――!!?）」

？「ケンカ売ってんの山本武」

ビアンキ「私の弁当へのケチかしら」

ゴオオオ

山本「え…じゃあ、両方どーすか？」

ツナ「（最近この二人が火花散ってる～～～っ）

後は獄寺君だけだね」

山本「アイツが遅れてくるなんて珍し＝な」

リボーン「とっくに外で待ってるぞ」

ツナ「！　（ビアンキ警戒して怪しい人になってる――――――！）

（でも本当に良かったな…。オレをかばって倒れたときは、もっと重症で死んじゃうかと思ったよ……）」

獄寺「くそぉ…近寄れねーぜ…」

ツナ「獄寺君…？」

獄寺「十代目!!
　いやあ、すばらしい門柱に見とれてました（焦）」
ツナ「ビアンキなら大丈夫だよ」
獄寺「!」
ツナ「うまく言ってビアンキに顔の一部を隠してもらったから。それなら大丈夫でしょ?」
獄寺「えっマジスか!?（ぱあ…）」
ビアンキ「隼人も子供ね」↑リスの着ぐるみ
獄寺「（違う意味で一緒にいたくね――――っ）」
リボーン「よし、揃ったな。骸退治に出発だ!!」

ツナ「ここだ」

ビアンキ「静かね…」

リボーン「新道ができてこっちは殆ど車が通らねーからな」

ツナ「うわっ既に不気味だ」

獄寺「これ一体が廃墟ッすね」

リボーン「ああ…ここは昔、黒曜センターって言う複合娯楽施設だったんだ」

ツナ「ん…？黒曜センター…？……あっ

　オレ昔ここに来たことある！！そーだそーだ！！ここってカラオケとか映画館があって、他にもちょっとした動植物園があった」

リボーン「改築計画もあったらしいが、おととしの台風で土砂崩れが起きてな、それから閉鎖してこの有様だ」

ビアンキ「夢の跡ってわけね……」

獄寺「カギはさびきってる…。奴らはここから出入りはしてませんね。どーします?」

ビアンキ「決まってるわ。正面突破よ」

ブショアア…

ツナ「なっちょっビアンキ!」

ビアンキ「ポイズンクッキング溶解さくらもち」

ブシュウウ

リボーン「よし、突入だ」

山本ＶＳ犬

リボーン「よし、頂上を目指しつつ、建物をしらみつぶしに見ていくぞ」

ツナ「ひい。緊張してきた～～～っ」

山本「いや～～マジすげーなー。超本格マフィアごっこだな」

ツナ「だから山本～～～～～～！！」

リボーン「ツナ」

ツナ「！？」

リボーン「来たことがあんならお前が案内しろ」

ツナ「な…えー！？来たっつっても超昔だぞ～～～！しかもあの時は悠里に引っ張られてたし…

　オレが覚えてんのは、確か、ゲートを入ってしばらく行くと、ガラス張りの動植物園があって…」

ビアンキ「そんなもの無いじゃない。あなたの目は節穴だわ」

ツナ「なっ」

獄寺「アネキ！」

山本「んー？何か動物の足跡だな…まだ新しい。犬か？にしちゃあ大きすぎるな」

ビアンキ「爪の部分…血よ」

ツナ「ひい…まさかまだ動植物園の動物がいるとかー！？」

獄寺「そんなまさか…」

ツナ「そ…そーだよね。こんなでかい動物いなかったし……」

ビアンキ「あら？木の幹がえぐられてるわ……」

リボーン「何かの歯形だな」

ツナ「え〝――っ！！気をまるかじりする動物なんている～～～～！？」

獄寺「！　あのオリ…」

ツナ「え…あれこそ前にあった動物園の廃棄物じゃあ」

獄寺「あそこ…よく見てください」

ツナ「食いちぎられてる――っ！」

獄寺「気をつけてください、何かいる！」

ガササ

獄寺「後ろだ!!くるぞ!!」

ビアンキ「こっちよ!早く!!」

ミシ…

リボーン「ん?」

?「かかったびょーん」

バリーン

どだっ↑山本　転

ミシ…ミシ…ミシ…

バリンッ

山本「うわあああっ」

ガシャーン

?「いらっしゃーい」

ツナ「!

　何…?今の…」

獄寺「人影に見えましたが……」

ツナ「つか山本は!?」

ビアンキ「落ちたわ」

リボーン「ツナの記憶は正しかったな。動植物園は土砂の下に埋まっちまってたんだ」

ツナ「じゃあここ、屋根の上～～～～!!山本大丈夫～～!?」

山本「いっつー」

ツナ「あんなところまで～～!?」

推定十五メートル程下。

獄寺「あのバカ足引っ張りやがって!」

山本「まいったなハハハ…」

ツナ「(笑ってるし……)あ!!

山本ッ!右になんかいる!!!!」

山本「!」

ガルルルル…

ツナ「何だあれ!?け、獣!?」

リボーン「これだけ離れちゃ手ーだせねーな」

ツナ「そんな!!山本が――――!!!」

獄寺「山本気をつけろ!!カゲに何か獣がいるぞ!!」

？「カンゲーすんよ。山本武」

山本「!?」

？「柿ピー寝たままでさー。命令ねーしやることねーし超ヒマだったの。そこへわざわざオレのエモノがいらっしゃったんだもんな」

犬「超ハッピー」

山本「お?」

ツナ「あれ?人だよ……人間だよ!!」

獄寺「黒曜の制服!!」

犬「上の人たちはお友達～～?首を洗って待っててねーん。順番に殺ったげるから」

ツナ「ひいっ（この人もヤバイ感じプンプンしてるー!!）」

山本「ハハハハ」

犬「?」

山本「あのえぐられた木とかもお前が作ったのか?スゲーのな」

ツナ「（山本、まだ遊びだと思ってる――――！）」

獄寺「あのバカ…」

犬「……もしかして天然？まっいいけど…

よーい…ドン！」

山本「おい」

犬「ギューン！！」

ダンッ

カチャ

犬「ひゃほっ」

クルルルルル…

ツナ「なっなにあれ！？」

獄寺「人間技じゃねぇ！！」

犬「ウキッ」

山本「！」

犬「いったらっきま～す！！」

山本「なっ」

ガツ

バキンッ↑山本のバット折

ヒュンヒュンヒュン

ツナ「山本のバットが――――――！！」

サクッ

犬「ヒャホ――――ゥ！！次はノドヲえぐるびょん」

ポロポロ…

ツナ「ひいいっ木とかえぐったのってやっぱあの人ー！？」

獄寺「ありゃ人間じゃねー！！呪いか！？呪いかー！？」

山本「フー」

ツ／獄「！？」

山本「なるほどな。マフィアごっこってのは加減せずに相手をぶっ倒してしていいんだな。

そういうルールな（キッ）」

ツナ「山本…怖がるどころか……」

リボーン「アイツあー見えて負けん気強ぇからな。バットを折られて心中穏やかじゃねえぞ」

山本「やり合う前に一つ聞いていいか」

犬「んあ?」

山本「お前ナリ変わってねーか?いつ変装した?爪伸びたし…」

犬「ゲ……やっぱ天然…(ガーン)」

ツナ「(ゴーン)変わったことにすら気づいてなかった!!)さすが山本…」

犬「まーいーや。教えちゃう。

ゲーム機ってカセット取り替えるといろんなゲームできるっしょ?それとおんなじ」

全「歯!?」

犬「カートリッジを取り替えると(カチャ)いろんな動物の能力が発動するわけよ(カシャン)」

ギギギ…ドンッ

犬「コングチャンネル」

ビアンキ「アレは霊長目オランウータン科ニシローランドゴリラね」

ツナ「うそ――――!?ありえねー!!」

山本「うおすげー。最新のドーピングかよ」

犬「だーかーらー（ガッ）ちがうんよ!!」

ブンッ

山本「うあっ」

ガシャアン

ツナ「山本!」

獄寺「くそっ暗くてよく見えね!!」

どさっ

山本「いつつあんにゃろ…」

犬「ほらほら休むなよ～～～。どこに逃げてもすぐにわかっからね。暗いところでもオレは

見えんだよーん」

ゴアッ

山本「くっ」

ツナ「山本！」

獄寺「ちっ見てらんねーぜ」

リボーン「ボムはやめとけ。爆発に建物が耐えられず、山本が生き埋めになるぞ」

獄寺「くっ」

犬「ホイ！ソラ！」

ビアンキ「刀を折られて圧倒的に不利だわ。リーチがないから相手の懐に入らない限り、勝機はない」

リボーン「山本にその戦いができるか？」

ツナ「え？」

リボーン「見ろ。あいつは体をかばってるぞ。まるで相手を倒しても怪我しちまったら負けみてーにな」

ツナ「そうだ！野球部はもうすぐ秋の大会があるんだ！山本、スタメン入りできたって、喜んでたし！！」

犬「逃げてばっかじゃん。もしかしてオレ相手に持久戦に持ち込もうとしてんのか？」

山本「いや――――そーゆー訳じゃないんだが、オレにはマフィアごっこ以外にも大事なもんがあってよ」

ツナ「（そーだよ。山本にとっては野球が一番なんだ）」

犬「わけわかんねーぞ、ボケ」

ビュッ

ツナ「やばいよ！！こんな所に山本連れてきちゃいけなかったんだ！」

リボーン「そんなに心配なら、お前が助ければいいだろ？」

ツナ「？」

リボーン「いってこい」

どんっ↑蹴

ツナ「うわっ

うぎゃあああ！！！」

どずーん

ツナ「げふっ」

獄寺「何やってんすかリボーンさん！」

リボーン「黙ってみてろ」

ツナ「いで～～～～～！！死んだかと思った～～～」

山本「ツナ！！」

犬「んあ？ザコのお友達れすか？よーし、山本逃げるし、先にウサギ狩っとくかな～」

山本「な」

ツナ「うぎゃー！！きたー！！食べられる――！！！」

ガッ

犬「んあ」

山本「お前の相手はオレだろ？こいよ。こいつぶち当ててゲームセットだ」

ツナ「たっ助かったー。山本――」

犬「ほへ――挑戦状だ。面白そーじゃん。んじゃオレも本気を見せちゃおっかな（カチャ）」

ザッザッ

犬「チーターチャンネル！」

ツナ「めっメチャメチャ速え――――っ！」

山本「くっ（ビュッ）」

犬「はずれっ。いたらき！！」

ガブッ

ツナ「山本！」

山本「そいつは」

犬「お互い様だぜ！！」

メキメキッ↑山本の腕が～～～！！！

ビアンキ「！！」

獄寺「アイツ、ハナから腕一本くれてやるつもりで……！！」

ツナ「ええ――――――！？」

リボーン「（キラーン）」

ガッ

犬「キャンッ」

どさっ

ツナ「ああ…

（山本の腕が…。オレを助けるためにこんな戦い方…）

ゴメン山本!!オレのせいで腕を…野球あんのに!!大会あんのに!!」

山本「おいおい勘弁してくれよツナ。ダチより野球が大事なんてありえねーだろ。それにこれくらいの怪我じゃ余裕で野球できるぜ」

ツナ「すげえ!!!でもメキメキってさっき…」

勝者　　山本!!

全「遊ぶなナレ!!」

ゴメンナサイ（渋々）」

ツナ「（渋々って言ってるし（ガーン））」

敵の正体

リボーン「ディーノの情報によると、今倒したのが主要メンバーの城島犬だ。この写真を見てみろ」

ツナ「こ…この三人組!?」

リボーン「ああ。真ん中の奴が六道骸だ」

ツナ「おっかねー…」

写真に写っていたのは犬・千種と、本物とは違う別の六道骸が写っていた。しかし、それが偽者だとは誰も知る芳がなかった。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・

ビアンキ「これでいいわ」

山本「どもっス」

ツナ「……（また動けなくて山本にメーワクかけちゃったよ。本当こーゆーシチュエーション向いてないよなー。へこむよなー）」

山本「チビわりぃ。バット壊しちまった」

獄寺「ったくしょーもねーな」

リボーン「気にすんな。スペアやるから」

山本「おっサンキュー」

ツナ「（替えあんのー！？（ガーン））」

獄寺「まっでもメガネヤローはまだ寝てるらしいし、アニマルヤローは倒したし、意外と簡単に骸をぶっ飛ばせそうですよ」

？「ププッめでてー連中だぜ！！」

ツ／獄「！」

獄寺「アニマルヤローだ」

犬「ヒャハハハハ」

ツナ「さっき完璧に気絶してたのに――――――！！」

犬「引っ掛かったなー。お前たちに口わらねーために、オポッサムチャンネル使ったんだびょん！！」

オポッサム：（有袋目・オポッサム科）

死んだ振りをするのが得意

犬「でもよーく考えてみたら、お前たちに何言っても問題ないじゃん！！

ぜってー骸さんは倒せねーからな！！！全員顔見る前におっしぬびょん！！」

獄寺「（ムカッ）んだと砂まくぞコラ！！」

ビアンキ「甘いわ隼人」

ひょいっ↑岩落

ツナ「あ」

ヒュ――――ン…ゴッ

犬「キャンッ」

獄寺「（ガーン）」

ビアンキ「ヒクヒクしてるけど、あれも死んだ振りかしら」

ツナ「（（ゴーン）やっぱこの女（ヒト）怖え――――――――！！）」

リボーン「だが、奴の言うとおり、六道骸をあなどらねー方がいい。

奴は幾度となくマフィアや警察によって絶体絶命の危機に陥ってるんだ。だがその度にヒトを殺してそれをくぐり抜けて来たんだ。

脱獄も死刑執行の前日だったそうだしな」

ツナ「この人何してきたの――――――！？六道骸やっぱ怖え――――――！！」

千種「骸様」

骸「おや、目を覚ましましたか」

ムクッ

骸「三位狩りは大変だったようですね、千種」

千種「ボンゴレのボスと接触しました」

骸「そのようですね。彼ら遊びに来てますよ。犬がやられました」

千種「！（ガタッ）」

骸「そう慌てないでください。我々の援軍も来ました」

千種「……」

？「相変わらず無愛想な奴ね――。久々に脱獄仲間に会ったってのに」

千種「何しに来たの？」

？「仕事に決まってんじゃない。骸ちゃんが一番払い良いんだもん」

？「答える必要はない」

？「……」

？「スリルを欲してですよ」

骸「千種はゆっくり休んだほうがいい。ボンゴレの首は彼らに任せましょう。

それでは僕は出かけてきます」

千種「骸様どちらへ？」

骸「一位狩りです」

千種「ボンゴレは来ているのに何故？」

骸「……一度会っておきたい人物なのですよ」

千種「……お気をつけて」

骸「クフフ大丈夫ですよ」

敵の正体（後書き）

姫「んあ？」↑犬風に

犬「オレの真似すんな！」

姫「あーようこそ。城島犬さん」

獄寺夫人「どうかしたの？」

犬「骸さんに頼まれて作者からのお知らせを良いに来たびょん」

どSちゃん「それならお願いします」

犬「え～っと、この作者はバカなので、誤字脱字が多いびょん。だから、見つけた人は気兼ねなく指摘をするんだびょん」

姫「なるほどね～」

どSちゃん「昨日なんて、骸っちさんにメッチャ指摘されてたもんね」

獄寺夫人「ま、だそうですので」

ビアンキVS M・M

ツナ「ちょっと……！あの、結構歩いたし、ちょっとや…休まない？

（恐怖と緊張で足が震えてうまく歩けないよ…）」

山本「そーだな。オレ腹へってきたぜ」

獄寺「ついでに飯にしましょうよ十代目」

ツナ「う…うん（ほっ）」

獄寺「あそこなんてどーすか？」

獄寺がさした先にはテーブルと椅子があった。

山本「んじゃ、寿司と茶を配るぜ」

どんっ

ビアンキ「どきなさいよ山本武。はいツナ。緑黄色野虫のコールドスープ」

ブショアアア…

ツナ「虫ですかー！！（ガーン）」

ビアンキ「冷たくて寿司なんかよりおいしいわよ」

ツナ「いや、あの（山本とはりあってるー！！）
（つーかどーしよ～～飲んだら死ぬー！！）」

ブシュウウ

ブクブクブク…

ビアンキ「！？」

ボンッ

ビアンキ「あつっ」

ツナ「わあっ！あぢぢぢ何なの！？このポイズンクッキング」

ビアンキ「私じゃないわ」

山本「ん？弁当が…！？」

グツグツグツ…

獄寺「！！　やべっ！」

山本「伏せろ！」

ボンボンボンボンッ

ツナ「なんなのこれー！！？」

ビアンキ「敵の攻撃を受けているわ！」

ツナ「え　ぇ！？」

山本「どこから」

ヴォォォ…

獄寺「ん…この音…そこか！」

ビッ

ドガン

？「ダッサイ武器。こんな連中に柿ピーや犬は何を手こずったのかしら」

ツナ「あれ、黒曜中の制服だ！！」

山本「ってことは」

獄寺「しかし敵は三人組だったはず。テメェ誰だ！」

M・M「気安くテメェなんて呼ばないで。私はM・M。私だって骸ちゃんの命令じゃなかったらこんな格好しないわよ。

しっかしあんた達、マフィアのくせにみすぼらしい格好してんのね――――」

ツナ「え」↑実はお気に入り

獄寺「な」

M・M「あーさえない男見てると悲しくなっちゃう。男は金よ。やっぱり付き合うなら骸ちゃんがいいわ」

ツ／獄／山「（骸……やはりこいつ……！）」

M・M「まーせーぜーうろたえなさい」

そういってM・Mが取り出したのはクラリネット。

M・M「私はあんたたちをあの世に送って、バックと洋服買い漁るだけ」

ヴヴン

グツグツグツ

山本「やべ」

ボンッ

ツナ「わわ！あの楽器が武器？？」

獄寺「なんなんだこの攻撃は！」

山本「これじゃ近寄れねー」

ボボンッ

獄寺「くっ」

ツナ「わぁっ」

山本「犬って奴に続きまたすげーのでてきたな」

獄寺「ちくしょーどーすりゃ…」

ツナ「ひいい～～～～～～～！！まだ死にたくない～～～～～～～～～～～！！」

ビアンキ「私が行くわ」

ツナ「ビアンキ」

ビアンキ「あなた間違ってるもの。大事なのはお金ではなく愛よ」

M・M「はあ？なんなのこの女。ムカツク」

ビアンキ「その武器は電子レンジと同じ仕組みね。物質に電波を照射して水分子を振動させ、温度を上げる」

M・M「分かったらなんだってのよ。

　そうよ。物質の温度とは物質を作る分子の運動の激しさの度合いのこと。分子の運動が激しいほど、摩擦により物質は高温になるの。

このクラリネットから照射される特殊な音波は分子を一分間に五億回振動させ、物質を沸騰させるって訳。

人間がこの音波を浴びたら沸騰してボンッ！よ。アハハハ」

ツナ「ひいいい！」

山本「マジかよ」

獄寺「何て女だ」

ビアンキ「御託はいいわ。行くわよ。ポイズンクッキング大型料理食べ放題！！！」

ツナ「あんな技あったんだ」

山本「すっげー」

獄寺「おえっ」

M・M「またダッサイ技ね。いいわ、来なさい。あんたの脳ミソからチンしてあげる。

バーニングビブラート！！！」

ヴヴン

ダッ

ツナ「料理を盾にして突っ込む気だ」

山本「うまい…だが届くのか！？」

ボボンッ

ヴウウウウ

M・M「！　（ひるまない……！！）」

ビアンキ「そこまでよ！ラスト、ロールケーキ！！」

M・M「キャアアア！！

　なんていうと思って？」

ビアンキ「！！」

ジャキッ↑クラ分裂

M。M「接近戦も得意なの！！」

ビアンキ「あぐっ」

ツ／獄／山「！」

ビアンキ「……！」

ズザッ

M・M「何が愛よ！金に勝る物があるわけないじゃない！」

いや～ここに主人公ちゃんいなくて良かったね。いたら絶対に

「楽器は大切に！！」

とかいいそうだもんなぁ。

山本「言えてるな」

M．M「（イラッ）うるさいわね。さあ、とどめの一吹きよ」

ツナ「やばいよー！！」

山本「おいっ」

獄寺「待て山本…。もう…触れたんだ」

山本「！？」

M．M「脳ミソを沸騰させてあげる。

！！？　ひぎゃアアア！」

ツナ「クラリネットがポイズン化してる！！」

獄寺「あれはアネキが最近習得した、触れた物をポイズンクッキングにする究極料理…」

ビアンキ「（パチッ）千紫毒万紅！！」

M・M「そんなバキャなぁぁっ（どさっ）ふぎぃぃ」

ビアンキ「大丈夫？（タッ）」

ツナ「え!?」

ビアンキ「よかったわ。お昼寝の邪魔されなくって」

リボーン「すぴ――ッ」

M・M「！」

ツナ「リボーンの奴、見ないと思ったら…」

獄寺「じゃあ、アネキが戦ったのは、リボーンさんの眠りを守るため…」

ビアンキ「愛の勝利ね」

M・M「（バタッ）」

ツナ「ビアンキやっぱ、恐るべし…」

山本「さすがだな」

獄寺「…けっ」

勝者　ビアンキ（愛）

美鈴ＶＳ骸

悠里「くっそ～っ。あのメガネ見失っちまった」

？「クフフフどうかしましたか？」

悠里「（ゾクッ）誰だ！

こ、黒曜生？アンタ何者？」

骸「僕は六道骸。今回の事件の首謀者、とでも言っておきましょうか」

悠里「見つけたぜ！（ダッ）」

キィィン

悠里「恭弥をどこにやった」

骸「恭弥とは、あの軟弱な並盛の風紀委員長ですか？クフフ彼には僕たちのアジトで大人しく寝ていてもらっていますよ」

悠里「こんのぉっ」

キィィン

骸「クフフフどうしましたか？力みすぎていますよ」

悠里「並盛の風紀を乱すものは許さない。並盛に二つ秩序はいらな

いからね」

骸「クフフ見事に彼と同じことを言いますね。そうですね、僕も二つはいらないと思います。だから彼には大人しくしてもらっているのですよ」

悠里「友達を傷つける奴は、許さないからな！！」

骸「そうですか。それなら君にも大人しく眠っていてもらうために、少し本気を出しましょう」

チャキ…ン

悠里「三叉槍か」

骸「そうです、これが僕の相棒、とでも言っておきます。そして

契約の必需品」

悠里「契約とか何のことか知らないけど、そっちがその気ならこっちも本気を出す」

チャキンッ

悠里「僕の刀で切り刻んであげる」

骸「行きますよ（ダッ）」

悠里「来い（ダッ）」

ガキィィン

悠／骸「！！？」

二つの武器が合わさったとき、二人の脳裏に不思議な光景が浮かんできた。

優しく笑う藍色の髪の少年。

無邪気に笑う栗色の髪の少女。

二人は仲良く手を繋いでいた。

骸「これは……」

悠里「武器が共鳴し、持ち主の過去を見せた……」

骸「（あの子はどうしているのでしょうかね）」

悠里「（今のは骸の過去と見て間違いなさそうだな。けど、一緒にいた少女、何か違和感がある）」

骸「おや？戦闘中に考え事ですか？」

悠里「そっちこそ」

骸「（今はあの子を気にしている場合ではない。一気にかたをつけ

ますか）」

悠里「（奴がどう出てくるか予想ができない。ならばここは慎重に……）」

骸「そろそろ」

悠里「！？」

骸「そろそろ終わらせましょうか」

悠里「ああ。そうだな」

骸「クフフ（ヴゥ…ン　一）地獄を苦しみ味わいなさい」

悠里「！！　幻覚！！しかも強い！！」

キイィ……

悠里「！！？　なん…だ…この感覚…？（幻覚とはまた違う…なんだ？）」

骸「（！？　まさか、彼女は幻覚にかかっていないのか！？バカな！）」

悠里「（キイィィイイン）うがっ」

骸「？」

悠里「何だ……右目が…焼けるように…いた…い……（どさっ）」

骸「クフフ当初と少し予定が違いましたが、もしもの場合、彼よりも使えるかもしれない。持ち帰るとしましょうか」

骸は美鈴を担ぐと、足早に黒曜ランドへと向かった。

美鈴の右目にかかっていた前髪がずれ、深紅の瞳があらわになる。

しかし骸は気づかなかった。そこに、はっきりと“六”の文字が浮かんでいることに。

VSバーズ

ツナ「ハア～、さっきの人怖かった～～～っ」

ザ…

？「あの強欲娘のM・Mがやられたのは実に良い気分だ」

ツナ「だっ誰！？」

？「まあまあ落ち着いて

……

これを見てください」

そういって開かれたパソコン。そこには、

？「お友達が狙われてますよ」

ツナ「京子ちゃん！！ハル！！」

京子とハルが映っていた。

？「これじゃ分かりにくいですかねー。あちらをご覧ください」

パッ

全「！」

ツナ「壁にモニターが！！つーかなんであの二人が映ってんのー！？」

獄寺「てめー何をたくらんでいやがる！」

ビアンキ「アンタが次の刺客ね」

？「まーまー落ち着いてと言ってるじゃないですか。ちゃんと説明しますから」

バーズ「私の名はバーズ。その名の通り鳥を飼うのが趣味でしてねぇ。ご覧の映像は可愛い鳥たちに埋め込まれた小型カメラから送られている物です」

花『お兄さんどう？』

京子『さっき寝ちゃった』

ハル『～♪』

ツナ「（ハルの奴勉強してら…京子ちゃん…今までお兄さんのお見舞いに…）

ん?何だ?二人の後ろにさっきから」

ゆら　ゆらり…

ツナ「うわあ!!」

バーズ「気がついちゃいました?アレは私に忠実な双子の殺し屋でしてね、その名もツインズ。

　あんな可愛い顔してますが、刑務所にいる十年間ずっと拘束具をはずしてもらえなかったほどの凶悪な連続殺人犯なんですよ」

ツナ「なんだってー!!」

獄寺「(アレが可愛くないって言ったら負けだろうか……)」

山本「(全然可愛くないのな……(苦笑))」

ビアンキ「あの子達に何する気?」

バーズ「何もしませんよ。あなた達が私に従ってくれさえすれば

　……ね」

ツナ「!!」

獄寺「ふざけんな!!あいつらはカンケーねーだろが!!殺し屋を戻さねーとぶっ飛ばすぞ!!(ぐいっ)」

バーズ「おっと私には触れないほうが良い。でないとお友達が

……バラされちゃいますよ」

獄寺「なっ！」

バーズ「離れていても私は彼らに指示できる。お友達の命は私が握っているんだ。お前らにガタガタぬかす権利はないんだよ。

二度と触れるなボケ」

獄寺「くっくそっ（ぱっ）」

バーズ「ウヒョヒョ。それでは始めましょー。うーん、そ・お・だ・なー。

ではお仲間でボンゴレ十代目をボコ殴りにしてください」

獄寺「なっ」

ツナ「（え…っていうかボンゴレ十代目がオレだって知らないはずじゃ…）」

バーズ「そこの沢田君を殴れと言ったんですよ」

ツナ「（ばれてるー！！）」

獄寺「メガネヤローが起きたのか……」

バーズ「彼女達を無事にお家に帰したいんでしょう？

だったら出血するまで殴ってくださいよ」

山本「無茶言うな」

ツナ「そんな一方的なー！！

（こんなことになるなんて！ど…どーしよ～～！！）」

リボーン「クピーッ」

ツナ「（アイツこんな大事なときにー！！）」

バーズ「まあ、断られても私は困りませんがね」

全「！？」

バーズ「私のもう一つの趣味は人を驚かせることでしてね。驚いたときの無防備で無知で無能な人間の顔を見ると、興奮して鼻血が出そうになる。

例えば、彼女の髪が突然燃え上がったらどんな素敵な顔をするだろう」

ツナ「え？」

バーズ「ウジュ　言ってたらやりたくなってきちゃいました～～～」

ヂヂ『（ジュッ　ボッ）』

ジジ『（ジュッ　ボッ）』

全「！！」

バーズ「さあ、決定的瞬間ですぞー。（ハァーハァーハァー）」

うわーメッチャヘンタイおやじだー。キモーイ！！

獄寺「このヘンタイヤローー……ってナレに先をこされた！？」

山本「今ナレに突っ込むときじゃないだろ」

バーズ「ワケわかんねーこといってるとお友達が――――」

獄寺「ぐっ」

ツナ「待って！！」

バーズ「ん？」

ツナ「分かった！山本、獄寺君殴って！！（ワケわかんない話してないでよ！！）」

山本「ツナ」

獄寺「十代目」

バーズ「ちぇっ　いいとこだったのに（ムスッ）

じゃあ五秒以内に始めてくださいよ」

ツナ「山本…獄寺君…ボボ……ボコってもらえる？

（二人のわけわかんない話で京子ちゃんたちにもしものことがあったら）」↑オイ

山本「バカいうな…（（）内に対して）」

獄寺「んなことできるわけないっス！（本音）」

バーズ「んー？」

バゴォ↑殴

ツナ「ふげっ！」

殴ったのは……次回に続く。

バーズ「なんだそりゃあ！？」

VSバーズ　2

ツナ「うわーっ！！」

どざぁっ

山本「あ…」

獄寺「アネキ！！何てことを」

ビアンキ「私は元々ツナを殺すために日本に来たのよ。こんなもんですんでラッキーだと思いなさい」

ツナ「たったしかに…ん？

（あんまり痛くない…ありがと…ビアンキ）」

ビアンキ「（プイッ）嫌われ役はなれてるわ」

山本「……」

獄寺「ケ」

バーズ「いやあお見事クリアです。次の要求もクリアして、彼女たちも助かりそうですね」

ツナ「え！まだあんのー！？」

バーズ「誰もこれで終わりなんて言ってませんからね――――。

しかし、今のクリアっぷりがよかったので次で最後にしましょう」

獄寺「ヤロー調子に乗りやがって！」

バーズ「お次は（ごそ…）このナイフで沢田さんを刺してください」

山／獄「な！」

ツナ「えー！！！」

ビアンキ「！」

バーズ「ウジュジュジュ。皆さんの今の驚き顔、実に良かったですよ～～～」

ツナ「そんなメチャクチャナー！（やっぱキモイこの人！）」

バーズ「ナイフの柄までぶっすり刺してくださいね。ウジュ」

獄寺「ふざけんな！！ヘンタイヤロー！！（ヘンタイ　ヘンタイ　ヘンタイ　ヘンタイ　ヘンタイ　ヘンタイ！！！！）」↑連呼しすぎ

バーズ「いかんいかん。鼻血出てきちゃいました。そんじゃー決めてください。

やるかやらないか」

獄寺「できるわけねーだろ！」

山本「無茶言うな」

ビアンキ「断るわ」

バーズ「それはありがたきお返事（ハート）

　それでは次のドキドキいきましょう。じっくりこの子から行きましょうか？

　いやー可愛いですな。天使のようだ」

ツナ「京子ちゃん！！」

カメラが少しずつずれていき、ジジが映し出される。更にずれてその手元にあったのは…

ツナ「りゅ…硫酸！？何する気なのー！？」

バーズ「硫酸って人にぶっ掛ける以外使用法ってあるんですか？」

いっぱいあるよー。料理に混ぜたりとか↑オイ！

バーズ「お前は黙っていろ」

・・・・・。ぐすん（泣）

ツナ「ナレぐれた！？」

山本「こんなときにかよ！」

バーズ「今度ナレーションの方にも硫酸ぶっ掛けてあげますよ。まあ、それより先に彼女にやりますがね。

いやー楽しみだ。彼女、痛くて驚くでしょーね！！

ただれてまたビックリ！！」

山本「こいつ！」

獄寺「マジ切れてやがる！！」

良い子はまねしないでね？

バーズ「やっちゃって」

ジジ『ギィ……』

バーズ「ウジュ」

ツナ「まって！！ナイフでも何でも刺すから！！！」

ピタ　↑あー。後1。だった。

山本「ツナ！」

獄寺「十代目！」

ツナ「絶対絶対だめだ!!!カンケーない京子ちゃんをひどい目に合わせるなんて!!」

バーズ「（ウジュジュジュ。なんとまああっけない。ナイフには引っかいただけでも即死する毒がたっぷり塗りこんであるんだ。

趣味の前に仕事終わっちまうな～～～）

それではやってもらいましょうか？制限時間は十秒ですよ」

山本「て…てめぇ!」

獄寺「十代目！もう一度考え直してください」

カチャ…

ビアンキ「すぐに救急車を呼んであげる。ナイフ貸しなさい」

ツナ「いいよ。自分で…やる……」

山本「!」

獄寺「十代目……」

ツナ「（獄寺君と山本だって、自分の事をかえりみずにオレをかばってくれたんだ。オレだって…）

ここここれくらい～～～～～～!!!」

バーズ「ウジュジュジュ」

ボゴッ

ジジ『ギギィィッ』

バーズ「！　どうしたジジ！！」

ジジ『ギ…ギ…』

？『おめーみたいなのがロリコンの印象悪くするんだよ』

全「『あっ！！』」

？『ハーイ京子ちゃん。助けに来ちゃったよ。

おじさんカワイコちゃんのためなら』

シャマル『次の日の筋肉痛もいとわないぜ』

ツナ「Ｄｒ．シャマル！」

バーズ「な、なにぃー！！？シャマル！！？

超一流の闇医者でありながら天才殺し屋と言われるトライデント・シャマルだと！？

何故…何故奴がこんな所に！！」

山本「やるな、保険医のおっさん」

獄寺「おせーんだよヘンタイヤブ医者が!!!」

バーズ「まーまー皆さん落ち着いて。こっちにはもう一人いるんですからね。

ほーら、次はこの子の顔が潰れる危機ですよ。ウジュ」

ツナ「ハル!!」

バーズ「嫌なら続けてもらいましょうか、ボンゴレ十代目。さあ、ナイフを刺してください、今すぐに!!」

？『哈(は)っ!!』

バキッ

ヂヂ『ギギャ!!』

バーズ「!!」

？『やれやれ』

？『ハルさん!怪我ありません?』

ツナ「あれは…」

大イーピン『許せないな、女性を狙うなんて』

大ランボ『ハルさん。ここはオレ達に任せてください』

ツナ「イーピン!!ランボ!!」

バーズ「バカな!!次から次へと。このことは誰にも知られていないはずだ!!」

大イーピン『言われたとおりにハルさんを見張ってて良かった』

シャマル『奴の読みはどんぴしゃりだったな』

ツナ「（言われたとおり?奴の読み?ま…まさか…）」

リボーン「ゴホン」

ツナ「リボーン、お…お前…」

リボーン「よかったな。困ったときに助けてくれる仲間（ファミリー）がいて」

ツナ「うん……ん?ファミリーじゃないだろ!!」

リボーン「さあ、こっちの番だぞ」

バキッ↑蹴

ツナ「うわわわわ（ヨロ…ヨロ）」

ガッ↑殴

ツナ「!!」

バーズ「ぎゃ」

ドザァッ

バーズ「おーいておーいて。おのれ許さんぞーガキの分際で～～！！

　　ヂヂ&ジジ！！何をしている！！こうなれば皆殺してしまえ！！」

ツナ「え〝え〝！！？」

京子『こんにちはシャマル先生』

花『どーして保健のオッサンがここに？』

シャマル『今日は速やかに帰ることをお勧めするよレディ達。オレの戦いっぷりを見たら惚れて眠れなくなっちまうぜ』

ツ／獄「（何言ってんだあのエロオヤジ）」

山本「（ドン引き」

花『やばいよ！こいつヘンタイだって！いこいこ京子』

シャマル『今度チューしよーね！麗しの子猫ちゃーん！フフン♪

　　さーやろーか？にしてもつくづくお前』

ジジ『ギイ〝イ〝イ〝イ〝イ〝』

シャマル「乙女たちには刺激が強すぎる野郎だな。まあ、医者として言っておくがお前は振動症候群（しんどうシンドローム）にかかっちまった。あまり動かんほうがいいぞ

……つっても遅かったか。

発病だ』

ブシャ

ツナ「ひいいあれもトライデント・モスキートの病気の一つー！？怖えーーーーー！！」

バーズ「おのれシャマル！！こうなればもう一方だけでもぶっ殺せ！！」

ハル『はひー何の騒ぎですか？』

大ランボ『オレ達が来たからもう大丈夫ですよ』

ハル『ほえ？』

大イーピン『ランボ。ハルさんをお願いね』

大ランボ「オーケー。さあハルさん、ここはイーピンに任せて安全な場所へ』

ツナ「（ランボ戦わないのー！！？）」

ヂヂ『ギイ〝イ〝イ〝イ〝』

ドゴッ

大イーピン『哈（ハ）っ！』

たっ

大イーピン『白（ハク）（ガッ）撥（ハッ）（ボッ）中（チュン）（グッ）

高三元（ハイサンゲン）！！』

ゴギャ　ボキッ　ベキッ

バーズ「バ…バカな！！すさまじい！！」

ツナ「すげーイーピン。さすが将来有望ランキングベスト3の十年後の姿！！」

バーズ「奴らは双子の悪魔と呼ばれた連続殺人犯だぞ。こんなことが…

やっぱ六道さんのミッションはレベルが高い（焦）

くわばらくわばら（そそくさ…）」

獄寺「どこへ行くんだ」

ドガッ↑蹴

バーズ「ひげっ」

どざっ　ブクブク↑泡

獄寺「げ…一発でのしちまった」

山本「命令する本人はたいしたことねーのな…」

ＶＳバーズ

獄寺の一発蹴りでノックアウト。

抜けられない幻覚世界

美鈴ｓｉｄｅ

美鈴「ん……ここは…？」

目が覚めると、見慣れない場所にいた。

四方を冷たい壁に覆われた、小さくて狭い部屋。

コンコン

壁を叩いてみる。

随分と頑丈にできた壁だなぁ。でも、

パンッ

ガラガラガラ

私の錬金術の敵じゃない。

美鈴「さ～って、ここはどこかなぁ。

……あ」

何か違和感があると思ったら、カツラが無くなっていた。

つまり、今の私は悠里ではなく、美鈴。

美鈴「骸の仕業…かな？」

まあいいや。どーせこの姿を見られたって、悠里であることがばれなければ何の問題も無い。

よし、とりあえずは、

美鈴「逃げるか」

外に向かって走り出す。

出口はあっさり見つかった。

そこから外に飛び出した……はずだった。

美鈴「あり？なんだこりゃ？」

目の前に広がるのは外の風景ではなく、さっきと同じ部屋。

美鈴「どーなってんの？」

もう一度、外に行く。が、結果は同じだった。

美鈴「んー？やばいねこれ」

どうやら幻覚に嵌ってるな。マーモンの幻覚さえも見破る私が。

だがしかぁし！！これでめげる私ではなぁい！！！

錬金術で手当たり次第に壁をぶち壊していく。でぇてこぉい！！出口ぃぃ！！

一時間後

……いい加減疲れたよ？

知らないかもだけどねぇ、錬金術って死ぬ気の炎みたいに、スンゲー気力が必要なんだよぉ？

それを一分間に二回のペースで使ってたから、まあ、持ったほうじゃん？

美鈴「って、ここでくたばってたまるかァァアアッッ」

再発進。

と、その時だった。

腹部に感じた強烈な痛み。

見ると、三叉槍の先が突き出ていた。

振り向いた其処には、不気味な微笑を見せる骸の姿。

そこで、私の意識は途切れた。

骸と陰

ツナ「ねえ、このおっさんといい双子といい、さっきの楽器の女子といい……一体何なの？こんな刺客聞いてないぞー！！」

リボーン「こいつらは骸と一緒に脱獄した連中だな」

ツナ「ちょっとまってよ。骸達三人の他にも脱獄囚いたのー！？」

リボーン「ディーノの情報によると脱獄は結束の固い三人組にM・M・バーズ・ツインズが加わる七人で行われたんだ。

三人組以外の消息は途絶えていたんだが、まさか骸のとこに来ていたとはな」

ツナ「まさかじゃないよ！！」

リボーン「だってだって、ディーノがこいつらはカンケーねーなって言ってたんだもん（プクーッ）」

ツナ「キャラ変えてごまかすな！」

獄寺「にしても、あのおっさんキモかったぜ」

作者「ねー。皆はバーズって何歳だと思う？」

ツナ「あれ、作者が」

獄寺「７０？」

山本「いや、６０とかそんぐらいじゃねーの？」

作者「実は３７！シャマルの二歳年上なんだよ」

全「え――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――っ！！！？」

作者「ビックリしすぎ……（呆）」

ビアンキ「ちょっと静かに！誰かいるわ。
　隠れてないで出てきたら？」

ツ／獄／山「な！！？」

ビアンキ「そこにいるのは分かっているのよ」

？「……」

ビアンキ「来ないならこちらから行くわよ」

？「ま…待って。僕だよ」

全「！」

ツナ「フゥ太！」

獄寺「こ…こんなところに」

山本「逃げてきたんじゃねーの？」

ツナ「と…とにかくよかったー！元気そーじゃんか～～！皆いるからもう大丈夫だぞ！！

さあ一緒に帰ろーぜ！」

フゥ太「来ないでツナ兄」

全「！」

ツナ「え…？」

フゥ太「僕……もう皆のところには戻れない。僕…

骸さんについていく…」

ツナ「な…何言ってんだ……？」

フゥ太「さよなら…」

ツナ「ちょっまてよフゥ太！！フゥ太！オイ待てって！！（タタッ）」

獄寺「十代目！！深追いは危険です！！（ダッ）」

山本「どーなってんだ？」

ビュッ　ドゴッ

獄寺「なんだ!!」

山本「て…鉄柱?」

獄寺「!!」

ザ…ッ

全「(次の刺客か!!)」

~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・~・

ツナ「フゥ太――――!どこ――――!?やっぱさっきんとこ右だったかな…」

コケッ

ツナ「! おっとっと」

こけたツナの目の前に現れた黒曜生。

骸「おや?」

ツナ「ひいっ黒曜生――――!!」

骸「(ニコッ)助けに来てくれたんですね!」

ツナ「え!?」

骸「いやあ助かったー。一生ここから出られないのかと思いましたよー」

ツナ「え～～～～～！？

（もしかしてこの人、黒曜の人質…？そっか…黒曜中も骸に征服されたよーなもんだもんなー）」

ここに居るのが骸本人だとは知る芳もない。

ツナ「あの…期待してるとこ悪いんですけど…まだ…助け出す途中っていうか…」

骸「すっすいません、一人で先走ってしまって。でも、助けに来てくれたという行為に本当に感激しているんですよ。ありがとう」↑アニメの骸カワイかったｂｙ作者

ツナ「いや…そんな～～～（ここに来て初めてまともな人に出会えた気がする～～～（ほっ）何か脱力～～～～）」

骸「すごいな～～やはり選りすぐりの強いお仲間とこられたんですか？」

ツナ「いや…あの…女の人とか赤ん坊もいたりするんですけどね…（言っちゃった！！）」

骸「え…赤ん坊！？こんな危険なところにですか！？」

ツナ「ええ…まあ。アイツは例外って言うか」

骸「へ～すごい赤ちゃんだなー！まさか、戦うとすごく強いとか？」

ツナ「まっまさかー赤ん坊が戦うわけないじゃないですか……（はーっ）

……（はーっ）

いや、実際直接的に戦ってくれたらどんなにいいことかと思うんですけどね（ボソ）」

骸「というと間接的に何かするんですか？」

ツナ「え…まあ…詳しくは言えないんですけど…（死ぬ気弾撃たれんだよなー）

あ…そーだ。それよりヒバリさんって並中生知りませんか？」

骸「ここのどこかに幽閉されています」↑うわ優し

ツナ「やっぱりここにー！どこの建物か分かりませんか！？」

骸「今質問しているのは僕ですよ」

ツナ「え…？」

骸「その赤ん坊は

間接的に何をするんですか？」

風で骸の右目が現れる。

そこには六の文字があった。

ツナ「ひっ（目…目が……！っていうか何か感じが変わった）

そーだ！はぐれちゃったんで皆のところに戻らなきゃ！友達とまた来ます！じゃあまた！」

骸「クフフフ」

千種「やはりあの赤ん坊、アルコバレーノ」

骸「そのようですね。そして赤ん坊は戦列には加わらないが、何か手の内を隠している…。ボンゴレ十代目を手にかけるのはそれを解明してからにしましょう（クスクス）」

千種「……うれしそうですね……」

骸「実際にあって呆気にとられてるんですよ。

神の采配と謳われた、人を見抜く力に優れているボンゴレ九代目が後継者に選んだのは、僕の予想をはるかに超えて弱く小さな男だった…。

何なんだろうね彼は……

クフフフフフフフフフフ」

千種「……（いつまで笑えるんだろう）」

骸「まあ、どちらにせよ、あのアルコバレーノの手の内はすぐに見えますよ。彼等の手には負えないでしょうからね。

あちらの六道骸は」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

ドガガッ

山本「くっくそっ。こっちもふさがれたぜ」

獄寺「やっぱ十代目を追うにはこいつを倒すしかないようだな」

山本「しかしなんつーバカ力だ…」

獄寺「あんな鋼球の直撃を食らったらひとたまりもねーな…

（ズキン）！？　な…っ

（こんなときに…メガネヤローにやられたキズが痛み出しやがった…）

ハァハァ…くそっ。さっさと終わらすぞ怪力ヤロー。こっちゃひまじゃねーんだ」

？「無駄だ。オレには勝てん」

山本「お前は！！」

ビアンキ「写真の六道骸！！」

獄寺「こいつが…」

山本「ついに出てきたな」

ビアンキ「フゥ太に何をしたの？」

骸（一応）「フゥ太…？知らんな。

……（一応）とはなんだ（ボソ）」

獄寺「ぐ…（ガクッ）」

山本「獄寺？」

ビアンキ「ハヤト！！（すごい熱…薬の副作用かしら…？）」

山本「お前の相手はオレがするぜ」

骸（一応）「千蛇烈覇！！」

山本「（遅い…！）」　サッ

ぐん

メキャッ

山本「！？？」

山本「がっ」

リ／ビ「！？」

獄寺「山本！」

リボーン「ヤベーな。こいつはつぇーぞ（カシャン）」

骸と陰（後書き）

姫「あ、久々に来れた」

骸（一応）「おい、何でオレは（一応）なんだ」

ドSちゃん「仕方ないですよ。骸はちゃんといるんですから。

ね、先輩？」

骸（一応）「ぐ…お…」↑“先輩”トラウマ

骸「あなたはSですか」

獄寺夫人「名前を見て気づこうよ。完全にSだよこの人」

姫「うんうん」

骸「なるほど。僕とは気が合いそうですね。

しかし作者さん、

可愛いって酷くないですか!?（ガーン）」

VS骸の陰

ツナ「ハァハァ。フゥ太だけじゃなくてヒバリさんも捕まってたなんて…！悠里は……！？

（にしても黒曜生の人質だった人、変わってたな…。不自然って言うか不気味って言うか…。六道骸の人質になると皆おかしくなっちゃうのかな…）

と、とにかく早く皆と合流しないと、こんな所で敵に出会ったりしたらシャレになんないよ～～～！」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

獄寺「山本！！」

ビアンキ「なぜ！？完全に避けていたわ」

ズズ…

骸（一応）「これで分かったはずだ。貴様らに生きる道はない。希望は捨てろ」

獄寺「こいつ…！」

？「おいおい待てよ。まだ負けちゃいねーぜ」

山本「フー。バット（こいつ）を盾にしなかったらやばかったな」

ビアンキ「山本武」

獄寺「あのバカ……」

リボーン「だがピンチには変わりねーぞ。あの鋼球の謎を解かねーと」

山本「ああ。チビの言うとおりだ」

骸（一応）「抵抗するとは愚かな。無駄なあがきは惨死を招くぞ。

千蛇烈覇！！」

山本「見切ってやるさ」

ガガガガッ

山本「こいつでなっ」

ザッ↑砂煙

山本「鋼球の周りに……！！」

ビアンキ「気流だわ！」

山本「やべぇっ」

ビュオッ

山本「ぐおっ」

どだっ↑転

山本「フー。転ばなきゃ危なかったぜ。

　鋼球の周りに風が起きてやがる。野球のボールは後ろに気流を作りながら進むっつーけど、そんなレベルじゃねーな」

リボーン「鋼球に彫られた蛇に秘密があるな」

山本「!?」

リボーン「あの蛇の溝が球に当たる空気の流れを捻じ曲げているんだ。溝を通って生まれた気流は複雑に絡み合うことで、威力を何倍にも増幅されて烈風を生み出す」

骸（一応）「理解したとて攻略にはならぬ。

　暴蛇烈覇!!（ドン）」

山本「基本に忠実に行くぜ。

　（確実に避けて、投げた直後の隙を突く）」

骸（一応）「無駄だ」

山本「!」

ギュルルル

山本「回転！！」

ゴオオオ…

山本「ぐっ　うああ！」

ゴギャッ

山本「！！！」

獄寺「山本ー！！」

ゴッ　ずず…

骸（一応）「言ったはずだ。希望は捨てろと。

約束通り惨死をくれてやる。止めだ」

獄寺「やろう…まちやが…（ズキッ）うっ」

どさっ

ビアンキ「させないわ」

ブショアアア×2

骸（一応）「オレはまだ三割の力も出していない。貴様に万に一つの勝機もない。諦めろ」

ビアンキ「（汗）」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

ツナ「皆どこー？確かここら辺だったような…

！　発見やっと見つけた！！

え…？あれって…写真で見た六道骸だ～～～～！！！

ひいい！！バックバック！

…ん？獄寺君！！山本！！ビアンキが山本をかばって…！

（ムカァ…アイツ…）

コラァ！！！何やってんだ――――！！！」

骸（一応）「！」

ビアンキ「ツナ！」

リボーン「（ニッ）」

ツナ「あ〝

（何やってんだオレ――――――！？何でランボ叱るみたいにナチュラルに六道骸叱ってんの――――――！）」

骸（一応）「降りてこいボンゴレ」

ツナ「ひっいや…あの…（ど…どーしよー！！）」

骸（一応）「女を殺して待つ（ドン）」

ビアンキ「！！」

ツナ「ビアンキ！」

リボーン「死ぬ気になるのは今しかねーぞ。暴れて来い。

ラスト一発だ（ズガン）」

ガッ

ズジャジャ

ビアンキ「ツナ…！」

骸（一応）「！　（暴蛇烈覇を止めただと……？）」

死ぬ気ツナ「復（リ）！！活（ボーン）！！！！

六道骸…死ぬ気でお前を倒す！！」

リボーン「最後の切り札だぞ。しっかり骸と決着（ケリ）つけて来い」

影に差し込む光

千種「鋼球を止めるなんて…

　アルコバレーノが０．０５秒以下の早撃ちで撃ったのは恐らく特殊弾」

骸「しかし、最後の一発だったとは。まんまと術中に嵌ってくれましたね。これでまた一歩、ボンゴレ十代目の略奪に近づきましたよ」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

骸（一応）「半端な強さではオレは倒せんぞ」

死ぬ気ツナ「こいっ」

骸（一応）「剛蛇烈覇！！！」

サッ

ダダッ

ゴッ↑投

死ぬ気ツナ「おりゃあ！！！」

骸（一応）「！！」

ビアンキ「あの子あんなに…」

リボーン「ここに来て急激に成長しているぞ」

骸（一応）「飛蛇烈覇！！！」

ガッ↑止

死ぬ気ツナ「うおおおりゃあぁ！！！（ドン）」

ゴツ

骸（一応）「ぐあっ」

ドガッ

死ぬ気ツナ「ハァハァ」

ビアンキ「や…やったわ！！」

リボーン「これで並盛に帰れそーだな」

千種「アレがボンゴレ…」

骸「これは驚きですね。しかしあの程度では僕の先輩だった男は倒せませんよ…」

骸（一応）「貴様になら全力を出せそうだ」

全「！！」

ビアンキ「あの攻撃を受けて平気だなんて……なんて奴なの！？」

骸（一応）「玉遊びなど余技に過ぎん！」

死ぬ気ツナ「！？」

骸（一応）「オレが真に得意としているのは（ダッ）

肉弾戦」

ドン

死ぬ気ツナ「うがっ！！」

リボーン「ハッタリじゃねーぞ」

死ぬ気ツナ「グァ…」

骸（一応）「まだだぞ」

死ぬ気ツナ「！！」

グイッ

ガッ↑膝蹴り

死ぬ気ツナ「ギャ」

骸（一応）「まだだ」

死ぬ気ツナ「！！」

ドゴォッ

ビアンキ「ツナ！！」

骸（一応）「フィニッシュだ」

死ぬ気ツナ「！！」

ドガァッ↑蛇鋼球　落

ビアンキ「あ……ああ……」

骸（一応）「貴様等の希望は潰えた。次は誰だ…？」

ガラガラ…ドズン…

骸（一応）「！　何！！！

バカな…コイツは化け物か…？」

死ぬ気ツナ「あなたはそんな悪い人じゃない」

骸（一応）「！！」

ビアンキ「！？」

骸（一応）「貴様…何を言っている！」

死ぬ気ツナ「そんな弱い心では死ぬ気のオレは倒せない」

骸（一応）「……心だと！オレの事を分かったような口を聞くな！！殺しはオレの本心だ！！！」

死ぬ気ツナ「ウソだ！！！」

骸（一応）「黙れ小童！！！」

死ぬ気ツナ「死ぬ気で倒す！！！」

ドッ↑殴

骸（一応）「うう…こ…このオレが負けただと…？」

死ぬ気ツナ「攻撃するとき必ず目を閉じているのも鋼球を使わなくては止めをさせないのも、あなたの心の中に罪悪感……迷いがあるからだ」

骸（一応）「な」

シュウウウウウ

ツナ「あなたを最初に見たときからおかしいと思ったんだ。まるでウチにいるランボって子供にみたいにあったかくて怖い感じがしなかったから」

骸（一応）「！　（こいつ…一見してオレを見抜いたというのか…）

……（なるほどな。これがボンゴレの血…）

完敗だ。お前を六道骸が警戒するのも頷ける」

ツナ「え!?な!?何言ってるんですか?だ…だって六道骸ってあなたのことでしょ?」

？「オレは影武者だ」

ツナ「え」

ビアンキ「ニセモノ!?」

？「その証拠に名前にずっと（一応）が入っているぞ」

ツナ「あ!ホントだ!

で…でも刑務所の写真にあなたの顔が…」

？「本物の骸は自分の姿を残すようなへまはしない。そして六道骸…アイツは…

オレの全てを奪った男だ!!」

ツナ「!」

リボーン「何があったか言え」↑上から目線ｗｗ

？「五年前…オレはある北イタリアにあるマフィアの一員だった。

孤児だったオレを育ててくれたボスとファミリーはオレの命…

オレは奴等の恩に報いたくファミリーの用心棒としてエリア最強までになっていた…

そんな折、ボスがまた孤児を拾ってきた…

何でも野望に満ちた目が気に入ったらしい。奴の面倒はオレが見ることになった。

オレは奴を本当の家族のように可愛がった。ファミリーがオレにそうしてくれた様に。

ところが間もなく事件が起きた。

オレがカードをしにアジトに戻るとファミリーが全員殺されていたんだ…」

リボーン「有名な事件だな」

？「オレは犯人への怒りに燃えた。だがその後の調査で意外なことが分かった。

オレが殺ったんだ」

ビアンキ「！」

ツナ「ど　どーゆーこと？」

？「それからは目を覚ますたびに、身に覚えのない屍の前に何度も立っていた」

ツナ「だって殺してるつもりはないんでしょ？」

？「もちろんだ……。オレは自分がすっかりおかしくなっちまったと思い…自殺を決意した。

だが無理だった…

全てを奴にコントロールされていたんだ…」

ツナ「な！！」

？「そう…あのガキ、六道骸に…

オレは操られていたんだ！！」

ツナ「なんだって！！」

？「いつしかオレは名も心も奪われ、ニセの六道骸となった…」

ビアンキ「そして何もかもに絶望して殺人マシーンと化したのね…」

ツナ「なんて奴だ六道骸…人間のやることじゃない……」

獄寺「ぶっ倒しましょう　十代目!!」

ツナ「獄寺君!!大丈夫なの!?」

ビアンキ「（副作用の発作が引いたのね（ほっ））」

？「ボンゴレ…お前ならできるかもしれない…

いいかよく聞けボンゴレ…骸の本当の目的は…

（はっ）どけっ!」

ビュビュ

サクサクッ

獄寺「メガネヤローだ!」

リボーン「行ったな。一撃離脱か…」

獄寺「く!」

ビアンキ「山本武は無事よ!」

？「うが（どさっ）」

ツナ「あ！ああ！！」

リボーン「目的は口封じか」

ツナ「そんな！大丈夫ですか！？しっかりしてください！！」

？「散々な人生だったぜ」

ツナ「そんな……あっあなたの本当の名前は！？」

？「！」

ツナ「六道骸じゃない、ちゃんとした名前があるでしょ！？」

ランチア「……オレ…は…ランチア…」

ツナ「しっかりしてくださいランチアさん！」

ランチア「その名で呼ばれると…思い出すぜ……昔の…オレの…ファミリー…

　　これでみんなの下へ逝ける…な……」

そう言ってランチアは涙を流し、静かに目を…閉じた。

ツナ「そんなー！！ランチアさん！！！」

獄寺「散々利用しといて不要になった途端…

　クソッこれがあいつ等のやり方かよ！」

ビアンキ「人を何だと思ってるの?六道骸」

ツナ「やっぱりアイツムカつくよ。

行こう。骸のところへ」

リボーン「だが最後の切り札は使っちまったぞ」

ツナ「分かってる…だけど…でも…六道骸だけは何とかしないと!!」

リボーン「(ニッ)じゃあ行くか。骸倒しにな」

骸と人質

ビアンキ「ここもだわ。階段が壊されてる…」

リボーン「やる気はマンマンってことだな。敵が来る道は一つに絞れた方がいいからな」

ツナ「なあ!?」

獄寺「ん?ケータイが落ちてる…。壊れてら…」

ツナ「あ!もしかしてヒバリさんのかも!ヒバリさん、着うた、うちの校歌なんだよね!」

獄寺「なあ!?ダッセー!!（ガーン）」

リボーン「早く行くぞ」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

ツナ「あ、あったー!!」

パシ

シュルルル

パシッ

ツナ「でた!ヨーヨー使い!」

ジュッ

千種「!?」

パカッ

プシュウウウウウウウウ

ツナ「煙幕…」

獄寺「十代目、ここはオレに任せて先に行ってください」

ツナ「獄寺君!!

……聞いて獄寺君、前にやられた時、悠里のおかげで命を取り留めたんだ」

獄寺「ええ、知ってます」

ツナ「それで…その…あの薬には副作用があって、完全に効くまでに何回か激痛が襲うんだ。それでもいいの?」

獄寺「……やります。そのためにオレがいるんですから」

ビアンキ「行きましょツナ」

ツナ「うん（獄寺君、本当に大丈夫なのかな…）」

獄寺「十代目」

ツナ「！！」

獄寺「終わったらまた皆で遊びに行きましょう」

ツナ「そーだよね。いけるよね」

獄寺「もちっス！」

ツナ「わかった！いくね！」

ダッ

獄寺「大人しく行かせてくれたじゃねーか」

千種「骸様の命令だ」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

ツナ「（怖ぇ～～）」

ギィィィ

ツナ「！」

骸「また会えて嬉しいですよ」

ツナ「ああ！！君は！！もしかしてここに捕まってんの！？

あ、あの人はさっき会った黒曜生の人質なんだよ」

骸「ゆっくりしていってくださいね。君とは永い付き合いになる。ボンゴレ十代目」

ツナ「え?何でオレがボンゴレって…?」

ビアンキ「違うわツナ!こいつ……!」

骸「僕が六道骸ですよ」

ツナ「な…はあー!!?」

バタン

ツナ「フゥ太!」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

バリーン

ガガガッ

ギチギチ

獄寺「ヘッタクソが!!」

千種「……(バッ)」

千種「!」

ドガァンッ

ズザッ

獄寺「二倍ボム！！」

千種「！」

シャッシャッ

ブチブチブチブチブチブチブチブチ

獄寺「前回やられたのがよっぽど脳裏に焼きついてるらしいな。素早すぎる反応だ。

おかげで足元がお留守だぜ」

千種「！！」

獄寺「障害物のある地形でこそオレの武器は生きる。ここで待ち伏せた時点でお前の負けだ」

ドガガガン

ゆら…

獄寺「おっとしぶてーんだったな。コイツで果てな。

（ズキン）！！　がっ　うがああァ！」

千種「（フラ）」

獄寺「くそっ（どんっ）こんな時に…！！」

千種「！？（フラ…）」

バリンッ

犬「スキありぴょン」

グサッ

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

ツナ「フゥ太！お…驚かすなよ」

ビアンキ「無事みたいね」

ツナ「あの後随分探したんだぞ」

ビアンキ「危険だから下がってなさい」

ス…

ビアンキ「フゥ…」

ドスッ↑刺

ツナ「ビアンキ！」

？「（ニヤ…）」

風紀委員長　参戦！

千種「無事だったの？」

犬「死むかと思ったけどね。ヒャハハハ　ザマーみろバーカ」

獄寺「（フラ…ズリッ）」

ズダダダ↑落

犬「んあ？ぶっざまー♪」

獄寺「（体が……動かねえ…）」

鳥「（バササ）ヤラレタ！ヤラレタ！」

獄寺「（くそぅ…ヘンタイヤローの鳥まであざ笑ってやがる。何が十代目の右腕だ…

何の役にも立っちゃいねえじゃねーか…

くそっ…くそっ……！）」

鳥「緑たなびく並盛の――――」

獄寺「（……！？）」

鳥「大なく小なく並がいい――――」

獄寺「へへ…へへへへ…」

犬「っひゃーこいつまだ闘う気かよー」

獄寺「ううっ」

とん　　コロコロコロ

ドガアン↑壁　爆

犬「っひゃーどこ売ってんのー？」

千種「！」

ガラガラガラ

獄寺「へっ……ウチのダッセー校歌に愛着持ってんのは…おめーぐらいだぜ…」

犬／千「！」

ガラガラガラ

犬「んあ？こいつ……」

千種「並盛中学風紀委員長…

　　雲雀恭弥――――」

獄寺「元気そうじゃねーか」

犬「ヒャハハハもしかしてこの死に損ないが助っ人か――!?」

雲雀「自分で出れたけどまあいいや」

獄寺「へへっ」

雲雀「そこの二匹は僕にくれるの?（ヨロ…）」

犬「こいつバーズの鳥手なずけてんの」

雲雀「じゃあもらうよ」

獄寺「好きにしやがれ」

犬「死に損ないが何ねぼけてんだ?こいつはオレがやる」

千種「言うと思った」

犬「徹底的にやっからさ（カシャン）百獣の王

ライオンチャンネル!!!」

ガルルル…

雲雀「ワォ子犬かい?」

犬「うるへーアヒルめ!!（ダッ）」

パシッパシッ↑トンファー構

ヒュッ

犬「ひょい♪」

くるんっ

犬「！？」

ガッ

パリーン

千種「犬！」

雲雀「次は君を……咬み殺す」

千種「（汗）」

ツナ「ビアンキ！しっかりして！
　　ちょっ　フゥ太何してんだよ！！」

ス…

ツナ「な！？」

ヒュッ

ツナ「うわっ（どてっ）」

ストッ

ツナ「フゥ太！？おい！」

骸「彼には何を言っても無駄ですよ。本当の彼はここにはない」

ツナ「は…どーゆー……？」

リボーン「マインドコントロールか」

骸「流石ですねアルコバレーノ。
　そうです。彼にはマインドコントロールが施してあります。つまり、僕の意のままに

…ほうら」

ビュッ

ツナ「うわっ！」

？「（ニヤ…）」

タタタタッ

リボーン「！　危ねーぞツナ！」

ドスッ↑蹴

ツナ「な！？」

サクサクサクッ

ツナが立っていたところに幾つもの手裏剣が刺さっていた。

ツナ「しゅ…手裏剣！？

…悠里！？悠里がいるの！？」

あたふめくツナの前に現れた美鈴。

ツナ「悠里じゃ…ない？」

骸「油断する暇はあるのですか？」

ツナ「！」

ビュッ

ツナ「わっ」

リボーン「一度に二人からの攻撃か…これはつれーな」

美鈴「あなたにはここでいなくなってもらう。

皆と…世界のために」

ツナ「あーゆー目が笑ってない笑顔ってメッチャ苦手なんだけど！！つか怖いよ！！」

リボーン「お前、アイツに見覚えあるか？」

ツナ「は？こんなときに何を言ってんだよ！知るわけないだろ！？」

リボーン「……そうか」

骸「無駄話をしていると……」

ヒュンッ

サクサクサクッ

ツナ「ひいぃっ」

骸「クフフフ」

リボーン「マインドコントロールされてちゃ手が出せねえな」

ツナ「そんな！！」

骸「さあ、どうしますか？ボンゴレ十代目」

ツナ「（ビッ）わあっ」

骸「クフフフフフフフ」

仲間

リボーン「そー言えば、前にディーノから貰った鞭を持ってきてやったぞ」

ツナ「はあ!?今そんなの渡されても困るから!

（はっ）そーだ、マインドコントロールが骸のせいなら

骸本人を攻撃すれば…

よしっ（タッ）」

骸「おや?」

ビッ

バシッ

グルルルル

ツナ「ぎゃっ」

鞭を放ち、軌道がそれて、自分がぐるぐる巻きとなったツナ。

さすが運動オンチ。

骸「クハハハ!!やはり君は面白い。

ホラ後ろ、危ないですよ」

フゥ太「ううう……」

ツナ「な!?フゥ太まで絡まってるー!?」

フゥ太「うぅ……」

ツナ「あっわっダメ!」

カラカラ↑三叉槍　飛

ツナ「!　（この目、ランチアさんと同じ目をしてる…

もしかしてフゥ太も骸に酷いことをさせられてその罪の意識で…）」

フゥ太「ううう……（がしっ）」

ツナ「わっ（フゥ太…）

お前は悪くないぞ」

フゥ太「!」

骸「!?」

ツナ「お前は何も悪くない。皆お前の味方だ。

だから安心して帰って来いよ」

骸「（ほう。マインドコントロールを解く唯一の方法
“一番望むこと”を言い当てたか）」
フゥ太「ううう……ツナ…兄…（どさっ）」
ツナ「フ…フゥ太!?」
骸「おやおや、君が余計なことを言うから彼、クラッシュしちゃいましたよ」
ツナ「な!?」
骸「思えば始めから手のかかる子だった。
次期ボンゴレ十代目が日本にいると聞いて来たまではよかったが、
情報は何一つなかった。
そこで、ボンゴレと知り合いというフゥ太君に来てもらったのですよ。
しかし彼も沈黙（オメルタ）の掟を貫き通し、心を閉ざし
終いにはランキング能力まで失ってしまった」
リボーン「それで前に行われた並中ケンカの強さランキングを使ってファミリーをあぶり出そうとしたんだな」

骸「もくろみは成功でしたよ。現にボンゴレはここにいる」

ツナ「人を何だと思ってるんだよ！」

骸「おもちゃ…ですかね」

ツナ「ふざけるな！」

骸「おっと、油断する暇はあるのですか？」

ツナ「？　……！」

カカカカッ↑手裏剣

リボーン「そーだぞバカツナ。もう一人いることを忘れてるぞ」

美鈴「ふふふ…（たっ）」

ツナ「ひいっ」

キイイィン

美鈴「！」

ツナ「あ！」

フィン「ツナ、加勢しに来たよ！！」

ツナ「フィンちゃん！！」

リボーン「（ニッ）」

本格的になっていく戦い

ツナ「フィンちゃん！どうしてここに！？」

フィン「ツナには悪いと思ったけど、ずっと後をつけてたの。

でも、足手まといになるのが嫌だからずっと気配を消してて……

だけどやっぱり出たくなって出てきちゃったｗｗ」

ツナ「なあ！？」

美鈴「頭数が一人増えただけでいい気にならないでよね。

アタシ達の目的を邪魔する奴らは何人たりとも生かさない」

フィン「いいわ。私が相手する」

ツナ「ちょっやめた方が…」

フィン「大丈夫。これでも私幹部だから（ニッ）」

タッ

ガシッ↑蹴　止

美鈴「！」

フィン「マインドコントロールされてる人の攻撃を止めるなんて容易いことよ」

ツナ「え？じゃああの子もマインドコントロールされてんの！？」

リボーン「にしては妙だな。その割には自分の意思で動いてるように見えるんだが」

骸「クフフ当然ですよ。

マインドコントロールと言っても、彼女はフゥ太君とは違う。

心を操り、“隠す”ということをできなくした。

それによって、本来の力を発揮できない物の、目的に合わせたことしかしない」

フィン「目的？」

骸「そう」

骸／美「打倒ボンゴレ」

フィ／ツ／リ「！？」

フィン「ま、いいわ。今最優先すべきことは、貴女を止めること」

美鈴「クスッ」

フィン「その余裕の笑み、できなくしてあげるわ」

タッ

タッ

フィン「はっ」

ガッ↑平手押し込み

美鈴「！　がはっ」

ツナ「すごい…」

フィン「あなたが一番望むことなんて知ったことじゃないわ。

だから――――」

ドガッ↑蹴

フィン「武力行使よ」

美鈴「く……（がくん）」

どさっ

ツナ「やった！すごいよフィンちゃん！」

フィン「それほどでも～♪」

骸「クハハッ君たちは何も分かっていない」

ツナ「え？」

骸「今の戦闘の間に少し細工をさせていただきました」

ドゴゴゴ↑床　崩

フィン「きゃっ！」

ツナ「そ、そんなあ！！建物が！！ああ、皆！！」

リボーン「ちっ」

ツナ「わわっうわあああっ！！うわあああああ」

次回、ツナの運命や如何に！？

リボーン「テキトーに切りやがったな」

ドガッ↑蹴

作者「がふっ」

六道輪廻

ツナ「うわあああああ」

バキッ↑殴

ツナ「ブ！！」

どさっ

ツナ「いで――――――――っ何すんだよリボー…んっえっあれ…？じ…地面が戻ってる…」

リボーン「お前が見たのは幻覚だぞ」

ツナ「へっげ…げんかく！？」

骸「クフフやりますね。見破るとはさすがアルコバレーノ。

そう、六道輪廻第一の道　地獄道は永遠の悪夢により精神を破壊するスキル」

ツナ「ひっこええ～～～～～～！！（ぞくっ）」

リボーン「六道輪廻…だと？」

骸「そうです。これをご存知ですか？」

リボーン「人は死ぬと生まれ変わって地獄道・餓鬼道・畜生道・修

羅道・人間道・天界道のいずれかに行くというやつだな」

骸「僕の体には前世に六道全ての冥界を廻った記憶が刻まれていましてね。六つの冥界から六つの戦闘能力(スキル)を授かった」

ツナ「なに……言ってんだ？」

リボーン「それが本当ならオメーはバケモンだな」

骸「君に言われたくありませんよ。呪われた赤ん坊アルコバレーノ」

“アルコバレーノ”については、かなり前で説明済みだす。

骸「さて、君は攻撃してこないのですか、アルコバレーノ。僕は三人を相手にしても、構いませんよ」

リボーン「掟だからだ」

骸「掟ときましたか。実に正統なマフィアらしい答えですね」

リボーン「それにオレがやるまでもなくお前はオレの生徒が倒すからな」

ツナ「な…おいリボーン！」

フィン「いいんじゃん？」

骸「ほう。それは美しい信頼関係ですね。面白い。

いいでしょう（ヴヴ…ン　三）」

ボト…ボト…ボト…

フィン「ひっイヤッ蛇！！」

ツナ「へ！？蛇だ！ひい！きたぁ！！

あ、こ…これも幻覚なんじゃ！」

骸「正真正銘の毒蛇ですよ。なんなら咬まれてみますか」

フィン「来ないで！蛇キライ！！」

骸「第三の道　畜生道の能力（スキル）は人を死に至らしめる生物の召喚。

さあ、生徒の命の危険ですよ。いいんですか？」

ツナ「ひいい！！やめて！助けて！！」

リボーン「あんまり図にのんなよ骸。オレは超一流の家庭教師だぞ」

ビッ　ギュルルル

キンッ

ツナ「！」

カラカラカラ

フィン「トンファー！？」

？「十代目…フィン…！伏せて！」

ツ／フィ「え！？」

ドガガガガ

ツナ「うわあ！！！

……！」

獄寺「遅くなりました」

ツナ「獄寺君！！ヒバリさん！！ふ…二人とも…」

リボーン「分かったか骸。オレはツナだけを育ててるわけじゃねーんだぞ」

雲雀「借りは返したよ（ポイ）」

獄寺「（どさっ）いでっ」

ツナ「ちょ」

ツ／フィ「（す…捨てたー！！（ガーン））」

骸「これはこれは。外野がゾロゾロと。千種は何をしているんですかねぇ…」

獄寺「へへ。メガネヤローならアニマルヤローと下の階で仲良く伸

びてるぜ」

ツナ「すごいよ獄寺君！か…体は大丈夫なの！！？」

獄寺「ええ…大丈夫っス…。つーかあの…オレが倒したんじゃねーんスけど…（ずーん）」

フィン「（なるほど。ヒバリさんか…）」

雲雀「……あれは…美鈴？」

骸「！！！」

ツ／フィ／獄「？」

リボーン「ん？」

骸「クフフ…まさか、この世界に彼女を知っている人物がいるとは思いませんでした」

雲雀「美鈴に…何をしたの？」

骸「彼女が君とどういう関係かは知りませんが、生きているのでご安心を」

雲雀「……（やはり、悠里と美鈴は同一人物なのか…？）」

ツナ「ヒバリ…さん？」

雲雀と美鈴の意外な接点を彼らが知っているはずもなく、ただ首を

傾げるばかりの面々だった。

勝利。そして……

骸「クフフフ。何故君が美鈴を知っているのかは知りませんが、今君は立っているのもやっとの状態のはずだ。骨を何本も折りましたからねぇ」

ツナ「ヒバリさんそんなヒドイ目に……！！」

雲雀「遺言はそれだけかい？」

骸「クフフフフ。面白いことを言う。君と契約しておいてもよかったかな？

仕方ない。君から片付けましょう（ヴヴ…ン　四）」

ツナ「目から死ぬ気の炎が！！」

骸「第四の道　修羅道。格闘のスキルです。

さあ、一瞬で終わらせますよ（ダッ）」

ガギキキキキキキンッ

フィン「す…すごい。速すぎて何にも見えないよ」

ギンッ

雲雀「君の一瞬っていつまで？」

骸「（ニヤリ）」

ツナ「やっぱり強い！さすがヒバリさん！！」

リボーン「こいつらを侮るなよ骸。お前が思ってるよりずっと伸び盛りだ」

骸「なるほど。そのようですね。

　彼が怪我をしていなければ勝負は分からなかったかもしれない」

雲雀「（ブシュウ）！」

骸「クフフフ…時間の無駄ですよ。手っ取り早く済ませましょう（ヴゥン　一）」

そこに現れたのは満開の桜。

ツナ「さ…桜！？何で桜！？」

リボーン「ヒバリは桜を見ると動けなくなる桜クラ病にかかっちまってんだ」

ツナ「え――――っうそー！！」

フィン「（あの変態シャマルめ。余計なことを）」

骸「クフフさあ、また膝まづいてもらいましょう」

ツナ「そんな！ヒバリさん！」

フッ

バキッ

ツナ「！」

フィン「え？」

リボーン「ニッ」

骸「おや？」

獄寺「へへ…甘かったな。シャマルからこいつを預かってきたのさ。桜クラ病の処方箋だ」

ツナ「それじゃあ！！」

ドッ

骸「がはっ……」

カラカラカラ

同時に桜も消える。

ツナ「桜は幻覚だったんだ！っていうか…これって…」

獄寺「ちっおいしいとこ全部持っていきやがって」

フィン「あ…ああ…」

リボーン「ついにやったな」

ツナ「……！お……終わったんだ…。これで家に帰れるんだ！！」

リボーン「しかしお前、見事に骸戦役に立たなかったな」

ツナ「ほっとけよ！！

ひ…ヒバリさん、だいじょうぶですか…！？」

雲雀「（フラ…）」

ツナ「！」

ばたっ

ツナ「大丈夫ですか　ヒバリさん！」

リボーン「こいつ、途中から無意識で闘ってたぞ。よほど一度負けたのが悔しかったんだな」

フィン「ヒバリさんすごい…」

リボーン「ま、それ以外にもありそうだけどな（ニッ）」

ツナ「？？

！！早く皆を病院に連れて行かなきゃ！！」

リボーン「それなら心配ねーぞ。ボンゴレの医療チームがこっちに向かってる」

獄寺「それならよかったっスね（フラフラ…）」

ツナ「獄寺君ムリしちゃダメだよ」

骸「その医療チームは不要ですよ」

全「！」

一同が声のしたほうを向くと、骸がこちらに向けて銃を構えていた。

骸「なぜなら生存者はいなくなるからです」

獄寺「てめー！！」

ツナ「ご獄寺君！！」

骸「クフフフ（チャキッ）」

全「！？」

しかしその銃を自らの頭に向け、

骸「Ａｒｒｉｖｅｄｅｒｃｃｉ」

ズガンッ

全「……！」

し～ん…

獄寺「や…やりやがった」

ツナ「……そんな…どうして」

リボーン「捕まるぐらいなら死んだ方がマシってやつかもな」

獄寺「ヤるせないっス……」

ツナ「（何だ…この感じ…吐き気がする…）」

リボーン「生きたまま捕獲はできなかったが仕方ねーな」

ビアンキ「ついに…骸を倒したのね」

獄／ツ／フィ「！」

ビアンキ「ううん」

獄寺「アネキ！」

ツナ「よかった！ビアンキの意識が戻った！」

リボーン「無理すんなよ」

ビアンキ「肩貸してくれない…」

ツナ「……？（あれ……？）」

獄寺「しょーがねーな。今日だけだぞ」

ツナ「！　獄寺君！！行っちゃダメだ！」

獄寺「え？」

ビッ

獄寺「おわっ」

ビアンキ？「クフフフフ。舞い戻ってきましたよ。

輪廻の果てより」

作者が壊れました。少々お待ちください

作者「あああああああああああああああああああ嗚呼ああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああアアア！！

データ消えてんじゃねーぞゴルァ！！ざけてんのか！」

解説しよう。コイツはついさっきまでめずらしく長々と話をかいていた。いつもいつも、一話一話が短すぎるコイツが！！

しかし！ “次話投稿”をクリックしようとした瞬間、突然パソコンの電源が切れ、努力が全て水の泡となったのだ。

その所為で、今、ブチギレテ壊れています。

内容的には、前回の終わりから察して、骸の憑依によりピンチになったツナ。～

～黒曜編、もうすぐで終了！というところまで来てたんですよ。

それが全部パーになったんで。

作者「黒曜編なんてやめてやらぁ！！」

落ち着きなさい。

え～と、作者がこんなんなんで、ホントに黒曜編終わっちゃうかもです。

楽しみに読んでくださった皆様方、ゴメンナサイ。

でも完全に終わるんじゃなくって、内容が思いっきり飛ぶだけなんで。

きっと次回は、骸が倒されてからになる可能性が……

ほんっとうにゴメンナサイ！！！

作者が壊れました。少々お待ちください（後書き）

和「……誰か、この哀れでバカな作者を慰めてやってくれ」

理沙「そうですね。いくら馬鹿でアホなヤツでも、これでも私たちの作者ですからね」

要「ちっ。オレの方にまで支障をきたすなよなアホ作者」

隼菜「ということで、感想&慰めの言葉、待ってます」

頑張って復活します。でもやっぱりグダグダグダグダグダグダグダグダグダグダ

はい、前回作者が壊れたために、骸戦が終了いたしました。

ゴメンナサイ。

頑張って復活します。でもやっぱりグダグダグダグダグダグダグダグダグダグダ

骸「作者の身勝手ですか！？」

作者「五月蝿い五月蝿い！！

それに、今までのグダグダが長かった所為で、苦情の葉書が来てんの！」

骸「葉書？」

作者「でわ、一通目。

『う〜おぉぃ！オレを出しやがれぇ！！さもねーとあろすぞ！！アホ野郎！！』

以上、H．Nカスザメさん」

骸「……」

作者「二通目。

『どうして僕たちを出さないんだい？出してくれないと君を永遠の悪夢に閉じ込めるよ』

以上、H．N最強の赤ん坊さん」

骸「……」

作者「三通目。

『王子出さないとサボテンにすんぜ』

以上、H・N自称王子サマ」

骸「……」

作者「まだまだ百通ぐらいあるよ。

H・N姫サマ。H・Nムッツリ、H・Nオカマ、にH・Nキレるお父さん。他にもH・Nツナさんラブ、H・N妹ラブ、H・N牛などなど」

骸「多すぎじゃないですか!?」

作者「ということなのだよ」

骸「……」

美鈴「せめて予定されていた前回の爆笑シーンを入れろ!!アレは皆に教えるべきだ!!」

骸「アレですか!?」

作者「りょーかい」

～Ｌｅｔ、ｓ　ｇｏ！～

ビ骸アンキ「いいですか？君の仲間をこれ以上傷つけられたくなかったら、逃げずに大人しく契約してください」

ツナ「な…！そんな…ムリだよ…」

ビ骸アンキ「お願いします！」↑土下座

その他（全て骸）「お願いします！」↑土下座

ツナ「え～～～～～～！！？」

リボーン「お前にプライドはないのか？」

獄寺（骸）「プライドなんてあったら他人を乗っ取ったりしません」

ツナ「リボーンどーしよ！オレ一人じゃ突っ込みきれない！」

リボーン「オレは何もしてやれねーぞ。自分で何とかしろ」

ツナ「この状況をか！？」

全（全て骸）「（バッ）」↑土下座中

ツナ「無理があるよ！ねぇ、いつもみたいに助けてくれよ！！」

バキッ↑蹴

ツナ「ブフッ」

リボーン「情けねー声出すな」

ツナ「だって…オレ…どうしたら」

リボーン「まずはこの土下座モードを解け」

ツナ「え！？どーやって！？」

作者「ピンポンパンポーン。はい、そこの土下座集団。ツナが憑依してもいいってさ」

ツナ「ちょっ何言って」

（骸）「本当ですか！？」

ツナ「え～～～～～～！！？」

リボーン「いいかツナ。折角作者が土下座モードを解いたんだ。次はお前の番だ」

ビアンキ（骸）「クフフフ、それではお友達を壊してから君を乗っ取りますか」

ツナ「なっ話がちがうぞ！」

獄寺（骸）「だから僕にプライドなど無いと、言ったじゃないですか」

ツナ「くっ…こんなヤツに負けたくない」

レオン「ブルッ…」

犬（骸）「おや？まさかそんな台詞が出てくるとは思いませんでした。やはり君の仲間は君の手で葬ることにしましょう」

ツナ「こんなふざけたヤツに負けたくない…。コイツにだけは勝ちたいんだ！！」

～了～

作者「はい、ここまで」

美鈴「なっ」

作者「後は原作通りでつまんないから」

骸「／／／／／／／／／／／／」↑今見るとチョー恥ずかしかった

作者「ま、次回からは頑張りますので」

終わりとそれから……

※結局骸を倒しちゃいました。

リボーン「終わったな」

ツナ「うん……。

あっそうだ、みんなの怪我！」

リボーン「心配ねーぞ。ボンゴレの医療班も敷地内に到着したらしいしな。

ランチアの毒も用意してきた解毒剤で間に合ったそうだ」

ツナ「（ほっ）よかった…」

？「ケホッ…ケホッ…」

ツナ「！　フィンちゃん」

フィン「あ…ツナ。……骸倒したんだね」

ツナ「うん。大丈夫？」

フィン「平気だよ。この中で一番軽症だったしね。獄寺君たちは？」

ツナ「傷が酷くて心配だけど、ボンゴレの医療班が来てくれたって」

フィン「お！一件落着カナ？」

ツナ「あはは。

……骸……。死んでないよな？無事だよな」

フィン「…どうして敵の心配をするの」

リボーン「ったく甘いなお前は」

？「近づくんじゃねぇびょん！！！」

犬「マフィアが骸さんにさわんな！！」

ツナ「ひいっあいつらが！！」

フィン「いたんだ……」↑酷！

リボーン「ビビんなツナ。奴らはもう歩く力も残ってねーぞ」

ツナ「な…なんで…？何でそこまで骸のために？君たちは骸に憑依されて利用されていたんだぞ」

千種「分かった風な口を聞くな…」

犬「大体これくらい屁ともねーびょん。

あの頃の苦しみに比べたら」

ツナ「あの頃……？」

リボーン「何があったんだ?言え」

犬「……へへっ

オレらは自分のファミリーに人体実験のモルモットにされてたんだよ」

リ／ツ／フィ「！！」

リボーン「やはりそうか。もしかしてと思ってはいたが、、お前たちは禁弾の憑依弾を作ったエストラーネオファミリーの人間だな」

フィン「あの有名なエストラーネオ。そっか、骸が使った禁弾は、そういうことなんだ…」

犬「禁弾?それはテメーらの都合でつけたんだろーが。

おかげでオレらのファミリーは人でなしのレッテルを貼られ、他のマフィアからひっでー迫害を受けた。

外に出れば銃を向けられ虫けらみてーに殺される。それがファミリーの大人たちが進めていた特殊兵器開発の実験にますます拍車をかけたびょん。

仲間は次々と死んでいった。毎日が地獄だった――――…。大人の一人が言っていた。

『特殊兵器の開発は地に堕ちたオレ達が再び栄光を取り戻すための礎だ。開発に携り死ぬことは名誉なことと思え』

ってな」

フィン「そんな……酷い」

犬「オレらはどこへ行こうとどうあがこうと生き延びる道は無かった。

でもあの人は――…たった一人で現状をぶっ壊したんだ。大人しくて目立つタイプじゃなかった。声を聞いたのもその時が初めてだった気がする」

『クフフ。やはり取るに足らない世の中だ。全部壊してしまおう――…』

このとき生まれて初めて…

『一緒に来ますか？』

オレらに居場所ができた――…。

犬「それを…おめーらに壊されてたまっかよ！！」

ツナ「……でも」

犬「！」

ツナ「でも、オレだって…仲間が傷つくのを黙ってみてられない…

だって……

そこがオレの居場所だから」

犬「ぐっ！」

千種「……ッ」

フィン「（ゾクッ）……何か…来る？」

ツナ「え？…あ！」

リボーン「医療班が着いたな」

ビュッ

ガチャッ↑首枷

犬「！」

ツナ「な！！？」

ガチャ

ガチャン

リボーン「早ぇおでましだな」

ツナ「い…一体誰！？」

フィン「“復讐者（ヴィンディチェ）”。マフィア界の掟の番人で、法で裁けない人たちを裁くのが彼等の役目」

ズザアッ

ツナ「あ！ちょっ…何してるんですか！？」

リボーン「やめとけツナ」

ツナ「ああ…」

リボーン「奴らに逆らうとやっかいだ…」

ツナ「お前がそこまで……そんなにヤバイの……？」

ギイイイイ

リ／ッ／フィ「！！」

ツナ「も、もう一人！？」

ガチャン

ツナ「あ、あの子は…！」

復讐者に捕まったのは、あろうことか美鈴だった。

しかし、気絶しているために抵抗はできない。

ツナ「待って！その子が何をしたの！？」

復讐者「イマコソ罪ヲ償ウトキガキタ」

リボーン「……」

ツナ「罪を償う？……ちょっとその子は何も…」

復讐者「コノ女ハ大罪ヲ犯シタノダ」

ズルズルズルズルズル

フィン「あ……！」

リボーン「追うな。奴らに手を出したら取り返しがつかなくなる」

ツナ「そんな……。でも、あの子は何で？」

リボーン「さーな。もしかしたら骸の一味だったかもしれねーし」

フィン「でもさっき言ってた『大罪』って言うのは…」

リボーン「わからねーが、復讐者の言うことは絶対だ。アイツも何か罪を犯したことには間違いねーんだ。

つーかお前ら、何で知りもしねーヤツを気にかけてんだ？」

フィン「なんだか、遠い昔に会ったことがあるような気がして…」

ツナ「オレもなんか、知ってる人だった気がするんだ。それに、ヒ

バリさんが気にかけてたし」

リボーン「そうか。だが今は」

医療班「おまたせしました！けが人は！？」

リボーン「お、医療班が来たな」

そして、フゥ太・ビアンキ・獄寺・山本・雲雀は病院へと運ばれた。

ランチアは骸が連れ去られた際に、他の脱獄囚とともに連れて行かれてしまった。

どうしてランチアまで、と問い詰めるツナだったが、リボーンはただこう言っただけだった。

リボーン「オレ達マフィアの世界はそう甘くねーんだ」

さて、所変わって先ほど美鈴を連れ出した復讐者。なぜか他のとはずれ一軒の家にたどり着いた。

ピンポーン

おい、何故に復讐者が行儀よくインターホンを鳴らしている。

ガチャッ

そこから現れたのは金髪にティアラを乗せた少年。ベルだ。

ベル「ししっ。お帰りマーモン」

“マーモン”確かに彼はそういった。
サアァと霧が纏い、晴れたそこにはマーモンがいた。
ベル「姫のこと連れ戻してきた？」
マーモン「もちろんだよ。ちょうど六道骸が連れ去られるときでね、それにまぎれて連れてきたよ」
ベル「ししっ。さっさと家に上がれよ。話すことあんだろ？」
マーモン「そうだよ」
ガチャン
マーモン「というより、その前に美鈴に目を覚ましてもらわなくちゃね」
ベル「オレに良い考えあるぜ」
マーモン「ムム。本当かい？」
ベル「ししししっ」
そういって彼が取り出したのは……ケーキ。
ベル「ひ～めっここにおいしいケーキがあるぜ」
美鈴「ケーキ！？（がばっ）」↑覚醒

マーモン「（絶句）」

美鈴「がはっ」↑吐血

ベ／マ「！！？（ビクッ）」

美鈴「ゲーギ（ダボダボ）」↑吐血

ベル「ちょっ姫！？」

マーモン「美鈴ストップ！何か色々とグロッキーになってるよ！？」

美鈴「（ゲボゲボゲボ）」↑吐血

ベ／マ「わ――――――――――っ！！」

～少々お待ちください～

ベル「姫、落ち着いた？（汗）」

美鈴「うむ」

マーモン「なるほどね。腹部に深い刺し傷があるよ。きっとこれが

原因だ」

ベル「ゲー。姫ってば何してきたんだし」

美鈴「あ、こんぐらいなら問題ないよ」

パン

バシュウウ

美鈴「錬金術応用編」

ベル「すっげ」

美鈴「で、マーモン。話って何？態々日本に来るほどなんだから、大事なことなんでしょ？」

マーモン「そうさ。よく聞いて。ボスが目を覚ました」

美／ベ「！！」

美鈴「マーモン、それ、本当！？」

マーモン「どうして日本に着てまでウソを言うんだい？ホントのことだよ」

美鈴「よ…よかったぁ」

目から流れる一筋の涙。しかし、なぜか赤い」

マ／ベ「！？」

ベル「姫？それ、どうしちゃったカンジ？」

マーモン「右目、怪我でもしたのかい？」

美鈴「右目…？怪我なんてして……」

ベル「ん？何かかいてあるぜ？

……六って」

美鈴「（六！？）まさか……」

ダダダダダダッ

鏡で確認中。

はいありました。右目にしっかりと六の文字。

美鈴「あんのクソナッポー何しやがったー！！！（怒）」

ベ／マ「（……ナッポー？）」

誰も知らなかった美鈴の隠れた力、それは六道輪廻だったｗｗ

美鈴「ｗｗ。じゃないよ！」

終わりとそれから……（後書き）

和「あーあー、マイクのテスト中マイクのテスト中……おし。
　久々すぎてマイクの調子がおかしかったぜ」

理沙「ウソをつかないでください。つい最近出たばっかりですし、そもそもこのコーナーはマイクを使いません」

和「んだよ、リアクション薄いなー。まあいいや、本題にいこう。
　あんたらは六道輪廻が使えたら、一番使ってみたいスキルってなんだ？」

理沙「なんですか突然」

和「いいから」

理沙「そうですね。強いて言えば地獄道ですね」

和「理由は？」

理沙「そりゃやっぱり、夫人を弄りたいですから」

和「なんだ、僕といっしょか」

隼菜「私は、餓鬼道使ってみたいなぁ～。だって…」

和／理「聞かなくてもわかるから言うな」

隼菜「だから扱いなおせって！」

和「ま、読者の皆さんにも質問だぜ。好きな六道輪廻のスキルとその理由。教えてくれな」

理沙「あ、いやなら書かなくていいんですからねー」

別れのとき

美鈴とベルは、イタリアに帰るために学校に転校（表上はネ）の手続きをしにきた。

恐らくこの日が最後の悠里と鐘である。

～職員室～

コンコン

悠／鐘「失礼しまーす」

先生「五月、どうしたんだ？」

悠里「父親の都合でイタリアに帰ることになりました。急な話ですが今日の夜には日本を立たなくてはいけません」

先生「えっそうなんですか？」

悠里「突然のことですみません」

～教室～

ツナ「にしても、また平和に戻れたなぁ」

獄寺「お役に立てなくて申し訳ございません！」↑土下座

ツナ「そんな…って土下座しないでー！！」↑軽くトラウマ

山本「ははっ終わりよければ全てよし、だぜ」

獄寺「んだとこの野球バカ！（怒）」

あれ?皆さん復活すんの早いっすね。ふっつーあれほど怪我してたら全治一週間、獄寺に至っちゃ一ヶ月かかると思うんだけど。

作者「だってこいつらいねーと話が進まねーもん」

作者に免じて許す。

ガラガラガラ

先生「はい皆さん席について。とても残念なお知らせがあります。二人とも、入って」

悠里「ちーっす」

鐘「ししっ♪」

先生「二人が家の都合でイタリアに帰ることになりました」

ツナ「えっ」

獄寺「マジか」

悠里「皆、今までありがとね」

時は過ぎて放課後。↑だから早いっつーの！！

ツナ「悠里、鐘」

鐘「ん？」

ツナ「これからオレんち来て。二人のお別れパーティーするから」

悠里「お別れパーティー？」

ツナ「うん。二人には六年間もずっとお世話になってたから、お礼がしたいんだ」

悠里「クスッ。いいよ」

～沢田宅～

京子「今までありがとう」

ハル「ハル達のこと忘れないでくださいね」

フィン「折角友達になれたのにね」

セシル「姉がお世話になりました」

山本「また寿司食べたくなったらいつでもこいな」

了平「極限に妹が世話になったぞー！！」

京子「／／／／／／もう、お兄ちゃんったら」

獄寺「もしよかったら、一緒にピアノでも弾こうぜ」

悠里「おっしゃ」

話も弾んでいた。

リボーン「それにしてもオメーらがいなくなったら少し寂しくなるかもな」

ツナ「ホントだね」

リボーン「悠里はツナの女友達第一号だったのにな」

ツナ「うんうん……って何で知ってるの!?」

リボーン「オレを舐めるな」

フィン「今度さ、イタリアの家に遊びに行っていい?」

悠里「（げっ）ダメ」

フィン「えー（ブーブー＝3＝）なんでぇいーじゃん」

悠里「（イラッ）ダメったらダメ」

フィン「じゃあ、勝手にいこっかなぁ?」

悠里「（ブチッ）ざけんなー!!」

ボトボトボト

全「！！」

ハル「はひ～～～ヘビです！」

ツナ「ヘビ！？どっから来たの！？」

獄寺「しかも、にーさんしー…六匹いますよ」

ビアンキ「これは……」

悠里「ハブ？」

ハル「はひぃっ毒蛇じゃないですか！」

ツナ「でもなんで毒蛇なんて」

このとき誰も気づかなかったが、美鈴の右目には“三”の文字があったりなかったり。

悠里「ま、とにかく捨てて…ゲフン。逃がしてこないとね」

ガシッ

山本「素手で大丈夫か？」

悠里「問題ない」

ビアンキ「待ちなさい」

悠里「なに?毒サソリ」

ビアンキ「そのヘビ私にくれるかしら?」

全「は?」

ビアンキ「ポイズンクッキングの材料にするわ」

ツナ「なっ（ガーン）」

悠里「これ全部!?」

ビアンキ「ええ」

ハル「デンジャラスです（怖）」

イタリアに帰ってきたぜ！

～空港（イタリア）～

美鈴「ついに…ついに…帰ってきたぁ――――――――――！！！」

ベル「姫テンション高すぎ（汗）

でも確かに六年ぶりのイタリアだしね」

美鈴「んじゃ、アジトに帰ろっか」

～アジト～

ベル「何か静かじゃね？」

美鈴「はれれ？

おーい！！マーモン！ルッス！スクアーロ！レヴィ！ボス！」

し～ん…

美／ベ「いない！？」

ベル「ちぇっ。こんなんだったらマーモンに聞いとくんだった」

ついでにマーモンは、二人に用件を言うとその日の内にさっさと帰ってしまっていた。

美鈴「うーん、多分、あっち」

ベル「あっちってどっちだし」

美鈴「南に向かってＬｅｔ、ｓ　ｇｏ！」

そして、南に歩くこと二十分。そこには立派なお屋敷がありまっせ。

よく迷子にならないねー。

美鈴「そりゃ、霊圧を追っかけるだけだし」

ガチャッ

美鈴「すんませーん、誰かいやせんかー？」

し～…ん

返事が無い。ただの空き家のようだ。

ベル「誰もいねーじゃん！！」

美鈴「（ゴーン）たしかにここからみんなの霊圧があったのに……」

ガサガサ

？「あら？美鈴ちゃんにベルちゃんじゃない」

？「ム。帰って来たんだね」

美鈴「ルッス！マーモン！ただいま」

ベル「ゲ…帰って来て最初にみんのがオカマかよ」

ルッスーリア「んまぁ！？酷いわぁ」

美鈴「マーモン！アジトのこと言ってくれなきゃわかんないじゃないか！」

マーモン「ム…悪かったよ」

ルッスーリア「あらマモちゃん、二人に言わなかったの？よくここが分かったわね」

美鈴「私を誰だと思っている。人探し（気配限定）のエキスパートだぞ」

ベル「んで？他の奴らは？」

マーモン「中にいるよ。こんな時間だし、皆寝てるだろうね」

美鈴「あ…だから返事が無かったのか」

ベル「つかさ、ここで喋ってないで中はいんね？」

マ／ル／美「ですよねー（笑）」

テコテコテコ

美鈴「そおだ、ルッス。隊服さ、作り直してくんない？デザイン代

えなくていいからさ。

ちっちゃくなった」

ベル「オレのもよろしく」

ルッスーリア「はいはい。二人とも大きくなったのね。あんなに小さかったのに」

美鈴「何スかその、何年かぶりに会った親戚のおばちゃんみたいな発言!?」

ルッスーリア「すぐやってくるわね」

たっ

美鈴「シカトっすか!?」

ベル「ししっ」

美鈴「いいや。スクアーロのこと起こしに行こうっと」

ベル「レヴィとかボスは?」

美鈴「朝からムッツリの顔なんてみたくないし、ボスは…（ブルッ）」

ベル「あ、なるほど」

～スクアーロの部屋～

美鈴「スクアーロはまだ寝てますかね？」

スクアーロ「ｚｚｚｚｚｚｚ」↑爆睡中

美鈴「寝てる（笑）」

ベル「どーやって起こすの？」

美鈴「これを使う」

取り出したのは小さな機械。

ベル「なにそれ」

美鈴「ボイスレコーダー。スクアーロの大声（八年前のだけどね）が入ってるんだ」

ベル「いつ録ったんだし（汗）」

美鈴「いくよ（ピッ）」

ボイレコ『う〝お〝おぉぃ！！起きやがれぇ！！』↑音量ＭＡＸ

ベル「うっせ。マジでいつ録ったんだよ」

美鈴「スクアーロが私のことを起こしに来たときだよ♪」

スクアーロ「ｚｚｚｚｚｚ」↑爆睡中

二人「起きないの！？」

美鈴「こうなったら、必殺、声真似！」↑秀○ｗｗ

ベル「誰の？」

美鈴「ボスの」

ベル「いやいや、ムリだろ。ボスの声メッチャ低いし」

美鈴「私の声帯は無限なのだ。いくよ。

《起きやがれ！カスザメ！！（※ＸＡＮＸＵＳ　ｖｏｉｃｅ）》」

スクアーロ「うるせーぞ！！！」

起きましたｗｗ

美鈴「お前の方が五月蝿いわボケェ！！」

あんたのせいです。

スクアーロ「ＸＡＮＸＵＳは」

美鈴「いないよ。ぜーんぶ私の声」

スクアーロ「……

帰って来たんだな」

ベル「ししっ。ボスが目ぇ覚ましたんだってな」

美鈴「わー…」

ベル「ん？姫どったの？」

美鈴「……長っ」

ス／ベ「は？」

美鈴「？スクアーロ髪長っ」

スクアーロ「お前だって長いだろうがぁ！」

美鈴「だって女の子だもん♪」

ルッスーリア「美鈴ちゃんベルちゃん、仕立て直し終わったわよ」

ベル「サンキュー」

美鈴「さっすが。早いね」

ルッスーリア「それじゃ、朝ご飯を作ってくるわね」

美鈴「あ、私も手伝う！」

タタッ

スクアーロ「おい、ベル」

ベル「ん？」

スクアーロ「美鈴になんか変わったことはあったか」

ベル「んー特に無いんじゃね？けど、スクアーロたちが言ってた特殊な力ってのはホントにあるみたいだぜ」

スクアーロ「！　その力を見せたのか？」

ベル「全然」

スクアーロ「じゃあなんで…」

ベル「王子の勘」

スクアーロ「てめえ…！」

ベル「ししっ冗談だって。プリンスジョーク。

だって六年間も一緒にいたんだぜ？そりゃ分かるっての」

スクアーロ「……」↑睨

ベル「オレ腹減ってるし、姫んとこいってこよ♪」

コンプレックス？

～台所～

美鈴「ねえルッス。何でアジト変わっちゃったの？」

ルッスーリア「（ビクッ）あのねぇ、なんだかボンゴレから撤退命令が出ちゃってね」

美鈴「マジで？」

ルッスーリア「美鈴ちゃん、棚の上にあるお砂糖とってくれる？」

美鈴「ういーっす（はっ）

？はうっ……ッ」

ルッスーリア「あら？どうしたの？」

美鈴「と、届かない」↑百五十三ｃｍ

ルッスーリア「あらあら、ゴメンなさい」↑百八十五ｃｍ

ベル「（ひょこっ）今日の朝飯なに？」↑百七十ｃｍ

ルッスーリア「パスタよ」

スクアーロ「ＸＡＮＸＵＳがうるせーからさっさとしやがれぇ」↑百八十二ｃｍ

レヴィ「ぬ…」↑百九十三ｃｍ

ベル「何だレヴィ起きてたんだ」

美鈴「うう……みんなのバカァ――――――――――！！」

ダッ

全「え！？」

ベル「オレらなんかした？」

ルッスーリア「あの様子だと、身長が低いことを気にしてるのね」

ベル「そーいや、九月の身体測定のとき百五十三ｃｍって言ってたっけ」

全「ちっさ！？」

美鈴『そんなにでかいのが偉いかコノヤロー！！』

ベル「まだ言ってるし」

ルッスーリア「マモちゃん、美鈴ちゃんのこと慰めてきてあげて」

マーモン「あとでお金貰うよ」

全（ル以外）「（いつからいた！？）」

ベル「つーか、何でマーモン？オレでもよくね？」

ルッスーリア「だめよ。あの子よりも大きい人が言ったって逆効果よ」

スクアーロ「なるほどなぁ」

マーモン「身長なんてどーでもいいのにね」↑四十ｃｍ

というわけで、ヴァリアー内最小のマーモンがいくことに。

マーモン「僕だって好きで小さいんじゃないんだ」

ですよねー（笑）

～美鈴の部屋～

コンコン

マーモン「美鈴いるかい？入るよ」

ガチャッ

美鈴「マーモン！！」

ギュムッ

マーモン「！？」

美鈴「もー皆イジワルだよー。私だって好きで小さいんじゃないの

に～～～～！！

　これでも毎日牛乳飲んでるんだよ～～～～！！」

マーモン「むぐぐ…とりあえず苦しいから一旦離してくれる？」

美鈴「あ！ゴメン！苦しかったよね」

マーモン「突然だったから受身が取れなかっただけだよ」

美鈴「（受身！？）」

マーモン「それにしても何で美鈴は小さいのが嫌なんだい？」

美鈴「だって皆大きいし、学校でもチビって言われるし」

マーモン「ハァ…」

ガヤガヤ…

マ／美「？？」

ガチャ

ドダダッ

美鈴「ベルにスクアーロにルッス！？何してんの？」

外が騒がしいと思ったら、この三人の仕業だった。

ベル「だって姫が心配だったし」

ルッスーリア「あと、ご飯できたわよ」

美鈴「了解っス」

～食堂～

ルッスーリア「美鈴ちゃん何か飲む？」

美鈴「牛乳」

マーモン「（即答!？）」

スクアーロ「（しかもチビならではの発言!？）」

バゴッ↑殴

美鈴「今チビって思ったよねぇ？（ニコッの反面怒り）」

スクアーロ「ピクピク…」↑瀕死

マーモン「あー、今の一撃でスクアーロがグロッキーになったよ」

美鈴「知らないっ（プイッ）」

バンッ

全「!？」

ＸＡＮＸＵＳ「おい、飯はまだか」

美鈴「ボス～～～～～～～～～～っ！！（泣）」

ギュムッ

ＸＡＮＸＵＳ「……」

全（ル以外）「（うわー羨ましー）」

美鈴「淋しかったよ～～～～～（泣）」

ＸＡＮＸＵＡ「……とりあえず離れろ」

美鈴「ふわっ!?ごめんなひゃい!!」

全「（“ひゃ”!?）」

美鈴「嬉しすぎてついつい」

ＸＡＮＸＵＳ「そうか。大きくなったな（ナデナデ）」

美鈴「んにゃ～（ニコ）」

レヴィ「（オレの時と接し方がちがう（ガーン））」

スクアーロ「（相変わらず美鈴には甘ぇなＸＡＮＸＵＳのヤロー）」

ルッスーリア「（こーやって見ると親子みたいねえ）」

マ／ベ「（美鈴／姫ってネコみたいだね／だな）」

なぜか頭を撫でられて嬉しそうな美鈴をみるだけで、若干一名をのぞいて、その場全員の心が和んだ。

Whoes　birthday?

ピンポンパンポーン

本日は美鈴の誕生日でっせ～。

ま、本人は忘れてるけど。

忘れていてもいつか思い出すのだ！

つーワケけ夜なんです。↑おい！

ベル「ひーめっ」

美鈴「あ、ベル。どったの？」

ベル「大広間に来な。パーティーやっから」

美鈴「パーティー？今日って何か特別な日だっけ？」

ベル「（また忘れてるし）いいから」

美鈴「？？ふむ」

～大広間～

ガチャッ

美鈴「うぃーっす。ただ今来――――」

パアンッ

全「誕生日おめでと」

美鈴「Ｗｈａｔ！？」

ルッスーリア「今日が何の日だか忘れちゃったの？」

美鈴「え？……あ、Ｍｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ」

ベル「ししっ当たり」

あ、何か既視感（デジャヴ）。

ベル「にしても、何で自分の誕生日を忘れんの？」

美鈴「だって興味ないし。皆だって――――」

ベル「十二月二十二日」

ルッスーリア「四月四日」

スクアーロ「三月十三日」

マーモン「七月二日」

レヴィ「…十一月十四日」

ＸＡＮＸＵＳ「十月十日」

あ、ＸＡＮＸＵＳ参加してたんだ（笑）

ＸＡＮＸＵＳ「ナレーションかっ消す」

サーセン（汗）

美鈴「って全員覚えてるんかい！つーか私の誕生日も」

全「知ってた」

ルッスーリア「だから皆プレゼントを買ってきたのよ」

ベル「そうだぜ。んで、これがオレから」

美鈴がベルに渡されたもの。それは――

美鈴「ティアラ？」

である。

美鈴「Ｗｈｙ？」

ベル「だって姫は姫じゃん」

美鈴「意味が分からないけどありがたく貰うっ」

憧れ（？）のティアラに目がキラッキラです。

ルッスーリア「私は美鈴ちゃんのためにかわいい服を――――」

美鈴「いつでも燃やす用意はできてるよ」

そういって笑いかける美鈴の手には手袋（発火布）が。

ルッスーリア「と思ったんだけどそう言うと思ってクールな服を買ってきたの」

美鈴「ですよねー（笑）」

ルッスーリアが渡した紙袋の中には、ジーパンにデニムベストに水色（無地）のシャツが入っていた。

美鈴「許容範囲かな」

スクアーロ「オレからはこれだぁ」

渡されたのは小さな箱。

美鈴「うわっキレー」

中に入っていたのは、十字架をかたどったサファイアの付いたネックレス。

ベル「スクアーロにしてはセンスあるじゃん」

スクアーロ「サファイアは九月の誕生石だからなぁ」

美鈴「あ、ありがとう。これ、大事にするね」

マーモン「僕はこれだよ」

スクアーロとは反対に大きな箱。というよりケース。

カチャッ

美鈴「こ…これは！！

ＳＡＸ！？」

フゥ太に言わせれば、美鈴が最もほしいものランキング堂々の一位。

美鈴「何で…？」

マーモン「ベルから聞いたのさ。君がこれをほしがってるってね」

ベル「ししっ」

レヴィ「ぬ…（このあと渡しにく！？）」

美鈴「んで、レヴィは？」

レヴィ「ぬぅ…」↑喋れよ！

気まずそうに差し出されたものは、

美鈴「写真立て？」

レヴィからとはとても思えないような、あまり派手ではないがちょっとかわいいピンクの写真立て。

ベル「よかったじゃん姫。あの写真、いっつもポケットん中だろ？」

美鈴「あ、ばれてた？」

“あの写真”とは、八年前、作戦実行前日に撮った、ヴァリアーの集合写真。

ポケットの中からそっと取り出す。

常に持ち歩いていたために、もうボロボロだった。

マーモン「年季が入っちゃってるね」

美鈴「これ持ってるとさ、遠く離れていても皆がすぐ近くにいる気がして、すごく安心できた」

改めてヴァリアーの絆の深さを知る一枚だった。

マーモン「それでボス。さっきから後ろにあるものが気になるんだけど」

その一言で全員の視線がＸＡＮＸＵＳの後ろに行く。

そこには、マーモンが出したＳＡＸに負けない大きさの箱が置いてあった。

ＸＡＮＸＵＳ「プレゼントだ」

中には――――

全（美／X以外）「ゲ…」

大きなクマのぬいぐるみ。

美鈴「キャ～～クマちゃん～～～～」

ギュムッ

全（X以外）「え――――――――――――――――――――!!?」

美鈴「ふかふかで気持ちいい～～～～（ふわぁ～ん）」

堪能しておりますゆえ、暫しお待ちを。

～十分後～

美鈴「クマ～（フカフカ）」

全「……」

ご堪能中なので更にお待ちを。

～更に十分後～

美鈴「にゃ～（フカフカ）」

全「……」

まだまだ足りないようなのでご了承ください。

～更に更に十分後～

美鈴「にゅ～（フカフカ）」

全「長い！！」

美鈴「ふわっ！？」

ベル「姫、長すぎ」

ルッスーリア「フカフカも大概にね」

マーモン「これだけで三十分も使ってるよ」

美鈴「ごめんなしゃい」

ヴァリアー隊員「我々からはこれです」

ちゃっかり参加しちゃってる隊員の皆様。

隊員「罵倒が聞こえたけど気にしないのであります！」

隊員「というわけでこれを」

ヴァリアー隊員の皆からはハイヒールブーツ。

美鈴「おっ？」

隊員「美鈴様に気に入ってもらうべく、我々がデザインし、ルッス

ーリア様に作り方を教えてもらい作ったのです」

美鈴「え！？皆が作ったの！？」

隊員全「はいっ」

早速はいてみることに。

美鈴「わーすごい。ハイヒールなのに動きやすいし疲れない。それにデザイン的にも隊服とマッチしてるし、完璧じゃん」

隊員「／／／／／／／／／／ありがとうございます！！」

隊員「／／／／／／／／／／感謝感激であります！！」

ベル「お前らなんで顔赤くしてんの？」

隊員「美鈴様はヴァリアー内唯一の女性であるために喜んでもらえることは我々にとって喜ばしいことであります！！」

ルッスーリア「やあねぇ、乙女ならここにもう一人いるじゃない」

幹部全「お前はオカマだ！！」

ルッスーリア「あんらっっ」

隊員全「……（苦笑）」

ルッスーリア「皆ひどいわぁ（泣）」

泣いているルッスーリアを余所にパーティーは過ぎていき、皆楽しみましたとさ。

めでたしめでたし。

美鈴「ナレーションなんかあった？」

ベル「いつものことじゃね」

美鈴「そっか♪」

Whoes　birthday?（後書き）

作者「ＸＡＮＸＵＳの誕生日って私の親の結婚記念日と同じ日なんだよ」

スクアーロ「う〝おぉい！！そんなプライベートなこと言っていいのかぁ！？」

美鈴「作者がいいならいいんだよ」

作者の両親「アハッ★」

作者「あんたらなんで出てきてんの――――――！？」

作者の両親「アハッ★」

作者「それ以外になんか言えよ！」

作者の両親「あはっ♪」

作者「片仮名が平仮名になって星が音符になっただけじゃねーかぁ！？」

ルッスーリア「苦労してるわねぇ」

美鈴「私の親はもっとまともだったハズ……」

作者「フフフ、君の親のモデルはこいつらだよ（黒笑）」

美鈴「（ガーン）」

ベル「あ、罷免がいろんなショックで石化しちゃったぜ」

作者「美鈴がやばいのでサイナラ～」

作者の両親「あはっ♪」

作者「いい加減帰れ――――！！！」

王子様の大脱走〜上〜

ベル「姫ーそこのポテチとってー」

美鈴「はい」

ベル「コーラ」

美鈴「へい」

ベル「チョコ」

美鈴「ほい」

サブちゃんか！

美鈴「古い」

すんません。ってか、本題ちがうし！

美鈴「黙ってろよバカナレ〜」

ういーっす。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・

はい、気を取り直して始めから。

ベル「姫ーそこのポテチとってー」

美鈴「はい」

パリパリパリ

ベル「コーラ」

美鈴「はい」

ゴクゴクゴク

ベル「チョコ」

美鈴「ん」

パキッ　ポリポリポリ

美鈴「あのさ、ベル」

ベル「んー？」

美鈴「私が言うのもなんだけど、あんまり甘い物ばっかり食べてると体に悪いよ？」

ベル「大丈夫だって。オレ王子だし♪それにたったこんだけじゃ病気になんてならないよ」

美鈴「王子関係ないし。私だって甘い物好きだから、ちょっとやそっとじゃ注意しないけどさ――」

辺りを見回す。そこにはお菓子のごみや未開封のお菓子が山のように積んである。

あれ、ベルってこんなにお菓子食べたっけ？なんて突っ込んではいけない。

これが無いと話が進まないんで。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

美鈴「言わんこっちゃない」

ルッスーリア「全く。王子様でも人の忠告は聞かなきゃだめよぅ」

レヴィ「貴様は一体何を考えているのだ」

ベルはお説教を受けていた。

顔をパンパンに膨らませ、だんまりとしている。

彼は何も言わなかった、否、言えなかった。

美鈴「何で虫歯になるかなぁ？」

重度の虫歯によって。

スクアーロ「ったく、ＸＡＮＸＵＳに知られる前に歯医者に行くぞ

お」

マーモン「僕がいいとこ紹介してあげようか？」

ベル「……（ブンブンブン！！）」

ルッスーリア「ダメよ、ワガママ言っちゃ」

ベル「……（ブンブンブン！！）」

レヴィ「虫歯なんぞさっさと治してしまえ」

ベル「……（ブンブンブン！！）」

美鈴「ベル、自業自得だよ。ずっと痛いまんまでいいの？」

ベル「……（ダッ）」

スクアーロ「おい、ベル！」

マーモン「ハァ。誰でもいいから彼を連れ戻して」

隊員「了解しました。行くぞお前ら！」

隊員達「おうっ」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

スクアーロ「う゛お゛ぉい！ざけてんじゃねえぞぉ！」

ドガアンッ！

スクアーロ「てめえ、なめやがってんのかぁ！

あいつに逃げられた挙句、何もできねえでノコノコ帰ってきただとぉ！」

スクアーロに怒られているのは、ベル捕獲隊のリーダーもとい、隊員達を引っ張ってベル捜索に向かった隊員。

スクアーロ「う〝お〝おい！（ぐいっ）なんだ、てめぇ？

文句でもあるってツラしやがって」

隊員「し……仕方なかったのです……。まさか、ボンゴレの同盟ファミリーであるキャバッローネの“跳ね馬”が出てくるとは……。

我々の判断できるレベルを超え……」

ぐいっ

隊員「ひ、ひいぃっ！」

マーモン「そこまでにしなよ、スクアーロ」

スクアーロ「（ピタ…）」

マーモン「ヴァリアーは復活してまだ日が浅い。無闇に駒を減らすのはやめてほしいなぁ。

あと、死体とかの処理も結構お金かかるんだよね」

スクアーロ「……ケッ。守銭奴チビがぁ」

マーモン「君、とりあえず、次の指示が出るまで待機しててていいよ」

隊員「は、はいぃっっ！」

タタッ　ドテッ　タタタッ　バタンッ

ルッスーリア「それにしても困ったもんねえ、あの子には」

レヴィ「どうする……ボスに知らせるか？」

美鈴「バカッそんなの自分で自分の首を絞めるだけだよ！」

スクアーロ「虫歯を治すのが怖くて逃げ出したぁ？こんなことがＸＡＮＸＵＳに知られてみろ！ただで済むわけねぇだろうがぁ！」

全「……（ゴーン）」

レヴィ「し、しかし……罰を受けるのはやつだけでオレ達は……」

スクアーロ「逃がしたオレ等も同罪に決まってんだろうがぁ！

ったくあのガキぃ……これからが大事って時によぉ……」

美鈴「私がちゃんとしなかったから……私がちゃんと止めていればこんなことにはならなくて済んだのに……」

ルッスーリア「美鈴ちゃんの責任じゃないわ」

美鈴「でも……」

マーモン「今君が落ち込んだって何にもならないよ。それよりベルだ。

こんなことになるんだったら、無理矢理虫歯を治そうとしなちゃよかったね」

ルッスーリア「あらぁ。虫歯を舐めちゃいけないわ。グッっと歯を食いしばれないだけで、攻撃するときの力は格段に落ちるわ。

１００％の力を出せないなんて、任務が務まると思う？」

美鈴「う～む」

ルッスーリア「困ったわねぇ、ホントにあのこったら怖がりで。一体どうやったら虫歯を治療してあげようかしら」

マーモン「寝てる間にやる、ってどう？目を覚ます前に、ささっとやっちゃうのさ。起きたら、もうすっきりって感じで。

僕がいい眠り薬を用意するよ」

ルッスーリア「でも……お高いんでしょう？」

マーモン「そこは特別ご奉仕価格。殺し一人分の半額という驚きの

依頼料で」

ルッスーリア「まぁ、信じられないわ！これはもうお電話するしか……」

スクアーロ「って、遊んでんじゃねぇぇぇぇっ！」

ドガアンッ！

スクアーロ「寝てる間に治すぅ？すぐに起きるに決まってんだろうがぁ！それにアイツが簡単に眠り薬を飲むとは思えねぇ！」

マーモン「そうかなぁ？」

スクアーロ「そうだぁ！」

マーモン「そうかもね……ちぇっ」

スクアーロ「まさかてめぇ、オレ達を騙して金だけを取りつもりで……」

美鈴「飲がダメなら食でいく」

スクアーロ「はぁ！？」

美鈴「日本にいたときに開発したケーキがある。これを食べた人は一秒以内に眠ってしまう。

しかもその効果は絶大。ゾウだって眠っちゃう」

スクアーロ「虫歯なのに甘いもん食わせてどうすんだぁ！！」

美鈴「あ、そっか」

レヴィ「ここは基本に立ち直った方がいいのではないか？」

スクアーロ「基本？基本ってなんだぁ？」

レヴィ「虫歯を治すために、古来より伝わる方法があるだろう」

美鈴「なんかいいｉｄｅａがあるの？」

レヴィ「虫歯に糸をくくりつけ、それを勢いよく引っ張るという……」

ドゴッ！↑蹴

レヴィ「ぐぉ……！」

スクアーロ「バカか、てめえは！まず最初にその糸をどうやってつけるんだ！」

レヴィ「き、貴様！誰が馬鹿だと！」

ガッ！↑殴

スクアーロ「何しやがんだ、てめぇ！」

そして二人の殴り合いが始まり――――

ルッスーリア「これよ！」

美鈴「どれよ！？」

ルッスーリア「あの子の顔に思いっきり愛の拳をお見舞いするのよ。そうすれば虫歯なんてポーンと飛んでいくわ。……まぁ、他の歯も抜けちゃうかもしれないけど、それは気にしないってことにして……」

マーモン「で、誰がやるの？」

ポツリとマーモン。

マーモン「殴ろうとしたらあっちは間違いなく本気で反撃してくるだようね。確実に、こっちもタダじゃすまないよ。こればっかりは美鈴でも同じ結果になるだろうね」

ルッスーリア「あ（汗）そ、そうね……ここは、やっぱり、皆で協力して……」

レヴィ「貴様がやれ」

スクアーロ「てめぇがやれ」

美鈴「アンタがやって」

マーモン「ルッスーリアがやってよね」

満場一致。

というかルッスーリア。殴ったらそれは歯が抜けるんじゃなくて、折れてるぞ。気づけ。

スクアーロ「チッ……とにかく、何が何でもヤツを連れもどさねぇとな」

美鈴「ハァ。確か、ベルはキャバッローネのとこにいるんだよね？」

スクアーロ「そうだぁ」

美鈴「……悠里しか動けないよなぁ」

ルッスーリア「悠里？」

美鈴「ちょっとやつに頼るしかなさそうだね」

～キャバッローネアジト～

悠里「まさか、こんな早くにまた悠里となるとはね」

コンコン

悠里「ばんわ～、荷物引取りに来ました～」↑！？

ガチャッ

ディーノ「お、悠里じゃねえか。イタリアに帰ってたんだな」

悠里「夜遅くにごめんくださ～い。鐘を拾いに来ましたぜ～」

ディーノ「鐘？いや、いねえけど」

悠里「あれま？んじゃ、変なヤツいない？顔パンッパンに膨らましてるヤツ」

ディーノ「ああ、いるぜ。なんか、切り裂き王子（プリンス・ザ・リッパー）のファンらしくてな。金髪にティアラしてたぜ」

悠里「うぃ～ソイツが鐘でっせ～」

ディーノ「え？でもアイツは茶髪じゃなかったか？」

悠里「やっぱマフィアだし～憧れってヤツですかねｗｗ」

ディーノ「なるほどな。んじゃ、呼んで来るからちょっと待ってろ」

悠里「へーい」

アジトの中に消えていったディーの。しかし彼は、ベルではなく叫び声とともに戻ってきた。

ディーノ「大変だ――――っ！」

悠里「（ビクッ）な、何！？」

ディーノ「いなくなっちまった！」

悠里「はいぃっ！？」

王子様の大脱走〜下〜

スクアーロ「う〝お〝い！まだみつからねーのか、ベルの野郎はぁ！」

ルッスーリア「もぅ、落ち着きなさいよ」

ベルが逃げ出してから六日が経っていた。

ルッスーリア「仕方ないじゃない。街は、キャバッローネのマフィアたちで溢れてるのよ。下手に動いて私達のことを知られるわけにはいかないでしょ。

動けるのは、美鈴ちゃんが言ってた悠里って子だけね」

スクアーロ「ちぃぃっ！」

ヴァリアーの皆は、まだ“悠里”の正体を知らない。

スクアーロ「それで、美鈴はどうしたぁ」

ルッスーリア「そうねぇ、連絡くれてからさっぱり音信不通になっちゃって」

スクアーロ「何やってんだあいつはぁ！」

美鈴がディーノに巻き込まれ大変なことになっておるとは誰も知らない。

ルッスーリア「仕方ないわ。マモちゃんに頼むしかないわね」

スクアーロ「チッ……背に腹はかえられねぇ」

レヴィ「……だな」

マーモン「これは、ヴァリアーの任務とは別件だからね。それで……

いくら払ってもらえるのかな」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

～・～・

美鈴「ここどこだろ。ハァ～お腹すいた」

キャバッローネに出向いたあの日、ベルがいなくなった事に気づいたディーノは美鈴を連れて街へ出た。

が、しかし、見つけたものの、突然銃撃を受け、その隙に逃げようとしたベルを追いかけ、足を滑らせ、ベルと美鈴を巻き込んで海に落ちた。

美鈴は二人とはぐれ、目が覚めたときは一人ぼっちだった。

美鈴「霊圧は～……変な“気”のせいで辿れないし……（ズーン）」

と、その時。

？『……！』

？『……！』

美鈴「あ、誰かいる。ベルたちかな？」

声が聞こえそちらの方へ走っていった。

こちらはベルとディーノ。

子供の喧嘩中～

ゴロゴロゴロゴロ　　ガン！

突き出した岩に頭をぶつけたディーノは、簡単に気絶した。

ベル「……あ…」

そしてベルは、こちの中の痛みが消えていることに気づいた。

プッ

異物に気づいて吐き出すと、大きな穴が開いた歯が出て来た。

ベル「……取れた。

いしししししししっ！あ――――――っ気分ソーカイ――――――――っ！」

ガサガサ

？「あ、やっと見つけた」

ベル「姫じゃん。どったの？」

美鈴「な～に～が～『どったの？』だ！どんだけ心配したことか！！」

ベル「何言っちゃってんの。オレ、ぴんぴんしてるし」

？「やっと見つけたぞ、ベルぅぅっ！」

ベル「あ、スクアーロ」

スクアーロ「ベルぅっ！てめぇ、いつまで跳ね馬のヤローと遊んでるつもりだぁ！」

美鈴「！　そーだ、跳ね馬は？」

ベル「それなら、もう終わったよ。ほら」

美鈴「ちょっ！何があったの！？」

スクアーロ「てめぇ、まさか……」

ベル「殺ってはねーよ。今同盟ファミリーと問題起こしちゃ不味いだろ」

スクアーロ「お、おう……」

ベル「さー、ボスのところに帰ろーぜ」

美鈴「こら、跳ね馬を忘れてくな」

ベル「あ。そーだな。跳ね馬も一緒に連れてくか」

美鈴「こいつ連れて帰んなきゃ怪しまれんのウチだしさ。

ほれスクアーロ、さっさとこっちに運んで」

スクアーロ「あぁ!?なんでンなこと……」

ベル「オレ、他人に借りとか作らない主義なんだよねー」

美鈴「上に同じく」

スクアーロ「知るかぁ!だったらテメーらで運びやがれぇ!」

ベル「やーだね。そんなメンドイこと、オレがするわけねーだろ……」

美鈴「やーなこった。メンドっちーことはお断りだよ~ん……」

ベ／美「だって」

ベル「オレ、王子だし♪」

美鈴「アタシ、女の子だもん♪」

スクアーロ「ふざけんなぁぁ――――――――――っ！！」

後日、ディーノは無事にファミリーに届けられたそうな。

新しい色々、出て来いやぁ！

ＸＡＮＸＵＳ「今日からヴァリアーに新しいやつが来る」

ベ／美／ル／レ「はい？」

ＸＡＮＸＵＳ「スクアーロ」

スクアーロ「オレかよ！？」

マーモン「かたいこと言わない」

スクアーロ「ちっ。出てきやがれぇ、デカブツぅう！」

ベ／美／ル／レ「！！！」

ドガアンッ！↑壁破壊

マーモン「キミ達に紹介するよ。コイツの名はゴーラ・モスカ。僕等の新しい仲間だよ」

レヴィ「不気味な……」

美鈴「（あれれのれ？なんかおっかしいよ～）」

ぺちぺち

ベル「何やってんの？」

美鈴「無機質なヤツから霊圧がします～」

X／ス／マ「（ぴくり）」

ベル「それって中に人がいるってこと？」

美鈴「そういうことになるけど、ま、ありえないか。ロボットだもんね（笑）」

XANUS「それと、てめぇらに渡すものがある」

XANXUSが取り出したのは、ボンゴレの紋章が付いた箱。

中には歪な形をした指輪が七つあった。

XANXUS「ハーフボンゴレリングだ」

全「！！」

XANXUS「晴れがルッスーリア、雷がレヴィ、嵐がベル、雨がスクアーロ、霧がマーモン、雲がモスカだ」

ルッスーリア「はぁい」

レヴィ「了解しました」

ベル「ししっ」

スクアーロ「……」

マーモン「オーケーだよ、ボス」

ベル「あり？姫は？」

美鈴「あ、そいえば」

ＸＡＮＸＵＳ「悪ぃが美鈴には外れてもらう」

ルッスーリア「え？」

スクアーロ「何っ！？」

マーモン「何故だい、ボス？」

ＸＡＮＸＵＳ「美鈴に適任の守護者はねえ。それだけだ」

ベル「でもよ、姫は幹部に欠かせない戦闘力を持ってんだぜ？」

美鈴「いいよ、ベル。何も守護者になれるとは思ったことはないし。

　そんな…私が守護者なんて…もったいないし…」

ベル「姫…？」

美鈴「大丈夫ったら大丈夫なの！！」

タッ

バタンッ

ベル「姫！」

バタンッ

ルッスーリア「……私は部屋に戻ってるわ」

レヴィ「オレも戻るとしよう」

バタン

ＸＡＮＸＵＳ「……」

マーモン「ボス、何のつもり？」

ＸＡＮＵＳ「お前らは――――――を知ってるか」

マ／ス「！！？」

～美鈴の部屋～

美鈴ｓｉｄｅ

なんで…どうして涙が止まらないの…？

私は何があったもボスについていくと決めた。それは、守護者になれなくても同じのはず…

なのに…どうしてこんなに悲しいのっ！？

美鈴「お父さん…お母さん…」

首にかけてあるリングを握り締める。
運命の日から常に持ち歩いていたリング。すべての始まりとなったリング。
ふと、骸戦の日を思い出した。
かすかにあった意識で復讐者を見た。あのときの感覚、知ってる。
コンコン
スクアーロ『美鈴、いるか？』
美鈴「スクアーロ…いるよ」
ガチャッ
スクアーロ「美鈴、話が「ねぇ、スクアーロ」…なんだ？」
美鈴「一ついいかな？」
行かなきゃ。
美鈴「日本に行かなきゃ…」
気持ちの引っ掛かりは任務に支障をきたす。
スクアーロ「どういうつもりだぁ」

美鈴「行かなきゃ。あの町に」

スクアーロ「あの町…？まさか、お前…」

あの町。そう、全てが始まった、私の生まれ故郷。

美鈴「今からボスに言ってくる」

スクアーロ「う〝お〝ぉい！オレが許可しねえぞぉ！これからが大事だって時に！」

美鈴「分かってるよ！」

分かってる。分かってるんだ。だからこそ行かなきゃいけない。

それに……それに私は――――

美鈴「私は守護者じゃないから」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

スクアーロ「……っ！！」

言葉につまるスクアーロを残し、美鈴は部屋を出て行った。

スクアーロ「……（やっぱり気にしてんじゃねえか）」

新しい色々、出て来いやぁ！（後書き）

もうすぐリング戦だ！

突然ですが、好きな属性ってなんですか？

私は大空です（ボンゴレリングが好きなだけ）！

ノロワレタマチ

〜？？？〜

そこは一面焼け野原だった。

元々は賑やかであったろう町の面影はなく、その姿は変わり果てていた。

家と言う家は全て跡形もなく、人はおろか、犬や鳥といった生き物すら近づくことはない。

世界から忘れられたようなその町は、音さえも存在しない。

その町にあるのは静寂だけだった。

“呪われた町”

人々はそう呼んだ。

その呪われた町を一人の少女が歩いていた。

楽しげでもなく、悲しげでもなく、ただ歩いていた。

町の一角で少女の歩みが止まった。

そこは元々、他の家より少しばかり裕福な家族が住んでいた。

もう家すら残っていないが。

少女はずっとその焼け野原を見ていた。

俯いているため、表情は分からない。

胸の前で手が合わせられる。まるで祈るかのように。

その手の中には彼女の宝物がそっと包み込まれていた。

ふいに、空を見上げるように、少女が上を向いた。

その頬にひとすじの涙。

沈んでいく夕日が、少女と町を照らす。

空も少女も町も真っ赤に染まる。

全てが真っ赤に染まった世界をみて少女は――――――――――――

再会と初対面

ツナ「あー暇だー！！」

山本「平和だし、イんじゃねーの？」

獄寺「そーですよ十代（Ｐｒｒｒ）……」

ツナ「あっゴメン。オレの携帯だ（ピッ）もしもし」

京子『ツナ君、今から皆で遊びに行かない？』

ツナ「えっっ／／／／／／う、うんいいけど。えっ？どーしたの？」

京子『あのね、悠里君、今日本にいるんだって！』

ツナ「えっ！？」

山本「ん？どーしたんだツナ？」

ツナ「悠里が今日本にいるって」

山本「本当か！？」

獄寺「本当ですか！？」

京子『それで、悠里君が皆で並盛商店街に行こうって誘ってくれたの』

ツナ「うん。行く。すぐ行く」

京子『ありがとう。私の家の前集合だから』

ツナ「わかった（プツッ）」

獄寺「それじゃあ行きましょう十代目！」

～並盛商店街～

ぞろぞろ

獄寺「何でこいつらもいんだよ」

ハル「悪いですか！？ハルだって悠里ちゃんに誘われたんです！」

悠里「フィン、セシルは？」

フィン「補習だってさ」

悠里「そっか。京子、ケーキ屋行こう」

京子「うん。京子はティラミス安いんだよ」

悠里「よしっっ」

リボーン「おいツナ。サボった分の補習の勉強は帰ったらネッチョリやるからな」

ツナ「ネッチョリやだ――――――！！（ガーン）」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・
～・

京子「お疲れ様」

コト…↑ジュース

ツナ「！？（まさか、オレのために！？）」

悠里「ん、はひはと（ありがと）」

ツナ「（なんだ、悠里か）って、口につめすぎ！」

悠里「（ゴクン）もう少しお酒が入ってもいいかな？」

ツナ「え！？お酒！？」

京子「ツナ君知らないの？ティラミスってお酒入ってるんだよ」

ツナ「マジで？」

結構マジらしいっすよ。実際のところちょっぴり苦い。

悠里「土産も買ったし、こんなもんかな」

ツナ「あはは、よかったね」

京子「あれ？」

悠／ッ「？」

京子「何の音だろう？」

ドーン…ドーン…

ドゴオッ

ツナ「な……何！！？」

悠里「京子、離れてな」

京子「うん」

ガキッ

ひゅうううう

ツナ「え…ええ！！？」

ドッ

ツナ「ぎゃああ」

ぐしゃあっ

？「す…すみませ…！！」

ツナ「いててて」

？「……おぬし……！！」

悠里「あれ？確か、あいつって門外顧問の…」

？「う〝お〝ぉい！！」

？「あ、しまった！」

？「う〝お〝ぉい！！」

スクアーロ「なんだぁ？外野がゾロゾロとぉ」

悠里「（す…スクアーロ！！）」

スクアーロ「邪魔するカスはたたっ斬るぞぉ！！」

獄寺「あぁ！？」

ツナ「な…何なの一体！？」

悠里「京子（ボソ）」

京子「なに？悠里君」

悠里「ハルやフィンたちと一緒に先に帰ってて」

京子「悠里君……！」

？「折角会えたのに……。こんな危険な目にあわせてしまって」

ツナ「え？あ…あの…誰でしたっけ！？」

？「来てください！」

ツナ「ちょっ何なの！？」

？「安全な場所へ！！おぬしに伝えたいことが！！」

悠里「んお？向こうに行っちゃう。

　真相を確かめるべく、ダッシュだ私！！」

スクアーロ「う〝お〝お〝い」

ダンッ

ツ／？「！！」

スクアーロ「もう鬼ごっこは終わりにしようや」

ツナ「ひいい、でた――――っ！！」

スクアーロ「で、何だ？そいつは」

悠里「ボ…ボンゴレボス十代目…候補……沢田つ…綱吉」↑息切れ中

ツナ「ゆ、悠里！なんでついてきてんの！？」

悠里「人のバトルを見るのが趣味だからね」

ツナ「趣味悪っ！」

スクアーロ「う〝ぉい、てめー誰だ？悠里っつったら美鈴がいってた奴じゃねえか」

ツナ「美鈴？（あれ？どっかで聞いたような…）」

悠里「にししししっ」

美鈴は首にかけてあったネックレスを取り出す。

あ、スクアーロからもらったやつね。

スクアーロ「！！　それは！…なるほどな（ニヤリ）

とりあえずテメーから片付けてやるぜぇ！！」

？「！！！」

ブンッ

ツナ「ひいっ」

？「がっ」

ツナ「！！」

バリーンッ

ツナ「き…君！！」

スクアーロ「う゛お゛ぉい」

ツナ「！（ビクッ）」

スクアーロ「そーだぁ、貴様だぁ。このガキとはどーゆー関係だぁ？」

悠里「いやいや（汗）さっき言ったじゃん」

スクアーロ「ゲロっちまわねーとお前を斬るぜ」

悠里「シカト！？仕方ない、大人しくしてよう」

賢明な判断ですよ♪（ニコッ

悠里「前言撤回！ナレをぶっ飛ばす！」

キャ～～～～～！（笑）　ダッ

悠里「腐れ！アホ野郎――！！」　ダッ

バッ↑ボム

スクアーロ「！！」

ドガガガッ

スクアーロ「なんだぁ？」

ザッ…

スクアーロ「……？」

獄寺「その方に手をあげてみろ。ただじゃおかねぇぞ」

山本「ま、そんなとこだ。相手になるぜ」

ツナ「獄寺君!!山本!!」

山本「持って来てねーのになぜかオレのバットが立てかけてあったんだよな（笑）」

ツナ「（アイツの仕業だーっ!!!（ガーン））」

スクアーロ「てめーらもカンケーあんのか、う〝お〝ぉい」

悠里「関係あるよ」

ツナ「あ、帰ってきた」

スクアーロ「そおかぁ。テメーらに一つだけ確かなことを教えてやるぜ。オレにたてつくと……死ぬぞぉ」

獄寺「その言葉、そのまま返すぜ」

山本「ありゃ剣だろ?オレから行くぜ」

?「やめてください!おぬし等の敵う相手ではありません!!」

悠里「バジルの言うとおりだ」

獄寺「ん?」

山本「!」

ツナ「そんな…（バジルってこの人の名前かな?）」

スクアーロ「後悔してもおせぇぞぉ」

山本「行くぜっ」

キイン

悠里「バト1♪」

キンッ　キキキンッ

スクアーロ「貴様の太刀筋、剣技を習得してないな」

山本「だったらなんだ」

スクアーロ「軽いぞぉ!!!」

ガキンッ

ドシュッ↑火薬

山本「!!」

ドゴッ

獄寺「!」

ツナ「山本ぉ!!」

悠里「ピュ～♪」

ぐらっ　どさっ

獄寺「ヤロッ！！」

スクアーロ「おせぇぞ」

獄寺「！？」

スパン

悠里「バト2♪」

ヒュンッ

獄寺「！！」

ゴッ↑蹴

獄寺「ぐあっ」

ツナ「獄寺君！！」

悠里「ワォ、さっすが♪」

スクアーロ「う゛お゛ぉい、話にならねーぞぉこいつら」

ツナ「！！」

スクアーロ「死んどけカス」

バジル「くっ（タッ）」

ガキッ

スクアーロ「いよおぉ、ゴミ野郎。そろそろゲロっちう気になったかぁ？」

バジル「断る！！」

スクアーロ「なら、ここが貴様の墓場だぁ」

キンッ

キキキンッ

悠里「バジルも頑張るねぇ」

ツナ「悠里はあの二人を知ってるの？」

悠里「フッ。僕の情報網を舐めるな」

ツナ「（この人いろんな意味でこえー！！）」

ガッ

バジル「ううー……」

スクアーロ「う〝お〝ぉい、まさかオレに勝てるとでも思ってたのかぁ？野良犬の分際で……。

　話は美鈴はそっちのガキから聞くことにしたぞぉ。てめぇは死ねぇ！！」

ズガン

死ぬ気ツナ「復（リ）…活（ボーン）！！！！」

ス／バ／悠「！！」

死ぬ気ツナ「ロン毛！！！死ぬ気でお前を倒す！！！」

餃ＶＳ鮪

死ぬ気ツナ「復(リ)…活(ボーン)！！！！」

ス／バ／悠「！」

死ぬ気ツナ「ロン毛！！！死ぬ気で、お前を、倒す！！！」

悠里「キャー目に悪いものー（笑）」↑酷

スクアーロ「う〝お〝おいなんてこった…死ぬ気の炎に…このグローブのエンブレムは…まさかお前、噂に聞いた日本の…」

悠里「ドンだけ人の話し聞いてないの！？」

スクアーロ「ますます貴様ら何を企んでんだぁ！？死んでも吐いてもらうぞぉオラァ！！！」

悠里「本日シカト四回目！！」

死ぬ気ツナ「うおおおお！！！」

ガッ

死ぬ気ツナ「！？」

スクアーロ「う〝お〝おい、よえぇぞ」

ガキッ

悠里「やっぱり沢田綱吉じゃ、スクアーロに敵いっこないか（笑）」

スクアーロ「う〝お〝おい、いつまで逃げるきだぁ！？」

ツナ「ひいぃっ」

スクアーロ「腰抜けが！！」

ドシュシュッ↑火薬

ツナ「わ！うわあああ！！！」

ブゥゥン

ドガガン

スクアーロ「ぐっ」

悠里「爆風ハンパな～い！

ねっリボーン」

リボーン「！！　オレが後ろに居たことに気づいていたのか」

悠里「にししっ当たり前じゃん」

バジル「ハァハァ」

ツナ「あ…ありがとう…。き…君！だ…大丈夫なの？」

バジル「拙者はバジルと言います。親方様に頼まれて沢田殿にあるものを届けに来たのです」

ツナ「は？オレに？…つーか親方様って…」

バジル「これです」

ツナ「？」

バジルが出したのは、ボンゴレの紋章のついた箱。

パカッ

中には、やはり歪な形をしたリングが七つ。

ツナ「なに……これ……！？」

悠里「なっ！？ハーフボンゴレリング！？」

スクアーロ「う゛お゛ぉい、そぉいぅことかぁ。こいつは見逃せねぇ一大事じゃねえかぁ」

バジル「！！」

スクアーロ「貴様らをかっさばいてから、そいつは持ちかえらねぇとなぁ」

バジル「くそ」

ツナ「ひいいいっなんなの～～！！どーしよー！！」

リボーン「……やべーな」

スクアーロ「う゛ぉ゛ぉい、それを渡す前に何枚におろして欲しい？」

バジル「渡してはいけません沢田殿」

ツナ「え!?ちょっなんなの?どーなってんのー!?」

？「相変わらずだな。S.スペルビ スクアーロ」

スクアーロ「!?」

ツナ「!!（この声は……!）」

ディーノ「子供相手にムキになって恥ずかしくねーのか?」

バジル「!?」

ツナ「ディ…ディーノさん!」

悠里「ちっ。跳ね馬か…」

ディーノ「その趣味の悪い遊びをやめねーって言うなら、オレが相手になるぜ」

スクアーロ「（やはり、跳ね馬は向こうか）」

ディーノ「黙ってねーで何か言ったらどうだ」

ダッ

パシッ

悠里「もらいっ」

ツナ「え…？」

バジル「な…！」

リボーン「！？」

悠里「ハーフボンゴレリングは貰っていくよ。バイビ♪」

ダッ

スクアーロ「う゛お゛おい！待ちやがれぇ！」

ダッ

バジル「まっまてっ

ううっ（ドサッ）」

ツナ「！」

ディーノ「おい、無茶すんな」

リボーン「深追いは禁物だぞ」

ツナ「リボーン！どーなってんだ？どうして悠里が……？」

ファンファンファン

ロマーリオ「ボス…サツだぜ」

ディーノ「ああ。ツナ、その話はあとだ。廃業になった病院を手配した。行くぞ」

ツナ「ま、待ってください！！獄寺君と山本が……！！」

リボーン「あいつらなら心配ねーぞ」

山本「大丈夫かツナ！」

獄寺「一体何なんすか？奴は？」

ツナ「二人とも！！」

リボーン「お前らがいるだけ足手まといだ。とっとと帰っていいぞ」

山／獄「！」

ツナ「リボーン、なんてコトを……！！」

リボーン「いくぞ（ぐいっ）」

ツナ「わっわっちょっおい！！」

リボーン「ほっとけ」

敵の正体

～中山外科医院～

ディーノ「バジルはどーだ？ロマーリオ」

ロマーリオ「命に別状はねぇ。よく鍛えられてるみてーだ。傷は浅いぜボス」

ツナ「あの…で…彼…何者なの…？」

ディーノ「こいつがボンゴレでないことは確かだ。だがもう一つ確かなことがある。それはコイツはお前の味方だって事だ」

リボーン「ついでに言っとくと、お前を襲ったあのロン毛はボンゴレだぞ」

ツナ「なあ！？どーなってんの？ボンゴレが敵でそーじゃない人が味方って…。

つーかオレ、別に敵とか味方とかありませんから！」

ディーノ「それがなツナ。そーも言ってらんねえみたいだぞ」

リボーン「あのリングが動き出したからな」

ツナ「リング？

っそーだリボーン！悠里は！一体なんで…！」

リボーン「……

ディーノ。頼んでいたやつはどーなった」

ディーノ「すまねえ。まだ調べがつかなくてな」

ツナ「??　え?　何の話?」

ディーノ「偽名の線を考えるにしても、本名が分からないんじゃ…」

リボーン「ああ」

ツナ「オレにもわかるように説明して!」

リボーン「ツナ、あのロン毛の名前はスクアーロって言ってな、ボンゴレで最強と謳われる独立暗殺部隊ヴァリアーのメンバーなんだ」

ツナ「ボンゴレで最強!?」

リボーン「ヴァリアーは忠誠心が高く、あらゆるミッションをこなしてきたが、あくまで裏の部隊だったからな、表舞台に出てくることはなかったんだ」

ツナ「って、それと悠里と何がカンケーあるんだよ!」

リボーン「やつはバジルが持ってきたハーフボンゴレリングを狙ってきた。そして、そのリングは悠里によって奪われた」

ツナ「え…それってつまり…」

リボーン「まだハッキリしたわけじゃねえからな、ディーノに調べてもらってたんだ」

ディーノ「だがな、未だにボンゴレファミリーの悠里って名前の女子マフィアはみつからねーんだ。鐘もな」

ツナ「え!?鐘もなの!?」

ディーノ「偽名の線も考えたが、本名を知らないんじゃ話にならない」

ツナ「偽名?

……あ、ディーノさん。“美鈴”って名前に聞き覚えはありませんか?」

ディーノ「美鈴?」

リボーン「黒曜で聞いたあの名前か」

ディーノ「分からないが、どこかで聞いたような気がするな……」

リボーン「調べてみて損はないな」

ディーノ「ああ。そうだな」

ツナ「でも……そんな……悠里や鐘が暗殺部隊…?」

~日本のどっかの森~

ザザッ

ザザザッ

スクアーロ「う〝お〝おい！てめぇ、待てって言ってんだろうがぁ！！」

悠里「五月蝿いよ。木から落ちたらどうするつもり？」

スクアーロ「知るかぁ！つーかいつまで変装してるつもりだぁ」

悠里「五月蝿い」

美鈴「ま、邪魔だからいっか（ポイ）」

どさっ

よい子はポイ捨てなんていけないぞ★

美鈴「（ピタッ）ハァ～。

スクアーロ」

スクアーロ「……なんだぁ」

美鈴「リングをアジトまで頼むよ。（ポイ）

僕はまだ日本に用事が残ってる」

スクアーロ「（パシ）用って何だぁ。あの町には行ったんじゃないのか？」

美鈴「ちょっと忘れ物。大丈夫。すぐに帰るから」

ダッ↑去

スクアーロ「おい、美鈴！

……クソガキがぁ」

ダッ↑帰

～やっぱり日本のどっかの森～

美鈴「……（行かなきゃ、行かなきゃ、行かなきゃ！）」

フラ…

美鈴「！」

ドサッ

偽物

？「……め…き…」

誰？

？「……き……ろ」

誰が呼んでるの？

？「姫、おきろ！」

パチッ

美鈴「……え？」

ベル「や～っと起きた。寝ぼすけ姫」

美鈴「ベル？ってことはここってイタリア？」

ベル「なに？どしたの？森ん中でぶっ倒れてるなんて何年前の話だよ」

美鈴「誰が私をここに？」

ベル「スクアーロ。何か知んないけど、姫が森ん中で倒れたからっつって、背負って帰ってきたんだぜ」

美鈴「先に帰れって言ったのに（ボソ）」

ベル「で、何やってんの？勝手に日本に行ったと思ったらさ、勝手に沢田達と接触してるしさ。マジで何してんの？」

美鈴「別に。沢田達とは会いたくて行ったんじゃないし、ただ、

　あの町のことが気になっただけだし」

ベル「あの町って……まさかのアレ？」

美鈴「まさかって言うほどじゃないでしょ」

バンッ↑扉開

スクアーロ「う〝お〝おい！会議室に集合だぁ！」

美／ベ「うるせ！」

～会議室～

美鈴「で、何？」

スクアーロ「何ってボンゴレリングを完成させるんだろうがぁ」

美鈴「あ、そ。それだけ。僕がいる意味ってあるの？」

レヴィ「ない」

美鈴「てめぇには聞いてねえよムッツリ」

レヴィ「なぬ！？」

美鈴「どーせいるいみないなら部屋に戻らせてもらうよ」

スクアーロ「う゛ぉい、ふざけてんじゃねえぞ。お前の説教もかねてんだよ」

美鈴「あっそ。だったらさっさとしてよ」

スクアーロ「てめぇ……ちっ。

リングを配るぞ」

スクアーロによって全員にハーフボンゴレリングが渡される。

ベル「ししっ。んじゃ早速」

カチッ　（ペキッ）→あれ？

（　）内は美鈴にしか聞こえてないよ★

美鈴「（“ペキッ”？）」

ＸＡＮＸＵＳ「解散しろ。美鈴は残れ」

ルッスーリア「はあい」

レヴィ「了解しました」

ベル「ししっ」

スクアーロ「…」

マーモン「わかったよ」

美鈴「フン」

バタン

ＸＡＮＸＵＳ「美鈴。てめえが日本に行った理由だが…」

美鈴「あの町に行きたかっただけ。出かける前にもそういって許可貰ったでしょ？」

ＸＡＮＸＵＳ「じゃあ何故沢田綱吉といた」

美鈴「知らない。ただぶらついてたらあいつ等がいて、そこにスクアーロが乱入してきた。

それだけで充分」

ＸＡＮＸＵＳ「信じていいんだな」

美鈴「フッ。今更ボスに信じる信じないを言ってどーすんの？裏切りがどーのこーのって？あほらし」

ＸＡＮＸＵＳ「（ピクッ）」

美鈴「僕の性分的に、裏切るならもっととっくに裏切ってるよ。ボ

スが閉じ込められたあの日にね！

……聞きたいのはそれだけ？言いたいのはそれだけ？なら、僕は部屋に帰らせてもらうよ」

ＸＡＮＸＵＳ「……」

美鈴「その沈黙、肯定と受けさせてもらうよ」

ガチャッ

美鈴「それと、どーせ自分で気づいただろーけど、

そのリング、偽物（フェイク）だよ」

ＸＡＮＸＵＳ「！」

バタンッ

美鈴「クスクス。あの鮫も馬鹿みたい。こんな偽者にだまされるなんてね……クスクス」

～スクアーロの部屋～

ガチャッ

スクアーロ「！　……美鈴か」

美鈴「クスクスクス」

スクアーロ「何を笑っていやがる」

美鈴「今すぐボスのところに言った方がいいよ。

　あんたが追いかけて取ってきたリングについて話があるみたいだから」

スクアーロ「？」

～ＸＡＮＸＵＳの部屋～

スクアーロ「う〝お〝ぉい、お呼びかボス？褒美をくれるってんなら、ありがたく頂戴するぜ」

ガッ↑頭？

ゴッ↑机に

スクアーロ「なっ何しやがる！！？」

ＸＡＮＸＵＳ「フェイクだ」

グシャ

スクアーロ「偽物！？」

ＸＡＮＸＵＳ「家光…

日本へ発つ。奴らを…

根絶やしにする」

偽物（後書き）

……美鈴が怖いよ…。

日本へ（前書き）

恐らくメチャクチャ短いよ♪

日本へ

ＸＡＮＸＵＳ「フェイクだ」

グシャ

スクアーロ「偽物！？」

ＸＡＮＸＵＳ「家光…

日本へ発つ。奴らを…

根絶やしにする」

バタン

美鈴「にししっバーカ」

スクアーロ「てめぇ！これを知ってて行かせたなぁ！」

美鈴「何言ってんの。当たり前でしょ？」

ベル「実際悪いのはお前だろ、スクアーロ」

ルッスーリア「八つ当たりはダメよ♪」

レヴィ「だからボス、スクアーロではなくオレに任せてくれれば…」

ベル「それはねーだろ。お前の場合、門外顧問のガキにまかれてお

終いじゃんタコ」

レヴィ「タコォッ！？」

美鈴「にしし」

ルッスーリア「それにしても見破ったのって美鈴ちゃんよね？
　　　　　　どうして分かったの？」

美鈴「まず、リングを合わせたとき音が明らかにおかしかった。まるで違うパーツをはめた時みたいにね。
　それでボスに説教されてる間に、ボスのリングを観察した。思ったと通り、０・０００１ミリずれてたよ」

ベル「は？」

ル／マ／レ／ス／ベ「じ――」

　　　　　　　　…………………………………………………………

……………………………………………………

　　　　　　　わかるか！！」

美鈴「はぁ？なんで？
　　　じゃ、モスカ…」

モスカ「グォン…グォン…」

美鈴「に聞いてどーする！なんでロボットに聞いてんの！しっかりしろよ私！！」

ルッスーリア「落ち着いて美鈴ちゃん！」

美鈴「I’m sorry. I’m BAKA.」

ベル「なんか色々と処理が間に合ってねーけど」

美鈴「★♪＊♯♭r×●＠＋£」

マーモン「ここは地球だよ！マイクが翻訳できてない！」

美鈴「～～」

全「わ──！！！」

バンッ

XANXUS「準備はできたかカスども」

美鈴「That’s ok boss.」

全「あ、戻った」

XANXUS「美鈴。ついてくるのか？」

美鈴「もっちろん♪（ニコッ）」

XANXUS「／／／／／／／／／／／／」

スクアーロ「（XANXUSが…）」

レ／ル／ベ／マ「（ボスが…）」

全（美／X除く）「（顔を赤くした！？）」

XANXUS「日本に行くぞ」

全「はい！」

日本へ（後書き）

ここまで来てお分かりでしょうが、美鈴は一種の二重（？）人格です。

因みに、ほんわか系の時は、人を惚れさせるほどキュートらしいです←メッチャ他人事

集合（前書き）

※メンドクサイので全員が集まるとこからです。

集合

レヴィ「雷のリングを持つオレの相手はパーマのガキだな」

ランボ「！（ゴクリ）」

レヴィ「邪魔立てすれば皆消す」

獄／山／了「！」

ツナ「（やばいよ！！）」

スクアーロ「待てレヴィ！」

全「！」

ルッスーリア「一人で狩っちゃだめよ」

マーモン「他のリングの保持者もそこにいるみたいなんだ」

ツナ「うわわわ……こ…こんなに……！」

スクアーロ「う゛お゛おい！！！よくも騙してくれたなぁカスども！」

ツナ「で…でた――っ」

山本「！」

獄寺「あんにゃろう」

美鈴「騙される方が悪いんだけどね（ボソッ）」

スクアーロ「雨のリングを持っているのはどいつだぁ？」

山本「オレだ」

美鈴「（ふむ。雷はアホ牛で雨は山本か…

悪くない人選だな）」

スクアーロ「なんだぁてめーか。

三秒だ、三秒でおろしてやる」

ツナ「ひいいいそんな…やばいよ！！！」

ガッ↑肩　？

スクアーロ「！！」

ＸＡＮＸＵＳ「のけ」

スクアーロ「ぐっ」

レヴィ「のけっ」

スクアーロ「う〝お〝ぉい！てめーはカンケーねーだろ！」

リボーン「でたな…まさか、また奴を見る日が来るとはな。
ＸＡＮＸＵＳ」

ツナ側全「！！」

ツナ「う…（な…なんだ…この人……！？）」

ＸＡＮＸＵＳ「（くわっ」↑睨

ツナ「ひいっ（ぞくっ）

うわあ！！」

獄／山「（く…う…動けねぇ）」

ＸＡＮＸＵＳ「沢田綱吉…」

コオオォォ

ツナ「！！」

ルッスーリア「まさかボス、いきなりアレを……！！」

スクアーロ「オレ達まで殺す気か！？」

リボーン「やべーぞ！逃げろ！」

ツナ「！　ええ！？」

ベル「ボス！オレ達の努力を無駄にする気かよ！！」

ＸＡＮＸＵＳ「死ね」

コオオオオ

美鈴「ＸＡＮＸＵＳ！！」

全「！！」

ＸＡＮＸＵＳ「……美鈴」

美鈴（タブンネ）「ＸＡＮＸＵＳ。俺の努力、無駄にする気か？」

ＸＡＮＸＵＳ「てめぇは誰だ」

ヴァリアー全「！？」

美鈴（タブンネ）「言う必要はない。その手をおさめやがれ」

ＸＡＮＸＵＳ「……ちっ」

シュウウウ

ツナ「た…助かったの？」

リボーン「あいつは…」

ツナ「あ！もしかして、美鈴って子！？」

ヴァリアー全「！！？」

美鈴「フッ。なんでアタシの名前を知ってるのかは知らないけど、その名前、軽々しく口にすると首が飛ぶよ？（ニコッ）」

ツナ側全「（ぞくっ）」

リボーン「なんつー殺気だ……」

ガッ

？「そこまでだ」

獄寺「あ、あいつは…」

家光「ここからはオレが取り仕切らせてもらう」

ツナ「と……父さん！！？」

美鈴「あらあら、門外顧問の家光じゃない。もう逃げなくていいのかしら？」

バジル「何を！」

家光「待てバジル。オレは逃げていたんじゃない。九代目からの回答を待っていたんだ」

美鈴「それは言い訳にしか聞こえないよ」

ＸＡＮＸＵＳ「美鈴、黙っていろ」

美鈴「アハハッ」

家光「オレは近頃のお前達のやり方と、それを容認する九代目に疑問を持ってな。九代目に異議申し立ての質問状を送っていた。そして、その回答と取れる勅命が今届いた」

ツナ「何の話かさっぱりわかんないよ～～っ。

つーかなんで父さんが…！？」

リボーン「門外顧問。それが家光のボンゴレでの役職だ。

ボンゴレであってボンゴレでないもの。

平常時には部外者でありながら、ファミリーの非常時において、ボスに次ぐ権限を発動できる、実質？2だ」

ツナ「な！？父さんが？2！？」

リボーン「そして門外顧問は、後継者選びにおいてボスと対等の決定権を持ってる。つまりボンゴレリングの半分であるハーフボンゴレリングを後継者に授けられる権限だ」

ツナ「ボンゴレリングの半分って……」

リボーン「言わなかったか？七種類あるハーフボンゴレリングはそれだけではただのカケラにすぎねーんだ。対となる二つが揃って初めて後継者の証であるボンゴレリングになるんだ」

ツナ「それでこんな変な形なんだ」

リボーン「逆に言えば二つ揃わなければ後継者にはなれねーんだ」

美鈴「へぇ～そーなんだ」

ベ／ル／レ／マ／ス「知んなかったの！？」

リボーン「ボスと門外顧問が別々の後継者を選ぶなんて、滅多にあることじゃないけどな」

家光「ＸＡＮＸＵＳ、これが勅命だ」

パシッ

ボッ

マーモン「それは九代目の死炎印。まちがいない。本物の勅命だね」

そこにはこう書かれていた。

“今まで自分は、後継者に相応しいのは家光の息子である、沢田綱吉だと考えてそのように仕向けてきた。だが、最近死期が近いせいか、私の直感は冴え渡り、他により相応しい後継者を見つけるに至った。

我が息子、ＸＡＮＸＵＳである。

彼こそが真に十代目に相応しい”

ツナ「なぁっ！？あの人九代目の息子なの！？」

美鈴「騒がしい」

“だが、この変更に不服な者もいるだろう。現に家光はＸＡＮＸＵＳへのリングの継承を拒んだ。かといって、私はファミリー同士の無益な抗争に突入することを望まない。そこで皆が納得するように、ボンゴレ公認の決闘をここに開始する”

家光「……つまりこーいうこった……。

同じ種類のリングを持つもの同士の一対一のガチンコ勝負（バトル）だ」

ツナ「ガチンコバトル～～～～！！？」

家光「ああ。後は指示を待てと書いてある」

獄寺「指示…！？」

？「お待たせしました」

ババッ

？「今回のリング争奪戦では、我々が審判（ジャッジ）を務めます」

チェルベッロ「我々は九代目直属のチェルベッロ機関の者です」

チェルベッロ「リング争奪戦において、我々の決定は九代目の決定だと思ってください」

チェルベッロ「九代目はこれがファミリー全体を納得させるためのギリギリの措置だと仰っています。

異存はありませんか？ＸＡＮＸＳＵ様」

ＸＡＮＸＵＳ「……」

チェルベッロ「ありがとうございます」

家光「待て、意義ありだ。

チェルベッロ機関など聞いたことがないぞ。

そんな連中にジャッジを任せられるか」

チェルベッロ「意義は認められません」

チェルベッロ「我々は九代目に仕えているのであり、あなたの力の及ぶ存在ではない」

家光「なに…っ」

ルッスーリア「んまあ、残念ね～～家光♪」

美鈴「にししっバッカみたい」

チェルベッロ「本来、七種類のハーフボンゴレリングは（中略）

そこで、真のリングに相応しいのはどちらなのか、命を懸けて証明してもらいます」

美鈴「あ、新技でた」

ツナ「『中略』とかどんだけ！？」

作者「あまりにも説明が長ったらしいので斬った」

全「（微妙に字が違う…）」

ベル「ま、いんじゃね？」

美鈴「確かに気にするだけ無駄だ」

チェルベッロ「場所は深夜の並中。詳しくは追って説明します」

山本「え！？」

ツナ「並中でやんの！！？」

美鈴「この町で一番楽しんで戦える場所だね」

ルッスーリア「あんらぁ。でも美鈴ちゃんは戦わないわよぉ」

美鈴「それを言ったらダメだよぅ」

ベル「ししっ姫グレてやんの」

チェルベッロ「それでは明晩十一時、並盛中でお待ちしています」

チェル×2「さようなら」

バッ

ツナ「ちょ　まって　そんなっ！」

ＸＡＮＸＵＳ「……」↑睨

ツナ「うわああ！！（ぞくぞく…っ）」

ＸＡＮＸＵＳ「帰るぞ」

ヴァリアー全「はい」

バッ

ツナ「か…帰ってくれた…」

リボーン「……」

ツナ「リボーン？」

山本「小僧、どーしたんだ？」

リボーン「あの美鈴って奴、どーも引っ掛かるな」

ツナ「あの子がどーかしたの？」

リボーン「ヴァリアーに女子隊員はいないはずなんだが」

全「！！！」

美鈴「フフフッ。楽しませてくれよ、沢田綱吉」

集合（後書き）

前回、美鈴は二重人格かも、とかいったけど、二重どころじゃないね・・・・。

やばい！早くそこまで（話を）辿り着かせないと！！

読者の皆が誤解したまま話が進んじゃう！！

予想タァイム！

～ヴァリアーアジト～

美鈴「さて、リング争奪戦においてのみんなの相手の守護者を私が分かる範囲で予想をしてみた。

　まずは、晴、つまりはルッスーリアの相手は、笹川了平と思われる」

ベル「誰だっけそれ」

美鈴「並中ボクシング部主将。座右の銘は“極限”。やけど注意。

→より、ムエタイを使うルッスーリアとしても、歴代の晴の守護者からしてもコイツしか考えられない」

ルッスーリア「ボクシングねぇ……。あまり好きじゃないのよね、あのスポーツ」

美鈴「次に嵐、つまりはベルね」↑無視

ルッスーリア「キィーッ！無視しないでぇ！」

美鈴「ベルの相手は獄寺だと思う。ま、私の勘ね。というより、嵐＝荒々しい＝ボムってなって、獄寺が出てきただけなんだけどね」

↑なお無視

ベル「獄寺ね、アイツたいした実力もないくせに右腕とか言ってんだもんな。ししっ」

美鈴「雲、ゴーラ・モスカの相手は……考えにくいけど恭弥だね」

ベル「ん、アイツってやんのか？」

美鈴「よく分からないけど、一人でいるのを好む奴だからさ、いかにも『雲です』って感じだし」

ベル「ふーん」

マーモン「で、霧はどーなんだい？」

美鈴「霧……か。マーモンは術師だから、相手も術師で来るかもしれない。

　となるとそーとーありえない話になるけど、六道骸しかいない」

ベル「でも今は復讐者に捕まってるんだし、戦えねーだろ」

美鈴「アイツを舐めたらいけない。脱獄だってするかもしれないんだ」

マーモン「何がどうあれ用心しておいた方がよさそうだね」

ルッスーリア「雷と雨はもう分かってるから情報は要らないわね」

レヴィ「一応あの牛ガキについて聞かせてもらう」

美鈴「いいよ。

　ランボはボヴィーノファミリーのヒットマン。元々はリボーンを殺すために日本に来たらしいけど、今は完全に沢田の家族になってるね。

　アイツは10年バズーカという秘宝を所持している」

マーモン「10年バズーカか。珍しい物を持ってるね」

美鈴「十年後のアイツは自らの角に雷を呼び込み、その電圧は百万ボルト。注意しな」

レヴィ「ふん。オレの電気傘（パラボラ）の前では通用せぬことを教えてやる」

スクアーロ「う゛ぉい、刀小僧はどーなんだぁ」

美鈴「山本に関してはノーコメント。あいつの力は未知数だ。今情報を与えてしまうと、そこから先に進めないからね」

スクッ

美鈴「さてと、私は疲れたから寝るよ。

　（……アイツが目覚め始めてる…。抑えなきゃ）」

ベル「ん。おやすみ～」

ルッスーリア「しっかり寝て疲れを取るのよ」

美鈴「オッケーオッケー♪」

晴の守護者戦

～並中～

チェルベッロ「厳正なる協議の結果、今宵のリング争奪戦のカードが決まりました。第一戦は、

晴の守護者同士の対決です」

ツナ「晴の守護者同士の対決……ってことは…」

ルッスーリア「あの坊やね」

了平「あいつか～～～」

チェルベッロ「よくお集まりいただきました」

チェルベッロ「それではただ今より、後継者の座を賭け、リング争奪戦を開始します」

チェル×2「あちらをご覧ください」

ツナ「？」

カッ　カッ↑照明　付

獄寺「！！」

ツナ「ああ！？な……何これ――！！？」

チェルベッロ「晴の守護者の勝負のために我々が用意した特設リングです」

チェルベッロ「今回は晴の守護者の特性を考慮した結果リングとしましたが、指輪争奪戦では各勝負ごとに、特別な戦闘エリアを設置いたします」

ツナ「んな――――!!あんな大掛かりな物を～～～～!!?」

ベル「ケッコー金かかってんね」

マーモン「でも勝負は見えてるんだ。無駄遣いだよ」

美鈴「なんでマーモンは口を開くと金、金、金、金なのかぁ?お金で買えない大切な物だってあるのに」

スクアーロ「わけわかんねーこと言ってんじゃねーぞ!」

美鈴「ワケわかんなくないよ。家族だってそうなんだ……」

スクアーロ「!」

ルッスーリア「ねぇ?ボスまだかしら?

私の晴れ舞台だって言うのに～～～」

マーモン「欠席みたいだね」

スクアーロ「あの男が他人の戦いに興味あるわきゃねぇ……」

レヴィ「！（ピクッ）」↑睨

スクアーロ「そもそも奴の柄にもねぇようなこんなセコイ勝負受けてねぇでオレにやらせればいいんだ。あんなガキども五秒でかっさばくぜぇ……」

ってう〝お〝おい！いつまで睨んでんだぁ！？」

レヴィ「じ――――」↑睨

ベル「なんかガンみしてるチビいるんだけど、マーモン」

マーモン「分かってるよ。あいつ守護者でもないのに……

見物料ふんだくってやりたいよ」

美鈴「へ！？」↑ガン見してチビで守護者じゃない人

ベル「姫じゃないし。あいつ。リボーン」

美鈴「あ」

チェルベッロ「それでは、晴の守護者、リングの中央へ来てください」

ルッスーリア「遊んでくるわねー」

マーモン「楽しませてもらうよ」

スクアーロ「とっとと殺れぇ」

美鈴「私が睡魔に負ける前によろしく」

全「（じゃあ来るなよ！！）」

チェルベッロ「間違いありません。正真正銘の晴のハーフボンゴレリングと確認しました」

チェルベッロ「指輪は原則として首からさげることとします。そして相手を倒し、指輪を奪った者が勝ちです」

ルッスーリア「！　あらぁ？んまぁ。よくみりゃあなた、いい肉体してるじゃない！！好みだわ～～～～♪」

了平「なに！？」

獄寺「！　アイツ今…なんて言いました！？（ガーン）」

ツナ「さ…さあ…？（ガーン）」

ルッスーリア「お持ち帰り決定♪（チュッ）」↑投げキッス

了平「何を言っている！」

マーモン「滅多にいないいいよ。ルッスーリアのお眼鏡にかなう奴なんて…」

レヴィ「あのガキ…ついてないな…」

美鈴「……（おえっ）」

ベル「ししっ。姫が露骨に嫌そうな顔してんだけど」

了平「さっきから何を言っているかわからんが、オレは正々堂々戦うだけだ」

ルッスーリア「んまぁそのポーズ。

そういえばあなた、ボクシング部の主将なのよね」

了平「！！　何故知っている！」

リボーン「情報収集は怠っていないようだな…」

美鈴「（ピースピース）」

ルッスーリア「ほんと、イケてないわねー。

このルッスーリアが立ち技最強のムエタイで遊んであげる」

了平「なにぃ…！！」

リボーン「やはりヴァリアーも晴の守護者は格闘家か」

ツナ「やはり……？」

リボーン「歴代のファミリーを見ても晴の守護者は皆、強力な拳や足を持っていた。

ファミリーを襲う逆境を自らの肉体で砕き明るく照らす日輪となる。

それが晴の守護者の使命なんだ」

チェルベッロ「では晴のリング　ルッスーリアＶＳ笹川了平

勝負（バトル）開始！！」

了平「貴様！！ボクシングへの侮辱は許さんぞ」

ルッスーリア「んっふふっ」

カッ　カッ　カッ↑ライト　付

了平「ぬおっ」

獄寺「まぶっ」

ツナ「な…何これ――っ

リングが光ってる――！！！」

チェルベッロ「この特設リングは晴の守護者の決戦に相応しく設計された、疑似太陽により照らし出される、日輪のコロシアムなのです」

美鈴「グラサン装着！（チャッ）」

ベル「姫　似合わねーし」

美鈴「そりゃなぁ」

ドゴッ↑蹴

了平「ぐあっ」

ツナ「ああ!!ヴァリアーの人はサングラス付けてるから自由に動けるんだ!!これじゃ、勝負にならないよ!!お兄さんにもサングラスを!!」

チェルベッロ「勝負中の守護者との接触は認められません。もし行えば失格としリングを没収します」

ツナ「そんな……!!」

ルッスーリア「あーらこの感触、思ったよりいい体してんのね。ますますタイプ♪」

了平「どこだ!?」

ビュッ　ビュッ　ビュッ

ルッスーリア「こっちよ」

ガッ↑殴

ルッスーリア「ん〜〜〜〜〜♪私の完璧な理想の肉体に近づいてきたわ〜〜〜。

私の思う究極の肉体美とは、朽ち果てた冷たくて動かない肉体(からだ)♪」

獄寺「それって死体のことじゃねーか!?」

ツナ「え〝……え〝――――!!?」

美鈴「あ、ヤベ。リアルに吐き気が…過去の思い出がぁぁぁぁ!!!」

ベル「うえ……」

スクアーロ「……（ゲッソリ）」

ツナ「な、何!?一瞬にしてヴァリアーの人たちから生気がなくなったよ?!」

了平「くっふざけるな!」

ルッスーリア「!」

どっ↑殴

スクアーロ「!」

ツナ「当たった!」

山本「す…すごいパンチだ」

ベル「ルッスーリア…本当に遊んでるね」

マーモン「当たったんじゃなくて、当たりにいったんだよ」

美鈴「器用な奴」

ルッスーリア「いじめちゃいや～～～～ん♪」

了平「なにっ!?

だが今の感触…奴は空中…!次は逃がさん!

もらった!!」

ルッスーリア「ムフ（ニヤ）」

ガッ

了平「うおぉ」

ブシュウ

了平「ぐあっ!腕があぁ!」

獄寺「!」

ツナ「あぁっ!」

了平「うぐっ……!」

どだーんっ

ルッスーリア「晴の守護者らしく逆境を跳ね返して見せたのよん♪
私の左足は鋼鉄が埋め込まれたメタル・ニーなの。
もうあなたの拳は使い物にならないわ」

獄寺「Ｃｈｅ!!」↑イタリア語です

ツナ「お兄さんの手が……」

リボーン「やべーのはそれだけじゃねーぞ。了平の奴、
ライトの熱にやられて脱水症状が始まっている」

了平「ハァ…ハァ…」

ベル「もう勝負は決まったようなもんだね」

？「立てコラ!!!」

ツナ「コロネロ!!」

スクアーロ「あのチビはアルコバレーノのコロネロだぜぇ」

レヴィ「何故奴がここに？」

美鈴「そりゃ、コロネロもあっち側だからね」

ス／レ／マ「！！」

コロネロ「そろそろ頃合だぜ。お前の本当の力を見せてやれ了平！！」

ルッスーリア「今更誰が何を言っても無駄よ。この子はもう終わり♪いただくわ♪」

了平「ハァ…ハァ…ハァ…

コロネロ……師匠……！！

その言葉を待っていたぞ！！」

ルッスーリア「！」

晴の守護者戦（後書き）

次回、コロネロに喝を入れられた了平が活躍！？

ルッス「んもうっ！活躍するのはわ・た・し♪」

了平「いいやオレだぁ！！」

※え～ハートマークが記号にならないので、音符で代用してます。

はい。

ツナ「お兄さんが起き上がった！！」

美鈴「しぶとい…」

ルッスーリア「あなたと私じゃ肉体の出来が違うの。灼熱のライトの中ではもうもたないでしょうに。

さっさと死んで私のコレクションになりなさいな」

了平「いいや…！まだだ！！」

ルッスーリア「立ってもいいことないわよ。あなたのパンチは通用しないんだから」

了平「ああ…確かに通用しなかった…

左はな…」

ルッスーリア「！」

獄寺「！」

リボーン「そーいやフゥ太達を助けたときから左しか撃ってねーな」

ツナ「え！？」

コロネロ「そうだ。右は一度も撃ってねーぜコラ！」

美鈴「体力温存ってわけ？」

コロネロ「それもあるが、奴が晴の守護者だからだ」

了平「この右拳は圧倒的不利をはね返すためにある！！！」

ルッスーリア「んまぁ、これは傑作だわ！滑稽だわ！おほーほほっ」

了平「何がおかしい！」

ルッスーリア「あなたの温存しているパンチがどれほどの物か知らないけど（スス…）当たらないと意味が無いのよ」

スススス…

了平「？」

獄寺「なんつーフットワークだ」

山本「まるで忍者の影分身だな」

ツナ「お兄さん…っっ

タダでさえ見えないのに…！」

ガッ↑殴

ドシャッ

ツナ「お兄さん！」

了平「大丈…夫だ…

いくぞ…」

ざっ…

ベル「へぇー」

マーモン「なかなか雰囲気があるよ」

美鈴「何を見せてくれるのかな」

ルッスーリア「（はずした瞬間があなたの最期よ）」

了平「そこか！」

ルッスーリア「！」

了平「うおぉお！」

グッ

了平「極限太陽（マキシマムキャノン）！！！」

ガッ

パリ…ン…

スクアーロ「！」

美鈴「何を慌ててるの？」

ベル「アレでやられるほどあのオカマは弱くねーと思うぜ」

クルッ

ダッ

ルッスーリア「ふ～～～～っ

クリーンヒットしてたらちょっとやばかったかしら」

了平「いいや、確かに当てたぞ」

ピシ…ピシ…

ルッスーリア「！？」

パリーン↑照明　割

ルッスーリア「！」

ツナ「……！？しょ…照明が…」

了平「うおおおお！！！」

ドドド

バリーン

パァン…

フッ↑ライト　消

了平「これでやっと貴様とイーブンの状態でやりあえそうだな」

ルッスーリア「!?」

了平「剋目!!!」

獄寺「芝生の奴!!」

ツナ「これで見える!」

リボーン「はなっから照明を狙ってやがったんだ」

ルッスーリア「目を開こうが閉じようがどうでもいいわ。それよりも信じがたいのは照明を割るほどの拳圧よ」

ベル「ルッスーリア。奴の体をよく見てみろよ」

サラサラサラ

ルッスーリア「!?なあに?砂…?いやちがうわ。アレは…!!

なっ!!?塩!?塩の結晶ですって!!?」

ツナ「し…塩――――――！！？」

ルッスーリア「なるほど。脱水症状により吹き出した汗の水分のみが照明の熱で蒸発し、汗に含まれる塩分は残る。

その塩分を拳に乗せ散弾のように放ったってわけね…

なはんだ…」

了平「気づいたところでもう遅いぞ」

ルッスーリア「おほっおほほほ

あまり笑わせないで！腹筋がもっと割れちゃうわ」

了平「なに…」

ルッスーリア「私がちょっぴりヒヤッとしたのは拳圧で照明を割ったと思ったからよ。

だってそんなことが出来たのは光り輝くパンチを放ったと言われる初代晴の守護者だけなんだもの」

了平「！？」

ルッスーリア「でもこの程度の猿芸なら私にもできるわ」

ス…

了平「！！」

ビュッ

バリーン

了平「なっ！？」

獄寺「芝生頭の塩をかすめて…！！」

ツナ「同じ技を！？」

リボーン「いいや、それ以上のテクニックを要するぞ。よける了平の体の塩を拳圧で吹き飛ばしている。

まさにヴァリアークオリティだな」

ツナ「ヴァリアー…クオリティ…？」

リボーン「ヴァリアーは人間業では到底できないと言われる殺し（ミッション）を、いかなる状況でも完璧に遂行してきた殺しの天才集団だ。

その悪魔の所業ともいわれる殺しの能力の高さを、人々は畏怖の念をこめてヴァリアークオリティという」

ルッスーリア「さすが、よく言えたわねリボーン♪

分かったかしら。私達とあなた達では実力に差がありすぎて遊びにはなっても戦いにはならないのよ」

了平「遊びかどうかはこの右拳を受けてから言うんだな」

ルッスーリア「んもう、分からない子ね。そのパンチはさっき真似して見せたでしょ？見切ったわ」

了平「何？………やってみなければ…分からん！」

ルッスーリア「んもう、諦めの悪い…」

コロネロ「よく言ったぜ了平。それでこそオレの弟子だコラ！」

美鈴「む〜長い」

ベル「さっさと終わらせちゃいなよ」

マーモン「どうやら美鈴に限界が近づいてるみたいだよ」

美鈴「悪いルッス。寝る」

ツナ側全「なっ！？」

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・

美鈴が寝てしまったので、彼女が起きた辺りから

獄寺「適当な奴…」

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・

了平「オレはもう、負けんと…！！！」

ツナ「た…立った…！」

了平「みさらせ！！！これが本当の」

ルッスーリア「全くしつこいわねぇ。これで終わりにしてあげましょう」

ススス…

了平「極限（マキシマム）！！！太陽（キャノン）！！！」

カッ

ピシピシ

バギャッ

ルッスーリア「ぎゃあ！！！」

弱肉強食

ドサッ

ツナ「お兄さんのパンチが…決まった！！！」

ルッスーリア「うぎゃあああ！！！

う…うそよぉ！メタル・ニーが砕かれるなんて！！」

マーモン「勝負あったね。ルッスーリアにはもう、あのパンチを防ぐ術がない」

ベル「笑かすよな、あのヘンタイ」

美鈴「幸先よくないことしちゃってさ」

了平「緊張感あるいい戦いだったぞ。さあ、リングを渡してくれ」

ルッスーリア「！　いやっいやよ！」

了平「！？」

ルッスーリア「私はヴァリアーよっ片足だって勝って見せるわ！楽勝よ！おほほっ」

ツナ「すごい執念だ……！！」

リボーン「ちげーぞ」

ツナ「!?」

ルッスーリア「さあいくわよ!!続けるわよ!!早く!!」

了平「!?……?何を焦っているのだ…」

?「破道の三十三　蒼火墜!」

ドスッ

ツ／了「――――――――」

グシャッ

マーモン「さすがだね。まさか美鈴が手を下すとは思わなかったけど」

にやりと笑う美鈴は、右手を前に出し左手をそれに添えるという、不思議な体勢でいた。

そして、右手をゆっくり下ろす。

ツナ「な…あの子が!?」

美鈴「マフィアの世界は弱肉強食。ヴァリアーは常に最強でなければいけない。

弱者はいらない。出たら消す」

ツナ「弱者は……消す……？そ……そんな…」

了平「おい！しっかりしろ！」

チェルベッロ「近づかないでください」

了平「なにぃっ」

チェルベッロ「たった今ルッスーリアは戦闘不能とみなされました。よって晴のリング争奪戦は笹川了平の勝利です」

了平「……」

し――――――――――――――――――――――――――――――――――ん…

チェルベッロ「今宵の勝負はこれで終わりますが、今回より決戦後に次回の対戦カードを発表します」

ツナ「え…！！もっもうわかっちゃうの～～～～～！？」

スクアーロ「う゛お゛ぉい！次はオレにやらせろぉ！」

チェルベッロ「それでは発表します」

スクアーロ「う゛お゛ぉ゛ぉい！！」

美鈴「にしし。シカトされてやんの」

チェルベッロ「明晩の対戦は……

マーモン「雷…次はレヴィだね」

チェルベッロ「それでは明晩お会いしましょう（カチッ」

バシュッ↑リング　壊

美鈴「それじゃ、かえろっか」

ツナ「あ、ま、待って！」

ベル「ボスが切れてたりしてな」↑無視

ツナ「み、美鈴ちゃん！」

ジャキン…

ツナ「ひいっ」

美鈴「軽々しくその名を呼んだら首が飛ぶって、言わなかったっけ？」

一瞬で振り返った美鈴が突き出してきたのは、巨大な鎌。

その切っ先はツナのノドに当たっていた。

ツナ「ははは話が……あるんだ…」

美鈴「話ねぇ。つまらないことだったら一瞬であの世行きだよ？」

ツナ「（ブルブルブル）」

ベル「姫ー。遊んでないでさっさと帰ろうぜ」

美鈴「……クスッ。皆先に帰ってて。あ、ベルは残ってね♪」

マーモン「用事があるならさっさと済ませてね」

スクアーロ「オレ達は帰ってるぞぉ」

美鈴「（だから帰れっていってんじゃん）

うん、きっとすぐに終わるよ」

バッ

美鈴「それで？沢田綱吉。話ってなに？」

ツナ「あ、あのさ、君達って……

鐘と悠里…だよね？」

美／ベ「！！」

ツナ側全「！？」

獄寺「十代目？」

山本「ツナ！？」

美鈴「あっはっはっは！！
　突然何を言い出すのかと思えば」
ツナ「だってそうだよね？あの二人なんだよね？」
美鈴「なに？超直感？ばれてたの？つまんなぁい。いつから？」
リボーン「っていう事は本当に鐘と悠里なんだな」
ベル「そうと言えばウソになるけど違うといってもウソだね」
了平「どういう意味だ？」
美鈴「そのまんまの意味。アレは偽名だからアレと私達が一緒かって言うと違うけど、結局は同じ人物ってコト」
獄寺「騙してたのか？」
美鈴「騙してた……まあ、そーゆーことになるね」
フィン「何のために……」
美鈴「全てはボスのため。
　その目的は次期ボス候補沢田綱吉の監視及びその周囲の人間観察」
リボーン「オレの誘いを断り続けていたのもヴァリアーだからだっ

たんだな」

美鈴「そゆこと♪」

山本「それじゃあ、今までオレ達と過ごしてきたのもウソだったってことか？」

ベル「ししししっ。あったり前じゃん。お前らといて面白いこととといったら、いつもやってるバカ騒ぎの見物ぐらいだし」

ツナ「そんな……」

フィン「ねえ、私達友達だよね？そうだと言って！」

美鈴「否」

フィン「！」

美鈴「私に友達なんて存在しない。あ、たった一人だけ面白い子がいるけどね、あの子以外の人間は興味ない。

あんた達と友達？そんなのこっちから願い下げ」

フィン「……信じてたのに…」

美鈴「いいねぇその顔。絶望に満ち溢れ憎しみがつまったその表情、大好きだよ」

ツナ「（ぞく…っ）」

美鈴「その命を刈り取りたいぐらいに」

ベル「ひーめっ。そろそろ帰ろうぜ」

美鈴「ベル～？折角のいいムードが台無しじゃないか」

ベル「いい加減帰んねーと、スクアーロがうるせえし」

美鈴「あーそれは困る。よし、帰ろう」

バリバリ

パアン↑鎌　壊

ツナ「あ、ちょっと待って！」

美鈴「まだ何かあんの？さっさとして」

ツナ「あのさ、この戦いでオレ達が勝ったら友達になってくれないかな。二人ともさ」

美／ベ「！！」

獄寺「十代目…」

山本「ツナ…」

了平「沢田…」

ベル「ふーん。随分と自信満々じゃん、ダメツナのくせにさ」

美鈴「勝ったら、ね。そしたら考えてあげてもいい。でもあたし達が勝ったら、あんたら全員の命刈り取らせてもらうから」

ベル「オレ達の世界は弱肉強食。手加減なんてないから。

そこんとこ理解しとけよ、獄寺」

ツナ「えっなんで獄寺君?」

獄寺「つー事は嵐のリングは……」

ベル「ししっ。んじゃな、バイビ♪」

美鈴「せいぜい頑張りな。おバカさんたち♪」

ダッ

雷戦？（前書き）

タイトルに？が付いている理由は簡単。

入りそうで入らないから。

雷戦？

ベル「姫、本当によかったのか？」

美鈴「ま、いんじゃん。

ん？何の話？」

ベル「ルッスーリアのこと」

美鈴「あ、そっちか。いいの、負けたあいつが悪い。

それにあの技はまだまだ弱い。あの程度でくたばるんだったら、

それこそヴァリアーに入らない弱者ということ。

死んでも仕方ないよ」

ベル「姫がいいならいいんだけどさ」

マーモン「二人とも、今心配すべきなのは彼女（訂正）彼じゃなくて」

→オイ

ガシャーン　ドガーン

マーモン「あっちだと思うよ」

美／べ「（汗）」

アジトに帰ってきた彼らが見たのは、空腹のせいで暴れまくるＸＡＮＸＵＳの姿↑子供か！？

今はスクアーロいびりをしている。

美鈴「ったく（呆）

急いで何か作ってこないとね」

ダッ

マーモン「ルッスーリアが負けて料理できる人が美鈴だけになった。彼女にとっては今日からは大変になるね」

～数分後～

美鈴「（ぐったり）」

ベル「大変ならルッスーリアのことやんなきゃよかったんじゃないの？」

マーモン「いや、美鈴がやらなかったとしても恐らくゴーラ・モスカが手を下していた。

結果オーライさ」

美鈴「ふぁ～。んじゃ、寝る」

ベル「明日からご飯よろしくな」

美鈴「（ピキーン（凍））」

で、結局次の日朝ごはんを作った美鈴でした。

そして夜。↑早すぎ

ザ――――――――――――――ッ↑雨

ピカッ　ゴロゴロゴロゴロ↑雷

美鈴「雷戦にはもってこいの天気になってるね」

夜の十時。ＸＡＮＸＵＳの夜食を作りながら外を見る美鈴。

ベル「つーかさ、レヴィは？」

そしてその夜食をつまみ食うベル。

マーモン「さあね。ベル、つまみ食うの止めな。ボスが怒るよ」

答えながらベルを注意するマーモン。

スクアーロ「ＸＡＮＸＵＳんとこで機嫌取りでもしてんじゃねぇのかぁ？」

マーモンと美鈴にばれないようにつまみ食うスクアーロ。

美鈴「ねえ、ボスに怒られるからいい加減つまみ食いを……ってな

んでマーモンまで食べてんの！？」

マーモン「むぐ…（しまった、つい手が）」

美鈴「マジ勘弁してよ。帰ってきたらみんなの分の夜食も作ってあげるからさぁ。

　これじゃ私の命がいくあっても足りないよ」

その一言で全員のつまみ食う手が止まる。

ベル「わりっ」

マーモン「謝るよ」

スクアーロ「すまねえなぁ」

美鈴「ったく。そんじゃ、ボスに届けてくる」

バタン

～ＸＡＮＸＵＳの部屋～

コンコン

美鈴「ボスー夜食持って来たよ」

「……」

美鈴「？」

ガチャッ

美鈴「もしもーし？」

ＸＡＮＸＵＳ「……」↑睡眠中

美鈴「……（寝てる！？）」

コトッ↑料理　置

〈夜食を作ったので私達が帰ってくるまで暴れないでね♪〉

バタンッ

～台所～

美鈴「ボス、寝てた。あとレヴィはいなかった」

マーモン「そう、なんだ。それじゃ、僕らも行こうか」

雷戦？（後書き）

そういえば何でヴァリアーの皆さんは美鈴の多重人格（特にＸＡＮＵＳに生意気な口を聞いたこと）について突っ込まないんでしょうか。。。

作者である私にも分かりかねる。

雷戦？え、やらないよ。

〜並中〜

美鈴「いないと思ったら二時間も前から！？」

並中に着いた美鈴たち。そこには二時間も前から待っていたというレヴィの姿と、ちょうど今到着したツナたちの姿があった。

ベル「信じらんない」

マーモン「仕方ないよ。君達と違ってレヴィは不器用な男だからね」

スクアーロ「とっとと終わらせろぉ！！」

美鈴「あっち側の雷は……ランボ」

ベル「あのチビ戦えんの？」

美鈴「あーだめだ。ランボって思ったら無性に殺意が芽生えてきた。
　レヴィー、さっさと殺っちゃっていいからねー」

チェルベッロ「それでは雷のリング　レヴィ・ア・タンVSランボ
　勝負(バトル)開始！！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

作者「開始とはよく言ったもんだな。もう終わるのに」

レヴィ「なぬっ！？貴様！どういうつもりだ！」

作者「どうもこうも、あんたの戦いを見て面白いって思う人、絶対に居ないから」

二十年後ランボ「と、言うことはオレ様も出ないんだな」

作者「ご名答♪ゴメンねぇ、私二十年後のランボなら好きなんだけどな」

二十年後ランボ「ここに出れただけでも充分ですよ」

レヴィ「オレを置いて話を進めるな！」

作者「あ、そうそう。雷戦を飛ばしたのってＸＡＮＸＵＳの命令なんだ♪」

レヴィ「ボスぅぅ！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

※超ツナご登場の辺りから

レヴィ「とどめだ」

獄寺「やめろー！！」

マーモン「えぐい死体が見れそうだね」

スクアーロ「う゛おぉい、とっとと焼けぇ」

レヴィ「死ね」

グラ…グラァ…

レヴィ「なに！？」

ダッ

ドズゥン↑避雷針　倒

全「！！」

獄寺「避雷針が！！」

ベル「風…じゃなさそうだ」

マーモン「ああ…あの曲がり方は」

美鈴「熱だね。熱が避雷針の細くて弱いところを溶かしている」

チェルベッロ「エレットゥリコ・サーキット全体が熱を帯びている。

熱伝導……？」

チェルベッロ「！　サーキットの外に」

超ツナ「目の前で大切な仲間を失ったら……

　　死んでも、死にきれねぇ！」

ベ／美「！」

ス／マ／レ「！！」

了平「なっ」

山本「なんだ…？」

獄寺「あの炎は……！！！」

了平「だ…誰だ？」

獄寺「まさか…」

山本「ツナ…？」

獄寺「……ああ…間違いねえ……あれは十代目だ！！」

山本「だな。ありゃツナだ」

了平「うむ。あんなことができるのは沢田しか居ない」

マーモン「なるほど。エレトゥリコ・サーキットの導体は金属でできていて熱を伝達する働きがある。その熱が避雷針のくびれ部分ま

で伝わり、溶解したために重量に耐え切れなくなって倒れたんだ」

スクアーロ「う〝ぉぉい、美鈴、ベル。聞いてねぇぞぉ、アイツがあんなバカでかい炎を出せるなんてなぁ」

ベル「オレに言うなよ。王子は姫の監視だけだったし」

美鈴「はっはっは。何言ってるのさみんな。

私だって見んのは初めてじゃボゲェ！！」↑逆切れ

超ツナ「……いくら大事だって言われても…ボンゴレリングだとか…次期ボスの座だとか…そんなもののためにオレは戦えない」

全「！」

ツナ「でも……友達が……仲間が傷つくのはイヤなんだ！！！」

？「ほざくな」

タイトルが思いつかない

？「ほざくな」

ドッ

ツナ「がっ！！

うわああ！！」

どさあっ

獄寺「十代目！」

山本「ツナ！」

ツナ「く……うう…あっ！あれは…！ＸＡＮＸＵＳ！！！

（キッ）」↑睨

ＸＡＮＸＵＳ「……何だその目は…。まさかお前、本気でオレを倒して後継者になれると思ってんのか？」

ツナ「そんなこと思ってないよ…オレはただ……！この戦いで仲間を誰一人失いたくないんだ！！」

ＸＡＮＸＵＳ「（ピクッ）！　そうか…てめぇ！！」

コオオオ…

チェルベッロ「ＸＡＮＸＵＳ様いけません！ここで手をあげてはリング争奪戦の意味が！！拳を収めください！！」

ＸＡＮＸＵＳ「うっせぇ！」

ガッ

ツナ側全「！！」

チェルベッロ「う……あ……」

ＸＡＮＸＵＳ「オレはキレちゃいねぇ。むしろ楽しくなってきたぜ（ニヤ…）」

ツナ「！！（わ……笑った…！？（ぞくっ））」

リボーン「こいつはレアだ」

マーモン「いつから見てないかな、ボスの笑顔」

レヴィ「八年ぶりだ」

美鈴「は？何言ってんの？先月笑ったじゃん。私の誕生日ンときに」

ヴァリアー全（Ｘ除く）「！！？」

マーモン「あの日も別に笑ってなかったと思うけど」

ベル「何か見間違えたんじゃねーの？」

美鈴「うっそだぁ！クマちゃんくれた時ちょっとニコッて…」

ヴァリアー全（X除く）「してない！（してたら逆に怖い！）」

ツナ「（クマちゃん！？）」

獄寺「（XANXUSがクマちゃん！？）」

美鈴「むぅ～（ぷくーっ）」

ツ／獄／山「／／／／／／／／／」

フィン「三人とも顔が赤いよ？熱でもあるの？」

リボーン「（ホントにガキだな）」

XANXUS「なるほどな。その腐った戯言といい、軟弱な炎といい、お前とあの老いぼれはよく似ている（／／／／／／）」

マーモン「ボス、必死に赤くなんの堪えてるね（ボソボソ）」

ベル「ばれてるけどな（ボソボソ）」

XANXUS「……ぷは―――っ。こいつは悲劇、いや喜劇が生まれそうだな！！」

ツナ「（な……なにがおかしいんだ…？）」

マーモン「ごまかしたね（ボソ）」

ベル「ごまかしたな（ボソ）」

スクアーロ「クソボスがぁ（ボソ）」

美鈴「??」

ＸＡＮＸＵＳ「おい女。続けろ」

チェルベッロ「はっ。では勝負の結果ですが、今回は沢田氏の妨害により、レヴィ・ア・タンの勝利とし、雷のリングならびに大空のリングはヴァリアーの物となります」

ツナ「ｗ!!?」

獄寺「アホ牛だけでなく、十代目のリングまで!?」

バジル「話が違う!!失格ではないはずだ!!沢田殿はフィールドに入っていなかった!!」

美鈴「よく考えなよ。ツナはフィールドを破壊して、勝負を妨害した。立派な失格の理由だよ」

ツナ「そ…そんな…っ」

ベル「自業自得だっつーの」

ちゃり…ぶちっ

了平「くっ」

獄寺「き…汚ねえぞっ！！」

チェルベッロ「ＸＡＮＸＵＳ様、リングです」

ＸＡＮＸＵＳ「……」

ピキンッ

ＸＡＮＵＸＳ「これがここにあるのは当然のことだ。オレ以外にボンゴレのボスが考えられるか」

獄寺「くそっ」

ＸＡＮＸＵＳ　「他のリングなど、どーでもいい。これでオレの命でボンゴレの名のもとお前らをいつでも殺せる」

山／獄「！！」

ツナ「そん…な！！」

ＸＡＮＸＵＳ「だが老いぼれが一時だとはいえ後継者に選んだお前をただ殺すのではつまらなくなった。お前を殺るのはリング争奪戦で本当の絶望を味わわせてからだ。

あの老いぼれのようにな」

ツナ「！？」

リボーン「！」

家光「ＸＡＮＸＵＳ！！貴様！！九代目に何をした！！」

ＸＡＮＸＵＳ「ぶはっ

それを調べるのがお前の仕事だろ？門外顧問！」

家光「きっ…貴様まさか……！！！」

リボーン「落ち着け家光。何の確証もねーんだ」

家光「お前こそ銃をしまえ」

リボーン「……」

ツナ「どーゆーこと…？ＸＡＮＸＵＳは何をしたんだ？」

ＸＡＮＸＵＳ「喜べモドキ共。お前らにはチャンスをやったんだ」

ツナ「！」

ＸＡＮＸＵＳ「残りの勝負（バトル）も全て行い、万が一お前らが勝ち越すようなことがあれば、ボンゴレリングもボスの地位も全てくれてやる」

ツナ「！！」

家光「！」

ＸＡＮＸＵＳ「だが負けたらお前の大切な物は全て…消える…」

ツナ「た……大切な物全て……！？」

ＸＡＸＮＵＳ「せいぜい見せてみろ。あの老いぼれがほれ込んだ力を。

女、いいぞ」

チェルベッロ「はい。では明晩のリング争奪戦のカードを発表します。

明日の対戦は……

嵐の守護者の対決です」

ＸＡＮＸＵＳ「……ベルか…悪くねぇ…」

レヴィ「ボス。雷のリングだ。収めてくれ」

ＸＡＮＸＵＳ「いらねぇ。次に醜態をさらしてみろ」

レヴィ「死にます」

美鈴「もーボス！来るならくるって言ってよね？」

ＸＡＮＸＵＳ「……」

美鈴「頑張り損だよ……ふわぁ。眠い…」

ＸＡＮＸＳＵ「夜食の礼だ。オレが担いでいく」

美鈴「ホント!?じゃ、寝てもいい?」

ＸＡＮＸＵＳ「……好きにしろ」

美鈴「にしし。じゃ、沢田綱吉その他諸々。無駄だとは思うけど友達になりたいのなら頑張れ。応援はしないけど★

まった明日～ｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚ」

全「寝るの早っっ!?」

バッ

ベル「獄寺、オレは手加減とかしねーから」

バッ

獄寺「そうだ、ランボ!!」

フィン「ランボ君、大丈夫!?」

ツナ「病院に連れて行かないと!!」

獄寺「アホ牛、しっかりしろ!」

リボーン「家光、お前はイタリアに行け」

家光「息子達を頼んだぞ」

フィン「（タイムリミットが迫ってる…早く…早く…
早く“魅麗”を戻さないと！！）」

タイトルが思いつかない（後書き）

フィンの言う“魅麗”とは一体誰なんだろうか……

嵐の予兆

～ヴァリアーアジト～

スタッ

ＸＡＮＸＵＳ「着いたぞ」

美鈴「んお、ありがとボス」

ベル「ひーめっ夜食」

美鈴「ちっ、覚えていたか」

ベル「あったり前じゃん」

美鈴「Ｌｅｔ、ｓ　ｔｈｒｅｅ　ｍｉｎｕｔｓ　ｃｏｏｋｉｎｇ♪」

マーモン「いいよ。三分だけ待ってあげる」

～三分後～

美鈴「チャーハンができた」

全「早っっ！？でもさすが」

美鈴「では、眠いのでこれで」

ベル「ん？姫は？」

美鈴「夜食は女の子の敵ですよ♪」

全「……」

バタンッ

次の日。

コーケコッコー　コケー（棒読み）

美鈴「（ムカッ）」

ベル「いつぶり？」

一年と半年。コケーコケー

美鈴「（チャキッ）」

・・・・・（汗）

美鈴「……（イライラ）」

無口の怒りが一番怖い　ダッ

美鈴「（ダッ）」

スクアーロ「オレにもやらせろぉ！（ダッ）」

マーモン「なんでナレは学習しないんだろうね」

ベル「オレ外に行ってくる」

マーモン「ム…どこに行くんだい？」

ベル「しししっ」

バタンッ

美鈴「んー（ぐぐっ）あれ？ベルは？」

マーモン「たった今出かけたよ」

美鈴「あ、ご当地の殺し屋殺しね。んじゃ、どーでもいっか」

マーモン「ハァ。緊迫感ないね」

美鈴「今晩、お寿司だから」

～路地裏～

ブシャアアッ

マーモン「派手にやってるねベル」

ベル「また覗き見かよマーモン」

マーモン「任務の度にご当地の殺し屋消して遊ぶのよくないよ。裏社会の政治が無駄にこんがらがるだろう」

ベル「政治なんて知ったことかよ。だってオレ王子だもん」

殺し屋「ヴァ…ヴァリアー!!貴様よくも弟を!!」

ベル「おっ来た。弟をやれば来ると思ったんだよね。売り出し中の殺し屋兄弟だし」

殺し屋「死ねや!!（ジャキンッ）」↑釘バット

ビュビュビュ

ビュ

ベル「ん、コイツ期待はずれだな」

ベル「コレ、オレの武器ね（キラン）」

殺し屋「（汗）」

スパッ

〜アジト〜

美鈴「くあ〜」↑猫か!?

ガチャ

ベル「たっだいま」

美鈴「遅い!寿司が腐るぞゴルァ!」

ベル「ししっ怒んなって」

マーモン「そういえば今日は寿司って言ってたね」

美鈴「今日はジャストで竹寿司が三割引だったんだぜ♪」

そして時は過ぎて。

～ベルの部屋～

美鈴「今日頑張ってね。折角お寿司にしたんだからね」

ベル「あたりまえじゃん」

美鈴「じゃあ、絶対勝ってもらうために」

Ｃｈｕ★

美鈴「負けたら承知しないよ」

軽くウィンクをして部屋を出ようとするが、

ベル「姫、ちょっと待った」

美鈴「ん？（くるっ）」

Ｃｈｕ★

美鈴「／／／／／／／／／／っっ！！」

ベル「王子の戦いの間、寝んなよ」

美鈴「わわわわかってるよ！／／／／／／／／／／／／」

バタンッ

美鈴「ベルの……

　　　バカァァァァァァァァァァァアアアアアア！！！！！」

ベル「ししっ。姫カワイ♪」

嵐戦　開幕

～並中前～

リボーン「いよいよ獄寺の勝負だな」

ツナ「獄寺君ならきっと大丈夫だよね」

リボーン「獄寺の相手をする鐘…いや、ベルフェゴールは“プリンス・ザ・リッパー”って通り名なんだ」

ツナ「プリン…？」←バカ

リボーン「“切り裂き王子”って意味だぞ」

ツナ「え、切り裂き……おうじ…？え？あの王子！？」

リボーン「ああ。本当に王族の血を引いてるらしいんだ。だが、その常人離れしたたぐいまれなる戦闘センスをもてあまし、自らヴァリアーに入隊した変り種だ」

バジル「拙者も親方様から聞きました。こと戦闘においてだけならヴァリアーで最も才能があるのはベルフェゴールだと」

ツナ「！　鐘が戦っているのって見たことなかったけど、そんな恐ろしいなんて…」

リボーン「厳しい戦いになることは間違いねーな」

～校舎内～

美鈴「んー？獄寺はどーしたのかな？」

ベル「逃げてどーすんだか。どうせ殺されんのに」

美鈴「右腕が来ないなんて、沢田綱吉もそれだけ人望が薄いってことかなぁ？」

ツナ「獄寺君……」

チェルベッロ「あの時計が十一時をさした時点で獄寺隼人を失格とし、ベルフェゴールの不戦勝とします」

カチ　カチ

了平「いかん」

カチ　カチ

シュルルル

ツナ「！」

ドガァン↑時計　爆

美鈴「！」

ベル「ん？」

キュッ

獄寺「お待たせしました、十代目!!獄寺隼人、行けます」

ツナ「獄寺君!!」

了平「タコ頭!!」

チェルベッロ「約束の時間に間に合いましたので、勝負への参加を認めます」

チェルベッロ「それでは戦闘フィールドの説明に移りますが、その前に、怪我のため我々の一名が交代となりましたので、報告させていただきます」

チェルベッロ「よろしく」

了平「やられた奴とよく似ている」

リボーン「チェルベッロにはいくらでも替えがいるらしーな」

チェルベッロ「今宵のフィールドは校舎の三階全てです」

チェルベッロ「もちろんこの棟と繋がる東棟も含まれ、廊下だけでなくこの階にある全ての教室を含みます」

美鈴「ワォ。広いね」

チェルベッロ「ただし」

ガタガタガタハタ

バリ――――ンッ

獄寺「！！」

チェルベッロ「フィールドのあらゆる場所に、このようなハリケーンタービンが仕掛けてあります」

獄寺「ハリケーンタービン？」

チェルベッロ「ハリケーンタービンは吹き出し口が四つあり、四方向にランダムに超強力な突風を発生させる嵐の装置です」

フィン「すごい危険だね……」

マーモン「まともに食らったら外へ飛ばされるだろうね」

チェルベッロ「そして今回は、勝負に制限時間を設けます。試合開始から十五分後にどちらかが嵐のリングを完成し所持しなければ、ハリケーンタービンに仕掛けられた時限爆弾が順次爆発し、この階を全壊にします」

ツナ「そ……そんなっ……！？じゃあ勝負がつかなかったら二人とも…」

チェルベッロ「死ぬでしょう」

チェルベッロ「二人とも嵐の守護者には相応しくないと言うことです」

ツナ「そんな…！！」

美鈴「ま、ベル的にはこれぐらいやった方が楽しめたりすんじゃないの？」

ベル「ししっ

だな♪」

獄寺「デスマッチかよ…おもしれーじゃねーか」

？「何だ？今のガラスの音は」

シャマル「ケガ人はいねーか？」

ポン↑肩に手

美鈴「！」

獄寺「なっ」

ス／マ「！？」

美鈴「気安く触んじゃねぇ！」

ドガッ↑回し蹴り

ガンッ

シャマル「のへー！！」

ツナ「シャ…シャマル！」

ヴァリアー全「！！」

マーモン「ドライデント・シャマル――…噂では二世代前のヴァリアーにスカウトされ、それを断ったほどの男……」

シャマル「ってわけで、オレこっちつくから。よろしくな、喪服の連中ーっ」

マーモン「へぇ。シャマルがあいつらとね」

美鈴「これ、喪服なの…？」

スクアーロ「ディーノにコロネロにシャマル…。これほどの人材が何故集まる…」

美鈴「そりゃ、あっちにはリボーンがいるからね」

ベル「ま、でもこの勝負楽しめそーじゃん」

チェルベッロ「それでは両者中央に来てください」

美鈴「お金と精神をかけてんだから勝ってよね」

ベル「いししし。あったり前じゃん。オレ、王子だから」

チェルベッロ「なお、今回のフィールドは広大なため、各部屋ごと

に取り付けたカメラで、校舎端の観覧席に勝負の様子を中継します」

チェルベッロ「また、勝負が妨害されぬよう、観覧席とフィールドの間に赤外線レーザーを設置しました」

ツナ「！」

ベル「そー言えばお前って爆弾使うんだったよな。

あと、肩に力が入りすぎてんじゃねーの？（ポン）」

獄寺「（ぜってー負けらんね！たとえ鐘だとしてもな……！（ギッ）」↑睨

ベル「ししっ怖いねぇ」

チェルベッロ「それでは嵐のリング　ベルフェゴールＶＳ獄寺隼人

勝負（バトル）開始！！」

吹き荒れる疾風

獄寺「いくぜ！！（ピッ）」

ベル「導火線短かっ」

ドン

獄寺「（まずは様子見だぜ。さぁどーする？）」

キラキラ

獄寺「な！！」

気づいたときにはナイフに囲まれていた。

カカカカ

獄寺「（そーだ。鐘はナイフを使ってたんだ）」

ベル「猪口才なことすんのやめとけって。誰相手にしてんのか分かってんの？」

シャマル「ヴァリアークオリティとはよく言ったもんだ。こりゃあ余裕ぶっこいてる暇はねーぞ」

獄寺「（……！こうなりゃ出し惜しみは無しだ）」

ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ

獄寺「三倍ボム！！！」

ベル「ん」

バジル「アレが獄寺殿の新技っ！！」

ツナ「すごい！ついに三倍ボムを完成させたんだ！！」

美鈴「むー。アレは新技とか完成とかじゃなくって単純に持てるかどうかの話になると思うんだけど」

ベル「（ス…」

ベルは、三倍ボムを見ても半歩後ろに下がっただけだった。

獄寺「（なぜよけねぇ…）」

バリーン↑突風

獄寺「な！！？」

ドドドドドンッ

獄寺「この風……あの機械か！！」

ベル「風には敏感なんだよね。嵐の守護者だから」

獄寺「くそっ！」

ガタガタガタ

バキャッ↑突風

獄寺「めゃちゃくちゃだぜ！！」

ツナ「ランダムに突風が！」

フィン「これじゃあボムが使えなくて不利よ！」

リボーン「それはお互い様だぞ」

獄寺「（だがこの風じゃ…鐘のナイフもまともに飛びやしねー）」

ビュオオォォ

フ…

ヒュ…

獄寺「（うそだろ――――…！！！）くっ」

ビビッ

バリーンッ

獄寺「っくしょー！！どーなってんだ！？まぐれか！？」

ベル「王子にまぐれとかないから」

獄寺「！！」

ベル「死ぬほど簡単な話さ。吹き荒れる気流を読んで、目標ライン上にそっとナイフを添える」

獄寺「！？」

気流に乗せられたナイフは、的確に獄寺を傷つける。

ツナ「気流を読むなんて…そんなこと…」

シャマル「不利だと思われる状況を逆に利用して、こんな人間離れしたことをやってのけちまうんだ……。認めざるをえないな。奴は本物の天才だ」

アナウンス〈三分経過しました〉

獄寺「（気流の流れを読むだと…？）」

ベル「嵐の守護者の使命って知ってる？

常に攻撃の核となり、休むことのない怒涛の嵐。

オレにはできるけど、お前にはムリだね」

獄寺「！」

シャマル「何突っ立ってんだ。立ち止まるな隼人」

キラキラキラ

獄寺「！」

カカカカ

獄寺「くっ。ふざけやがって！！」

ビュビュッ

カカカッ

獄寺「くそっこれじゃあ攻撃に移れねぇ！！」

レヴィ「スキのない流れるようなナイフ捌きで相手の攻撃を一切封じる」

マーモン「こんな風の中でこんなことができるのはベルぐらいだよ」

美鈴「なにを！私だってできるぞ！」

スクアーロ「はんっ！」↑興味なさ気

カカカッ

獄寺「ちくしょう！撃てねぇ！！」

ベル「日本にいる間、殺しは姫に制限されてたからさ、おかげで思う存分楽しめるよ」

獄寺「（ここは一旦引くしかねぇ。奴の攻撃の届かないところに！！）」

ドン

ベル「爆発に乗じて隠れたつもりかよ。かくれんぼ、だぁ～い好き」

～理科室～

獄寺「あのナイフと正面向いてやりあうのは分が悪い。トラップ張って死角からチャンスをうかがうしか……」

ビュビュッ

スパンッ

獄寺「どっからきやがった！！！」

ツナ「鐘はまだ廊下にいるよ！！！」

バジル「では、相手が見えていないのに！？」

美鈴「分かってないなあ。どこにいても当たるのがベルのナイフだよ」

ベル「オレ王子だからさ、お前らパチもんとは出来が違うんだよね」

ザクッ

獄寺「うぐっ」

ツナ「獄寺君!!」

獄寺「いってー!!なんでだっ」

ベル「うしし、もう当たり?もっと楽しませてくれてもよかったんじゃない?

ま、いいや。怒涛のシメは針千本のサボテンにしてやるよ。

バイバイ（ビッ）」

ツナ「ああ!!」

ビュッ

了平「いかん!」

ビュオッ

ドスドスッ

ツナ側全「!!!」

ドスドスドスドスドスドスドスドスドス

ベル「うししし♪サボテン一丁上がり」

ツナ「ご……!!獄寺君!!!」

バリン

ベル「!!」

バジル「あ……あれは…」

ツ／了／山／フィ／美「もっくん!!!」

その他全「もっくん??」

説明しよう。

もっくんとは、並中にある人体模型につけられた愛称なのであ～る。

とはいっても、そう呼んでいたのはツナ・獄寺・山本・了平・美鈴・ベル・フィン・セシル・京子のみである。

ベル「もっくん……なるほど、身代わりね」

獄寺「コイツがテメーの技の正体だ」

ツナ「い……糸だ!!」

獄寺「テメーは勝負の前、肩を叩くのと同時に視認しにくいワイヤーをオレの肩に取り付けやがったんだ。ご丁寧に重量を感じねーよう、今日局部麻酔まで打ってな。そしてワイヤーを手繰り寄せ、そ

こにナイフの突起を引っ掛けて投げる。ナイフは目標に当たる寸前までレールの上を端って飛んでくるって仕掛けだ。今回はもっくんに代わってもらったがな」

ツナ「そ…それでナイフが獄寺君に吸い込まれるように飛んだんだ」

シャマル「まるでモノレールだな」

ベル「頑張ってるけど五十点ってとこかな。つかお前こんなもんで得意になるのもいいけどさ」

ガタガタガタ

獄寺「!?」

ゴッ↑突風

ベル「この風じゃなんもできないじゃん。なぁ、どーする?」

獄寺「（す…）」

ツナ「ボ…ボム!で…でも」

ベル「それ、当たんないから」

シャマル「あたんねーボム当てるようにするために、ナンパ返上で付き合ったんだぜ。かつて天才の名をほしいがままにしたこのオレがな」

ツナ「え…!?」

獄寺「果てろ!!!」

バジル「ダメです!また風の壁にぶつかる!」

ツナ「頭悪くて口あんぐり」

獄寺「(行け)」

バシッ

ベル「!」

ツナ「あれは!!

ドシュウ

美鈴「ボムが進む向きを変えた!?」

ベル「!!」

獄寺「オレが下手うって十代目に恥をかかすわけにはいかねーんだよ」

ベル「(汗)」

ドガガガッ

バジル「す…すごい……今のは…」

ツナ「まさかこれも……新技…！？」

シャマル「ロケットボム…コイツこそが六日間で奴がつかんだ技だ」

リボーン「方向転換するボムか」

シャマル「ああ。仕込んだ推進用の火薬の噴射であらかじめ決めた方向に二度変化する

（後略）」

ツナ「え！？説明してよ！」

詳しくはＷｅｂ…じゃなくて原作で★

ツナ「でもすごいよ獄寺君」

了平「やったのか？」

バジル「分かりませんが…直撃しました。大ダメージには違いありません」

リボーン「そーだな」

レヴィ「ベルの奴、無傷ではあるまい」

マーモン「その通り…アレが始まるね」

スクアーロ「おぞましいぜぇ」

美鈴「にしししししっ♪」

スパパ

ガラガラガラ

美鈴「本当の戦いはここから始まる」

シャマル「！！」

ベル「うしししし！！あぁあ〜〜っ流しちゃったよ、王族の血を〜〜〜〜！！」

獄寺「！？　（何だコイツ・・・・・・？）」

マーモン「自分の血を見てから始まるのさ、プリンス・ザ・リッパーの本領は」

吹き荒れる疾風（後書き）

少々長くしておきました。

王子の覚醒

獄寺「……！！」

ベル「あ〝はあ〝ぁ〜〜ドクドクが止まんないよ」

獄寺「（どーなってやがる…！？）」

ツナ「わ……笑ってるよ…！？」

シャマル「キレタな…」

スクアーロ「あいつの奇行、相変わらず理解できねーぜ」

マーモン「知らないのかい？ベルが自分の血を見て興奮するのは、自分の血に、血を分けた双子の兄の姿を見るからさ。

彼は幼少の頃、双子の兄をめった刺しにして殺したらしい。その時のことを彼は何食わぬ顔で『ゴキブリと間違えたんだ』と言っていたよ。そしてその時、最高の快感を得ることができたとも――…

ベルが暗殺部隊ヴァリアーに入隊したのは、殺しの興奮を忘れなかったからだ。

あの表情、無邪気でむき出しの残虐性が蘇ってる」

ツナ「あれが……鐘なの…？」

美鈴「そーだ、沢田綱吉。これで、どうして私が、ベルをあらゆる戦闘において出さなかったか、分かるよね」

ツナ「え……？」

美鈴「何かの拍子でベルが怪我しちゃったら、全員あの世行きだからだよ。

　ま、それはそれで私的にはよかったんだけど、後で厄介なことになりそうだったからね。私、面倒事、嫌いだから♪」

ベル「血だよ～～～～王族の血だ～～～」

獄寺「よくわかんねーが、糸は見破ったんだ。もうこの風ん中、ロングレンジのナイフは来ねぇ。一気に行くしかねーぜ。

　ロケットボム！！」

ドシュ

ベル「あ゛～～～？」

バジル「！　よけないのか……？」

獄寺「へっ。頭ん中にまでヤキがまわったか？」

ベル「ししっ」

シュッ　チッ

シュッ　チッ　チッ

ドガガガ

ベル「あ゛はあ！！」

獄寺「！！」

ツナ「かわしたっ！？」

リボーン「ただかわしたんじゃねえ。ムダがねえ」

シャマル「あれほどの身のこなしとは…」

レヴィ「いよいよ奴らしくなってきたな」

マーモン「うむ。キレてこそベルの天賦の才は冴え渡る」

ダッ

ベル「ししっ」

ビュッ

くん

シュッシュッ

獄寺「（風の影響で狙いがデタラメだ。ビビるこたぁないぜ！！）」

バシュッ

獄寺「なに！！」

ツナ「え！！？」

獄寺「どーなってんだよ！！ナイフには当たってねーぞ」

フィン「触らないで切るなんて、まるでかまいたちみたい…」

ベル「どがーん」

獄寺「！！」

ベル「血ぃ」

獄寺「（（ぞく…）や…やられる……！！）

っかよお！！」

ピン↑チビボム

ドンッ

獄寺「っで――っっ」

スクアーロ「肉を切らせても骨を守る。いい判断だな爆弾小僧。だが」

シュッ

スパッ

獄寺「な!?」

ツナ「まさか…当たってなかったの!?」

はい。説明しよう。

獄寺がチビボムを投げた瞬間、あるものがチビボムの軌道を変えました。

そのあるものとは、小石。

とっさに美鈴が投げ、それがチビボムに当たって、ベルにはダメージが来ないようにしたのでした。

あ、どうやって投げたとか、どうやって届かせたとか聞かないでね?

ヴァリアークオリティですから。

因みにばれたら失格行為。

獄寺「くそ…っ。とにかくこの距離は不味い……」

ベル「待ちなよ」

ヒュッ

ブシュッ

獄寺「ぐっ（またナイフが当たってねーのに……！！どーすりゃいいんだ!?）」

アナウンス〈あと六分でハリケンタービンが爆発を開始します〉

獄寺「時間もねーのかよ!!くっそお!!」

ビュビュッ

獄寺「こーなりゃ…！」

ダダッ

ベル「ん」

キキッ

ベル「ししし。またかくれんぼ?」

〜図書室〜

獄寺「さあ、来やがれ…

思いっきりぶちこんでやるぜ」

ツナ「図書室には入り口があそこだけなんだ!」

美鈴「あいつ…。ベルとサシで勝負するつもり?」

マーモン「袋小路でベルと勝負なんて、自ら死を選ぶようなもんだよ」

ベル「しししっ」

ビュビュビュッ

バッ

獄寺「飛んだな！食らいやがれ！！」

ドシュッ

ベル「ニッ」

ヒュッ

スパ…

ツナ「ああ！！また当たってないのに…！！」

バジル「あんなことが…」

シャマル「……？」

獄寺「（今のはなんだ……おかしい…

切られた場所も…切り口の方向も

何かが不自然だ！！）」

ベル「反撃開始ぃ～～～っ」

獄寺「！！」

ビシュッ

獄寺「ぐあっ」

タタッ

ブシュッ

獄寺「ま……まだだぜ…」

ベル「いーやっ（ビュッ）でっきあっがり～～～～～っ」

カカカッ

獄寺「！！？（ピタ…）

……」

バジル「獄寺殿、止まってはダメです！！」

ツナ「早く逃げないと！！」

マーモン「逃げないんじゃなくて、逃げられないのさ」

ツナ「!?」

美鈴「にししっそゆこと♪

モニターで見るのは難しいけど、あいつの周りには…

鋭利なワイヤーがはりめぐらされているのさ♪」

バジル「!!」

ツナ「いつのまに!どーやって!?」

シャマル「やはりナイフだな」

リボーン「ああ」

ツナ「ナイフ…?」

リボーン「ナイフのケツにワイヤーがつけてあったんだ。これでかまいたちの説明もつく」

シャマル「うむ…これだけで二つの切断方が生まれる…

一つ目は投げて切る場合だ。

ナイフをよけたと思ってもその後で軌道がターゲット側に曲がれば、奴とナイフの間にあるワイヤーが内に切れ込み、切りつけられる。

二つ目は設置型…

壁にナイフを刺してワイヤーを張れば、そのまま見えない切断機となる。図書室に入る前にナイフを投げ、隼人のボムを切ったのはこっちだ。

つまり奴は、吸い込まれるトリックといい、ただのナイフ使いじゃなく、

ナイフとワイヤーの両刀遣いだったわけだ」

美鈴「さっすがヴァリアーにスカウトされただけあるね、シャマル。

ベルの技をそこまで見切っちゃうなんて」

マーモン「まんまと術中に嵌ったね。体技だけでなく策を張れるのもベルが天才たるゆえん」

ベル「しししっおっしまーい」

獄寺「お前がな…」

マーモン「？」

ツナ「！？」

ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ

ツナ「ああ！」

バジル「こぼれた火薬が導火線のように！！」

シャマル「フン」

ドガガガガ

獄寺「たわんだ糸じゃ切れねーぜ」

ツナ「分かってたんだ獄寺君！！」

獄寺「そしてこのボムの行き先は」

ドシュ

獄寺「てめーのワイヤーに案内してもらうぜ！！」

シュルルルル

ベル「！！」

獄寺「これが嵐の守護者の怒涛の攻めだぜ」

ドガガガンッ

獄寺「これでダメ押しだぜ！！」

ドシュウウウウ

ドガガガガッ

バジル「決まった！！」

ツナ「すさまじい…！」

レヴィ「……バカな……」

マーモン「これだけ撃ち込まれれば、さしものベルも…」

スクアーロ「堕ちたな」

美鈴「……」

シャマル「やーりやったな……。いいんじゃねーか？アイツが嵐の守護者で」

獄寺「……終わったぜ」

チェルベッロ「いいえ。完成した嵐のリングを所持するまで、勝利と認められません」

チェルベッロ「二つのリングを手にし、嵐のリングを完成させてください」

獄寺「けっ。めんどくせー」

アナウンス〈残り時間はあと三分です〉

獄寺「（がくっ）！？」

バジル「！」

ツナ「獄寺君！！」

獄寺「大丈夫っスよ十代目。リングを持ってすぐに戻りますから」

美鈴「……まだだ」

ツナ「…え？」

美鈴「まだ終わっていない！」

ベル「あ゛…はあ゛…」

獄寺「！！」

ツナ「！！」

マ／ス「！！」

シャマル「！」

ベル「勝つのオレっ！」

獄寺「ってめぇ！！」

ガッ↑殴

獄寺「放せ！」

レヴィ「ベルの奴まだやれるのか？」

マーモン「いいや。恐らく彼を動かしているのは勝利への本能。負けを認めない王子の本能だ」

美鈴「クスッ。そんなもんだと思う？」

マーモン「む？」

美鈴「私達だってこの六年間ただ過ごしてたわけじゃない。ベルが暴走したらいけないからって、戦ってなかったわけじゃない。

この六年間、私たちは毎日殺し合いをしてたんだから！！

アハハハハハハハハ！！！」

ツナ「（ぞくっ）悠…里？」

スクアーロ「このバカ、狂いやがった」

美鈴「バカ？バカはあんた達じゃないの？よく見てみなさいよ。

獄寺、押されてるよ？」

バジル「！！」

獄寺「（くそっ！！血ぃ流しすぎて目がかすんできやがった……！！）」

ツナ「獄寺君！！」

チェルベッロ「……そろそろ…」

チェルベッロ「（コクッ）」

チェルベッロ「間もなく、約束の時間です」

ピーピー

ドガガン

獄寺「!?」

ツナ「な」

スクアーロ「お」

チェルベッロ「お話したとおり、勝負開始から十五分が経過しましたので、ハリケーンタービンの爆発が順次開始されました。図書室の推定爆破時刻はおよそ一分後です。なお、観覧席には爆発は及びません」

ドガガガンッ

ツナ「そ……っそんな〜〜!!このままじゃ獄寺君が!」

リボーン「敵もろとも死んじまうぞ」

了平「何をしているタコヘッド!急がんか!」

獄寺「るせー!やってんだよ!!」

どんっ

獄寺「ぐあ！」

シャマル「いかん…出血とともに体力が落ちてる…このままではまずいぞ……」

ベル「リング～～」

チェルベッロ「十五秒経過。残り四十五秒です」

スクアーロ「チキンレースかぁ。面白くなってきたじゃねーか」

マーモン「美鈴、いいのかい？」

美鈴「ベルのこと？フフッ。ベルがくたばるとは思ってはないけど、くたばったらそれはそれ。ベルが弱かったてことでしょ？

ヴァリアーに弱い人は要らない。ベルであっても同じことだよ♪」

リボーン「ツナ、どーすんだ？」

ツナ「どーするって…」

シャマル「やむをえんな。リングを敵に渡して引き上げろ隼人！！」

獄寺「！！」

ベル「あ〝はあ〝」

バ／ツ「！！」

シャマル「こんなもんでくたばるなんてバカげてる！戻れ！」

獄寺「ふざけんな！」

ベル「あ〝はあ〝」

獄寺「オレが負けてみろ！一勝三敗じゃもう後がねぇ！！致命的敗北なんだよ！！」

シャマル「お前の相手はいかれちまってんだ！もはや勝負になっちゃいねぇ！戻るんだ！」

獄寺「手ぶらで戻れるかよ！！これで戻ったら十代目の右腕の名がすたるんだよ！！」

ツナ「！　獄寺君、そんなこと…！！」

ドガガッン

獄寺「十代目！オレが勝てば流れは変わります！任せてください、これくらいオレが……！！」

山本「獄寺！！」

了平「タコヘッド戻って来い！！」

フィン「獄寺君、戻って!!」

チェルベッロ「図書室まで、残り二十秒です」

シャマル「隼人!!修業に入る前に教えたことを忘れたのか!!」

獄寺「忘れるかよ…!だからこそ、一番の使い時で使うんじゃねーかよ。ここは死んでも引き下がれねぇ!!」

ツナ「ふざけるな!!」

獄寺「!!」

ツナ「何のために戦ってると思ってるんだよ!!」

獄寺「!!」

ツナ「また皆で雪合戦するんだ!!花火見るんだ!!だから戦うんだ!!だから強くなるんだ!!また皆で笑いたいのに君が死んだら意味がないじゃないか!!」

リボーン「……」

ツナ「獄寺君、分かってるの?君がいなくなったら悲しむ人が居る

んだよ!!もう二度と、悠里や鐘と笑う日が来なくなるんだよ!!
それでもいいの!?」

美鈴「!!」

獄寺「……十代目」

ピ――――――――――ッ

ドガガァンッ

ザ――――…

ツナ「獄寺君…獄寺君!!」

山本「獄寺!!」

シャマル「……あのバカ…」

ツナ「そ…そんな…うそ…」

バジル「くっ」

ツナ「そんなことって…なんで…獄寺君…（へたっ）」

リボーン「……!あそこみろ」

ツナ「?」

リボーンが指した先。煙の中から姿を現したのは、獄寺だった。

獄寺「すみません十代目。リング取られるってのに……
　花火見たさに戻ってきちまいました」

ツナ「うん。よかった……」

獄寺「な！オレ負けてんスよ？手ぶらで戻ってきたんですよ！？」

フィン「ううん。手ぶらじゃないよ。獄寺君は、ちゃんと自分の命を持ち帰ってきた」

獄寺「……！！」

美鈴「リング…
　にししっリング回収に行こーっと♪」

タッ

美鈴「ベール、ベール、どーこかなっ♪」

テテッ

美鈴「あ、みっけ。
　ベールくんっ生きてますー？」

ベル「ししししっ

リング　アイムウィナー」

美鈴「……なんか微妙に元気そうだな…」

ベル「ひ…め。王子ちゃんと約束果たしたからな…

ししっ」

美鈴「…！

にしし、ベルったらバカ正直で変なの。

ご褒美に、傷直してあげるから、大人しく寝てな」

ベル「姫のくせに生意気なの……（くたっ）」

美鈴「……（ま、生きてたんだし、よしとするか）」

美鈴がベルの体に手をかざすと、ベルの体の周りが淡く光りだした。

所変わって皆のとこ。

チェルベッロ「嵐のリングはベルフェゴールの物となりましたので、この勝負の勝者はベルフェゴールとします」

スクアーロ「う〝お〝ぉい、笑える結末だったなぁ。これでいいよ貴様等の命は風前の灯だぁ」

了平「くっ」

マーモン「それに、まだ君達の霧と雲のリング保持者は現れないじゃないか。出場者がいなくて不戦勝、なんてオチじゃないだろうね」

チェルベッロ「それでは、次の対戦カードを発表します。次の対戦は……」

王子の覚醒（後書き）

フィンのモデルの奴がこの小説読んだとき、「私こんなキャラじゃないよ～」と突っ込んできた。

そりゃそうだ。お前であってお前じゃないんだから。

でもどっちかって言うと、私から見たそいつなんだよなぁ。

星と望

～ヴァリアーアジト～

ベル「ひーめっ。何してんの？」

美鈴「いる場所から考えようか？」

→屋根の上

美鈴「私がここに来るってことは星を見に来てるの」

ベル「明日のバトル、緊張してんの？」

美鈴「まっさか！

……でも、私まで戦うことになるとはね」

＝回想＝

チェルベッロ「それでは次の対戦カードを発表します。次の対戦は……」

フィン「ちょっと待って！」

チェルベッロ「……何でしょうか」

フィン「話があるので、美鈴が来るまで待ってくれませんか？」

チェルベッロ「用とは何でしょうか？」

フィン「揃ったら話します…」

ツナ「フィンちゃん？」

タッ

美鈴「おまたせー」

マーモン「随分と遅かったね」

美鈴「にしし。ごめんよ。

でもその代わり、ベルは無傷になったから勘弁してちょ」

マーモン「！？」

ベル「そゆこと♪」

獄寺「な！？」

ツナ「傷が全部……治ってる！？」

フィン「……」

チェルベッロ「それでは全員揃いましたので」

美鈴「ん？」

フィン「私を…戦わせてください」

全「！！？」

チェルベッロ「しかし、守護者以外の戦闘は認められていません」

フィン「分かってます！でも…美鈴に話があるんです」

チェルベッロ「話なら個人的にしてもらえると幸いです」

ツナ「フィンちゃん、一体どーゆー…」

フィン「公の場で、ここにいる全員に知ってもらいたい」

チェルベッロ「……分かりました。では、明晩の対戦はボーナスバトルとし、五月氏とフィノーレの勝負（バトル）とします」

美鈴「（何を考えてるんだか…）」

チェルベッロ「それではお二方には、最も大切なリングを持参してきてもらいます」

フィン「リングを？」

美鈴「どうして？」

チェルベッロ「これはリング争奪戦の一環として行う物。よってリングが必要とされるのです」

美鈴「なーる」

バッ

？「失礼する！」

雷撃隊「レヴィ隊長！！校内に何者かが侵入しました。雷撃隊が次々とやられています！！」

レヴィ「！　おのれ！何者だ！！」

マーモン「どんなハエが来るのか楽しみだね」

スクアーロ「う゛お゛ぉい！！」

美鈴「一人しか思い当たらないのはどして？」

ベル「ぜってーにアイツだよな」

ツナ「あいつ！？」

雷撃隊「ぐああっ」

どしゃっ

ツナ「！！　ヒバリさん！！」

美鈴「やっぱし恭弥だ（あちゃー）」

雲雀「校内への不法侵入及び校舎の破損。連帯責任でここにいる全員咬み殺すから」

獄寺「なっオレ達もかよ！」

ツナ「あの人校舎壊されたことに怒ってるだけだ――！！」

山本「おいつ、本当に学校好きなのな」

フィン「咬み殺されるのは勘弁！」

マーモン「むむ…あいつが雲雀恭弥」

レヴィ「よくも…オレの部下を潰してくれたな」

チェルベッロ「あなたは沢田氏側のリング保持者ですか？でしたらこのような行為をされては…」

レヴィ「どけチェルベッロ。奴はただの不法侵入者だ！！！」

美鈴「元風紀委員の立場として言うけど、不法侵入者はあたし等だよ」

ガッ↑足掛け

雲雀「まずは君から咬み殺そうか」

レヴィ「なに！？」

シャマル「おーおーかっこいいねー」

獄寺「あのバカ、出てくるなりメチャクチャしやがって」

ツナ「でもやっぱりすごいよ。ヴァリアーの攻撃をいとも簡単に」

山本「ああ。さすがだな」

バジル「できる…！何者なんですか？」

リボーン「奴はウチの雲のリングの守護者にして並中風紀委員長、雲雀恭弥だ」

スクアーロ「てめーら、奴をどう思う」

マーモン「確かにレヴィはヴァリアーでも鈍重なうえに故障しているが、それを差し引いてもなかなかの身のこなしだね」

美鈴「そお？だってレヴィって幹部内最弱だし、恭弥だってただ足掛けしただけ」

ベル「ま、あんなキモイおっさんからしたら難しいのかもな♪」

レヴィ「貴様ら！さりげなくオレをバカにするな！」

美／べ「全然さりげなくない」

スクアーロ「う〝お〝おい！！貴様、何枚におろして欲しい！！」

雲雀「ふうん。次は君？」

チェルベッロ「おやめください。守護者の場外での乱闘は失格となります」

了平「なに！！」

ツナ「やばいよ！」

美鈴「まーまー。落ち着こうじゃないか、恭弥」

雲雀「悠里、何してんの？それとも、美鈴と呼ぼうか？」

美鈴「！！　なんで私の名前を……！？」

ツナ「そーだ。オレ達が悠里の本名を知ったのってヒバリさんのおかげだった」

マーモン「いつばらしたんだい？」

美鈴「ばらした覚えはないけどなぁ」

雲雀「小さいころはもっと純粋だったのにね」

美鈴「オイ貴様！知らないくせに何を言う！！」

ベル「んー？姫と雲雀って学校以外で接点あったっけ？」

美鈴「とにかく、とにかくだ。落ち着いてもらわないと困る」

雲雀「ふうん。じゃあ、咬み殺されてくれるなら、ね」

ツナ「んなー！？」

美鈴「待てっつーの！全部終わったら相手してあげるからさ」

雲雀「ホント？それじゃ、その日を楽しみにしてるよ」

ツナ「（ほっ）」

雲雀「校舎の破損は完全に直るの？」

チェルベッロ「はい。我々が責任を持って」

雲雀「そう……。美鈴、約束守ってね」

美鈴「はいはいーい。じゃねー（ニコニコ）」

ツナ「あのひばりさんが………戦いをやめた」

リボーン「それほど悠里とのバトルは大切ってことなんだな」

獄寺「悠里とヒバリって仲がいいのか悪いのか……」

ツナ「謎が多いって言うか……」

山本「怪しいのな」

獄／ツ／山「…………」

フィン「三人のほうが謎だと思うよ。美鈴のことになると何かと反応してさ」

獄／ツ／山「／／／／／／／／／／／」

美鈴「あー私なんかした？」

マーモン「さあね」

美鈴「ま、いっか。明日楽しみにしてるよ。じゃあね」

バッ

＝了＝

美鈴「アイツ、そんなに自信あるのかな？」

ベル「さーな。けどよかったんじゃねーの？どーせ、戦いたいって思ってたんだろ？」

美鈴「まあね。いやーそれにしてもキレーな空だなー（リング…か。あのリングを公にはしたくなかったけど、仕方ないか）」

～数時間前。っていうか、ヴァリアーが帰ったあと～

ツナ「ふう、帰ってくれた」

獄寺「ヒバリが来たときはどーなるかと思ったぜ」

了平「うむ」

リボーン「だが、ヒバリが仲間に加わるとなると強いぞ」

フィン「なんてったって並盛最強の風紀委員長だもんね！」

獄寺「ま、それより強いのが悠里だけどな」

フィン「うっ…」

ツナ「フィンちゃんどーしてあんなことを…

　っていうか獄寺君治療しなきゃ！」

獄寺「これくらいかすり傷っス」

バジル「！　Ｄｒ．シャマルに診てもらってはどうですか？」

シャマル「オレ、男はみねーから。バイビ～～」

バジル「え　ぇ！！？」

ツナ「あーゆー人なんだよ」

？「しょーがねーなー。ロマーリオ、代わりに診てやってくれ」

ツナ「！　この声…」

ディーノ「よっ」

ツナ「ディーノさん！」

ディーノ「ヴァリアーと入れ違いになったみてーだな」

獄寺「今頃何しにきやがったんだ？」

ディーノ「ようやく奴について調べがついたんでな」

全員「！！」

ディーノ「悠里は本名を五月美鈴。八年前に六歳で入隊し、その時には既に幹部の座が用意されていたつわものだ」

ツナ「ろ、六歳！？」

ディーノ「しかも奴は入隊に必要な条件を全くクリアしていなかったのにも関わらず、入隊試験――つまりは戦闘試験だ――をクリアして入隊したんだ」

山本「条件って何スか？」

リボーン「ヴァリアーに入隊する際にアンケートをとるんだ。戦闘経験や、武器についてなどな」

獄寺「ですが、前に聞いたとき、いつも戦闘（？）してたとかって言ってましたよね」

ツナ「確かに」

ディーノ「それがな、違うんだ」

獄寺「違うって何がだよ」

ディーノ「あいつの家は至って平凡な家族だ。マフィアなんてこれ

っぽっちもカンケーねーんだ。しかも生粋の日本人だ」

獄／リ「！？　なんだと！」

ディーノ「マフィアではないが、少し特殊でな、他の家よりも裕福だったらしい。

だが、ある日突然あいつはいじめを受けた。最初は幼稚園のクラスメイトだったらしく、あまり気にせずに暮らしていたんだが、そのうちいつの間にか家族を含む町の奴全員からの総攻撃となった」

ツナ「な！」

ディーノ「イジメに耐え続けて一年、ついに奴は反撃に出た。家族、友達、クラスメイト。見境なく次々と町の人間を自らの手で殺していった。それが奴の六歳の誕生日らしい。

最終的に町を焼き、生き残りはゼロ。これが八年前に起きた、町焼失事件の真相だ」

獄寺「アイツが…自らの手で町を……」

ツナ「悠里が言ってた、“戦わざるを得ない状況”ってこういうことだったんだね」

ディーノ「そしてイタリアに逃亡し、森で倒れているところを拾ったのがヴァリアーってワケだ」

フィン「美鈴は、ウソをついてたってこと？」

リボーン「そーなるな」

ツナ「でも、あのときの悠里、ウソをついてる感じじゃなかった。言いたくない物を何とか思い出しながらって感じで、辛そうだった気がする」

獄寺「なんか、しっくりこねーな…」

ディーノ「六歳で裏社会に入り込んだあいつは、恐るべきスピードで名を上げ、半年後には既に通り名があった」

リボーン「なんて言うんだ?」

ディーノ「プリンセス・サングエ・マッキアート」

リボーン「血に染まりし姫…か」

ディーノ「ミッションにいけば服は血にまみれ、まるでゲームのように楽しみながら人を殺していく。無邪気に笑うその笑顔は、心から楽しんでる笑顔らしい」

ツナ「姫っていうのは?」

ディーノ「ベルフェゴールと共に行動しているからだとか、姫のように気高いだとか諸説ある」

獄寺「そんなスゲー奴なのになんで今まで正体がつかめなかったんだ?」

ディーノ「ＸＡＮＸＵＳだ」

全「え？」

ディーノ「ＸＡＮＸＵＳが美鈴の入隊を本部に報告しなかったんだ。それに、奴と接触した人間は、ヴァリアー以外は皆殺されていて、正体をつかむのが更に難しくなっていたんだ」

リボーン「その割には細かく調べてあるじゃねーか」

ディーノ「匿名の情報があったんだ。ヴァリアーに入る前の美鈴を知っている人物と、入隊後の美鈴を知っている人物、最低二人からのな。

ま、入隊後の情報が、オッタビオって奴からってのはわかったんだけどな」

リボーン「そーいえばの話だが、ツナたちが久々に悠里とあった日の前日、あの町が再び燃えたんだ」

全「！！」

ツナ「あの町って、さっき言ってた？」

リボーン「ああ。火が上がる前後、黒服に身を包んだ栗髪の少女が目撃されている」

フィン「美鈴のこと？」

リボーン「恐らくな。何のためかはしらねーが」

ツナ「ねえフィンちゃん。そうしてあんなことを言ったの？」

フィン「言ったでしょ。皆に知ってもらいたいことがあるから。

“皐月魅麗”に関してね」

ボーナスバトル当日！

スクアーロ「う〝お〝おい！！美鈴はどこにいるんだぁ！」

ベル「姫ーどこだー？」

マーモン「美鈴、隠れてないで出てきたらどうだい？」

レヴィ「……」

朝から響くヴァリアーの声。

それもそのはずで美鈴を探していた。

今日は美鈴の戦いだと言うのに、朝から美鈴の姿がなかった。

こんな置手紙を置いて。

『プチ家出じゃぁ！探すんじゃねえぞゴルァ！！

見つけ出した奴はぶっ殺す（ニコッ）

ま、見つけようにも私は私じゃないから見つけられないだろうけどね♪

リング戦には出席するから心配すんな！！

んじゃな♪　ｂｙ美鈴』

と言うことです。

全「美鈴（姫）どこだー！！」

一方、美鈴側。

美鈴（ネコ）「（にししっ♪まさか私がこの姿（ネコ）になってるとは思わないでしょ。

我ながらいいアイディア♪）」

ガヤガヤ

美鈴（ネコ）「ん？何か向こうが騒がしいな。いっちょ行ってみるか」

タタッ

ツナ「フィンちゃん、考え直して！いくらなんでも無茶すぎる！」

フィン「無茶じゃない！私は皆を守るために来たんだよ？それなのに見てるだけなんて……！

それに急がないと魅麗が……ッッ」

リボーン「落ち着けフィン。お前の言っている“魅麗”ってのは一体誰なんだ？」

フィン「ダメなの…まだ言えない…

お願いツナ、修行を続けさせて」

ツナ「でも…」

フィン「はやくっ！」

ツナ「うん。分かった。リボーン頼む」

リボーン「ちっ。わかった」

ズガンッ

ボウッ

超ツナ「いくぞフィン」

フィン「うん」

美鈴（ネコ）「（アイツ、あんなボロボロになってまで修行を…！？

何がアイツをそこまで…

って、ここで覗き見しちゃったら今日のお楽しみなくなるじゃん！！

……む～陰に隠れて声だけを聞いてくか）」

ササッ

～数分後～

フィン「ハア…ハア…」

超ツナ「フィン、もうやめよう。これ以上は意味がない。ただお前が傷つくだけだ」

フィン「やめないで！お願いだから…！」

超ツナ「だがもうボロボロじゃないか！！続けることはできない！！」

リボーン「そうだぞフィン。今のお前がツナと修行してもただ疲労し、バトルで力が出せなくなるだけだ」

フィン「……私じゃ力不足なの…？足手まといなの…？

たった一人の親友を守ることもできないの！！！？」

シュウウウ

ツナ「親友？守るってどーゆーこと？」

フィン「美鈴は…魅麗は…私の親友なの…。二度と会うはずのなかった……たった一人の…」

美鈴（ネコ）「！！？（どういうこと？美鈴（わたし）とフィン（あいつ）は何の接点もないはず…

会ったとしても学校が初対面のはず…）」

リボーン「詳しく教えろ」

フィン「ダメ…その話は今日の勝負でね？
　だからそれまで待って…？」

ツナ「フィンちゃん……」

美鈴（ネコ）「……（今日の勝負、大丈夫かな…？自我を保っていられるといいな。あいつが出てこないように）」

こうして並盛は夜を迎えた。

ち・な・み・に。

～ヴァリアーアジト～

美鈴（ネコ）「ミャ～ン」

スクアーロ「あ〝ぁ？なんだぁこのネコ」

レヴィ「ぬ…妖艶だ」

スクアーロ「う〝お〝おいてめぇ、ネコに恋するとかキモイんだよお」

レヴィ「なぬ！？貴様……！」

マーモン「む…入り口で何を騒いでるのさ」

レヴィ「このネコがだな…」

マーモン「む、そのネコ」

ベル「あ、姫みっけ」

ス／レ「は？」

ベル「覚えてねーの？このネコ、八年前以来じゃん♪」

スクアーロ「言われてみれば…」

レヴィ「見覚えが…」

美鈴（ネコ）「ニャ～ンゴロゴロゴロ（，Ｖ≦）★」

マーモン「美鈴、ふざけてないでさっさと戻りなよ。（バサッ）」

シュルルル

美鈴「みー。マーモンのバカ、イジワル、チビ、強欲」

マーモン「フン。何を言っても僕は動じないからね」

美鈴「むむむむ～～～～！！

　こんのマーモンのほっぺたムニムニめ～～～～！！！」

バフッ↑ほっぺ潰し

マーモン「ムギャ」

美鈴「べーだべーだべーっだ!!!」

ダッ

ベル「姫……どんだけマーモンに悪態ついてんだし」

スクアーロ「お前、あいつに何かしたか？」

マーモン「してるわけがないだろ」

ベル「の割にはスンゲー怒ってるけど」

マーモン「ムムッ。よく分からないが、バトルに行く前に謝りに行くとするよ」

スクアーロ「そうしておけぇ」

バトルの前に謝ってくださいよマーモン

～美鈴の部屋～

コンコン

マーモン「美鈴？入るよ」

ガチャッ

美鈴「美鈴ちゃんキーック！！！」

ドスッ

マーモン「ムギャッ」

どさっ

マーモン「何のつもりだい？」

美鈴「何のつもり？フン、手紙読まなかったの？

私を見つけたらぶっ殺すって言ったよね？」

マーモン「ム、見つけたもなにも、君の方から帰ってきたんだろ？」

美鈴「うるさいうるさーい！

マーモンなんてほっぺたムニムニしてやるんだから！！」

ぶぎゅ

マーモン「むぐぐ……

　そもそも見つけたのが僕じゃなかったらこれはできないと思うけど」

美鈴「（ピタッ）むむむ…

　ベルだったら半殺し

　スクアーロだったら三分の二殺し

　レヴィだったら本殺し

　ボスだったら素直に謝る」

マーモン「……（呆／汗）」

美鈴「ま、いっか。あーもう色々とメンドクなった。

　お先に行ってまーす（パサ）」

シュルルル

美鈴（ネコ）「みゃ～ん♪」

タッ

マーモン「……これ、僕が来なくてもよかったんじゃない？」

バトルの前に謝ってくださいよマーモン（後書き）

短！？

なんですかこのあってもなくても変わんないような話！！

メッチャいらねー！？

ボーナスバトル？幕開け

ツナ「あ～～～とうとう勝負（バトル）の時間になっちゃったよ～～～」

フィン「全くツナったら、そんなに心配しなくてもいいのに」

ツナ「心配だよ！いくら修行したって言ってもフィンちゃんが勝てるような相手じゃないと思うって！」

リボーン「ま、フィンにもワケがあんだろ。とりあえずはファミリーを信じてしたいようにさせてやれ」

フィン「ふふっ。ありがとう」

～並中～

ツナ「あ、あれ？ヴァリアーの人まだ来てないのかな…？」

？「いいえ既にお待ちです」

ツナ「あ、チェルベッロ！」

フィン「お待ちです…っていなくない？」

美鈴（ネコ）「いるよアホタレ」

ツナ「わっネコが喋った！？」

美鈴（ネコ）「ただのネコじゃないよん♪」

シュルルル

ツナ「ネコが人になった！？」

フィン「アニメーガス……？」

美鈴「にしし♪」

チェルベッロ「今宵のフィールドは校内プールとさせていただきます」

ツナ「校内プール？そんなのうちの学校にあったっけ？」

フィン「あったよ。私、毎日泳いでるからね」↑水泳部だったりする

美鈴「ふ～ん。それってどこにあるの？意外と私知んないからさ連れてって」

チェルベッロ「こちらです（バッ）」

美鈴「んじゃ、プールで待ってるよ♪（バッ）」

？「遅れてスマンな！」

ツ／フィ／バ「？」

了平「こいつを連れてきたんでな」

？「～～～～！！」↑包帯人間

ツナ「ファラオ――――ッ!!」

？「（フガフガ）ち……違うっス!オレっス!!（ファラオ…）」

獄寺「ロマーリオのおっさんが『これが男の治療だ』とかぬかして大雑把に包帯巻きつけやがったんスよ!」

ツナ「ご……獄寺君!?（ガーン）

怪我、大丈夫なの？」

了平「安静が必要なのだがどーしても行くと言うので手を貸したんだ」

獄寺「借りてねーよ!勝手についてきたんだろ!!

いくら勝敗がカウントされねーっつっても、勝負の行方も知らずに殺られたらたまんねーからな」

フィン「全然大丈夫だよ。心配ナッシング♪」

獄寺「てめーお気楽すぎんだよ!

さ――いきましょ…うっ（ばたっ）」

ツナ「獄寺君!!」

バジル「大丈夫ですか獄寺殿!」

リボーン「やっぱコイツバカだな…」

～プール～

美鈴「……さっさと来なさいよ。私は短気なの――っ！」

バッ

ベル「だったらこんな早くにこなきゃ良かったんじゃねーの？」

美鈴「む、ベル…」

マーモン「ベルの言う通りさ。散々僕の悪口を言って飛び出してったんだ。待つのが普通だよ」

美鈴「マーモンまで……」

フィン「美鈴！来たよ！」

美鈴「はあ。やっと来たね。待ちくたびれちゃった」
待ちくたびれたぜ』

山本「何だ今の？」

獄寺「あいつの声と同時に男の声が聞こえたぜ」

美鈴「ゴチャゴチャうるさいなぁ。さっさと始めようよ」
『ゴチャゴチャうるせぇなぁ。さっさと始めようぜ』

チェルベッロ「それでは両者揃いましたので、リングを提示しても

らいます」

フィン「はい。私が持ってるリングってこれしかないから。

あ、お母さんの形見だから大事に扱ってね？」

チェルベッロ「確かに確認しました」

チェルベッロ「五月氏もリングを」

美鈴「ん。私もちょー大事なリングだからさ、」

チェルベッロ「確かに確認……！？」

リボーン「？　どーした？」

美鈴「何か不都合でもあった？」

チェルベッロ「いえ。それでは、守護者戦同様リングは首からさげてもらいます」

チェルベッロ「観覧される方はプールサイドの外に出てください。

フィールドはプールサイドから内側全体のみ。万が一プールサイドからはみ出すようなことがあれば赤外線レーザーが感知し、圧縮粒子砲が放たれます。なお、はみ出しても失格にはなりません」

美鈴「狭すぎね？」

フィン「べっつに構わないよ。水は私の領域（フィールド）だからね」

獄寺「意味わかんねーし」

チェルベッロ「それではボーナスバトル　五月美鈴ＶＳアメイラ・Ｃ・フィノーレ

勝負（バトル）開始！」

ボーナスバトル？美鈴ＶＳフィン

チェルベッロ「ボーナスバトル　五月美鈴ＶＳアメイラ・Ｃ・フィノーレ

勝負開始（バトル）！！」

美鈴「さ、修行の成果とやらを見せてもらおうか」

フィン「ええ。まずは手始めに（シュッ）」↑ナイフ

美鈴「（ヒョイッ）ナイフだなんて、ベルのパクリじゃん」

フィン「無駄口叩いてると（シュッ）怪我するよ」

美鈴「怪我するのはどっちだよ！」

キィィン

美鈴「私にだって飛び道具があるんだよ（シュッ）」↑手裏剣

フィン「お互い様ってことね！」

キィン

ツナ「……大丈夫だよね」

リボーン「まあ見てろ」

フィン「じゃあ行くよ、ナイフ二十連！」

ビュビュビュッ

美鈴「舐めないでね。こんなのよけるまでもない（シュッ）」

キキキキン

美鈴「こんなの遊びにもな「百連！！」ならないっての。

破道の三十一　赤火砲！！」

ドオォン

獄寺「何だあの技…」

フィン「ナイフは効かないみたいね。それじゃあ次」

ジュッ

ツナ「アレはダイナマイト！？」

美鈴「アンタの修行ってのは人の技を盗むこと？」

フィン「二倍ボム！」

ドシュッ

美鈴「にしし♪（ダッ）」

バジル「自らボムの中に？」

チッ　チッ

ドガアン

美鈴「やっほーい♪」

山本「よけたぜ！」

美鈴「さあ、その血を献上しな（ビッ）」

スパッ

フィン「くっ」

ツナ「ああ！」

美鈴「隙だらけだね」

ドカッ↑蹴

フィン「がは…っ」

ドオンッ

ツナ「フィンちゃん！やっぱりムリだって！」

フィン「ムリかどうかなんて、まだ分からないよ」

タッ

美鈴「甘い」

タッ

フィン「（かかった）」

ピ…ン

美鈴「？」

カッ

マーモン「ムムッ、これは閃光弾」

美鈴「（ちっ。前が見えない…）」

ヂヂヂ

美鈴「！」

ドガァン

美鈴「がっ」

ツナ「当たった！」

ジャボン↑ｉｎｔｏ水

フィン「ゴメンね美鈴。ここまでするつもりはなかったけど」

ピチョン↑謎の薬

美鈴「！　ゴボッ）

（息ができない…！？）」

ベル「何入れたの？」

フィン「これは麻痺薬。たった一滴で人の活動をとめることができるの」

ツナ「活動？」

フィン「そう。さあ美鈴、これもあなたのためなんだからね？」

？「ほう。殺すことがその人のためってか」

フィン「誰！？

……まさか、そんな！！」

獄寺「な！？」

美鈴「そのレベルで私を殺せると思ったら大間違いだよ」

フィン「いつの間に…どーやって！？」

美鈴「話は簡単。さっきプールの中で溺れた私は幻覚。偽物ってこと」

フィン「いつから幻覚だったの？」

美鈴「最初っから。

それじゃ、データ分析始めまーす」

ツナ「データ分析？」

マーモン「美鈴は戦いの中で敵を観察し、データとして分析する。それによって相手の弱点などを見出すのさ」

美鈴「まずはナイフ。時速五十キロ・ナイフの質Ｄランク・手入れ度二十％・コントロール三十％

あと、そのナイフ、デザインがダサい」

ツナ「な！？」

フィン「ちょっ　それどーでも良くない！？」

美鈴「続いてダイナマイト。

瞬間時速は三十キロ・手入れ度九十五％・コントロール四十二％

っていうか、このボムって獄寺のじゃん」

獄寺「オレのボムも分析してあんのかよ!?」

美鈴「それと、誰が造ったのか知らないけど、その麻痺薬、上物だよ。羨ましいな」

フィン「あげないよ。これは私のファミリーが作ったんだから」

リボーン「ナチスファミリーは技術面で支えているらしーな」

美鈴「ま、いっか。なぁアメイラ。あんた、自分で何回攻撃してきたか覚えてる?」

フィン「何よいきなり」

美鈴「答えは百五十。もし仮に、全く同じ数だけ同時に攻撃を受けたらどうなる?」

バジル「同時?一体どういうことだ?」

フィン「な、何が言いたいのよ」

美鈴「にししっ。それではショーを始めようか」

右手が前に出される。するとどこからともなく手裏剣が現れ、宙に浮いた。

ツナ「なっ!どーなってんの!?」

獄寺「これも幻覚か？」

マーモン「いいや、これが現実だよ。彼女には僕達でさえ知らない力が沢山あるからね」

美鈴「そゆこと。

　　Ｉｔ、ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ♪」

ビュッ　ビュッ

ツナ「ああっ！まずいよ！！」

了平「まるで手品のようだ」

ヒュンヒュンヒュン

美鈴「ばいばい♪」

ヒュ…ン

ガキィィン

美鈴「！？」

ベ／マ「？」

ツナ「えっ？何？何が起こったの？？」

美鈴「……手裏剣が全部はじかれた？」

ブゥン…

美鈴「…なにそれ」

フィン「あーあ。こんなタイミングで出さなきゃいけなくなるなんて。

　これが私の本当の武器。私の本命はこのブーメランなの」

ブォン　ブォン

フィン「さあ、よけてみな!!」

ブゥンっ

美鈴「回転数2．5回／秒・スピード3．7m／秒・角度58。・折り返し地点は……

　ここだ」

ガシッ

ツナ「と、とった!」

獄寺「すげぇ……」

リボーン「あの動体視力、伊達じゃねえな」

ポタ…ポタ…

ベル「ん？血が出てる」

フィン「当たり前でしょ。だってそのブーメラン、辺が全部刃になってるんだよ」

美鈴「そんなこと、私が知らずに取ったと思う？」

フィン「！」

美鈴「物心ついたときから人を殺してたせいかもしれないけど、私は血を浴びるのが好きでね。誰のでも構わない。だから……」

全「（ぞくっ）」

美鈴「私のために血を流しな！」

ブゥン

フィン「ちょっそれ私のブーメランなんだけど！！」

ザシュッ

フィン「うぐっ」

ツナ「フィンちゃん！」

フィン「……くっ。こうなれば…ッ」

パチン

フィン「Ｍｅｉｎ　Ｄｉｅｎｅｒ，ｖｅｒｓａｍｍｅｌｎ　ｓｉｅ　ｓｉｃｈ　ｊｅｔｚｔ　ｈｉｅｒ！」

全「！？」

ザザッ

ナチス「フィノーレ様ご無事ですか！？」

ベル「誰こいつ等」

フィン「この人たちは私の部下達。もしものことを想定して待っていてもらったの」

チェルベッロ「フィールド内への部外者の侵入は認められていません。引かなければフィノーレを失格とし「別に構わないよチェルベッロ」！？」

美鈴「部外者は殺すまで。ごみは掃除しないとね★」

チェルベッロ「分かりました」

フィン「甘いな♪ここにいるのはみんなファミリーの精鋭部隊、つまりは私達幹部の次に強い人たちなの。それが五十人。手を出せるはずがないわ」

美鈴「そっちこそ甘い。私はヴァリアーだよ！

『さあゴミ共、かかって来い！』

チャキッ↑短刀2本

リボーン「アイツ、刀も使うのか！」

ナチス「かかれえ！！（ダッ）」

美鈴「にしししししししっ♪‥

ザクッ　ザシュッ

ブシャアアア

美鈴「キャハハハハハハハ！！」

ディーノ「これがプリンセス・サングエ・マッキアートの実体か……」

マーモン「無駄のない姫のような流れる動き、必ず血でぬれる服。それこそ

プリンセス・サングエ・マッキアート
血に染まりし姫」

スクアーロ「アイツに取っちゃ殺しはゲームだ。如何に多くの人間をグロテスクに殺すか」

ドシュッ

美鈴「さ～ってと、ゴミ掃除かんりょー♪」

プールは一面血の海となっていた。

フィン「あ…ああ……ウソでしょ??」

美鈴「後はアンタだけだよ、アメイラ」

フィン「ひっ…いや……ッッ

……なんてね」

ポロロン

美鈴「!?　うっ…何だこれ…頭が、割れそうだ…ッ!」

フィン「（スクッ）さあ、本番はここからだよ」

ボーナスバトル？形見箱

美鈴「うあ…っ何これ…ッ」

フィン「形見箱って知ってる？」

美鈴「形見…箱……？」

リボーン「聞いたことがある。何か箱に自分の人生をあらわす思い出の品を入れる。それを死ぬまで続けることで、その箱一つでその人物の人生を知ることができる」

フィン「そう。その人の人生を箱につめた物が形見箱。魅麗も自分の人生を形見箱として残したの」

美鈴「だから…何ッ！？」

マーモン「それがその箱ってことかい？」

フィン「そういうこと。魅麗はこの箱に人生をつめた。

それも特殊な方法でね」

ツナ「特殊？」

フィン「形見箱は本来、思い出の品を入れるもの。でもね、魅麗は品ではなく記憶をつめた。このオルゴールにね」

獄寺「記憶をつめるだと？そんなことが」

リボーン「できる奴はできるぞ。それに記憶をつめると言っても、持ち主の魂が移って自然と記憶がしまわれるパターンもある」

フィン「だから、このオルゴールを開けば魅麗の記憶を知ることができる」

ツナ「それじゃあ、フィンちゃんがこのバトルを望んだのって…」

フィン「皆に、特に美鈴にこの記憶を見てもらうため。

何が何でも思い出してもらうよ、美鈴」

美鈴「何が言いたいの？私とその魅麗が同一人物だとでも？あり得ない！それじゃあ、もし仮に私が魅麗だとしたら、あなたは何？」

フィン「それは全部この形見箱が教えてくれる。魅麗の全てを」

マーモン「興味深いね」

フィン「フフッ。じゃ、皆ご一緒に

過去の世界に誘(いざな)え」

ゆっくりとオルゴールの箱が開かれて、静かにメロディーが流れ出した。

ボーナスバトル？形見箱（後書き）

メッチャ短いねｗｗ

次回はとうとう、魅麗の正体と、美鈴の過去が明らかに！！

ボーナスバトル？魅麗と楓

私は、小さな村で生まれた。人口百人と言う、小さな村。

自然が溢れ、そんな環境で育った私には外の世界には興味はない。

自分で言うのもなんだけど、私は気前がいい。

友達も多い。

その中でも一番仲がいいのは楓。俗に言う“親友”と言うやつ。

楓は幼馴染でいつも一緒だった。

彼女がいればそれでいい。他に友達がいなくなったとしても、楓さえいれば。

そう思えるほど、楓の存在は私には大きかった。

でも、そんな日常もあえなく崩れることとなった。

楓が重い病気にかかった。

“白血病”というらしい。

この小さな村には病院がない。

村人が利用するのは、隣町の小さな病院。

でも、その病院でも処置はできなかった。小さすぎたのだ。

結果、楓は遠くの大きい病院へと入院することになった。

私は、毎日毎日病院へ通った。お見舞いに行った。

その度に日に日にやつれていく楓を見た。

辛かった。今にも死にそうな顔をする楓を見たくなかった。

それでも通い続けたのは、一番辛いのが楓だってことを知っているから。

ある日、楓は言った。

“あなたが来てくれるだけで元気が出る。

生きなきゃって思う。

だって親友だから”

だから私は、楓が元気になるのを信じて通った。

病院のほかに神社にも通って、祈った。

病院が頑張ってくれたのか、お祈りの成果か、それとも楓が頑張ったのか、

彼女は少しずつ回復していった。

私の病院通いも回数を増した。

あと何日で退院できるかな、

帰ってきたらまた、思いっきり遊ぼう、

頭の中は楓が帰ってきた後のことしかなかった。

楓も絶対元気になって帰るって約束した。

なのに――――――――……

彼女は、この世を去った。

信じられない、信じたくない

元気になるって約束したのに……ッ

絶対帰ってくるって言ったのに……ッ

楓のいない世界は考えられなかった。

楓のいない未来は闇しかなかった。

私は泣いた。

涙が枯れるほどにずっと。

彼女のそばで

生き返ってほしくて

そのために涙を流した。

そんなある日、あいつは現れた。

白く光る不思議な少年。

彼は自分を神様だと言った。

神様だから、死人を生き返らせることができる、と。

そうか、私が祈ったから

私が泣いたから

願いを叶えてくれるために

神様が来てくれたんだ。

そう思った。

――楓を生き返らせて……

彼にすがった。

彼以外にすがる物がなかった。

彼は微笑みながら言った。

“友達を生き返らせたいならば、名前を呼びなさい。

その呼び声に戻ってきた魂を僕が肉体に入れます”

もう一度会いたい

もう一度笑いあいたい

だから…だから…

生き返って……

――――楓ッッ！！！

目の前で起きたことが信じられなかった。

自分で望んだ事だけど、あり得なかった。

ベッドの上で冷たく横たわっていた楓が温もりを取り戻しながら起き上がった。

楓、楓！楓ッ！！

彼女に向かって手を伸ばした。

が――――

そこから先は“闇”だった。

暗い

寒い

寂しい

真っ暗の空間で、私はそれ以外の感情を持ち得なかった。

そこに彼が現れた。

“友達が生き返って満足か？”

不気味な笑顔だった。

まるで獲物を見つけた肉食獣のように。

ここはどこ？

楓に会わせて！

どうして私はここにいるの？

“僕は君の願いをかなえた。

だから今度は君が僕に代償を払う番だ”

代…償…？

どういう意味だか全く分からなかった。

神様なのに、どうして代償？

その時、彼の容姿（かたち）が変わった。

神様らしい白い服は黒く染まり

人の形だったのが耳がとがり爪が鋭く伸びて…

ああ、彼は“悪魔”だったんだね。

私は悪魔と契約をしてしまったんだ。

ようやく分かった事実に愕然とした。

悪魔と契約してしまったら無事ではいられない。

“安心しろ。確かに僕は悪魔だが、君の友達は確かに生き返ったよ。

だからその代償として、君の魂を喰らうだけさ”

楓は生き返った

でも私は死ぬ

結局、もう二度と二人で笑い会える日は来ない。

その瞬間、私の中に“憎しみ”が溢れた。

楓を蝕んだ病気

病院のない村

尽くしてくれなかった医者

そして――――

病気に負けた楓を。

溢れた“憎しみ”は心（いれもの）から零れ、体全体に行き渡った。

次に見た光景は真っ白の世界だった。

いつの間にか気を失っていたらしい。

私の周りに沢山の“白い人”がいた。

本物の神様。

私は意識があるだけで指一本動かせなかった。

“悪魔と契約したなんてけしからん”

“今すぐ追放すべきだ”

“存在を抹消し、関わりのある人間全てから記憶を消せ”

たったこれだけの会話を聞いただけで私の犯した罪・そしてこれからが分かってしまった。

私は、もうこの世に存在することができないと結論が出された。

もう二度と“意識”を持つことは出来ないし

折角生き返った親友も私を思い出すことはなくなる。

悲しかった。

苦しかった。

辛かった。

私はただ、もう一度楓と笑いたかっただけなのに。

もう一度楓の笑顔が見たかっただけなのに。

頭の中でいろんな考えがぐるぐるしている間に周りには誰もいなくなった。

いや、いた。一人の青年が。

どうやらこれから私を消すつもりらしい。

けれど、彼は言った。

“悪魔と知らなかったのは罪じゃない。

ましてや、友達思いのいい子なだけなはずなのに。

どうしてそれで存在を消されなくちゃいけないんだろう”

この人は何をいっているんだろう。

この人も神様なのではないか？

それなのに、どうして他の神様の意見を批判するのだ？

“僕は気にが悪いとは思わない。だから君を助けるよ。

僕の独断と偏見だ。

君を別の人間として他の世界に送り込む。

あいつらにばれないようにね。

僕は、君にチャンスを与えるよ。だから――

新しい人生を充分に楽しんできてね。

皐月魅麗ちゃん”

そこで私の意識は途切れた。

もう何も考えることはできなくなった。

次に景色を見るときには

私は五月美鈴となった。

ボーナスバトル？真実

美鈴「楓……？」

目の前にいる人物と、ついさっき見た人物の顔が重なる。

フィン「そう。私は楓」

ツナ「今のはなんだったの？」

リボーン「これが“記憶”か」

フィン「思い出してくれた？」

美鈴「私…私…なんてことを…ッ」

美鈴はその場に泣き崩れた。

フィン「魅麗は悪くない」

その時不思議なことが起こった。

美鈴とフィンを光が包み込んだ。

光が晴れると、そこには全員が見た“美鈴”と“楓”がいた。

楓「魅麗は何も悪くないの。悪いのは病弱だった私のほう」

魅麗「ちがうっ！！私があんなことをしなければ……

悪魔となんか契約をしなければ……ッッ」

楓「でも！

それでも魅麗のおかげで私は生き返ることができた！

魅麗のおかげで私はまた笑えるようになった！！」

魅麗「楓……ごめんなさい…っ」

楓「いいの。だって私達……」

魅／楓「親友だから」

ベル「ん、まさかのハッピーエンド？」

マーモン「別にいいんじゃない？美鈴がそれを望むならさ」

ツナ「でもこんなことってあるんだね」

リボーン「親友を思って追放された少女と

親友を思って追いかけた少女。

友情が巻き起こしたミラクルってやつだな（ニッ）」

魅麗「楓…私…（ポロロン）うっっ」

どさっ

楓「魅麗！？」

ポロロロン

ツナ「オルゴールが鳴ってる？」

獄寺「アイツの記憶は終わったんじゃないのかよ！」

ポロン

ポロロン

魅麗「う…あ…

あああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

ボーナスバトル？五月美鈴（前書き）

不定期更新ですんません≧≦●≧≦　。。

なぜか長いですけど割愛で。

ボーナスバトル？五月美鈴

――――――――暗い

――――――――冷たい

ここはどこだろうか。

私は誰だろうか。

ついさっき何かが起こった気がする。

でも、思い出すことはできない。

思い出すことのできない記憶がいくつか存在する。

理由は、わからない。

早くここから出たい。

この、暗く狭いところから。

私は足掻いた。

一秒でも早くここから抜け出したくて。

無駄だと思っていたけど足掻いた。

こうすれば出れるような気がして。

でもやっぱり無駄だった。

足掻き疲れた私は、早く出られることを願って

静かに眠った。

“……い……

み……き……”

私を呼ぶのは誰？

“み……れい……”

みれいって私のこと？

どこかで聞いたことがあるような名前……

「美鈴、起きなさい」

バシッ

「いったぁ――――――！！」

頭を叩かれて飛び起きる。

目の前には藍色の髪の男の子がいた。

「くーちゃん！なにするの！」

「呼んでも起きないあなたが悪いのですよ。

そもそもかくれんぼの途中で寝ますか普通？」

「ねます」

彼はくーちゃん。

本名は覚えてない。

ただなぜか私は彼をくーちゃんと呼ぶ。

私の従兄妹。

実際は違うかもしれない。

でも従兄妹みたいなもの。

「皆あなたを探して待っていますよ」

「ごめんなさい」

くーちゃんと手をつないで皆のところへ行く。

私の名前は五月美鈴。

産声がかわいらしい鈴の音のようだったから親がそう付けたらしい。

友達が多く、今は幼稚園の年長。

くーちゃんは一つ上。

「みれーちゃんどこに行ってたのぉ。さがしたよ」

「くやしかったらじりきでみれいをみつけなさいよ」

「まったくみれーちゃんたら」

皆で笑いあう。

それだけでも幸せ。

「くーちゃん、かえろっ」

私とくーちゃんは手をつないで家に帰った。

「美鈴はもうすぐで五歳ですね」

「うん。ごさい。

おとーさんとおかーさんにいいプレゼントもらうの」

「それはいいですね。

しかし、今年は不況でお金がないのでは？」

「ふきょーってなあに？」

「仕事がうまくいかずにお金が無くなってしまうことです」

「ふーん？」

たまにくーちゃんは難しい言葉を使う。

年上であることを自覚させたいのだろうか。

それとも頭がいいと思わせたいのだろうか。

でもそれもくーちゃんのいいところ。

嫌いになんかならない。

「プレゼントがもらえなかったらどーしよーね」

「僕はあまり関係ありませんがね」

「かんけーあるもん。プレゼントなかったらねー
ショックであそんであげなくなるかも★」

「さらっと酷なことを言わないでください」

あはは、とお互いを見て笑う。

家に着いたときくーちゃんは言った。

「美鈴の誕生日までに僕が考えておきますから
心配しないでください」

「うん。やくそくだよ♪」

それから数日後、約束通りくーちゃんから一つの提案が来た。

それは“宝探し”

くーちゃんが用意したプレゼントを私が見つけると言う

いたってシンプルな物。

私は喜んだ。

でも、これが悲劇の始まりだなんて夢にも思ってなかった。

宝探しで私が見つけたのは、リング。

銀色に輝く石がはめ込まれた不思議なリング。

キラキラと輝く石が綺麗で魅力的だった。

私はくーちゃんにお礼を言った。

“綺麗なリングをありがとう”

と。

だけど、くーちゃんは驚いていった。

“僕が用意したものはリングではありませんよ”

と。

もう一度探しなおした。

そこにくーちゃんからの贈り物はいた。

小さなハムスター。

つぶらな瞳に魅せられて、リングのことは頭の中から消えた。

その次の日からだった。

――――――――死ね

幼稚園に行った私の机にはその一言が刻まれていた。

誰が……

どうして……

先生に言うと衝撃のことが分かった。

書いたのは親友だった。

私は一気にどん底に落とされた気がした。

それからは“地獄”ばかりだった。

暴言

暴力

落書き

持ち物隠し

イジメのご定番。

それだけじゃなく、やってくる人は日に日に増えた。

家族に言っても信じてもらえず、先生もまた然り。

心の拠り所が無くなった。

いや、一つだけあった。

くーちゃんだけはいつも私の味方だった。

“僕は美鈴を信じますよ。

辛くなったら言ってください。

いつでも助けます”

そう言ってくれたくーちゃんだけが神様みたいだった。

あんなことになるまでは

ボーナスバトル？町焼失事件

イジメが始まって四ヶ月が経った。

だんだんとエスカレートしてきたそれは

クラスメイトだけでは収まらなくなった。

家族まで。

私の存在を消し、

ご飯を作らず、

踏みにじっていく。

生きるために私は、

万引きをするようになった。

犯罪であることは分かっている。

それでも生きるにはそうするしかなかった。

イジメが始まって半年。

とうとう味方はいなくなった。

外に出れば町の人間に殺されそうになり、

家にいれば家族に殺されそうになる。

行き場がなくなった私は、秘密基地にいった。

私とくーちゃんの二人だけの基地だった。

ここにいれば襲われることがないと思った。

ここにいれば最近姿を見せないくーちゃんと会えると思った。

秘密基地は絶対に誰にもばれることはなかった。

秘密基地に隠れ始めて三ヶ月。

くーちゃんは一向に表れることがなかった。

居場所が知られなくても私が危険であることには変わりない。

食べ物を求めて外に行くときは、いつもいつも誰かに襲われる。

もう精神がイカレそうだ。

一秒も気が抜けない生活。

誰かに助けを求めたい。

でも、周りにいる人間は皆敵だ。

せめてくーちゃんがいれば……

その時くーちゃんの言葉が頭の中に蘇ってきた。

“呼べば助けに行きますよ”

私は呼んだ。

誰かに見つかるかもしれなくても

力の限りくーちゃんの名前を叫んだ。

寂しくて

会いたくて

助けて欲しくて

涙があふれてきて、

声がかれてきて、

それでも呼んだ。

もう、声が出なくなった。

こんなに呼んだのに

こんなに会いたいのに

くーちゃんは来てくれなかった。

約束を守ってくれなかった。

基地の中でくーちゃんがくれたハムスターが私を見つめていた。

そいつを見ているだけで憎らしくなった。

裏切り者のくーちゃんを見ているようで

殺してやりたくなった。

気付けば、私はハムスターの首を絞めていた。

ハムスターがか弱く悲鳴を上げる。

私は静かに手を離した。

次から次えと涙が溢れてきた。

悲しかった。

苦しかった。

唯一の味方までもが消えてしまった。

私の心は闇へと沈んでいった。

イジメが始まってから一ヶ月が経った。

私の六歳の誕生日。

今までと全く違う。

私を祝ってくれる人は誰もいいない。

今までと同じなのは、私が生きているかどうか。

ただそれだけ。

私の精神は限界だった。

もう二度と平和な日が来ない。

分かっていることだけれど、やっぱり信じたくなかった。

今までの一年が全て夢だったらいいのに。

何度かそう思った。

そう思って外に出る。

そして、そこにいる武器を持った大人達を見るだびに

私は現実へと引き戻された。

今日も外に出る。

食料調達のために。

ハムスターは割と元気に育った。

結構大きくなったハムスターを連れて私は基地を出た。

いつものようにいろんな人に襲われるかと思った。

けど、どういうわけか、誰もいなかった。

不気味だ。

どこかに隠れているのか？

注意深く道を進む。

そのときだった。

――――――キイィッ

私の肩に乗っていたハムスターが悲鳴を上げ、

血まみれになって落ちた。

振り返ると結局人が居た。

そいつが持っていたアイスピックがハムスターを貫いたのだ。

目の前で息絶えたハムスター。

その傷口からあふれ出た血が地面を赤く染め上げた。

それを見ているうちに、私の中の何かが

大きく弾け、どっと溢れ出した。

ブシャァッ

血が飛ぶ。

ザシュゥッ

肉片が飛ぶ。

地面は血をたっぷり吸い込み、紅く紅く染まっていた。

町には“それ”が通り過ぎた証拠の様に

大量の死体が道を作っていた。

高い位置にあった太陽は大きく傾き、

紅く染まった町を、そりいっそう紅く染め上げた。

私は屍を踏みつけて道を進む。

手や顔についた鮮血を舐め取る。

近くにいた大人を見つけて持っていたナイフをその心臓に深く突き刺す。

勢いよく抜くと鮮血が吹き出した。

それは返り血となって私に降りかかる。

快感だった。

今までに感じたことがないほどいい気分だった。

やがて町は闇に包まれた。

それを待っていたように私はマッチで火をつけた。

火は炎となって全てを飲み込んだ。

生きる者死んだ者全てを。

闇色の空を紅く紅く染め上げる。

私は赤が好きだ。

血の色炎の色。

全て、全てが紅(あか)に染まった世界を見て

私は笑った。

狂ったように

心から愉しそうに

私は笑い続けた。

ボーナスバトル？決意

美鈴「うあああああああああ！！！！」

フィン「美鈴！！」

ツナ「これが、悠里の過去……」

獄寺「信じらんねぇ」

美鈴「頭が割れる……ッッ

うあっ……あああああ！！！」

フィン「美鈴！！しっかりして！！みれ（ドスッ）

……がはっ……！」

ツナ「フィンちゃん！？」

どさっ

フィンのお腹には深く深く刀が刺さっていた。

？『感謝…するぜ』

ベル「？　男の声…？」

ブアッ

美鈴を中心に漆黒の炎が吹き荒れた。

マーモン「ム、一体何が起こってる？」

ツナ「悠里！フィンちゃん！！」

スクアーロ「おもしれーことになりそうだなぁ」

ギュルッ

炎が一気に晴れた。

そこにいたのは――――

ベル「……姫？」

山本「なんだ、ありゃ…」

確かに美鈴ではあった。でも違う。

純白だったリボンは血のような赤に染まり

栗色だった髪は漆黒に染まっていた。

バジル「あれは一体……」

レイ「オレの名は、レイ」

獄寺「この声…！」

リボーン「あのもう一つの声の奴か」

レイ「感謝するぜェアメイラ。オレを六年の呪縛から解き放ってくれてよォ」

マーモン「六年、と言うとちょうど美鈴とベルが日本に行った時だね。

なにかあったのかい？」

ベル「しんねーし」

？「ゴホッ…」

レイ「！」

フィン「美鈴は…？美鈴はッッ！？」

レイ「しらねえな」

ガッ↑蹴

ドガアン

ツナ「フィンちゃん！」

レイ「弱ぇくせにいきがってんじゃねぇ」

フィン「ううっ……

み…れい……」

『もういない？』

真っ白な空間に二人の男女がいた。

『ああ』

男は答えた。

『いないってどういうこと!?』

『この世から追放されたんだ』

『追放って、どうしてッッ!?

何も悪いことはしてないッッ!!』

女は男の言葉を拒絶するように叫んだ。

『したんだよ。悪魔と契約という、重罪をね。

我々の決定は絶対。周りの人間に聞いてみろ。

アイツを覚えている人間はいない』

女を見下すように、男は冷たく言い放った。

『悪魔……』

『なんだと?』

『あんた達の方がよっぽど悪魔よ!

私からしたら、私を生き返らせてくれた悪魔の方がよっぽどいい人よ!!』

『……』

『あの子に……魅麗に会わせて！！』

“楓”は叫んだ。

『……』

しかし“神様”は答えなかった。

『会わせなさいよ！神様なんでしょ！？あんた達が魅麗をどっかにやったんでしょ！？

人から大切な物を奪っておいて、その態度はないんじゃないのッ！？』

『会えないことはない』

“神様”は口を開いた。

『だが、あいつはお前を覚えていない。会ってもムダだ』

『ムダなんて分かんないでしょ！？

それに、覚えてなくてもいい、私は魅麗のそばにいたい！』

『……。分かった。お前を皐月魅麗のいる世界へと送ろう。

但し人生は一から、つまり赤ん坊からやり直しだ。

それでも覚えていられると言う自身があるのならそのうちあえる

だろう』

“神様”が“楓”に手をかざす。

“楓”が淡く光りだし、その形が薄れていった。

『ただ一つだけ言っておく』

“楓”はもう殆ど見えない。

『世界は広いぞ』

そして“楓”は完全に消滅した。

フィン「（美鈴…ごめんなさい…
私が、もっと早くあなたを見つけていられたら…）」
ずず…
レイ「まだやる気か？ムダだと言うのがわからねえのか？」
ゴッ
パシッ
レイ「！！」
ツナ「フィンちゃん！？」
フィン「私はね…ムダって言葉が…大嫌いなんだ……」
コオオォォ
フィンの体が光りだす。
その光が手に集中し、光の矢となった。
マーモン「ムム、あいつ何をする気だ？」

フィン「美鈴……遅くなってごめんね…？」

レイの胸の中心に深く刺した。

レイ「ぐあああっ」

そこから光がほとばしった。

フィン「私の魂の力で、あなたを浄化させる」

レイ「この…クソアマがっ……

よく覚えとくが良い。次にオレが出てきたときがてめえらの最期だ」

光は完全にレイを包み込んだ。

晴れたそこにはいつもの美鈴が立っていた。

しかし、気を失っていた。

バランスを崩しフィンに倒れこむ。

抱きかかえたフィンも既に気力の限界であり、一緒に倒れた。

ベル「姫ッ」

ツナ「フィンちゃん！」

獄寺「おいアメイラ！しっかりしろ！」

チェルベッロ「お待ちください」

チェルベッロ「両名戦闘不能となりましたのでこの対決は引き分けとさせていただきます」

チェルベッロ「なお、リングは回収とさせていただきます」

バジル「回収？」

了平「何故だ？」

山本「こいつ等のリングとボンゴレリングはカンケーねーだろ？」

チェルベッロ「それにお答えすることはできません」

獄寺「なに！？」

チェルベッロ「我々の決定に従えない場合は失格とします」

ツナ「そんな！」

チェルベッロ「それでは明晩のカードを発表します」

チェルベッロ「明晩の対決は――――雨」

スクアーロ「ようやくオレの出番かぁ」

ツナ「そうだ。山本の相手は激強のロン毛だ！」

スクアーロ「首を洗って待っていろぉ」

ダッ

マーモン「ベル、僕達も帰るよ。
美鈴を頼んだよゴーラ・モスカ」

モスカ「プシュー」

ダッ

ツナ「行っちゃった」

リボーン「ツナ、急いでフィンを病院に連れて行くぞ」

ツナ「うん」

獄寺「十代目、オレも行きます」

山本「オレもついてくぜ」

ツナ「皆で行こう」

ボーナスバトル？決意（後書き）

この回にしてようやくスクアーロが喋った。。。

レヴィなんて一回も喋ってないｗｗ

ボーナスバトル〇真意

～中山外科医院～

全「……」

ツナ「フィンちゃん…大丈夫かな…」

ロマーリオ「できる限りのことはした。後は、この嬢ちゃんの生きる気力だな」

ツナ「……大丈夫…だよね……？」

バンッ↑扉開

全「！！」

？「姉さん！！」

ツナ「セシルちゃん！？どうしてここに！？」

リボーン「オレが知らせたんだ」

ツナ「お前また余計なことを！！」

セシル「姉さん！一体何があったの！？どうしてこんな…

こんなボロボロになってるの！？

ツナさん！教えてください！姉さんに何があったんですか！？」

ツナ「っっ……」

セシル「黙らないでください！姉さんは何の戦いに巻き込まれたんですか！？」

？「セ…シル…」

全「！」

セシル「姉さん！」

山本「気がついたのな」

フィン「セシル……ツナを…責めないで…。

悪いのは姉さん…だから……」

ディーノ「喋るな。傷口が開くぞ」

フィン「美鈴は…私の命に代えても助けなくちゃいけない…」

セシル「美鈴？美鈴って五月美鈴のこと？」

ツナ「セシルちゃん知ってるの！？」

セシル「昔からうわ言でいつも『美鈴、美鈴』って言ってた。

そうか、そいつが姉さんを苦しめるんだね？だったら私が排除する」

フィン「止めて！！うっ……」

ツナ「安静にしてて」

セシル「どうして？姉さんが苦しむならそいつは姉さんにとっての敵でしょ？敵は排除していかないと私たちは生き残れない。

分かってるでしょ？

姉さんをそんなにしたのもそいつなんでしょ？」

フィン「美鈴は…友達…なの…。だから…そんな事…言わないで…」

セシル「友達なら傷つけないでしょ！！？だから」

フィン「分かったら姉さんの言うことを聞きなさい！！うあっ…」

山本「落ち着けって。な？」

リボーン「セシルも落ち着け。ここは病院だ」

セシル「……」

バジル「しかしセシル殿は何故そこまで美鈴殿を消すことばかり考えるのですか？」

セシル「私たちは生まれながらのマフィアなの。だから敵は必ず排

除しなければ生きていくことはできない。ただそれだけ」

ツナ「セシルちゃん……」

フィン「私は…この世界に来ても魅麗を忘れることはなかった」

全「？」

フィン「あのクソ神にムダだと言われても、心のどこかで、絶対に会えるって信じてた。

だから…だから…学校で出会ったときはすごく嬉しかった…でも…

美鈴は私を覚えていなかった。

神様の言ったとおりだった。

だからこそ、私は、私達の記憶を取り戻したかった」

リボーン「だが、余計な物まで見せちまったみてーだな」

フィン「あり得なかった。“魅麗”の形見箱に“美鈴”の記憶が入ってるなんて」

バジル「もしかして、ですが、美鈴殿の記憶とレイは何か関係があるのでしょうか？」

フィン「私の不注意だった。ちゃんと神様に言われてたのに。

『記憶と力が完全に取り戻されたとき、あいつはアイツじゃなくなる』と」

ツナ「？？　どーゆーこと？」

リボーン「記憶と力が取り戻されたとき……か。なるほどな」

ツナ「え？」

リボーン「お前らに聞くが、悠里としていたとき、アイツから何か感じなかったか？」

全「？」

獄寺「どーゆーことスかリボーンさん。何かって」

ツナ「あ…そういえば…」

了平「何か知っているのか？」

ツナ「皆と会うずっと前の話なんだけど、ああリボーンには話したな。

オレ達が小学生のときだ。悠里のことが気に入らなかった人たちがいてさ、悠里をいじめてたんだ。

けど、全員仕返しに遭った。

その時、オレが実際に見たわけじゃないし、その人を信じていたわけじゃないけど、

仕返しを受けた人たちは皆、『手を触れないで人を傷つけることができる悪魔だって言ってたんだ。

オレはその時、いや、ホントは今でも悠里がそんなことをするなんて信じたくなかったけど、

今こうして考えると、もしかしたらアレはレイだったんじゃないかな……」

獄寺「でも、そう決めるのは早いのでは？」

山本「力と言えばさ、あいつ、ダイナマイトを撃ち落すとき、よくわかんねー技使ってたよな」

ディーノ「言われてみればそうだな」

リボーン「なるほど。力は前々から取り戻されてたってワケだな」

バジル「そういえば拙者、親方様からよく沢田殿の話を聞かされていたのですが、そのときに美鈴殿の話も出てきたんです。

その時の親方様の呟きが気になっていたんです」

ツナ「父さんの呟き？」

バジル「はい。

『彼の記憶は触れてはいけない。もし触れてしまったら取り返しがつかない』

そのときは意味が分からなかったのですが、今になってみるとよく分かりました」

獄寺「なっ!?お前知ってたのかよ!知ってたんならなんでフィンを止めなかったんだ!?」

バジル「すみません。気になってはいたものの、何年も前の話なので…」

ツナ「バジル君は悪くないよ」

バジル「すみません」

ツナ「……リング争奪戦(この戦い)が終わったら、ちゃんと美鈴ちゃんと話をしよう。オレ達は何も知らなすぎた。

何も知らないのに無責任なことばかり言って……。

だから、ちゃんとお互いのことを知ってから、分かち合える友達になりたいんだ」

レオン「(フルフル)」

ツナ「えっ?なっ何!?」

獄寺「レオンが…!」

リボーン「一瞬にしてマユになったぞ」

了平「何が起きているのだ!?」

セシル「何これ」

リボーン「本来レオンはオレの生徒に試練が近づくとマユになるんだが…」

ツナ「あ、そっか。じゃあ山本?」

リボーン「今の一連でなんで山本になるんだバカツナ。

いいか?今レオンはお前の言葉に反応したんだぞ」

ツナ「え?じゃあまたオレ!?」

リボーン「そーとも限んねえ。確かにツナの言葉に反応したが、大体の問題はその中身だ」

獄寺「中身っていうと美鈴の話っスか?」

バジル「と言うことは、沢田殿か美鈴殿か、もしくはこの場にいる全員と言うことですね」

リボーン「ああ」

了平「つまりはここからは絶対に負けられない戦いと言うことだな」

ツナ「山本……明日の勝負、頑張ってね」

山本「おう」

獄寺「負けんじゃねーぞ」

了平「極限に頼んだぞ」

山本「わーってますって。任してください」

ボーナスバトル◎失意

～ヴァリアーアジト～

ガラガラ

マーモン「美鈴、起きたかい？」

ベル「まだだぜ」

マーモン「ハァ。ベル、ちょっといいかい？」

ベル「何？」

マーモン「レイが言っていた六年前、何があったの？」

ベル「またその話？オレは知んねっていってんじゃん」

マーモン「それじゃあ美鈴が不審な行動をしてたとか……」

ベル「あのなぁマーモン。確かにオレは監視として姫と一緒にいたぜ？

でも、姫の行動を全部見てるわけじゃねえんだよ。

オレにだって分かんないことぐらいあんの」

マーモン「……」

ベル「オレだって何があったのか知りたいぐらいだしさ。
それに、目ぇ覚ましたら本人に聞きゃいい話だろ」

マーモン「……そう…だね。
それじゃあ、僕は部屋に戻ってるから」

バタンッ

ベル「……

（姫、本当に何があったんだよ…。オレに言えないことでもあんのかよ…）」

チュッ

ベル「起きたらちゃんと話し聞かせてもらうからな」

紅く燃え上がる町が目の前に広がる。

沢山の人の悲鳴が聞こえる。

町中に人が焼ける臭いが充満してる。

目を閉じるたびにいつも見ていたこの風景。

ずっと……皆は殺されたんだと思ってた。

自分で殺したのが真実なのに…。

どうして……

マーモン「ウソ、ついてたんだね」

！！？

いつの間にか町は無くなり、闇の空間にいた。

マーモン「僕達にウソをつくなんて卑怯じゃないか」

違う…私は…ウソなんて…

ルッスーリア「だめよぅ美鈴ちゃん。私達仲間なんだからちゃんと本当のこと話してくれないと」

ウソなんてつく気はなかった！！

騙してたんじゃない！！

レヴィ「やはり貴様はヴァリアーのお荷物になるだけだ」

イヤだ！私はお荷物なんかじゃない！！

スクアーロ「腰抜けはいらないんだよ、う〝お〝おい」

待って…置いてかないで……

ＸＡＮＸＵＳ「……カスはさっさと失せやがれ」

お願いボス！！捨てないで！！一人にしないで！！

ねぇ…ベル！！

ベル「……オレ、ウソとか嫌いだからさ…

じゃあな、姫」

ヤダよ！！行かないで！！お願いだから！！みんな！！

レイ「さあ美鈴。こっちに来い。楽になるぞ」

イヤ……

レイ「さあ」

いやあああああああああ！！！！！

美鈴「あああああ！！！

……ハァ……ハァ……

……夢……？」

本当に、夢だったの…？

頭が…痛い…

？「……んん…」

美鈴「（はっ）

……ベル？」

なんでベルがこんなところで寝てるの…？

ああ、手が震えてる。

皆、レイのことを知ってしまったのだろうか…

過去を見た後の記憶が何にも無い…

もし、レイのことを知っていたとしたら、話さなきゃ、いけないだろうか…

イヤ…ダメだ…話せない…。

話したりしたら、それこそ本当にあの夢のようになってしまう…

『話せばいいじゃないか』

！！　レイ！！

『どうせ、ヴァリアーの奴らはお前を信用してなんかいない。

お前が再び日本に出向いたときに信用なんてとっくに崩れてんだよ』

違う！！そんな事無い！！

『どこが違うんだ？ＸＡＮＸＵＳだって何も言わなかったが、内心はいつお前を消そうかと考えてるだろうぜ』

ありえない！！ボスは…そんなこと…

『考えるだけ無駄だ。さっさとヴァリアー出てってオレにその体を受け渡せばいい話だ。お前一人がいなくなったところで悲しむ奴なんて一人もいねえ』

美鈴「黙れ！！さっさと消えうせろ！！」

ベル「姫…？大丈夫か？」

美鈴「（（はっ）声に出てた？）

あ、うん。大丈夫」

バンッ

スクアーロ「う〝お〝おい！！起きたかぁ！！」

美／ベ「うるせえ！」

スクアーロ「う〝お〝い。随分と元気そうじゃねえかぁ〝」

マーモン「やっと起きたか。それなら話を聞かせてもらうよ」

美鈴「（ビクッ）話…？」

マーモン「そうさ。レイについてさ」

ドクンッ

美鈴「や……ッ」

スクアーロ「あいつは何者なんだぁ」

美鈴「ダメ……ッ」

《オレ、ウソとか嫌いだからさ》

美鈴「いやぁ……ッ」

ベル「姫。オレ、ウソとか嫌いだからさ」

ドクンッ

美鈴「イヤアアアアッ」

ブワッ

全「！！」

マーモン「まずいね。このままだとレイが出てくるかもしれない」

スクアーロ「ちっ」

ベル「姫ッ」

ギュッ↑抱

ベル「落ち着けって、な？何がヤなのか言ってくんねえとわかんねえし」

美鈴「ああ……ぅあっ……

怖い……私…怖いの…」

マーモン「怖いって何がさ」

美鈴「本当のことを知ったら皆がいなくなる気がして…レイに取り込まれそうで…」

ベル「だーいじょぶだって。何心配してんの?オレ達が姫を捨てるわけねーじゃん」

マーモン「そうだよ。だから、話してくれない?」

美鈴「……グズッ（こくり）」

美鈴「レイは、私のもう一つの魂なの」

ベル「は？」

スクアーロ「どういうことだぁ」

美鈴「レイは元々、全く違う人から生まれるはずだった。でも、レイの母親はレイの出産直前にレイをおろした。わざと赤ん坊に悪い薬を飲んで、流産した。生まれることのできなかったその魂は、ほぼ同時期に生まれることとなった私の魂に溶け込んだ。

だからレイは私であり私でない、もう一つの“私”である」

マーモン「ちょっとストップ。魂が溶け込むって、普通じゃありえないと思うんだけど」

美鈴「普通じゃありえない。そりゃそうだよ。私は普通じゃないんだから。

魅麗の記憶を見たでしょ？あらゆる物を恨んだまま生まれ変わった私は、記憶が無くとも心のどこかにとても濃い負の感情が存在していた。そして同じように、強制的に流産されたことによって生まれることのできなかったレイも、とても濃い負の感情を持っていた。

“憎しみ”“恨み”と言う形で持ち合わせる感情が同じだっ

たからこそ、私達の魂は溶け込んだ」

ベル「んー。何かよくわかんねえけど、そこまでの理解はオッケー。で、なんでこの話でオレ達が姫を捨てるとか思うわけ？」

美鈴「こうなった以上は、いつレイが出てくるか分からない。実際に、この戦いが始まる前のとき、ボスの攻撃を止めたのはレイだった」

全「！！」

スクアーロ「なるほどなぁ。それであの時ＸＡＮＸＵＳを呼び捨てにしてたんだなぁ」

美鈴「そういうこと」

ベル「ま、あん時の姫はそれはそれでかっこよかったけどな♪」

マーモン「あまりいい話じゃないけどね」

美鈴「だから、」

ベル「心配すんなって言っただろ？オレ等はヴァリアー。みんな似た物同士だしっ♪」

スクアーロ「あまり気に病むことはねぇ。ＸＡＮＸＵＳにはオレから話しといてやる」

マーモン「君はもう少し休んでいなよ。たいした怪我はしてないんだし、君が倒れたのは気力の問題だろうから、そのあたり、しっか

り回復してもらわないと困るから」

美鈴「皆…ありがとう…

拾ってくれたのがヴァリアーで……よかった…（にこっ）」

あ、なんだか一降り来そうですなぁ

～ヴァリアーアジト～

スクアーロ「う゛お゛おい！！今日はオレの勝負だぁ！！」

全「知ってる」

スクアーロ「う゛お゛おい！！何だぁその冷めた反応はぁ！」

美鈴「五月蝿いぞ鮫！黙らないと（ズキッ）うっ…」

ベル「姫！？」

美鈴「大丈夫。レイが出たせいで気力が擦り減ってるだけだから」

マーモン「それは大丈夫の類に入るの？」

美鈴「入る」

スクアーロ「う゛お゛おおい！！行くぞぉ！」

ベル「ししっ分かってるって」

マーモン「そうだね」

美鈴「行こっか」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

～並盛中～

美鈴「今日のフィールドはどこだろう」

ベル「っていうか、カスクアーロは？」

マーモン「さあね」

チェルベッロ「お待ちしておりました」

チェルベッロ「今宵のフィールドはＢ棟です」

マーモン「どこだい？」

美鈴「私が案内するよ」

～Ｂ棟～

美鈴「な！？」

ベル「は！？」

美／ベ「なんじゃこりゃ！？」

校舎の原型はなく、ボロボロのズタズタ。

３階から水がとめどなく流れ落ち、下に水がたまっている。

ＸＡＮＸＵＳ「……」

マーモン「ボスも来たんだね」

ＸＡＮＸＵＳ「ったりめーだ。カスザメの最後を見届ける」

美鈴「ワォ」

マーモン「ム、そろそろスクアーロや相手も来るみたいだね」

バン

スクアーロ「う゛お゛おい！もうすぐだぁ！」

全「知ってる」

スクアーロ「またかぁ！」

ベル「ししっ」

ガヤガヤ

ツナ「な！？」

獄寺「校舎の原型留めてねーじゃねーか！！」

美鈴「あーあ。基本うち等と同じリアクションしてるし」

ベル「何かムカつく」

スクアーロ「う゛お゛おい！今日で貴様等の命はおしまいだぁ！」

ツナ「うわ！出たヴァリアー！」

獄寺「あいつら……！」

美鈴「あ、楓…フィンは？」

ツナ「っっ。無事だけど、傷がひどくて病院で寝てるよ」

美鈴「……っ（あとで謝りに行かなきゃな）」

ベル「ま、全ては今日にかかってるな、スクアーロ」

ＸＡＮＸＵＳ「負け犬はカッ消す。てめえらか、このカスをだ」

ツナ側全「（ぞくっ）」

チェルベッロ「それでは雨のリング戦を始めますので、守護者以外は校舎から出てください」

ベル「だってさ」

美鈴「スクアーロ、分かっているとは思うけど、もし負けた場合は」

スクアーロ「分かってる」

美鈴「クスッ。ベル、マーモン。出よっか」

ゾロゾロ

チェルベッロ「それでは説明します」

チェルベッロ「と、言ってもほとんどはナレが説明してしまいましたが。

このフィールドは『アクアリオン』

特殊な装置によって溜まった水は海水と同じ成分にされ、一定の水量になると獰猛な海洋生物が放たれます」

チェルベッロ「それでは、雨の守護者S．スクアーロVS山本武

勝負（バトル）開始！！」

雨の守護者戦

チェルベッロ「勝負（バトル）開始！！」

スクアーロ「とばすぜぇ！！！」

パシャッ

ビュッ

ザッ

ドシュッ

山本「！！」

ツナ「そーだあの武器！！刀の刃から！！」

獄寺「仕込み火薬！！」

ザッ

ドゴオ

山本「っと！！」

スクアーロ「ほう、よけたか」

山本「あっぶねー。あんたに負けてから毎日やってたイメトレのお

かげだな」

スクアーロ「イメトレだぁ？カスがぁ」

バシャバシャバシャ

スクアーロ「こいつもイメージ……できたか？」

ピシャ

山本「！　消えた…？」

バッ

山本「！！」

スクアーロ「う〝お〝いっ！！」

ガッ

ツナ「何だ今の！？」

バジル「速い！！」

スクアーロ「あれがオレの力だと思ったら、大間違いだぁ！！」

美鈴「そう思う人がいたらめでたしですね（ボソッ）」

スクアーロ「死ねぇ！！」

ドシュッ

山本「！！！」

ディーノ「あの距離では！！」

ドオン

獄寺「！！」

ツナ「山本！！」

スクアーロ「フッ。

！？」

ドウッ

ツナ「な…なんだ！？あの煙の形…！？」

リボーン「山本の奴、抜いたな」

ツナ「えっ！？」

リボーン「これが時雨蒼燕流　守式七の型」

『繁吹き雨（しぶきあめ）』

スクアーロ「何だとぉ!!?」

雲雀「!」

ツナ「す……すごい!」

バジル「スクアーロの爆風をかわしました!!」

ディーノ「あれが山本の時雨蒼燕流。まだ荒さはあるが、この短期間でよくもここまで…」

美鈴「にししっ盛り上がってる場合?」

獄寺「! どーゆーことだ」

美鈴「スクアーロの表情見てみなよ」

ツナ「わ、笑ってる!?」

スクアーロ「う゛お゛ぉい!!!(ザザッ)図に乗るなぁ!!!」

ドシュッ

ドガガガッ

山本「(やっべ、塞がれた)」

スクアーロ「切る!!!」

山本「えーっと…こんな時は…

こいつだ」

ス…

ちゃぷん

ザッ

ツナ「……！」

スゥ…

ベル「！」

ちゃぷ…

ザンッ

スクアーロ「！！」

獄寺「な…何だ！？」

リボーン「時雨蒼燕流　守式弐の型」

ズバッ

スクアーロ「ちいっ」

『逆巻く雨』

ツナ「……（唖然）」

ベル「水の壁で姿をくらまして、さらに身を縮めて攻撃を防御」

マーモン「確かにあれでは当たる確立は低くなるだろうね。だけど、」

美鈴「スクアーロの前では何でもないみたいだね」

ディーノ「スクアーロの奴、また笑っている…」

スクアーロ「う゛お゛ぉい小僧!!何故防御のあと打ち込んでこなかった!!」

山本「!?」

スクアーロ「愚かなアホがぁ!オレに唯一傷を付けることができた最後のチャンスを潰したんだぞぉ!!」

山本「!?」

ツナ「え……?」

バジル「最後のチャンス…!?」

ベル「しししし」

美鈴「やっぱりね」

マーモン「どうやらスクアーロは確信したみたいだね」

了平「負け惜しみを言いおって！ハッタリに決まっている！」

山本「ハハ…最後って…随分言ってくれるな。

　言っとくけど、時雨蒼燕流はこれだけじゃないんだぜ」

リボーン「そうだぞ。時雨蒼燕流は、守型四式　攻型四式の状況に応じた八つの型が存在するんだ」

す…

ツナ「！　山本が初めて…」

ドッ

ツナ「前に出た！！」

ザッ

ヒュッ

ディーノ「（速い！！）」

バッ

ブオッ

スクアーロ「!?」

バジル「山本殿の手に刀がない!!」

リボーン「時雨蒼燕流　攻式五の型」

『五月雨』

ザシュッ

ザバアッ

ツナ「!!」

バジル「い…今のは…っ」

リボーン「五月雨。一太刀のうちに刀のもち手を入れ替え、軌道とタイミングをずらす変幻自在の斬撃だ」

獄寺「ま…まーまーやるじゃねーか」

ツナ「すげぇ…山本…」

ベル「めでたい連中だな」

マーモン「うむ…。ヴァリアーのボス候補になるということがどれほどのことか分かってないね」

美鈴「スクアーロが笑っていたのは、ただ戦いが愉しいからだと思う？」

スクアーロ「う〝お〝ぉい！！」

ザバッ

スクアーロ「効かねぇぞ」

ツナ「！」

山本「あり…？」

ディーノ「スクアーロは無傷だ…！！」

ツナ「な…なんで！？」

バジル「間違いなく当たっていたのに！」

ディーノ「一瞬だ。

山本の刀の軌道に合わせて一瞬身を引いたんだ…」

バジル「！」

ツナ「そんなことって」

ディーノ「奴に動きを読まれていたとしか考えらんねーな」

バジル「しかし拙者の見る限り、山本殿が持ち手を変えるためのモーションの不自然さは見当たりませんでしたよ…」

ツナ「じゃ…じゃあどうして……!?」

美鈴「（こいつらはスクアーロを甘く見すぎてるね）」

スクアーロ「う〝お〝ぉい　お前の使う無敵の流派とやらはこんなものかぁ!?」

山本「!」

ディーノ「（まずいな…やはり恐れていたことが…）」

ツナ「（山本……）」

スクアーロ「それとは別に一つ腑に落ちねえことがある。貴様、今の一太刀に

刃ではなく峰を使った?」

獄寺「!」

ツナ「峰打ち?」

山本「そりゃあ、オレはあんたに勝つためにやってんで、殺すためじゃねーからな」

獄寺「！　あの野球バカそんな甘っちょろいことを…」

ツナ「（山本……）」

ベル「ナンセーンス」

マーモン「ふざけてるね」

美鈴「バッカじゃないの？」

スクアーロ「う゛お゛ぉい　随分ナメてくれたなぁ！！まだ自分の置かれた状況がわかってねぇようだなぁ！！その生意気な口をきけなくしてやる！！」

ザッ

ツナ「また逆巻く雨を…」

スクアーロ「（ニカッ）」

ビュッ

ズアッ

ツナ「ロ……ロン毛も同時に水柱を！？」

山本「？」

ディーノ「これではお互いに視界が！！」

リボーン「先に見つけたほうが勝ちだな」

山本「……！」

ビュッ

獄寺「！！」

ツナ「山本！！」

どぱっ

スクアーロ「どうだぁ！痛いかぁ！？最後に絶望的なバットニュースを教えてやる。貴様の技はすべて見切ってるぜぇ。その時雨蒼燕流は

昔ひねり潰した流派だからなぁ！！」

全てを洗い流す鎮魂歌の雨

ザアアア

ツナ「時雨蒼燕流を、昔潰しただって…！？」

スクアーロ「剣帝という男を倒し極めた剣を試すため、オレは強ぇ相手を探していた。そんな折、細々と継承されている完全無欠の暗殺剣が東洋にあると聞いた。それが時雨蒼燕流。

見つけたぜぇ　継承者と弟子の三人をな。貴様と同じ八つの肩を使いやがった。だが所詮は古典剣術（ローカル）の亜流！！すべての型を受け！！見切り！！切り刻んでやったぞぉ！！」

ツナ「そ…そんなことって！」

リボーン「恐らく本当の話だぞ。スクアーロの技の見切りは反射レベルよりもう一ランク早い」

ツナ「……！！！」

バジル「なんてやつだ…山本殿の時雨蒼燕流まで」

美鈴「だ～から言ったのにさ」

山本「聞いてねーな、そんな話…」

獄寺「……！」

ツナ「山本！」

スクアーロ「ん゛ん？」

山本「オレの聞いた時雨蒼燕流は、完全無欠最強無敵なんでね」

ベル「バカげてんな」

美鈴「ホントだよ」

スクアーロ「もう加減はしねぇぞぉ」

ツナ「！」

バジル「……」

マーモン「スクアーロが牙を？く」

ザッ

山本「いくぜ」

ドシュッ

ザボッ

ドオッ

ギャン

山本「!?」

ガッ

山本「!!」

ツナ「ああ!!」

バジル「柱の破片が!!」

山本「ぐぁっ!!」

ザバシャッ

スクアーロ「う゛お゛ぉい!!動き出したら止まらねーぞぉ!!」

山本「ぐっ」

ザッ

バッ

獄寺「あの技は!!」

パシッ

『五月雨』

スクアーロ「ニヤリ…」

ギュキッ

ガキィィイイィィィ…

山本「！！」

獄寺「！？」

ツナ「山本…？」

バジル「山本殿！！何故動かない！！」

スクアーロ「死ねっ！！」

山本「くっ」

がっ

ザシュッ

山本「がっ」

ザバアア

獄寺「山本！！」

スクアーロ「う゛お゛ぉい！！」

ドシュッ

山本「っつ～」

ザボッ

マーモン「スクアーロが放ったのは鮫衝撃（アタッコ・ディ・スクアーロ）。

　渾身の一撃を強力な振動波に変え、相手の神経を麻痺させる衝撃剣」

ベル「自分の腕を打って硬直を解くとは、山本もやるじゃん」

美鈴「でも鮫衝撃（アタッコ・ディ・スクアーロ）は、素手をバッドで殴られるよりずっと強い。私でさえ一時間は麻痺が取れなかったんだから」

マーモン「しばらく奴のあの手は使い物にならないだろうね」

スクアーロ「どうした！顔色が悪いぞぉーっ！！」

ザザッ

山本「！」

ザボッ

タタッ

スクアーロ「う゛お゛ぉい！！逃がすかぁ！！」

バシャン

山本「つ～っ」

ガガガガガ

ボゴッ

ガガガガッ

ズガガアッ

スクアーロ「散れ」

ドボーン

美鈴「ヒュ～♪」

バジル「な…なんて斬撃だ……。突く…刺すというより…空間をかじるような!!」

レヴィ「鮫の牙（ザンナ・ディ・スクアーロ）…。

ボス……」

XANXUS「はっ。何年経っても…変わりばえのしねー野朗だ」

マーモン「さすがスクアーロと言ったところかな。ちゃんと最後に雨の守護者の使命を体現している」

美鈴「戦いを清算し流れた血を洗い流す鎮魂歌(レクイエム)の雨」

スクアーロ「さあ小僧!!心臓を切り刻んでやるぞぉ!!」

ツナ「!!　山本……!!」

山本「ちくしょ～こーも一方的かよ…。負けたなんて知ったらオヤジ怒るんだろうな」

スクアーロ「う゛お゛ぉい　まだやるか?得意の時雨蒼燕流で。

どぉしたぁ!!継承者は八つの型全てを見せてくれたぜぇ。最後に八の型秋雨を放ったと同時に無残に散ったがなぁ!!!」

美鈴「(……秋雨?)」

スクアーロ「う゛お゛ぉい!!ガキども!!刀小僧の無様な最期を目ん玉かっぽじってよく見ておけぇ!!」

ツナ「山本…!!

!」

スクアーロ「ん゛?」

ザバッ

スクアーロ「うぉお゛ぉい　寝ていろぉ!!そのままおろしてやるぞぉ!!」

山本「そーはいかねーよ。時雨蒼燕流は完全無欠最強無敵だからな」

ベル「頑固だね」

マーモン「強がりを言ったところであの体じゃ何もできないくせにね」

美鈴「（……まずいなこりゃ）」

獄寺「あいつ…」

ツナ「山本!!」

スクアーロ「カスが!!まずはその減らず口から切り落としてやるぞぉ!!」

ドシュドシュッ

ドガガガ

ダダッ

どしゃっ

山本「ぐ」

スクアーロ「……」

山本「いくぜ」

スクアーロ「何しに来た」

山本「時雨蒼燕流…」

ツナ「なっ山本…！」

獄寺「あいつ、まだ…！」

ディーノ「いかん！！」

スクアーロ「う〝お〝ぉい　脳細胞がねぇーらしいなぁ！！」

ダッ

スクアーロ「その構えは知っているぞ！！さぁ打てぇ！！秋雨を！！！」

ツナ「山本！！」

プシュウウウ…

スクアーロ「（終わりだぁ！！）」

山本「（時雨蒼燕流　攻式八の型）」

美鈴「スクアーロ！ダメだ！！」

スクアーロ「あ゛ぁ？」

『篠突く雨』

時雨蒼燕流

『篠突く雨』

スクアーロ「な…にぃ…」

ツナ「！！」

美鈴「チッ」

ザバァッ

スクアーロ「ぐはっ」

ツナ「あ…当たった…」

レヴィ「どーなっている……！？」

山本「ハハハ。やっぱりな」

スクアーロ「ぐ…ぐはっ…！貴様！！時雨蒼燕流以外の流派を使えるのかぁ！？」

山本「いんや。いまのも時雨蒼燕流だぜ」

スクアーロ「！！」

山本「八の型　篠突く雨はオヤジが作った型だ」

獄寺「!?」

ツナ「!!」

リボーン「なるほどな。それで八代八つの型なんだな」

ディーノ「ん?」

リボーン「時雨蒼燕流にとって、継承とは変化のことなんだ」

獄寺「……!」

ツナ「変化……?」

リボーン「恐らく、山本の父とスクアーロが倒した継承者は、同じ師匠から一から七までの型を継承され、その後それぞれが違う八の型を作ったんだ」

ツナ「え…?」

バジル「同じ流派を名乗っておきながら、ですか…?」

リボーン「時雨蒼燕流の継承者は、先人の残した型を受け継ぎながら新たな型を作り、そしてまた弟子に伝えていくんだ」

バジル「で…ですが、それでは枝分かれして無数の型が生まれてしまうのでは?」

リボーン「逆だぞ。寧ろ、いままで途絶えなかったのが不思議なく

らいだ。一度きりというシビアな継承法。変化には、進化だけでなく退化もある。その中で最強を謳い、あえて強者から狙われるんだ。まるで自分を追い込むようにな。ゆえに時雨蒼燕流は気と才あるもの途絶えた時、世から消えることも仕方無しとした滅びの剣と呼ばれる」

マーモン「ところで、どうして美鈴は知っていた？」

美鈴「皆気付いてないだろうけど、私、よくアジト抜け出してこいつ等の修行状況を見に行ってたの」

ツナ「！？」

美鈴「山本の時雨蒼燕流も見た。もちろん篠突く雨も。

　スクアーロが昔時雨蒼燕流の継承者を倒したことも知っていた。スクアーロは篠突く雨を知っていると思ってたんだ。けど、あいつは知らなかった」

スクアーロ「う〝お〝ぉい！！ガキ……。正直ここまでやるとは思ってなかったぞ。だからこそその峰打ちは解せねぇ。真剣勝負を舐めやがって。それともまだオレの知らない違う型があんのか？」

山本「ん…？ハハハ。残念ながら一から七までの型はあんたが知ってる型と同じだぜ」

ディーノ「！　バカ正直にばらしやがった…」

スクアーロ「やはり死ぬしかねぇようだな！！一度喰らった篠突く雨は既に見切った！！」

ツナ「そ……そんな！」

山本「流石だぜ。そうこなくっちゃな。んじゃ、いってみっか。

時雨蒼燕流　九の型」

スクアーロ「！！（ピクッ）」

ヴァリアー「！？」

ツナ「きゅ……九？」

バジル「ということは…」

リボーン「山本の奴、新たな自分の型を放つ気だぞ」

ディーノ「なるほど。常に流派を超えようとする流派…。もしそれができるのならば

確かに時雨蒼燕流は完全無欠最強無敵！！！

（だが、できるのか……？）」

スクアーロ「何だぁそのふざけた構えは。野球でもするつもりか！？」

山本「あいにく、野球（こいつ）しか、とりえがないもんでね」

リボーン「この一撃でケリがつくな」

ディーノ「ああ」

ツナ「！　で…でもあの竹刀!!時雨蒼燕流でなくちゃ使えないんじゃ!?」

リボーン「だからこそ、山本の父は山本にあれを持たせたんだ。

竹刀を変形させることができなければ、山本に最強の剣術を継ぐ資格がないということだ」

ツナ「え!?そんな危険な賭け……!!」

バジル「!!　スクアーロが動きました!!」

スクアーロ「図に乗るなよガキ!!オレの剣の真の力を思い知れ!!!」

ゴアッ

バジル「!!　水がえぐられていく!!」

マーモン「鮫特攻（スコントロ・ディ・スクアーロ）

まさかここで剣帝を倒したスクアーロの奥義が見られるとは」

美鈴「あれが鮫特攻（スコントロ・ディ・スクアーロ）……」

スクアーロ「死ねぇ!!」

山本「いくぜ」

ピシャッ

スクアーロ「!?」

ツナ「……!!」

バジル「消えた!!」

山本「時雨蒼燕流　攻式九の型」

バジル「かわした!」

リボーン「まだだぞ」

スクアーロ「で、どーした!?」

ズアア…

獄寺「なんて反応速度だ!」

ツナ「方向が!」

ガキン

ブシャァッ

了平「山本ォ!!」

獄寺「ギリだぜ!!」

ディーノ「（やはり無理なのか…）」

スクアーロ「とどめだぁ」

と、その時、スクアーロの背後から山本が現れた。

スクアーロ「（逆!?）」

ツ／バ「!!」

スクアーロ「（ここまでやるとはな――――だがオレの剣に）

死角はない!!」

カチン

雲雀「!」

ディーノ「義手!?」

スクアーロ「……!?」

ドバシャッ

スクアーロ「（まさかオレが切ったのは）」

リボーン「水面に映った影か」

ザ…

『うつし雨』

スクアーロ「（これが……敗北……）」

バシャン

リボーン「恐らく逆巻く雨の応用だな。

最初の一太刀で山本は波を作っていたんだ。おびき出したスクアーロのちょうど背後に自分を反射させるためのな」

ツナ「そんなすごい技をとっさに……？」

山本「勝ったぜ」

山本の手には完成した雨のリングがあった。

ベル「ぶったまげ」

マーモン「まさかこんな事がね…」

美鈴「Ｗｏｗ」

ＸＡＮＸＵＳ「……スクアーロ……。

ざまぁねえ！！負けやがった！！！カスが！！！

用済みだ」

レヴィ「ボスが直接手を下さなくとも」

マーモン「僕がやってこよーか？」

美鈴「何いってんのさ。アレは私の仕事（えもの）だよ」

チェルベッロ「（タッ）お待ちください。今アクアリオンに入るのは危険です。規定水深に達したため、獰猛な海洋生物が放たれました」

美鈴「知らないよ（タッ）」

ベル「おい」

美鈴「破道の七十三　双蓮蒼火墜！！」

ドゴォッ

パシャン

山本「美鈴?」

スクアーロ「美鈴……何しにきやがった…」

美鈴「何しに?それはあんたが一番良く知ってるんじゃない?」

ズ…　↑鎌

美鈴「さようなら♪」

ズシャァッ

スクアーロ「ぐぁっ…」

ザボン

ツナ「!!」

獄寺「あいつ!」

山本「……」

美鈴「何をボケッと突っ立ってんの?折角脱出口開いたんだし、出ないと鮫(あれ)に喰われるよ」

タッ

美鈴「これでいいでしょ?ボス」

XANXUS「……」

美鈴「にししっ」

チェルベッロ「雨のリング戦は山本武の勝利です。それでは、次回の対戦カードを発表します」

ツナ「……」

ディーノ「（こいつらはまだ中学生なんだ…。酷な戦いだな…）」

チェルベッロ「明晩の対戦は……霧の守護者同士の対決です」

ベル「やっとマーモンの出番だな」

マーモン「どうやらそっちの霧はまだのようだね、リボーン。つまらないから、不戦勝って落ちだけはやめてほしいな」

美鈴「さ、帰ろっ」

ベル「ししっ」

バッ

マーモン「ム」

サァァ

レヴィ「ボス…」

ＸＡＮＸＵＳ「……（バッ）」

バッ

こうして、長かったような短かったような雨戦は幕を閉じた。

ごめんなさい（前書き）

うわーん、ベルの誕生日なのに話がベルの誕生日じゃないよー（泣）

ごめんなさい

～中山外科医院～

フィン「……（そろそろ、山本君のバトルが終わったかな…？）」

コンコン

フィン「はい、ツナ？山本君？」

美鈴「……ごめん…私…」

フィン「！！　美鈴！！」

美鈴「しっ。お願いだから静かにして。ヴァリアーの皆に言わないでこっそり来たの」

フィン「どう、して？何しに来たの？」

美鈴「……。フィン、ゴメンね」

フィン「っ。どうして謝るの？美鈴は悪いことなんてしてないのに」

美鈴「だって…フィンのことを傷つけて…」

フィン「でも、アレはレイでしょ？美鈴じゃないんでしょ？それなら謝る必要は無いよ」

美鈴「違う！確かに…レイは私とは別の人格。でも…それでも、私であることには変わりないんだ」

フィン「それ、どーゆーこと？」

美鈴「フィンには全部話すよ。あの記憶が伝え切れなかった真実をすべて」

フィン「……」

美鈴「……」

フィン「そう、だったんだ」

美鈴「フィン。私、もう二度とアンタと、いや、ツナたちと笑い会える日は来ないと思う」

フィン「どうして……」

美鈴「レイの覚醒はまだ完全じゃない。もし、完全に覚醒してしまったら、レイはこの世界を破壊する気なんだ。それに、それが無いとしても、リング戦で全てが決まる。こっちが勝てばボスが皆を殺す。そっちが勝てばヴァリアーは、特に私は重い処分を科せられるはずだ。だから、もう二度と会えないってことになる」

フィン「私たちは死なない！たとえレイが覚醒してもＸＡＮＸＵＳにやられたとしても死なないよ！」

美鈴「そんな事分からないじゃんッ！！」

フィン「分からなくたって！私たちは友達なんだ。美鈴がツナたちをどう思っているかは分からないけど、それでも私たちは友達でしょ！？」

美鈴「っっ」

フィン「信じよう？それに、もし美鈴に重い罰が科せられるなら、九代目に言って私も罰を受ける」

美鈴「バカじゃないの！？そんな事してなんになるの！？」

フィン「私がバカなのは昔からでしょ」

美鈴「……。本っ当にバカなんだから」

ガチャッ

フィ／美「！！」

フィン「あ、あんたは」

美鈴「チェルベッロ……」

チェルベッロ「やはりここにおられましたか。五月氏とアメイラ氏にお話があります」

美鈴「話？」

チェルベッロ「はい。――――――をご存知でしょうか」

フィ／美「！？」

夏の朝って、天気悪いよね

そこは一面花畑。

美鈴「ここは、どこ…？なんだか、懐かしい…」

？「久しぶりですね、美鈴」

美鈴「！！　くー…ちゃん？くーちゃんなの？どこにいるの！？」

？「僕は――――にいますよ」

美鈴「どこ…？ねぇ姿を現してよ。どうして私を見捨てたりなんかしたの？ねぇってば！！」

？「僕が見えないのですか…。残念です」

美鈴「待って！ねぇ

くーちゃん！！」

チュンチュン

美鈴「……夢！？」

～・～・～・～・～・～・～・～・～

～談話室～

コンコン

ＸＡＮＸＵＳ「……」

マーモン「ボス、許可を貰いに来たんだ。あの力を今晩の争奪戦で使いたい」

ベル「ふーん。やる気マンマンじゃんマーモン」

レヴィ「何故そこまでする。スクアーロが負けたといっても勝負は三勝二敗一分。オレ達にとっては有利すぎるほど有利」

美鈴「焦ってるの？」

マーモン「まさか」

ベル「それとも姫に殺されんのが怖いんだろ」

マーモン「バカにしてるのかい？」

ベル「ししっ。敵はまだ粘写しても見つからないんだろ？」

マーモン「相手はカンケーないよ。僕の力はたまに使って慣れておかないと手に負えなくなる種類の物でね」

ベル「たんのしみー。オレ初めて見るよ、マーモンのソレ」

美鈴「Ｍｅ　ｔｏｏ」

ＸＡＮＸＵＳ「……。許可する」

～・～・～・～・～・～・～・～・

マーモン「すぅ――――――っ　ずび――――――っ

……ベルかい？」

ベル「さっすがマーモン。気配は消しきったつもりだったんだけどな。また粘写？」

マーモン「まーね」

ベル「見つかったの？相手の霧の守護者は」

マーモン「相変わらずだよ」

ベル「やっぱ用意できてねーんじゃねーの？あいつら」

マーモン「それはないよ。僕の粘写を阻止しようとする力を感じるからね」

ベル「ＣＤ？何それ？暗号？」

マーモン「さぁね。こんなことは初めてさ。どーやら相手は僕と同じ特殊な人間らしい」

ベル「うしし、と・く・しゅねぇ。ま、いいや。オレとしてはバトルがなくても初公開のマーモンの力を見せてくれればさ」

マーモン「ただで見せる気はないよ。今晩の勝負も見物料くれなきゃ入れないし」

ベル「うわー何このチビムカツク。殺してー」

マーモン「やるかい？」

ベル「退屈してさ」

マーモン「だろーね」

ベル「……。姫があんな状態じゃなけりゃなー。それにボスも近くにいるし」

マーモン「僕の口座にＳランクの報酬三倍分ね」

ベル「ふざけんな鼻タレ小僧」

マーモン「ちゃんと入金チェックするからね」

？「やーなこった」

美鈴「バトル一つ見んのに金払うなんてお断りだよ」

ベル「！　姫」

マーモン「美鈴、いつからそこに？」

美鈴「最初っから。つかマーモンが粘写しに来る前から」

マーモン「気配はなかったのに」

美鈴「私のこと見くびるなっつーの」

ベル「ししっさすが姫じゃん」

美鈴「とにかく、私はお金を払う気はないから。じゃ」

ベル「姫待って」

バタン

マーモン「フン。…はっきり言って対戦相手に興味はない。油断できないのは寧ろアイツだ。何を連れてくる気だ……？黄色いおしゃぶりのアルコバレーノ

リボーン」

～・～・～・～・～・～・～・

美鈴「へぇ～体育館か」

マーモン「敵の守護者はまだのようだね」

ベル「やっぱねーんじゃねーの？」

美鈴「！　誰か来る。……この霊圧！」

ベル「ん？」

そこに現れたのは犬と千種。

美鈴「は！？」

ベル「あいつらって…」

ツナ「あ゛あ゛！！」

獄寺「こんな時に！！」

リボーン「落ち着け、お前達。こいつらは霧の守護者を連れてきたんだ」

獄寺「何言ってるんスかリボーンさん！だってこいつら…

！　ま…まさか…！霧の守護者とは…」

山本「こいつらが連れてくるってことは…」

ツナ「う……うそだ……霧の守護者って……ろ…六道骸!!!」

美鈴「やっぱりアイツが来るのか……？でも霊圧が…」

？「クフフフフ　クフフフフフ」

ベル「（クフフ…って…（呆））」

？「Ｌｏ　ｎｅｇｏ（否）Ｉｔ　ｍｉｏ　ｎｏｍｅ　ｅ'　Ｃｈｒｏｍｅ（我が名はクローム）」

クローム「Ｃｈｒｏｍｅ（クローム）髑髏」

ツナ「六道骸じゃ……ない!!?」

バジル「クローム…髑髏？」

了平「ん?だ…誰だ?この女子は…」

山本「ツナの知り合いか?」

ツナ「……あ……え?」

ベル「姫、あいつどー思う……て、姫?」

美鈴「（ふるふるふる）な……凪!!」

ベル「!?」

マーモン「?」

クローム「……美鈴?」

ツナ「な!美鈴ちゃんのこと知ってんの!?」

美鈴「うわーチョー嬉っ!あの日以来一回も連絡入れてないのに覚えてくれてたなんてメッチャいい子!!」

リボーン「どーゆーことだ」

ベル「姫、アイツ誰?」

美鈴「紹介しようっ!私のたった一人の親友、凪です!」

クローム「……親…友…?」

美鈴「え!君がそこに反応しちゃう!?ダメですか!?私が親友じゃダメですか!?」

クローム「(ふるふる)」

美鈴「よかったー」

ベル「いつに無くテンション高いなー」

美鈴「でもそっかー。凪はボンゴレの守護者になっちゃったのかー。残念ですなぁ、折角の親友との再会が敵同士なんてさ」

クローム「？」

美鈴「ゴメンね凪。私はヴァリアー。このちっこいのが仲間であり君の対戦相手でもあるマーモン。悪いけど、君の応援はできない」

クローム「（ふるふる）会えただけで嬉しいから」

美鈴「ホント？マジゴメンね……ってあり？どったのマーモン？」

マーモン「あのクローム髑髏とか言う女、特殊な人間のようだね。みなよ、ファンタズマが興奮している」

レヴィ「よ…妖艶だ」

美鈴「黙れよ変態ロリコンジジィ。凪に手ぇだしたらぶっ殺す」

レヴィ「……（汗）」

バサァッ

ドゴッ

ツナ「！？」

バサッ

ツナ「コロネロ！！！」

了平「師匠！！もう京子と寝ている時間のはず…」

コロネロ「だからおねむだぜコラ！！
　　だが、カエルを乗せたチビの……正体がアルコバレーノかどうか見極めねーとなんねーからな」
リボーン「やっぱり気になったんだな」
美鈴「（…あり？あいつらってマーモンがアルコバレーノだってこと知らないの？）」
マーモン「フン。マヌケ面さげた奴が増えたか。この戦いでもっとマヌケ面をすることになるだろうがな」
ツナ「そういえばディーノさんは？今日は来てくれないのかな……？」
山本「そーいやまだ来てねーな」
リボーン「ん、あいつは昨晩急用ができてな。旧友に会いに行った」
ツナ「こんな時に…そんな…」
千種「犬（コソ）」
犬「んあ？」
千種「向こうにいる栗髪の人…（コソ）」

犬「あいつがどーしたびょん（コソ）」

千種「骸様が言っていた（コソ）」

犬「あの女?ドクロに続いてブス女だびょん」

千種「……」

美鈴「（（ぴくっ）今サイテーな言葉が聞こえた気がする（イライラ））」

チェルベッロ「今回のフィールドは体育館すべて。館内のものは何を使っても構いません」

チェルベッロ「尚、このフィールドには特殊装置は用意されておりませんのであしからず」

ツナ「え……?何も無いの……?」

リボーン「霧の守護者の特性にはよけーなもんはいらねーんだ」

山本「?」

リボーン「無い物を在るものとし、在るものを無い物とすることで敵を惑わし、ファミリーの実体をつかませないまやかしの幻影。

それが霧の守護者の使命だからな」

美鈴「マーモンにぴったりじゃん。自分のプライベートさえつかませないんだし♪」

マーモン「フン」

チェルベッロ「観覧席は同じ館内の指定スペース内とします」

ウィィィ…

チェルベッロ「嵐戦のように赤外線感知式のレーザーが設置されていますので気をつけてください」

チェルベッロ「それでは霧の対戦　マーモンＶＳクローム髑髏

勝負（バトル）開始！！！」

霧の守護者戦

チェルベッロ「勝負（バトル）開始！！！」

ヒュンヒュンヒュン…

と…ん

ビキッ

ドゴゴゴ　↑床崩

獄寺「うわ！」

ツナ「床があ！！」

レヴィ「ぬお！！！」

リボーン「バカツナめ。お前はこの技を知っているぞ」

ツナ「ひい！！うわああ！！」

美鈴「凪、幻覚使えたんだ」

マーモン「やはり僕と同じ術師か（タンタン）でもこんな子供だましじゃ（タンッ）僕から金は（タッ）」

クローム「！」

マーモン「取れないよ」

ギュルッ

クローム「きゃあっ」

フッ　↑戻

ツナ「!?」

山本「あれ?戻ったぜ」

リボーン「あそこを見ろ」

ツナ「!　ああ!!な、何あれ!!」

クローム「ああっ」

グググ…

ツナ「そんな…!」

マーモン「弱すぎるね。見せ物にもなりゃしない」

?「誰に話してるの?（コッ）」

マーモン「!?」

クローム「こっち……」

ダムダム　↑バスケットボール

バジル「え！？」

了平「お…女がバスケットボールになったぞ！！」

獄寺「なぁ！？」

リボーン「幻覚だぞ」

ツナ「幻覚！？」

美鈴「ワオやるね」

リボーン「互いに譲ることなく幻を作り出す息もつかせぬ騙しあい。こんなスゲー戦いはめったに見られるもんじゃねーぞ」

ツナ「……げんかくって…確か前にも…

！　骸の地獄道！！」

獄寺「十代目。あいつ、骸が憑依してるんじゃ…」

美鈴「アホタレ。幻覚がすべて地獄道って言うならマーモンの術はなんなのさ」

ツナ「そ、そーだよね」

がしゃんっ

マーモン「よかったよ。ある程度の相手で。これで思う存分アレを使える。あのマヌケチビ二匹の前でね」

バキンッ

ジャラララ…

リ／コ「！！」

ピシピシ

マーモン「ファンタズマ行こう」

パリン

ファンタズマ「キ――――」

ツナ「か、カエルが…！」

バジル「奇怪な！」

ファンタズマ「（カプ）」

コオオォォォ　↑おしゃぶり光

コロネロ「あの巻きガエルと藍色のおしゃぶり…生きてやがったのか……コラ！」

リボーン「やはりな……。奴の正体は、アルコバレーノ　バイパー」

ツナ「アイツもアルコバレーノなの！？」

コロネロ「ああ。奴も最強の赤ん坊虹の一人（アルコバレーノ）だぜ」

リボーン「アルコバレーノ一のサイキック能力をもつとも言われている術師だ」

獄寺「サイキックって…超能力じゃないスか！？そんなオカルトな！！（ガーン）」

コロネロ「戦いの最中行方不明になったと聞いていたが、まさか生きていたとはな。何故今までおしゃぶりが光らなかったんだ？コラ」

リボーン「よくわかんねーがさっきのクサリみてーのでおしゃぶりの機能を封印してたみてーだな」

マーモン「バカチビ共には分からない研究の副産物さ。お前達と違って僕は怠らなかったからね」

コロネロ「！」

マーモン「呪いを解く努力を」

ツナ「……？…何の事……？」

コロネロ「やばいぜ。あのバカチビ相手じゃ並みの術師じゃかないっこねーぜコラ！」

リボーン「舐めんなよコロネロ。髑髏は並みの術師なんかじゃねえぞ」

コロネロ「！」

クローム「誰だろうと、負けない」

ツナ「!?」

タッ

ビュッ

マーモン「健気な攻撃だね」

ヒュンヒュンヒュン

マーモン「!?　この大蛇、幻覚ではないのか」

ドサッ

バジル「す!すごい!効いてるみたいです…!」

了平「あの女!!ヤるではないか!!」

獄寺「ケモノを召喚する…あの技は」

ツナ「骸の能力（スキル）　畜生道だ!!」

美鈴「畜生道か…何で凪が六道輪廻を?」

バッ

ツナ「！」

山本「な…」

マーモン「僕もそろそろ力を解放するよ。君の正体はその後でゆっくり暴こう」

美鈴「正体って何をだよ。言っとくけどもしものことがあったら勝っても負けても死ぬことになるからね」

ヒュッ　カッ

ドドドドド　↑火柱

了平「うおおっ」

獄寺「あちっ！」

ツナ「わあ！！」

ズボッ

マーモン「確かに君の幻覚は一級品だ。一瞬でも火柱にリアリティを感じれば焼け焦げてしまうほどにね。ゆえに弱点もまた、幻覚！！！」

ブアッ

ピキィィィン

ツナ「うわぁ！」

バジル「火柱が凍った！！」

了平「何だ、この寒さは……！？」

コロネロ「不覚にも幻覚にかかっちまったぜコラ」

リボーン「オレもだぞ。さすがバイパーだな」

クローム「（汗）」

マーモン「幻術とは人の知覚、すなわち五感を司る脳を支配するということ。術師の能力が高ければ高いほど支配力は強く、術にかかる確率も高まり、より現実感（リアリティ）をもつ。そして、術師にとって幻術を幻術で返されたということは、知覚のコントロール権を完全に奪われたことを示している」

ビキビキッ…　↑足凍

クローム「！」

ツナ「ああ」

マーモン「どうだい？忌まわしきアルコバレーノの力は。さぁ、君の正体を暴こうじゃないか」

クローム「……！（キッ」　↑睨

マーモン「もう何を念じてもムダだよ。君は既に僕の幻覚世界の住人なのだからね」

ブウン

クローム「きゃあ」

ドギャッ

クローム「あうっ」

コロネロ「やべーぞコラ」

リボーン「だな」

クローム「う……」

マーモン「ムム。どうやらその武器は相当大事な物のようだね」

クローム「！　ダメ」

グ…

クローム「ダメ――――――――――ッ！！！」

パアン　↑三叉槍　壊

クローム「！！　（ゴフッ）　↑吐血

がはっ　う！（ゴホゴホッ）」

ツナ「え!?ええ!?」

クローム「がはっ!!（パタ…）」

バジル「ど……どーしたんだ!?顔が土色に…」

了平「お……おい!!アレを見ろ!!腹が!!」

ベゴッ

ペシャァァ…

獄寺「陥没していく……!!」

ツナ「これも幻覚～～～!?」

マーモン「ムム……これは現実だ……どーなっている?何だこの女…」

クローム「む……さま…

骸……様…」

マーモン「にわかに信じがたいが、彼女は幻覚でできた内臓で延命していたらしいね……」

獄寺「な!?」

ツナ「幻覚でできた内臓――――!?」

リボーン「それで幻覚のコントロールを失い、腹が潰れたんだな」

美鈴「マーモ～ン、帰ったら覚悟しておきなさいね～（ニコニコ）」

ツ／獄「（怖っ！？）」

クローム「骸……様……力になりたかった…」

？《上出来でしたよ。可愛い僕のクローム》

ツ／美「！」

？《君は少し休みなさい》

ツナ「（ぞくっ）……！！」

ベル「なーんだ。ふたを開ければマーモンの圧勝かよ。しかもアルコバレーノの力もちょっとしか見れねーしさ」

レヴィ「これで全て終わったな」

美鈴「（キィィ…）……っっ！」

レヴィ「……？」

シュウウゥゥ…　↑霧

了平「霧が娘を包んでいくぞ！」

マーモン「なーに、最後の力を振り絞って自分の醜い死体を隠そうとする、女術師によくある行動パターンさ」

ＸＡＮＸＵＳ「……？」

美鈴「（キィィィィィィ）うっ……！！」

ベル「姫？」

美鈴「（何だ…これ…。右目が…（キィィィィィィ））……ッ」

レヴィ「どーした」

美鈴「骸が…六道骸が……来る！！！」

シュアアアア…

マーモン「ムム！？」

？「クフフフ」

獄寺「！！？」

マーモン「ムム？男の声？」

美鈴「気をつけて！」

がっ

ボコボコボコ　↑亀裂

マーモン「！！」

ドギャッ

マーモン「ムギャ！！（どさっ）」

？「クフフフ　随分いきがってるじゃありませんか」

骸「マフィア風情が」

まやかしの幻影（前書き）

あけました。

ハァ～なかなか思い通りに話が進みませんねぇ。

本当なら年越しまでにヴァリアー編終わらせるつもりだったのに…

…

まやかしの幻影

バジル「だ…」

了平「誰だ…？」

ベル「んー？」

レヴィ「娘が…」

美鈴「来たか…」

ＸＡＮＸＵＳ「……」

獄寺「六道骸…！！間違いねえ」

ツナ「骸……無事だったんだ」

骸「お久しぶりです。舞い戻ってきましたよ……

輪廻の果てより」

ツナ「……（ぞくっ）」

コロネロ「奴が霧の守護者の正体なのかコラ」

リボーン「（ニッ）」

マーモン「……。ウム、六道骸…そうか、本当に君が来ると

はね」

骸「当然です」

マーモン「そういえば君、一ヶ月前に脱走を試みたらしいね」

獄寺「なあ！！」

レヴィ「あの鉄壁といわれる復讐者の牢獄を……」

ツナ「ま…っまた脱走したの――！！？」

美鈴「一生捕まってればいいのに」

マーモン「だが脱走は失敗に終わったはずだ。更にそれどころか、脱走の困難な光も音も届かない最下層の牢獄にぶち込まれたと聞いたよ」

ツナ「！！」

千種「……」

骸「クフフ。ボンゴレが誇る特殊暗殺部隊ヴァリアーの情報網も高が知れてますね」

マーモン「ム」

骸「現に僕はここにいる」

マーモン「面倒くさい奴だなあ。いいよ、ハッキリさせよう。君は

女についた幻覚だろう（ビュッ）」

ピキピキ

骸「おや」

ツナ「うわぁ！！」

バジル「吹雪です！」

了平「寒い！凍え死んでしまうぞ！」

骸「おやおや？」

マーモン「幻覚でできた術師に負けてあげるほど僕はお人好しじゃないんだ」

ピキピキピキ

キィィィン

バジル「ああ！」

了平「完全に凍ってしまったぞ！！」

獄寺「じゃあ、あの骸は幻覚！？」

ツナ「そんな…」

マーモン「さて、化けの皮を剥がそうか。尤も砕け散るのはさっき

の女の体だろうけどね」

美鈴「あのね、それ以上凪を傷つけるなら君の事燃やすからね？」

マーモン「フン」

ズズ…　↑ハンマー

ツナ「ああっ」

山本「やべぇ！」

骸「（ヴゥ…ン…ー）」

ズバンッ

ギュルルル

マーモン「！！」

ツナ「え！？」

レヴィ「！？」

フワッ

コロネロ「蓮の……花……」

骸「クフフ。誰が、幻覚ですか？」

ジュウッ

マーモン「ムグ！！」

ギリギリギリ

マーモン「何て……力だ…！く……苦しい…」

ベル「うわ……なんつーか、流石って感じだな」

コロネロ「あのバイパーを圧倒してるぜ……」

リボーン「あれがツナの霧の守護者、六道骸だ」

ツナ「やっぱり本物なんだ…」

獄寺「しかし…だとしたらさっきの女はどーなるんですか…」

リボーン「クロームと骸を分けて考えちゃダメだぞ。クロームがいるから骸は存在し、骸がいるからクロームは生きていられるんだ」

獄寺「……！？」

ツナ「い…意味わかんないよ」

リボーン「今はこーするしかねーんだ」

美鈴「凪は骸の触媒にされてるのか…」

ベル「しょくばい？」

美鈴「なんでもない」

骸「さあ……どうします？アルコバレーノ。のろのろしているとグサリ……ですよ」

マーモン「ムウ！！」

コオオオ

ペシャアアア

マーモン「図に乗るな！！」

ブアッ

骸「惰弱な（ヴゥ…ン…四）」

ズバババッ

ツナ「！！　あの目の炎は！！格闘能力（スキル）の修羅道だ！！」

マーモン「ムムウ！！格闘のできる術師なんて邪道だぞ！！輪廻だって僕は認めるものか！！」

骸「ほう。それは彼女も否定するような物ですよ」

マーモン「彼女？美鈴のことかい？」

ツナ「え…？何で輪廻を否定することが美鈴ちゃんの否定なの？」

リボーン「さーな」

マーモン「人間は何度も同じ人生を無限に繰り返すのさ。だから僕は集めるんだ!!金をね!!」

グニャアア

ツナ「わあっ」

山本「うおっ床が!」

コロネロ「バイパーの奴、力全開だぞ」

骸「クハハハ!強欲のアルコバレーノですか。面白い……だが、欲なら僕も負けませんよ」

ガッ　ガッ

ドドド

マーモン「なに!?」

ベル「すんげっ」

レヴィ「夢でも見ているのか…う…うぷ」

了平「ぐむ…ふらつく…」

獄寺「…吐き気が…するぜ…」

コロネロ「幻覚汚染が始まってるぜコラ」

リボーン「ああ。脳に直接作用する幻覚をこれだけ立て続けに食らってんだからな」

美鈴「ベル、大丈夫!?」

ベル「姫は…平気なわけ…?」

美鈴「術師の能力が高ければ高いほど支配力は高い。自らが術にかかる確率もまた然りさ。それはあそこにいる二人がよく証明してるよ」

ベル「へえ…」

美鈴「私に?まって。このエリアは私の幻覚でコーティングしてあるから少しは楽になるはずだから」

ベル「サン…キュ」

レヴィ「オレも…」

美鈴「来んなムッツリスケベエロオヤジ。凪にキモイ目使ったらお前から燃やすからな」

レヴィ「ぬおっ」

マーモン「ムッこれほどの幻覚能力……おまえどこで…」

骸「地獄界にて」

マーモン「ふざけるな！！」

ピキィィィッ

美鈴「（ドクン）うっ……目が…」

ベル「姫？」

美鈴「（ドクン）目が…焼けるように痛い…」

レヴィ「大丈夫か？」

美鈴「レヴィに心配されるようなことじゃ（ドクン）うあっ…！」

ゴポッ

美鈴「！？　（ここは…？……水？）」

目の前にある筒状のケース。

その中には――――

美鈴「（六道骸……？何だよ……これ…？）

（ドクン）うっ！！！」

ベル「姫！？」

美鈴「何これ…何か…見える…？」

（（千種「骸様……もう追っ手が…」

犬「ダメれす！逃げられないびょん！！」

骸「クフフ…。さすが鉄壁といわれる復讐者の牢獄…

伊達じゃありませんね…

ここからは別れて各々で逃げましょう

僕一人なら何とかなるがお前達がいては足手まといだ……」

））

美鈴「（これは…記憶…？どうしてそんなものが……？）」

（（骸「犬、千種。あの子を…美鈴を頼みます。

彼女を絶対に復讐者に渡してはいけません」

千種「骸様…？」

犬「骸さん何言ってんれすか！？」

骸「早く逃げなさい！」））

美鈴「（私……？どうして骸が私を…？それに復讐者って…）」

（（復讐者「ナカマヲタスケルタメニオトリニナルトハ

……

マアイイ…

シュハンハコノオトコダ。

アノオンナモスグツカマエル」）

美鈴「……！！！」

（ドクン）っっ…」

（（？「いいだろう。

逃走中の柿本千種と城島犬の保護、及び

五月美鈴の身の安全は私が責任を持つ」

骸「クフフ…物好きですねえ……

僕は全ての能力を取り上げられてしまいましてね、

特異なこの娘の身体を借りても…

僅かな時間しかこちらにとどまることはできない」

？「……それでも構わない」

家光「君にツナの霧の守護者になってもらいたい

六道骸」））

美鈴「家光…！（どーなってんの？一体どーして私が…）

六道…骸……ッ」

ドドドドドドドッ

マーモン「とった」

骸「！」

マーモン「死ね！」

ブワッ

パクンッ

グチャッ

ツナ「ああ！！」

山本「お…おい！！」

犬「骸さん！」

千種「……！！」

しーん

どんっ

マーモン「……！！バカな！！」

ぱあんっ

骸「堕ちろ、そして巡れ」

骸の手にはハーフボンゴレリングが二つ収まっていた。

ベル「……（あんぐり）」

美鈴「まじで？」

レヴィ「バカな！あのマーモンが…！！」

バジル「勝った…」

了平「圧勝だったぞ…」

犬「へへ」

ツナ「（これが…骸だ…）」

骸「このリングを一つに合わせるのですね？」

チェルベッロ「は…はい…」

？「まだだよ！！！」

サラサラサラ…

マーモン「ハァ…ハァ…少し遊んでやれば図に乗りやがって!!僕の力はまだこんな物では…!

!?」

骸「ご存知ですよね?」

マーモン「!!（はっ）」

骸「幻術を幻術で返されたということは、知覚のコントロール権を完全に奪われたことを示している」

シュルルルルル…

マーモン「!!?　グゲッやめろ!ファンタズマ!!」

骸「さぁ力とやらを見せてもらいましょうか?さぁ!」

マーモン「ムギャ!!」

ツナ「落ちるー!」

山本「おっと」

骸「クハハハハ!!どうですか?アルコバレーノ

僕の世界は!!」

ズボッ

ツナ「！！」

獄寺「あっ！！」

山本「！？」

ベル「ゲッ！！」

美鈴「い゛！？」

ズルルルル…

シュポッ

マーモン「んぷっ」

ボコッ

マーモン「ンムーーッ！！！」

ボゴッボコボコッ

マーモン「ムムム！！！やめろ！死ぬっ！死ぬ～～～～～～！！」

骸「君の敗因はただ一つ。僕が相手だったことです」

マーモン「ギャッ」

ドンッ

ツナ「……！！」

ベ／レ／美「！！」

フッ

獄寺「な……」

骸「これで……いいですか？」

チェルベッロ「――――――――……」

チェルベッロ「……」

↑絶句

チェルベッロ「霧のリングはクローム髑髏の物となりましたので、この勝負はクローム髑髏の勝ちとします」

コロネロ「あのバイパーが…」

ベル「粉々かよ」

ツナ「え…ちょ……っそんな…そ…そこまでしなくても…」

骸「この期に及んで敵に情けをかけるとは…どこまでも甘い男ですね沢田綱吉。

心配無用……といっておきましょう」

ツナ「!?」

骸「あの赤ん坊は逃げましたよ。彼は最初から逃走用のエネルギーは使わないでおくつもりだった…

抜け目のないアルコバレーノでしたよ」

ＸＡＮＸＳＵ「……ゴーラ・モスカ。争奪戦後、マーモンを消せ」

モスカ「プシュウウウ…」

骸「まったく君はマフィアの闇そのものですねＸＡＮＸＵＳ。君の考えている恐ろしい企てには僕すら畏怖の念を感じますよ」

ＸＡＮＸＵＳ「（ピク）」

骸「なに、その話に首を突っ込むつもりはありませんよ。僕は良い人間ではありませんからね。ただ…君より小さく弱いもう一人の後継者候補をあまりもてあそばない方が良い」

ツナ「!?」

骸「それでは僕は帰らせてもらうとしましょうか」

ツナ「待って骸!」

骸「おや?」

ツナ「骸、一つ聞いていいかな?骸は

――――――――くーちゃんなのか？」

くーちゃん

ツナ「骸、お前はくーちゃんなのか？」

全「！？」

骸「おやおや、その名前は懐かしいですね。誰に聞いたのですか？」

ツナ「美鈴ちゃんの…記憶で」

骸「（記憶…）それを知ってどうするんですか？」

ツナ「いや…別にどーってことはないけど…。けど、記憶で見たくーちゃんとお前が何となく似てるよーなきがして…」

獄寺「確かに喋り方とか藍色の髪とか同じトコありますね」

骸「いいでしょう。教えてあげますよ。そのくーちゃんとやらは――」

美鈴「お前じゃない！」

骸「！」

ツナ「！」

美鈴「くーちゃんは…お前じゃない」

ベル「姫？」

骸「おや？」

美鈴「思い出したんだ…。くーちゃんの名前を…」

骸「！」

美鈴「くーちゃんの名前は、『樺根（かばね）　来夢（くるむ）』。決して六道骸なんかじゃない…」

骸「『来夢だから略してくーちゃん』でしたか？」

美鈴「！　何でそれを……」

骸「クフフ。確かに僕は君の言うくーちゃんではありませんよ。しかしその記憶は僕のものでもある」

ツナ「え？それってどーゆー……」

骸「そのうち、僕の気が向いたらこの話はしますよ。今日は、クロームに少し無理をさせてしまった」

美鈴「あ、凪のこと大切にしてよね。私の親友なんだから」

骸「クフフフ。まあいいでしょう。それでは沢田綱吉、クロームを頼みますよ（フッ」

どさっ

了平「また女になったぞ」

獄寺「どーなってる」

ツナ「！　そ、そーだ！この子内臓は！？」

リボーン「心配ねーぞ。クロームの内臓は骸の強力な幻覚によって機能している」

クローム「（スヤ…」

ツナ「ね…寝てる（ほっ」

犬「こいつすぐくたびれるびょん。これだから人間は…」

獄寺「（テメーも人間だろ！！（ガーン））」

千種「犬、いこう」

犬「うい」

ツナ「え！？この娘放置ですか！？」

犬「起きりゃ自分であるけんだろ？その女ちやほやする気はねーし。そいつは骸さんじゃねーからな」

ツナ「……」

チェルベッロ「これで勝負は3対3となりました」

チェルベッロ「明日は最後の守護者戦、雲の守護者同士の戦いとな

ります」

美鈴「ボス、モスカって強い？」

ＸＡＮＸＵＳ「ああ」

美鈴「幹部の中で言うと誰と同じくらい？」

ＸＡＮＸＵＳ「ベルよりは強え」

ベル「ふーん。じゃ、勝てんじゃね？」

美鈴「期待してるよゴーラ・モスカ」

モスカ「プシュウウウ」

美鈴「（さて、どうやって中の霊圧を探ろうかな）」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・

『おにーちゃん、なまえなんてゆーの？』

『僕は来夢。樺根来夢といいます。君は？』

『わたしはみれい。さつきみれいっていうの。よろしくね、くーちゃん』

『……くーちゃん？』

『うん。だってくるむだからりゃくしてくーちゃん！』

『略して何故文字数が多くなっているのですか?』

『…あれぇ?』

『クスッ。君は面白いですね。これからよろしくお願いしますよ美鈴』

～・～・～・～・～・～・～・～・～・

美鈴「（はっ）……。くー…ちゃん…」

（（骸「『来夢だから略してくーちゃん』でしたか?」））

美鈴「（あいつは言ってた。くーちゃんは骸であって骸でない。一体どーゆーことなんだろう…。くーちゃんと骸はどんなカンケーが…）」

『いつでも助けに行きますよ、美鈴』

雲の守護者戦

チェルベッロ「これが雲の守護者バトルの戦闘フィールド
クラウドグラウンドです」

あ、あれ？もう雲戦！？

ついさっき霧戦が終わったばっかじゃなかった！？

くーちゃんの疑問残しすぎじゃないの！？

もうちょっとひねってさ――――

ヴァリアー「うるせえ」

……（汗）

サーセンっした。

了平「なんということだ…運動場が！！」

獄寺「ガ…ガトリング！？」

チェルベッロ「雲の守護者の使命とは、何ものにもとらわれることなく独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮雲」

チェルベッロ「ゆえに最も過酷なフィールドを用意しました。四方は有刺鉄線で囲まれ、８門の自動砲台が３０ｍ以内の動く物体に反

応し攻撃します。また、地中には重量感知式のトラップが無数に設置され、警報の直後爆発します」

了平「まるで戦場ではないか！」

レヴィ「怖けりゃ逃げろ」

獄寺「！？」

レヴィ「てめーらのボスのようにな」

獄寺「なっ！？１０代目は逃げたんじゃねえ！！」

山本「ツナは来る必要はねーのさ。ヒバリはうちのエースだからな」

ＸＮＡＵＳ「エース……。そいつぁ面白ぇ！！」

美鈴「ふーん。要するに今日は恭弥が勝つ自信があるから沢田綱吉は見る必要はないってか。ここで私達が勝てばどうなるかも知らないくせに」

獄寺「どーゆーことだ！？」

美鈴「さぁ～？」

チェルベッロ「それでは雲の対戦　ゴーラ・モスカＶＳ雲雀恭弥

勝負（バトル）開始！！！」

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

雲雀ＳＩＤＥ

エース？何それ？

本当は僕の邪魔をするあの群れを咬み殺したいけど、その前にその邪魔をするこの機械を咬み殺す。

チェルベッロ「勝負（バトル）開始！！！」

覆面をした女の合図と同時にデカブツが飛んできた。

けど、そんなのカンケー無い。

動きは直線、スピードだって大して速くもない。

ガシャン

ドガァァン！！

秒殺だった。

僕が左腕をもぎ取ったら勝手に爆発した。

跳ね馬より殺りごたえがなかったね。

跳ね馬に言われたとおり、二つのリングを一つにあわせる。

ツナ側全「（ぽっかーん）」

ヴァリアー「（ボケ――――）」

チェルベッロ「（キョトン）」

雲雀「これいらない（ポイ）」

チェルベッロ「え……？（ガゴーン）」

呆けている女にリングを投げる。

あとは――――

雲雀「さあ、下りておいでよ、そこの座ってる君」

ベ／美／レ「！」

雲雀「サル山のボス猿をかみ殺さないと帰れないな」

あとはあそこで偉そうに座っている彼を咬み殺すだけ。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

レヴィ「なぬ！」

ベル「なぬじゃねーよタコ」

レヴィ「タコォ！？」

美鈴「これでうち等負け越しじゃん」

ベル「どーすんのボース」

ＸＡＮＸＵＳ「……」

美鈴「ボス……？（何見てるんだろう？）」

ＸＡＮＸＵＳ「（バッ」

ガッ

ツナ側「！！」

チェルベッロ「……！！」

ダン

ＸＡＮＸＵＳ「足が滑った」

雲雀「だろうね」

ＸＡＮＸＵＳ「ウソじゃねえ」

カチ

ピ――――――ッ

ドォン

ＸＡＮＸＵＳ「（バッ）そのガラクタを回収しにきただけだ」

雲雀「ふぅん（ダッ）」

ビュビュッ

了平「ヒバリの奴何をしとる！！」

チェルベッロ「おやめください。守護者戦以外でのバトルは失格となります！」

ＸＡＮＸＵＳ「オレはガラクタを回収しにきただけだと言ったはずだ」

雲雀「そういう顔には見えないよ（ビュッ」

ＸＡＮＸＵＳ「安心しろ。手はださねぇ」

雲雀「好きにしなよ。どの道君は咬み殺される」

レヴィ「おのれ～～～～！！ボスを愚弄しおって！！」

ベル「待てよムッツリ」

レヴィ「ムッツリ！？」

ベル「あそこにはガトリング砲と地雷があるんだぜ。お前が行ったら即死ぬだろーぜ」

レヴィ「何だとベル！！」

美鈴「それになんか企んでるよ、ボスさんは」

レヴィ「！？　何を…だ……？」

美鈴「さーね」

レヴィ「な…」

美鈴「ただ、私がまだ感じ取ってるモスカの中の霊圧と関係しているのは間違いないと見ていいね」

ＸＡＮＸＳＵ「！　（コォォ…」

雲雀「！！　手……出てるよ？」

レヴィ「あやつ、ボスの動きを捉えているだと！？」

美鈴「ワォ」

ベル「アンビリーバボー」

ＸＡＮＸＵＳ「くっ（ス…）

チェルベッロ

チェルベッロ「はい、ＸＡＮＸＵＳ様」

ＸＡＮＸＵＳ「この一部始終を忘れんな。オレは攻撃してねえとな」

チェルベッロ「！？　はい」

次の瞬間、雲雀の足を圧縮粒子砲が掠めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9617t/

星は何処に

2012年1月6日15時49分発行